

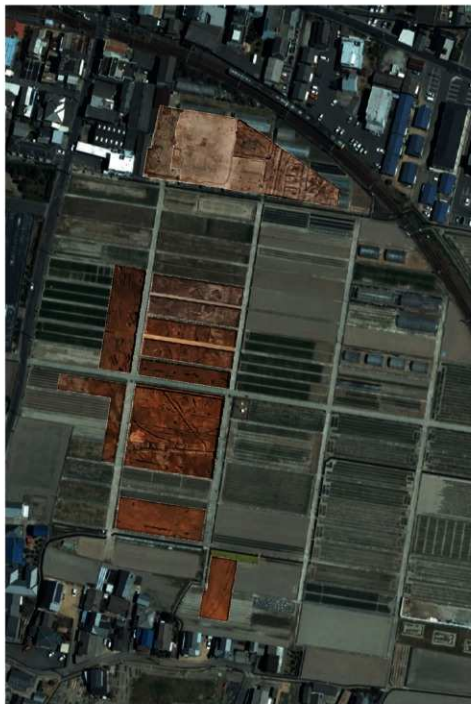
新病院整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

萩前・一本木遺跡Ⅰ

—第1分冊—

2017年3月

高松市教育委員会





出土遺物（土師器）



出土遺物（須恵器）



9-SD205・11-SD2・32-SD20・36-SD10 出土遺物

例 言

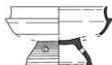
- 1 本書は、香川県高松市仏生山町に所在する萩前・一本木遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、高松市民病院整備事業に伴うものである。本書には、2011年度(第1次調査)、2012年度(第2次調査)、2015年度(第3次調査)の約3カ年度の成果を収録した。
- 3 調査は、高松市教育委員会が実施した。
- 4 調査期間と面積は以下のとおりである。
第1次調査：2011年7月4日～2012年3月22日(約8,500㎡)(第3～13、20～24調査区)
第2次調査：2012年3月26日～10月29日(約3,050㎡)(第14調査区)
第3次調査：2015年2月23日～3月17日(約550㎡)(第27調査区)、4月3日～8月24日(約1,400㎡)(第28～39調査区)、11月16日～12月17日(約530㎡)(第41～47調査区)
- 5 現地調査は高松市創造都市推進局文化財課(当時、高松市教育委員会文化財課)文化財専門員 船築紀子、波多野 篤、同課埋蔵文化財担当職員 池見 歩、同課非常勤嘱託職員 岡本 治代、磯崎 福子、森原 奈々、中西 克也、上原 ふみが担当した。
- 6 本報告書の執筆・編集は、船築・森原が行い、磯崎が補佐した。第V章の執筆分担は文末に記した。
- 7 現地調査と整理事業にあたっては、下記の方々の御協力と御指導・助言を賜り、記して感謝する次第である。(順不同・敬称略)
機関：香川県教育委員会、香川大学工学部
個人：市来 真澄、大久保 徹也、中野 咲
- 8 自然科学分析については、下記の機関等に依頼又は委託して実施し、その成果の一部を第IV章に掲載した。
土壌分析・AMS：辻本 裕也氏・馬場 健司氏・高橋 敦氏(バリノ・サーヴェイ㈱)
地震分析：長谷川 修一氏・山中 稔氏(香川大学工学部)
- 9 以下の業務については、委託業務として行った。
基準点打設業務委託：株式会社 四航コンサルタント(平成23年度)
空中写真測量業務委託：株式会社 四航コンサルタント(平成23年度)、
株式会社 イビソク(平成23年度・24年度)
掘削業務委託：株式会社 村上組(平成23年度・24年度・27年度)、タチバナ工業株式会社(平成27年度)
遺物写真撮影業務委託：西大寺フォト
出土鉄器の保存処理及び実測：株式会社 文化財サービス

凡 例

- 1 本書で使用した座標系は平面直角座標系第Ⅳ系(世界測地系)、標高は東京湾平均海水面を基準とした。土層注記及び遺物観察表(土器・土製品)の色調表示は、『新版 標準土色帖』(農林水産省農林水産技術会議事務局 監修・財団法人 日本色彩研究書 色票監修)によった。
- 2 遺構名の表記は、原則として以下の規則により、調査区名-遺構種別(竪穴・掘立・柵列・S D・S K・S X・S P)個別番号の数字の組み合わせで統一した。個別番号に関しては、原則として調査時に付した番号を踏襲している。
- 3 遺構種別については、付属施設を伴う竪穴(竪穴建物)、掘立(掘立柱建物等)、柵列(柵)は漢字表記、単体の遺構はS D(溝)、S K(土坑)、S X(性格不明遺構)、S P(ピット)といった遺構記号とする。
ex) 第4次調査の竪穴建物1は「4-竪穴1」(4+竪穴+1)
- 4 竪穴建物・掘立柱建物内部の遺構については、それぞれ「カマド」や「周壁溝」、「支柱穴」、「土坑」などの名称を与えることとする。
- 5 出土遺物の実測図は、土器は1/4、鉄器は1/2、玉類は1/1、石器は1/2、1/4、1/6、遺構の縮尺については図面ごとに示している。また、写真図版における遺物の縮尺はすべて任意である。
- 6 遺物実測における種別ごとの網掛けは以下の通りである。



須恵器



須恵器 (焼成不良)



化粧土



黒色土器



貿易陶磁器

本文目次

(第1分冊)

第Ⅰ章 調査に至る経緯と経過.....	1
第1節 調査に至る経緯.....	1
第2節 調査の経過.....	1
第Ⅱ章 地理的・歴史的環境.....	5
第1節 地理的環境.....	5
第2節 歴史的環境.....	6
第Ⅲ章 調査の成果.....	10
第1節 調査の方法.....	10
第2節 基本層序.....	10
第3節 遺構と遺物.....	10
A 中央区画.....	10
(1) 竪穴建物.....	10
(2) 掘立柱建物.....	144
(3) 柵列.....	170
(4) S D.....	173
(5) S K.....	201
(6) S X.....	231
(7) S P.....	238

挿 図 目 次(1)

図 1	高松市及び市域における位置図	5	図 53	6・23・竪穴 9 平・断面図	72
図 2	萩前・一本木遺跡周辺道路分布図	7	図 54	6・23・竪穴 9 カマド及び出土遺物実測図	73
図 3	調査区配置図 (S = 1/2000)	9	図 55	7・24・竪穴 7・6・竪穴 4 平・断面図	74
図 4	第 3・4・5・6・7・21・22・23・24・42 調査区 遺構平面図 (S = 1/200)	11・12	図 56	7・24・竪穴 7・6・竪穴 4 カマド及び出土遺物実測図	75
図 5	第 8・9・43 調査区遺構平面図 (S = 1/200)	13・14	図 57	21・竪穴 20・4-SK54・3・竪穴 34 平・断面図	78
図 6	第 10・45 調査区遺構平面図 (S = 1/200)	15・16	図 58	21・竪穴 20・4-SK54・3・竪穴 34 カマド及び 出土遺物実測図	79
図 7	第 11・35・44 調査区遺構平面図 (S = 1/200)	17・18	図 59	4・竪穴 99・22・竪穴 7・5・竪穴 30 平・断面図	80
図 8	第 12・20 調査区遺構平面図 (S = 1/200)	19・20	図 60	4・竪穴 99・22・竪穴 7・5・竪穴 30 断面図及び 出土遺物実測図	81
図 9	第 13 調査区遺構平面図 (S = 1/200)	21	図 61	4・竪穴 99・22・竪穴 7・5・竪穴 30 カマド	82
図 10	7・42・竪穴 5 平・断面図	22	図 62	10・竪穴 310 平・断面図及び出土遺物実測図	84
図 11	7・42・竪穴 5 床面遺物出土状況及び出土遺物実測図	23	図 63	10・竪穴 310 カマド	85
図 12	6・竪穴 1 平・断面図	24	図 64	6・竪穴 108 平・断面図	86
図 13	6・竪穴 1 出土遺物実測図	25	図 65	3・竪穴 108 カマド	87
図 14	6・23・竪穴 8 平・断面図	28	図 66	3・竪穴 108 床面遺物出土状況	88
図 15	6・23・竪穴 8 カマド及び出土遺物実測図	29	図 67	3・竪穴 108 出土遺物実測図	89
図 16	6・竪穴 7 平・断面図	30	図 68	4・竪穴 30・22・竪穴 6 平・断面図	90
図 17	6・竪穴 7 カマド	31	図 69	4・竪穴 30・22・竪穴 6 カマド	91
図 18	6・竪穴 7 床面遺物出土状況及び出土遺物実測図	32	図 70	4・竪穴 30・22・竪穴 6 床面遺物出土状況及び 出土遺物実測図	92
図 19	8・竪穴 1 平・断面図	34	図 71	21・竪穴 18・3・竪穴 35・4・竪穴 18 平・断面図	94
図 20	8・竪穴 1 カマド及び遺物出土状況	35	図 72	21・竪穴 18・3・竪穴 35・4・竪穴 18 カマド	95
図 21	8・竪穴 1 床面遺物出土状況及び遺物実測図	36	図 73	21・竪穴 18・3・竪穴 35・4・竪穴 18 出土遺物実測図	96
図 22	8・竪穴 4 平・断面図	38	図 74	23・竪穴 5 平・断面図及び出土遺物実測図	97
図 23	8・竪穴 4 カマド	39	図 75	5・竪穴 1・23・竪穴 10 平・断面図及び出土遺物実測図	98
図 24	8・竪穴 4 床面遺物出土状況	40	図 76	5・竪穴 1・23・竪穴 10 カマド及び遺物出土状況	99
図 25	8・竪穴 4 出土遺物実測図	41	図 77	10・竪穴 210 平・断面図 (第 1 生活面)	100
図 26	3・竪穴 55・21・竪穴 10 平・断面図	42	図 78	10・竪穴 210 平・断面図 (第 2 生活面)	101
図 27	3・竪穴 55・21・竪穴 10 カマド	43	図 79	10・竪穴 210 カマド (第 1 生活面)	102
図 28	3・竪穴 55・21・竪穴 10 遺物出土状況及び 出土遺物実測図	44	図 80	10・竪穴 210 カマド (第 2 生活面) 及び出土遺物実測図	103
図 29	4・竪穴 1 平・断面図及び出土遺物実測図	45	図 81	3・竪穴 40 平・断面図	104
図 30	6・23・竪穴 6 平・断面図及び出土遺物実測図	46	図 82	3・竪穴 40 カマド	105
図 31	6・23・竪穴 6 カマド及び遺物出土状況	47	図 83	3・竪穴 40 床面遺物出土状況及び出土遺物実測図	106
図 32	6・竪穴 2 平・断面図	48	図 84	6・竪穴 40・6・竪穴 3 平面図	108
図 33	6・竪穴 2 カマド及び出土遺物実測図	49	図 85	6・竪穴 40・6・竪穴 3 断面図	109
図 34	8・竪穴 2 平・断面図	50	図 86	6・竪穴 3 カマド	110
図 35	8・竪穴 2 カマド及び出土遺物実測図	51	図 87	6・竪穴 3 出土遺物実測図	111
図 36	10・竪穴 90 平・断面図及び出土遺物実測図	54	図 88	3-SK23・3-SPT2 平・断面図及び出土遺物実測図	112
図 37	10・竪穴 90 カマド	55	図 89	21・竪穴 8・3・竪穴 110・4・竪穴 122 平・断面図	114
図 38	3・竪穴 45 平・断面図	56	図 90	21・竪穴 8・3・竪穴 110・4・竪穴 122 断面図及び 出土遺物実測図	115
図 39	3・竪穴 45 断面図	57	図 91	21・竪穴 8・3・竪穴 110・4・竪穴 122 カマド	116
図 40	3・竪穴 45 カマド	58	図 92	10・竪穴 301 平・断面図	118
図 41	3・竪穴 45 床面遺物出土状況	59	図 93	10・竪穴 301 カマド及び遺物出土状況	119
図 42	3・竪穴 45 出土遺物実測図 (1)	60	図 94	10・竪穴 301 遺物出土状況及び出土遺物実測図	120
図 43	3・竪穴 45 出土遺物実測図 (2)	61	図 95	10・竪穴 50 平・断面図	122
図 44	10・竪穴 110 平・断面図	62	図 96	10・竪穴 50 カマド及び出土遺物実測図	123
図 45	10・竪穴 110 断面図	63	図 97	10・竪穴 60 平・断面図	124
図 46	10・竪穴 110 カマド	64	図 98	10・竪穴 60 カマド及び出土遺物実測図	125
図 47	10・竪穴 110 床面遺物出土状況	65	図 99	10・竪穴 30 平・断面図及び出土遺物実測図	126
図 48	10・竪穴 110 出土遺物実測図	66	図 100	5・竪穴 35 平・断面図	127
図 49	10・竪穴 201 平・断面図	68	図 101	24・竪穴 1 平・断面図	128
図 50	10・竪穴 201 カマド及び出土遺物実測図	69	図 102	10・竪穴 1 平・断面図	130
図 51	4・竪穴 20 平・断面図	70			
図 52	4・竪穴 20 床面遺物出土状況及び出土遺物実測図	71			

挿 図 目 次(2)

図 103	45- 壁穴 5 平・断面図	131
図 104	4- 壁穴 91 平・断面図	132
図 105	21- 壁穴 2 平・断面図	134
図 106	21- 壁穴 2 カマド及び出土遺物実測図	135
図 107	3- 壁穴 50 平・断面図	136
図 108	3- 壁穴 50 カマド及び出土遺物実測図	137
図 109	22- 壁穴 1 平・断面図及び出土遺物実測図	138
図 110	22- 壁穴 1 カマド	139
図 111	10- 壁穴 120 平・断面図	140
図 112	7・24- 壁穴 3 平・断面図及び出土遺物実測図	141
図 113	42- 壁穴 1、42- 壁穴 3、43- 壁穴 7、5- 壁穴 45 平・断面図及び出土遺物実測図	143
図 114	5・23- 壁穴 2 平・断面図及び出土遺物実測図	144
図 115	5・22- 壁穴 1 平・断面図	146
図 116	4- 壁穴 2 平・断面図	147
図 117	4- 壁穴 3 平・断面図	149
図 118	4- 壁穴 4 平・断面図	151
図 119	6- 壁穴 1 平・断面図	153
図 120	8- 壁穴 3 平・断面図	154
図 121	7・42- 壁穴 1 平・断面図及び出土遺物実測図	155
図 122	23- 壁穴 1 平・断面図	156
図 123	7- 壁穴 2 平・断面図	157
図 124	10- 壁穴 2 平・断面図及び出土遺物実測図	158
図 125	10- 壁穴 1 平・断面図及び出土遺物実測図	159
図 126	9- 壁穴 1 平・断面図	160
図 127	9- 壁穴 1 出土遺物実測図	161
図 128	4- 壁穴 1 平・断面図	162
図 129	4- 壁穴 1 出土遺物実測図	163
図 130	9- 壁穴 2 平・断面図及び出土遺物実測図	165
図 131	10- 壁穴 3 平・断面図	166
図 132	10- 壁穴 3 出土遺物実測図	167
図 133	12- 壁穴 1 平・断面図	168
図 134	12- 壁穴 2 平・断面図	169
図 135	3- 欄列 1 平・断面図	170
図 136	5- 欄列 1・2 平・断面図及び出土遺物実測図	171
図 137	11- 欄列 1 平・断面図	172
図 138	3・4-SD23 平・断面図	173
図 139	5-SD27・23-SD16、5-SD49、5-SD52 平・断面図	174
図 140	6-SD11・23-SD11・5-SD20 平・断面図	175
図 141	8・9-SD3、8・9-SD5、8・43-SD6 平・断面図	178
図 142	42-SD2・7-SD1、42-SD4、8・43-SD6 平・断面図及び 出土遺物実測図	179
図 143	8-SD7 平・断面図及び出土遺物実測図	180
図 144	9-SD6・200 平・断面図	181
図 145	9-SD105・110 平・断面図	182
図 146	9-SD117 平・断面図及び出土遺物実測図	184
図 147	9-SD115・216・220・222 平・断面図	185
図 148	11-SD7・44-SD3・45-SD4 平・断面図及び 出土遺物実測図	186
図 149	10-SD202・216 平・断面図	187
図 150	11-SD12・9・8 平・断面図	188
図 151	44・45-SD1・45-SD2 平・断面図及び出土遺物実測図	190
図 152	3-SD1・4-SD3 平・断面図及び出土遺物実測図	191
図 153	9-SD205 平面図	192

図 154	9-SD205 断面図	193
図 155	9-SD205 出土遺物実測図	194
図 156	9-SD205 土器出土状況図	195
図 157	11-SD1・2・3・4 平・断面図	196
図 158	12-SD22・25・26・35 平・断面図及び出土遺物実測図	197
図 159	13-SD1 平・断面図	198
図 160	13-SD2・3 平・断面図	200
図 161	3-SK3・28・29・101・102・106・107 平・断面図及び 出土遺物実測図	202
図 162	3-SK37、3-SK104・21-SK19 平・断面図	203
図 163	4-SK25・100・102・105、21-SK1 平・断面図	205
図 164	4-SK50・107・120 平・断面図	206
図 165	21-SK7、4-SK2 平・断面図及び出土遺物実測図	207
図 166	5-SK11・53・67・68・69、22-SK2 平・断面図	209
図 167	6-SK10・12・14・15・16・39・45 平・断面図及び 出土遺物実測図	211
図 168	6-SK18、6-SK5・24-SK5、24-SK6 平・断面図及び 出土遺物実測図	212
図 169	6-SK24・29、23-SK1、24-SK13・25 平・断面図	213
図 170	24-SK2・14、6-SK46・24-SK8、24-SK11、24-SK10・6-SK13 平・断面図及び出土遺物実測図	215
図 171	7-SK6・13・28・33・48 平・断面図	216
図 172	8-SK8・16、9-SK1・2・4・40、43-SK2 平・断面図及び 出土遺物実測図	218
図 173	9-SK5・7・106・202・207・219 平・断面図	220
図 174	10-SK3・10・31・55 平・断面図	222
図 175	10-SK52・57・58・106・111・124 平・断面図	223
図 176	10-SK112・128・132・207 平・断面図及び 出土遺物実測図	224
図 177	10-SK208・311・312 平・断面図	226
図 178	11-SK6・11・15・29・30・31 平・断面図	227
図 179	12-SK1・2・8・42 平・断面図	228
図 180	13-SK4・6・12 平・断面図及び出土遺物実測図	229
図 181	20-SK7・10 平・断面図及び出土遺物実測図	230
図 182	8-SX58、43-SX1 平・断面図	231
図 183	10-SX217 平・断面図	232
図 184	5-SX55 平・断面図	233
図 185	9-SX126 平・断面図及び出土遺物実測図	234
図 186	11-SX5 平・断面図及び出土遺物実測図	235
図 187	12-SX30 平・断面図	236
図 188	12-SX31 平・断面図及び出土遺物実測図	237
図 189	SP 平・断面図及び出土遺物実測図	239

挿 表 目 次

表 1 調査作業工程表.....	2
------------------	---

表 2 整理作業工程表.....	3
------------------	---

巻 頭 図 版 目 次

巻頭図版 1 調査区全景 (オルソ)

巻頭図版 2 出土遺物 (土師器)

巻頭図版 3 出土遺物 (須恵器)

巻頭図版 4 9-SD205・11-SD2・32-SD20・36-SD10 出土遺物
--

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

平成20年度に高松市仏生山町甲808番1号ほか(香川県農業試験場の圃場内)に、高松市市民病院の建設が計画され、事業課(高松市病院局新病院整備課)から高松市教育委員会(以下、市教委)に埋蔵文化財包蔵地の有無の照会があった。周辺での調査の蓄積がほとんど無い地域であり、埋蔵文化財包蔵地として登録されていなかったが、新病院建設計画の事業面積が広大であることから、事前の試掘調査を実施した。試掘調査は平成21年10月27日～11月2日の実働5日で実施することとなった。事業対象面積は、約14,500㎡で、現地に存在する圃場の区画に合わせて南北方向のトレンチを8本設定した。

試掘調査の結果、試掘調査の対象地全域で埋蔵文化財の包蔵が確認できたため、事業課に対して、当該地において保護層が確保できない掘削工事を行う場合は、事前に埋蔵文化財に対する保護が必要である旨を伝え、協議を実施した。

事業課から平成23年6月13日付けで文化財保護法第94条第1項に基づく埋蔵文化財発掘の通知が市教委に提出された。その通知を香川県教育委員会に達達したところ、香川県教育委員会から6月23日付けで事前に発掘調査を行う旨の行政指導があったため、発掘調査を実施することとなった。

第2節 調査の経過

調査は、平成23年7月4日から平成24年10月26日までの間は継続的に、平成27年2月23日から平成27年12月16日の間は断続的に調査を行った。調査期間は述べ約4ヶ年に渡る。平成23年8月20(土)と11月26日(土)、平成24年5月26日(土)の計3回現地説明会を実施し、それぞれ約350人・200人・200人の参加者を得た。

また平成23年8月20日の現地説明会終了後、小学生とその保護者、龍雲中学校生徒の参加による親子文化財教室を開催した。

整理作業は平成23年度から28年度にかけて実施した。

萩原・一本木遺跡 調査日誌抄録

H23.7/4(月)	第3・4調査区調査開始
H23.8/27(土)	第3・4調査区空撮
H23.8/20(土)	現地説明会・親子文化財教室開催 来場者・参加者計350人
H23.9/7(水)	第5・6調査区調査開始
H23.9/15(木)	第9調査区調査開始
H23.10/19(木)	第3・4・5・6調査区空撮
H23.11/17(木)	第9調査区空撮
H23.10/25(火)	第7調査区調査開始
H23.10/26(水)	第8調査区調査開始
H23.11/2(水)	第10調査区調査開始
H23.11/17(木)	第8調査区空撮
H23.11/26(土)	現地説明会開催 来場者200人
H23.12/13(火)	第7調査区空撮
H24.1/5(木)	第11調査区調査開始
H24.1/14(土)	第12調査区調査開始
H24.1/18(水)	第10調査区空撮
H24.2/21(火)	第11調査区空撮
H24.2/21(火)	第13調査区調査開始
H24.3/8(木)	第12・13調査区空撮
H24.3/26(月)	第10調査区調査開始
H24.4/24・25(火・水)	1回目空撮
H24.5/26(土)	現地説明会開催 来場者200人
H24.6/1(金)	2回目空撮
H24.7/10(火)	3回目空撮
H24.7/28(土)	4回目空撮
H24.8/6(月)	第20調査区調査開始
H24.9/10(月)	第24調査区調査開始
H24.9/24(月)	第23調査区調査開始
H24.9/26(水)	第22調査区調査開始
H24.9/28(金)	第21調査区調査開始
H27.2/23(金)	第27調査区試掘調査開始
H27.4/3(金)	第28調査区調査開始
H27.5/7(木)	第29調査区調査開始
H27.5/22(金)	第30調査区調査開始
H27.6/9(火)	第31調査区調査開始
H27.6/16(火)	第32調査区調査開始
H27.6/29(月)	第33調査区調査開始
H27.7/2(木)	第34調査区調査開始
H27.7/8(水)	第35調査区調査開始
H27.7/22(水)	第36調査区調査開始
H27.8/10(月)	第37調査区調査開始
H27.8/18(火)	第38・39調査区調査開始
H27.9/29(火)	第40調査区立会
H27.11/16(月)	第41調査区調査開始
H27.11/24(火)	第42調査区調査開始
H27.11/25(水)	第43調査区調査開始
H27.11/27(金)	第44調査区調査開始
H27.11/30(月)	第45調査区調査開始
H27.12/8(火)	第46調査区調査開始
H27.12/16(水)	第47調査区調査開始
H27.12/17(木)	調査終了

表1 調査作業工程表

調査区	担当者	調査面積 (㎡)	平成23年度									平成24年度									
			7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月			
3	船架・波多野・池見・磯崎・岡本・森原	490.0																			
4	船架・波多野・池見・磯崎・岡本・森原	490.0																			
5	船架・波多野・池見・磯崎・岡本・森原	490.0																			
6	船架・波多野・池見・磯崎・岡本・森原	490.0																			
7	波多野・池見・磯崎・岡本	490.0																			
8	船架・波多野・池見・磯崎・岡本・森原	578.0																			
9	船架・波多野・池見・磯崎・岡本・森原	1481.5																			
10	船架・波多野・池見・磯崎・岡本	952.0																			
11	船架・波多野・池見・磯崎・岡本	598.0																			
12	船架・波多野・池見・磯崎・岡本	1008.0																			
13	船架・波多野・池見・磯崎・岡本	457.0																			
14	船架・波多野・池見・磯崎・森原	3028.0																			
20	船架・岡本	256.0																			
21	船架・波多野・磯崎・森原	98.0																			
22	船架・波多野・磯崎・森原	90.0																			
23	船架・波多野・磯崎・森原	73.5																			
24	船架・波多野・磯崎・森原	73.5																			

調査区	担当者	調査面積 (㎡)	平成27年度											
			3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月		
27	船架・中西・森原・磯崎	552.5												
28	中西・森原・磯崎	233.3												
29	船架・森原・磯崎・上原	248.0												
30	船架・森原・磯崎	174.5												
31	船架	57.0												
32	船架・磯崎	183.5												
33	船架	52.5												
34	船架	74.3												
35	船架	80.5												
36	船架・磯崎・上原	180.0												
37	船架・上原	36.0												
38	船架・上原	80.0												
39	船架・上原	7.0												
40	船架・森原	70.0												
41	船架・森原	150.4												
42	船架・磯崎・上原	98.0												
43	船架・磯崎・上原	96.0												
44	船架・森原・磯崎・上原	52.0												
45	船架・森原・磯崎・上原	43.0												
46	船架・森原	60.0												
47	波多野・森原	32.0												

表2 整理作業工程表

		平成23年度											
		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
	洗浄												
	接合・復元												
		平成24年度											
		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
	洗浄												
	接合・復元												
	実測												
	遺構トレース												
	遺物トレース												
	写真撮影												
	レイアウト												
	執筆・編集												
		平成25年度											
		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
	洗浄												
	接合・復元												
	実測												
	遺構トレース												
	遺物トレース												
	写真撮影												
	レイアウト												
	執筆・編集												
		平成26年度											
		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
	洗浄												
	接合・復元												
	実測												
	遺構トレース												
	遺物トレース												
	写真撮影												
	レイアウト												
	執筆・編集												
		平成27年度											
		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
	洗浄												
	接合・復元												
	実測												
	遺構トレース												
	遺物トレース												
	写真撮影												
	レイアウト												
	執筆・編集												
		平成28年度											
		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
	洗浄												
	接合・復元												
	実測												
	遺構トレース												
	遺物トレース												
	写真撮影												
	レイアウト												
	執筆・編集												

第II章 地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境

高松市は香川県の県都で、県の中央やや東寄りに位置し、平成18年の合併によってその市域は、讃岐山脈から瀬戸内海までに及ぶ。瀬戸内海に浮かぶ島嶼部も市域に含んでおり、備讃瀬戸を挟んで岡山県と向かいあっている。この合併によって讃岐平野を構成する高松平野の大部分が高松市の行政区域に含まれることとなり、地理的区分と行政区域がほぼ一致することとなった。

高松平野の南部には標高600～1000mの讃岐山脈が聳え、前山丘陵地帯から瀬戸内海に向かって階段状に標高は低くなり、瀬戸内海沿岸部では標高100～200mとなる。平野部は花崗岩の風化した砂礫やマサなどの堆積によって形成されている。平野部には、残丘のように孤立した讃岐独特の景観を描き出している山塊群がいくつか存在している。この山塊群は、花崗岩丘陵の上に讃岐岩をはじめとする瀬戸内火山岩類が堆積して形成されており、平野の東部に屋島、立石山塊、南西部に石清尾山、浄願寺山、さらに西部に青峰、堂山の山系などが展開する。いずれも讃岐平野の特徴であるメサ、あるいはビュート型の溶岩台地で、20～300mの低い山地である。これらの山塊に囲まれるような形で展開する高松平野を構成する地層は、領家花崗岩が基盤をなし、三豊層群、沖積層の順で層をなしている。平野部の大部分は、讃岐山脈より流れ出た諸河川が運んだ土砂によって形成された沖積平野で、沖積低地及び扇状地性の低位段丘から構成されている。平野中部の栗林公園から平野東部の久米池を結ぶ標高10m前後を境に地形の傾斜が大きく変化しており、この境界線以北が沖積作用による三角州帯と考えられている。

高松平野には、西から本津川、香東川、御坊川、詰田川、春日川、新川といった河川が北流しているが、なかでも香東川が沖積平野の形成に最も大きな影響を及ぼしており、現在の春日川以西が香東川による沖積作用によって形成されたものと考えられている。現在、石清尾山塊の西側を直線状に北流する香東川は17世紀初めの河川改修によるもので、それ以前には現在の香川町大野付近から東へ分岐し、石清尾山塊の南側から回り込んで、平野中央部を東北流するもう一本の主流路が存在していた。この旧

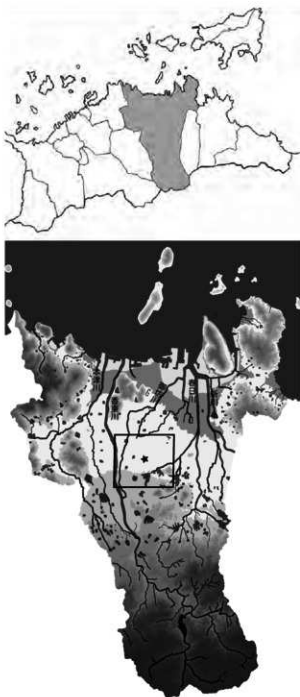


図1 高松市及び市域における位置図

流路は、現在では水田地帯及び市街地の地下に埋没しているが、空中写真等から、林から木太地区にかけての分ヶ池、下池、長池、大池、旧ガラ池を結ぶ流路等数本が知られる。その周囲には旧中州や後背湿地が展開していたことが明らかにされており、発掘調査でもその痕跡が数多く確認されている。なお、17世紀の廃川直前の流路は、御坊川として今でもその名残をとどめている。このような高松平野を流れる諸河川は、南の讃岐山脈から平野での流入口で穏やかな傾斜を持つ扇状地形の沖積平野を形成し、農耕に適した地味豊かな土壌をもたらしたが、諸河川の流域は伏流し、表層は潤れ川になることが多く、早くからため池を築造して水不足を解消してきた。山間の洪積台地と洪積層の境目に多くのため池が分布する。これらのため池は、年間1,000mm前後と降水量の乏しい讃岐平野において農業用水確保のために不可欠なものである。また、ため池に加えて出水（すいじ）と呼ばれる自噴地下水脈の利用が盛んで、両者を併用した特徴的な配水網と厳格な水利慣行を伝えてきた。しかし、昭和50年の香川用水の通水によって、一帯は三郎池の受益範囲に取り込まれ、農業用水の確保の不安が払拭された反面、地元水源を核とした水利慣行が急速に消滅するとともに、ため池や出水の水源自体もその役割を失いつつあり、近年の開発に伴う農地の転用によるそれ自体の減少が、その傾向にさらに拍車をかけている。

第2節 歴史的環境

【旧石器～縄文時代】

旧石器時代の遺跡は、高松平野南縁の横内東遺跡や雨山南遺跡で国府型のナイフ形石器が出土している。

縄文時代では、大池遺跡出土の有舌尖頭器などの少数例を除けば、晩期に至るまであまり認められない。晩期頃になると居石遺跡、浴・長池遺跡、井手東Ⅱ遺跡、松林遺跡などで、旧河道から縄文土器が出土し、平野部への集団の進出が認められるようになる。

【弥生時代】

弥生時代では、旧香東川の支流や低地に囲まれて点在する微高地の多くに遺跡が知られている。浴・長池遺跡、井手東遺跡、居石遺跡、前田東・中村遺跡、空港跡地遺跡、宮西・一角遺跡、松林遺跡、多

肥宮尻遺跡、弘福寺領田園北地区比定地区などををはじめとして高松平野の各所で人々の生活痕跡を確認することができる。近年の調査では、太田原高洲遺跡で中期後葉の区画墓が確認され、上東原遺跡では前期～後期の居住遺構と水田経営にかかわる水路網が確認されている。

【古墳時代】

弥生時代終末期から古墳時代前期前半段階まで、空港跡地遺跡、上天神遺跡、巴原遺跡などをはじめとして平野中央部で集落が展開したことが知られているが、その後の中期前半までの明確な居住域は確認されていない。中期後半になると、同じ微高地上の太田下・須川遺跡（TK 23～47期）において、カマドを付設しない竪穴建物と掘立柱建物で構成される居住域が確認されている。空港跡地遺跡西側から野郷遺跡を含み多肥宮尻遺跡を北縁と考えられる微高地上の集落域では、カマドを付設する竪穴建物が数棟確認されている。大下遺跡、太田原高洲遺跡、多肥北原遺跡では、7世紀前半（TK 217以降）の居住遺構が数棟重複して築かれ、断続的な居住域が展開していた。

一方、古墳に関しては、積石塚が累代的に造営される平野北部の石清尾山古墳群をはじめとして、平野を囲む山塊において前方後円墳などが築造される地域である。平野南縁の丘陵部でも古墳が数多く確認されている。本遺跡の南に位置する船岡山古墳は、近年の調査で全長44mを測る前方後円墳（1号墳）と墳形不明の古墳（2号墳）で構成され、前期前半の円筒形埴輪が出土している。小日山1号墳は全長31mを測る前方後円墳で、塊石積みで構築された石室が露出し鏡が出土したとされているが所在不明である。中期には、全長88mを測る前方後円墳で例板式石棺が露出している三谷石舟古墳や、直径42mの周濠を巡らす円墳の高野丸山古墳がある。後期では日山周辺で平石上1号墳、後半以降になると最大規模の横穴石室をもつ矢野面古墳、平石上2・3号墳、万塚古墳、加摩羅神社古墳が点在する。終末期には住蓮寺古墳群（TK 209）、雨山古墳群（TK 217）、北山古墳群などの群集墳が存在する。

直線距離にして南東方向へ約3kmの位置に、初期須恵器（TG 232段階）の三谷三郎池西岸が広く知られている。萩前・一本木遺跡では、地方窯「拡散」期である5世紀末～6世紀の須恵器が出土しているが、当該期の窯跡は未確認である。今後の調

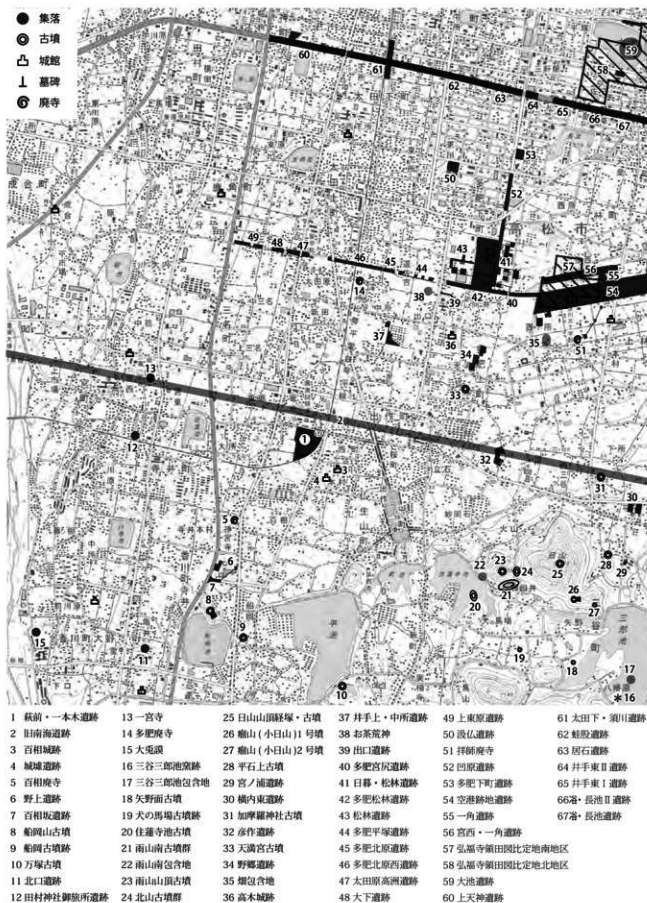


圖2 萩前・一本木遺跡周辺遺跡分布圖

査例の増加が期待される。

【古代】

古代における高松平野は大きく東の山田郡と西の香川郡で構成されていた。平野を東西方向に横断する南海道が設置された後、南北軸が東に約9～11度振れた条理地割が広く分布している。調査地周辺は、香川郡の12郷の一つ百相（もまい）郷に属し、当遺跡の北側30mには南海道が設置されている。この旧南海道の北側に位置する多配（たへ）郷域でも、近年県道太田上町志度線道路改良工事に伴う発掘調査（大下遺跡・太田原高洲遺跡・多肥北原西遺跡・多肥北原遺跡）が行われており、古代の幹線道路が検出されている。このうち多肥北原西遺跡の南北道路を南進すれば当該地に突き当たるが、これに繋がる道路遺構は確認できていない。

船岡山の北麓には天正年間創建と伝わる船山神社があり、奈良時代の軒瓦が出土することから、古代寺院跡（百相庵寺）に比定されており、神社南西には礎石が残る。

【中世】

中世以降では、源平屋島の合戦で源氏方に属した河西左エ門師貞の末裔、河西氏の居館と伝わる百相城跡があり、堀・石垣の痕跡が残る。その後、香川郡東部八か村を取り仕切っていた大庄屋の別所氏が屋敷を構えていた。

【近世】

江戸初期の寛文8年（1668）高松初代藩主松平頼重が開基となり、藩主家の菩提寺である浄土宗弘生山法然寺が建立された。明治31年（1898）に町制をして法然寺（弘生山来迎院法然寺）の山号をとり町名とし、昭和31年（1956）に高松市に合併し、町制時の百相・出作の二大字は弘生山町となった。大正15年（1926）高松琴平電鉄の弘生山駅が設置、昭和4年（1929）には塩江村に至る塩江温泉鉄道が開通されるなど、交通の要衝と古い街並みを残す門前町として発達した。

【香川県農業試験場】

香川県農業試験場は、明治32年（1899）に香川郡栗林村（現・高松市花ノ宮町）に創設された。

昭和5年（1930）に本場を高松市花ノ宮町から弘生山町に移転し、昭和25年（1950）には圃場区画整理工事が開始された。調査時の圃場区画は、この時期に整備されたものと考えられる。昭和43年（1968）に研究庁舎の改築工事が完成し、市道弘生

山門座線を境に北側に研究庁舎棟が並び、南側には圃場が広がっていた。

平成11年（1999）に、創立100周年を迎え、農業試験場移転整備基本計画が公表された。平成23年（2011）、現在の農業試験場が整備され、本場を綾川町に移転した。

<参考文献>

- 高橋学 1992『高松平野の地形環境』『讃岐国弘福寺領の調査 弘福寺領讃岐国山田郡田原調査報告書』高松市教育委員会
- 渡邊誠 2011『有料老人ホームリトモ高松新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 空堀跡地遺跡』高松市埋蔵文化財調査報告書第134集 高松市教育委員会
- 川畑聰 2005『南山南古墳群～3号墳・13号墳～ 電気通信事業用無線基地局建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』高松市埋蔵文化財調査報告書第88集 高松市教育委員会
- 大嶋和明 2010『雨島から弘生山へ昔の道を歩く』『ふるさと探訪』高松市歴史民俗協会・高松市教育委員会
- 船橋紀子 2011『法然寺から船岡山古墳へ』『ふるさと探訪』高松市歴史民俗協会・高松市教育委員会
- 山本英之 2015『三谷石舟古墳周辺を訪ねる』『ふるさと探訪』高松市歴史民俗協会・高松市教育委員会

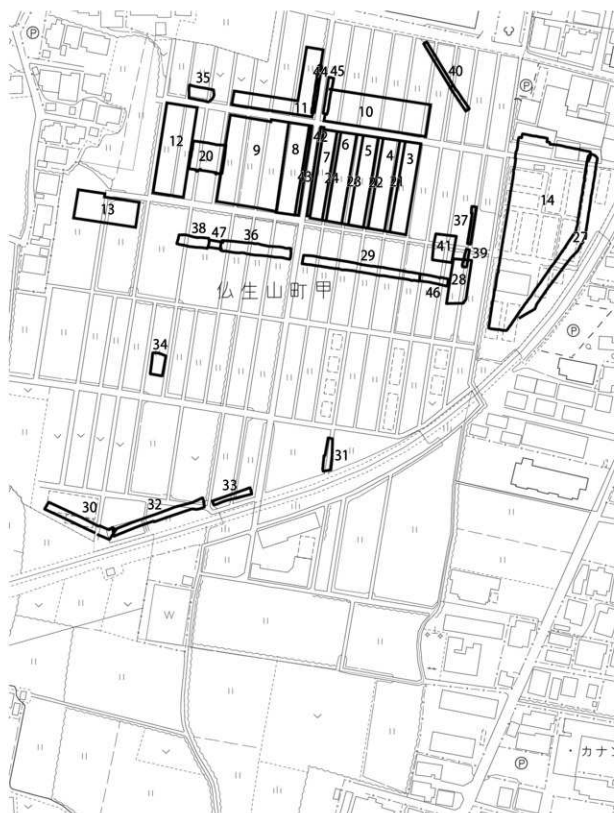


図3 調査区配置図 (S = 1/2000)

第三章 調査の成果

第1節 調査の方法

a. 調査区番号と遺構番号、遺物の取上げ（図3）
調査区は調査を開始した順番で、第3～14・20～24・27～47調査区と番号を与えた。このうち第40調査区は保護層が取れたため、工事立会を行い、平面図の記録保存を行った。第1・2・15～19・25・26調査区は、香川県農業試験場跡地中央エリアにおいて、新病院整備事業とは別の道路新設改良事業の調査として行ったものである。

遺構番号は遺構の種類に関係なく、検出した順番で1から番号を与えた。遺構の種類は、現地での調査所見をもとに性格を判断し、番号の前に遺構の略号を冠した。また、竪穴建物に付属する支柱穴や土坑などについては、竪穴建物内で1から番号を与えた。

遺物の取上げは、遺構単位で、かつ出土層位が明らかかな場合は、層位も記載して取上げた。

b. 記録作成

図化作業の際に使用する基準点と水準点は、（株）イビソクと（株）四航コンサルタントに委託し、世界測地系第IV系・4級基準点を用いた。

断面図と切り合い関係のある遺構平面図、遺物出土状況図等は手測りで記録を作成し、その他の平面図については、空中写真測量を用いた。

第2節 基本層序

各調査区の基本層序は、耕作土と床土の下、耕作土直下が地山面となり、この地山面が遺構面となる。第3～5・10調査区、14・27調査区の北側では、床土の下に遺物包含層が確認できた。遺物包含層が確認できた調査区では、包含層上面（第1遺構面）での調査終了後に包含層を除去し、地山面で調査を行った（第2遺構面）。

第3節 遺構と遺物

A 中央区画（図4～9）

（1）竪穴建物

7・42—竪穴5（図10～11）

第7・42調査区西端で検出した竪穴建物である。平面形状は隅丸方形で、調査区外に広がるため、全体の形状は不明である。主軸方位N-17.5°-W、検出面の標高は36.3mである。規模は、長辺約5.00m、短辺3.8m以上、深さ約0.2mを測る。

埋土の掘削後、貼床面直上で遺構の検出を行い、中央炉（42-S K 2）と周壁溝、支柱穴（7-S P 2・42-S P 7）、ビット（7-S P 1・42-S P 6）、土坑（42-S K 1）を確認した。

埋土は、灰黄褐シルト混じり細砂とにぶい黄褐シルト混じり細砂、黒褐細砂混じりシルトである。遺物は須恵器杯身（5）・杯蓋（2）・高杯（6）・杯身片、土師器壺片が出土した。

貼床は、灰黄褐細砂と暗赤褐細砂～シルト、にぶい黄褐中粒砂混じり細砂～シルト、黒褐細砂混じりシルト、にぶい黄褐細砂、灰黄褐細砂～シルトである。遺物は貼床直上で須恵器杯蓋（1）・杯身（4）・土師器直口壺（8）・甕（10）が、貼床内から須恵器杯蓋片が出土した。

竪穴建物の中央で、42-S K 2を検出した。42-S K 2内には焼土と炭化物が確認できたことから、中央炉の可能性が考えられる。埋土は、灰黄褐細砂に焼土・炭化物多量、黒褐シルト混じり細砂に焼土塊・炭化物多量、灰黄褐シルトで、被熱した石を確認した。遺物は土師器椀（7）・甕（9）が出土した。

周壁溝は一部で確認でき、幅約0.22m、深さ約0.15m、埋土は黒褐シルト混じり細砂、灰黄褐シルト混じり細砂、灰黄褐細砂～中粒砂である。遺物は出土していない。

支柱穴は、東側の2基を確認した。42-S P 7は円形を呈し、直径約0.50m、深さ約0.22mを測る。断面形状は逆台形である。埋土は、上層が黒褐中粒砂混じり細砂～シルト、柱痕が暗褐粗砂混じり細砂～シルト、掘方が暗褐中粒砂混じり細砂～シルトである。7-S P 2は楕円形を呈し、長径約0.82m、短径約0.59m、深さ約0.19mを測る。断面形状は不整形である。埋土は暗褐極細砂～シルトである。遺物は出土していない。



図4 第3・4・5・6・7・21・22・23・24調査区遺構平面図 (S=1/200)

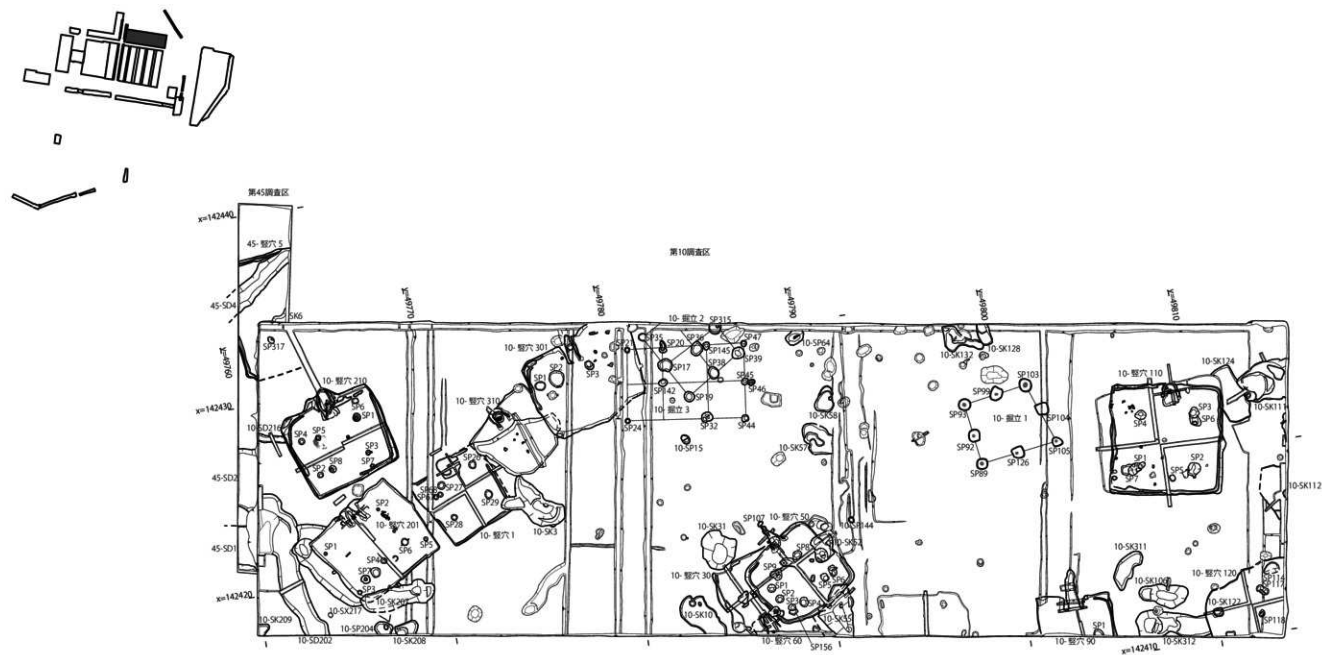


図 6 第 10・45 調査区遺構平面図 (S = 1/200)

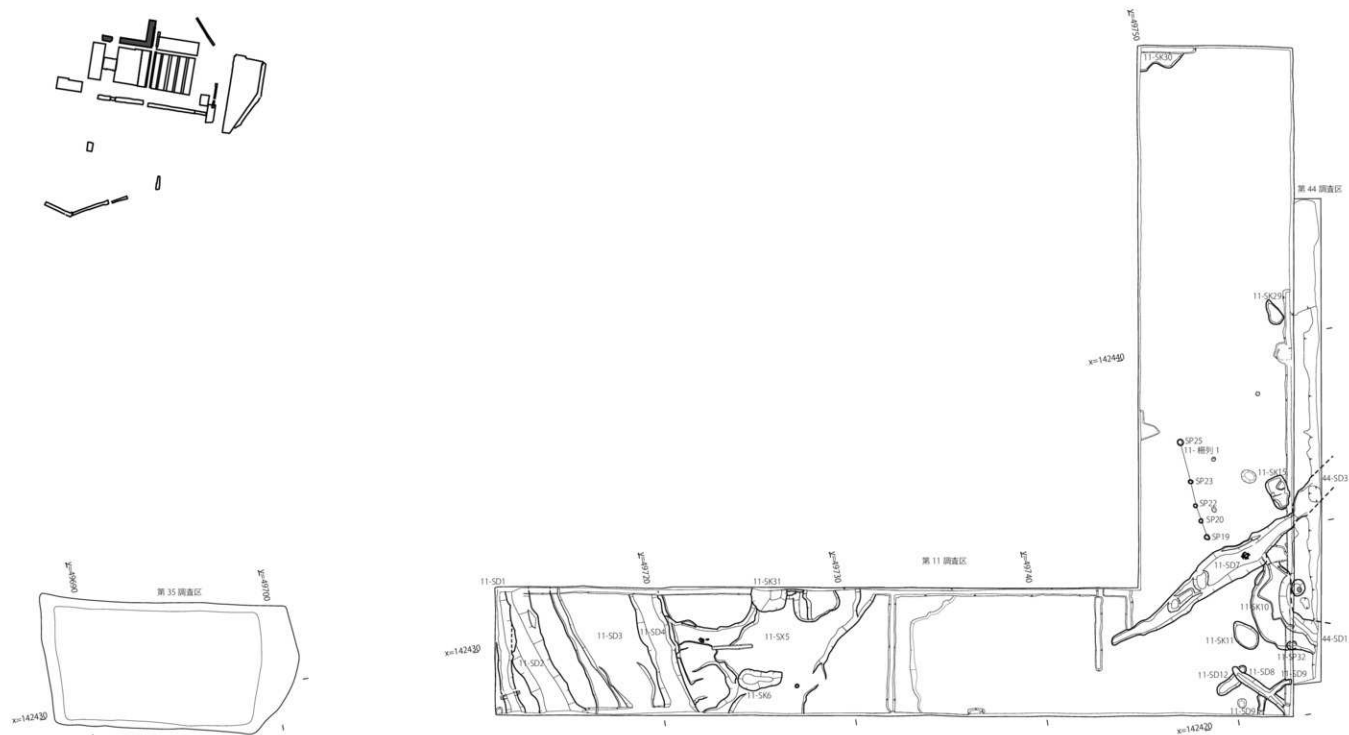


図7 第11・35・44調査区遺構平面図 (S = 1/200)

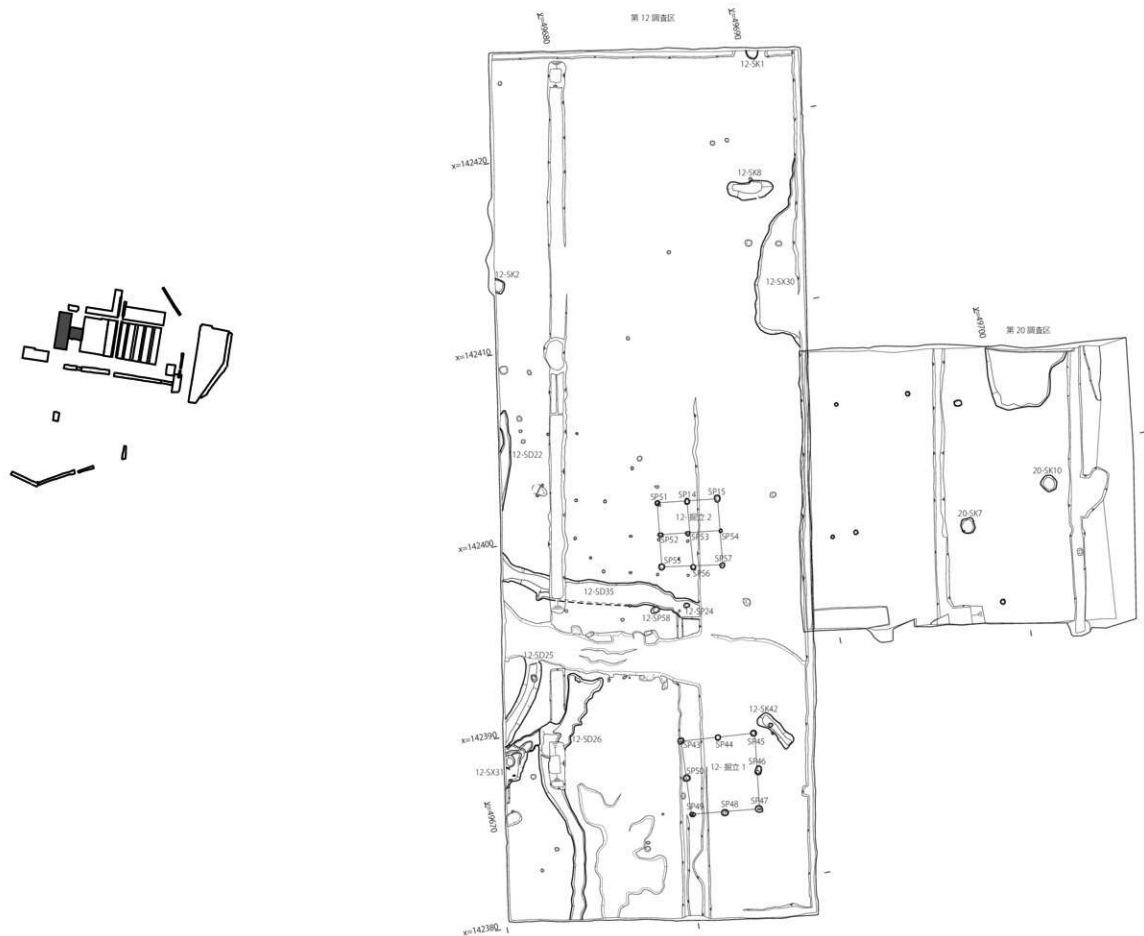


図8 第12・20調査区遺構平面図 (S=1/200)

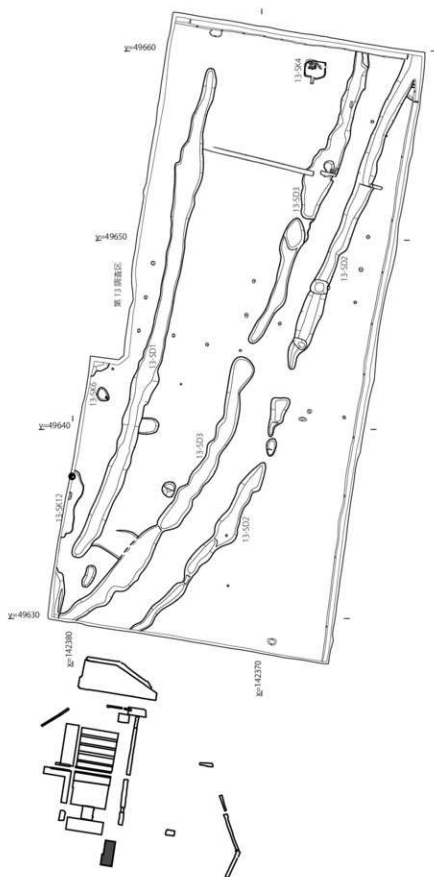


図9 第13調査区遺構平面図 (S = 1/200)

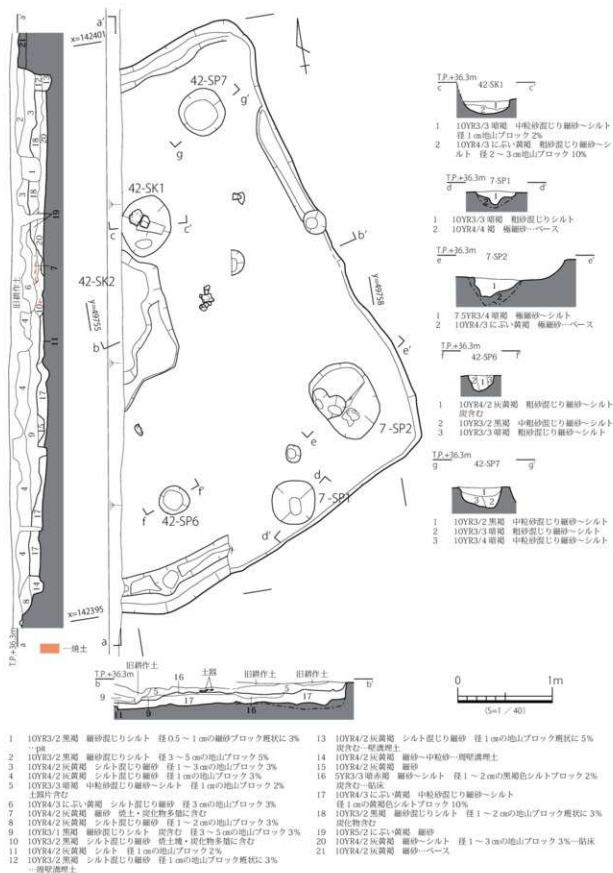


図 10 7・42- 壁穴 5 平・断面図

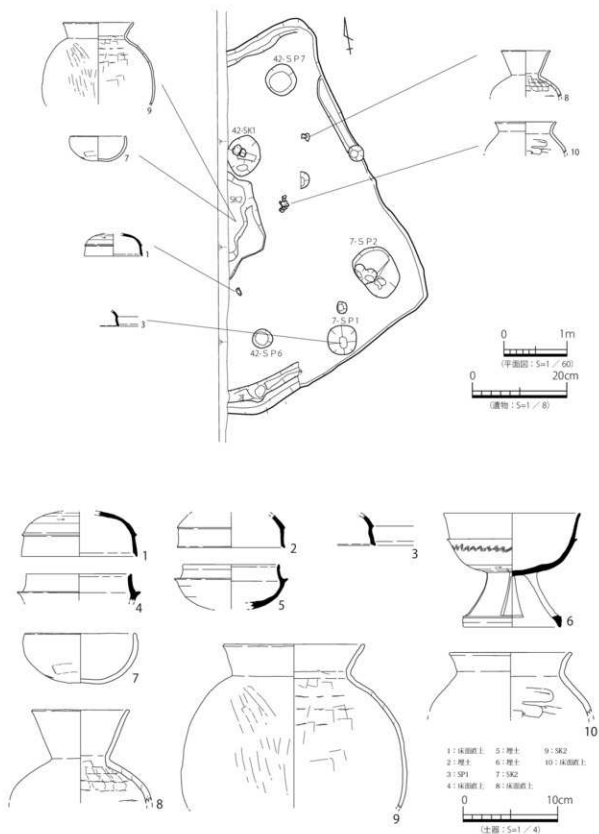


図 11 7・42- 竪穴 5 床面遺物出土状況及び出土遺物実測図

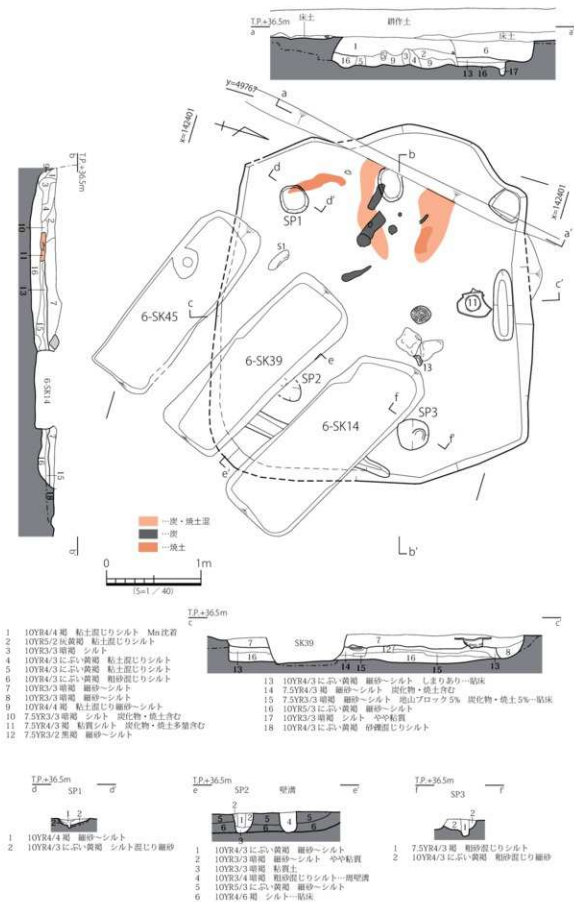


图 12 6-竖穴 1 平·断面图

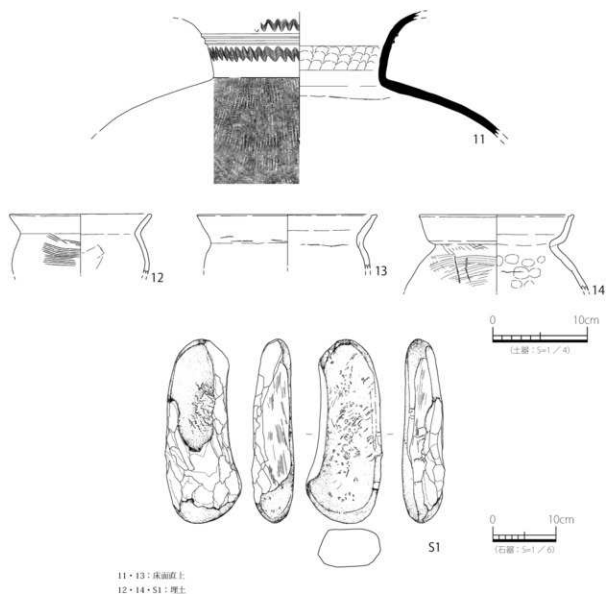


図13 6- 壁穴1 出土遺物実測図

7-S P 1 は円形を呈し、直径約 0.45 m、深さ約 0.14 m を測る。断面形状は逆台形に段落ちである。埋土は暗褐粗砂混じりシルトである。遺物は須恵器杯蓋 (3) が出土している。42-S P 6 は円形を呈し、直径約 0.33 m、深さ約 0.17 m を測る。断面形状は U 字形である。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が灰黄褐粗砂混じり細砂～シルト、掘方が黒褐中粒砂混じり細砂～シルトと暗褐粗砂混じり細砂～シルトである。

42-S K 1 は楕円形の土坑で、長径約 0.65 m、短径約 0.53 m、深さ約 0.14 m を測る。断面形状は皿状である。埋土は暗褐中粒砂混じり細砂～シルトとにぶい黄褐粗砂混じり細砂～シルトである。遺物は、土師器高杯片が出土した。

出土遺物の年代から、T K 208～T K 23 型式併行期と判断できる。

6-堅穴 1 (図 12～13)

第 6・24 調査区北側で検出した堅穴建物である。6-S K 14・39・45 に切られる。平面形状は、ややゆがんだ方形を呈する。主軸方位 N-103.5°-W、検出面の標高は 36.3m である。規模は、長辺約 3.76m、短辺約 3.30m、最深部で約 0.3m を測る。

埋土の掘削後、貼床面直上で遺構の検出を行い、カマドの痕跡と周壁溝、ピット (S P 1～3) を確認した。

埋土は暗褐細砂～シルトで、遺物は土師器甕 (12・14)、須恵器杯身片・壺片、土師器甕片が出土した。

貼床は、にぶい黄褐細砂～シルトと暗褐細砂～シルト、にぶい黄褐細砂～シルトである。貼床直上で須恵器甕 (11)、土師器甕 (13)、砥石 (S1) が出土した。

カマドは、西側に作り付けられる。調査区西壁附近で夥しい量の焼土と炭化物を検出したが、平面ではカマド袖を確認できなかった。断面の観察から、カマド構築材は暗褐シルトとにぶい黄褐粘土混じりシルトである。焚口付近と想定できる箇所に炭化物や焼土塊などが認められる。遺物は出土していない。

周壁溝は北辺の一部と東側の一部で確認でき、幅約 0.27 m、深さ約 0.12 m を測る。埋土は暗褐細砂～シルトと暗褐粗砂混じりシルトである。遺物は出土していない。

支柱穴と想定できるピットを 3 基確認した。S P 1 は円形を呈し、直径約 0.29 m、深さ約 0.10 m を

測る。断面形状は浅い皿状に柱痕の段落ちである。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が褐細砂～シルト、掘方がにぶい黄褐シルト混じり細砂である。S P 2 は 6-S K 39 に切られるため、全体の形状は不明である。深さ 0.21 m を測り、断面形状は U 字形である。柱痕が確認できる。埋土は柱痕がにぶい黄褐細砂～シルト、掘方が暗褐細砂～シルトと暗褐粘質土である。S P 3 は円形を呈し、直径約 0.33 m、深さ約 0.18 m を測る。断面形状は逆台形に柱痕の段落ちである。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が褐粗砂混じりシルト、掘方がにぶい黄褐粗砂混じり細砂である。

出土遺物の年代から、T K 208 型式併行期と判断できる。

6・23-堅穴 8 (図 14～15)

第 6・23 調査区南東で検出した堅穴建物である。6-堅穴 9 に切られる。平面形状はやや縦長の隅丸方形である。主軸方位は N-16°-W、検出面の標高は 36.4m である。規模は、長辺 4.56m、短辺 3.58m、深さ 0.20m を測る。

埋土の掘削後、貼床面で遺構の検出を行い、カマドと周壁溝、土坑 (23-S K 1・2) を確認したが、支柱穴は確認できなかった。

埋土は、暗褐～黒褐シルトと暗灰黄シルトである。遺物は須恵器杯身 (20)・杯蓋片・杯身片・壺片、土師器甕片・甕片・土師質土器皿片が出土した。このうち土師質土器皿 (23・24)・甕 (25・26) は埋土上面からの出土で、混入品と考えられる。

貼床は褐～黄灰シルトと黒褐シルトで、西側の一部に壇状の高まりをもつ。また北西側には、砂岩の台石が置かれていた。遺物は貼床直上のカマドの周りから須恵器杯身 (15～19) が 5 点並んで出土した。このほか貼床直上から鉄製刀子 (T1)、須恵器杯蓋片・土師器甕片が、貼床内から須恵器杯蓋 (21) 匙片・粘土塊が出土した。

カマドは堅穴建物の北側中央に円形に作り付けられ、カマド内部に掘り込みが確認できた。掘り込み内部の埋土は上層が黒シルト、下層が暗灰黄シルトである。カマドの袖部分は暗褐細砂～シルトで、内側には被熱による赤色化が認められる。遺物は図示できなかったが、須恵器高杯片が出土した。

周壁溝は一部で確認でき、幅約 0.12 m、深さ約 0.03 m を測る。遺物は須恵器高杯片が出土した。

23-S K 1 は不整形の土坑で、直径約 0.44 m、

深さ約 0.23 m を測る。断面形状は椀形である。埋土は上層が黒褐粘質シルト、下層が暗褐シルトである。遺物は出土していない。

23-S K 2 は楕円形の土坑で、長径約 1.15 m、幅約 0.77 m、深さ約 0.08 m を測る。断面形状は逆台形である。埋土は黒褐シルトである。遺物は製塩土器片 (22) が出土した。

出土遺物の年代から、T K 208 ～ T K 23 型式併行期と判断できる。

6-竪穴 7 (図 16 ～ 18)

第 6・24 調査区中央西側で検出した竪穴建物である。平面形状は隅丸方形で、主軸方位 N-12.5°-W、検出面の標高は 36.4 m である。規模は、長辺約 5.50 m、短辺約 5.40 m、深さ約 0.18 m を測る。

埋土の掘削後、貼床直上で遺構の検出を行い、カマドと周壁溝、支柱穴 (S P 1 ～ 4)、ピットを確認した。

埋土は、暗褐細砂～シルトである。遺物は須恵器杯身 (27)、土師器小型甕 (32) が出土している。

貼床は地山ブロック土を含む暗褐細砂～シルトである。遺物は須恵器高杯 (29・31)、土師器甕 (35) が出土している。

カマドは竪穴建物の北側中央に楕円形に作り付けられる。カマド構築材は暗褐粘土～シルト、カマド内部の埋土は、上層が暗褐シルト、下層が焼土を含む黒褐粘土である。遺物は、カマド内から須恵器高杯 (30)、土師器甕 (33・36) が出土し、カマドの周辺から土師器鍋 (34) が出土した。この須恵器高杯 (30) はカマドの奥壁際で伏せられた状態であった。土師器長胴甕 (36) は底部に蒸気孔が穿たれていて饅頭甕と考えられる。

周壁溝は南側で一部を検出した。幅約 0.12 m、深さ約 0.11 m を測る。周壁溝から須恵器杯身 (28)、磨石 (52) が出土した。

支柱穴は 4 基確認できた。S P 1 は不整形円形を呈し、直径約 0.28 m、深さ約 0.32 m を測る。断面形状は U 字形である。柱痕が確認でき、柱痕の埋土が黒褐シルト、掘方が暗褐細砂～シルトである。S P 2 は楕円形を呈し、長径約 0.46 m、深さ約 0.35 m を測る。断面形状は U 字形である。埋土は上層が暗褐細砂～シルト、中層が黒褐細砂～シルト、下層が暗褐細砂である。S P 3 は円形を呈し、直径約 0.41 m、深さ約 0.29 m を測る。断面形状は

逆台形である。埋土は上層が褐シルト、下層が褐粘土～シルトである。S P 4 は円形を呈し、直径約 0.36 m、深さ約 0.43 m を測る。断面形状はやや歪な U 字形である。埋土は上層が炭化物や焼土を含む暗褐シルト、下層が暗褐シルトである。

出土遺物から、T K 23 ～ T K 47 型式併行期と判断できる。

8-竪穴 1 (図 19 ～ 21)

第 8 調査区の南で検出した竪穴建物である。平面形状はやや歪な横長の方形で、主軸方位 N-22.5°-W、検出面の標高は 36.5 m である。規模は、長辺約 4.10 m、短辺約 3.44 m、深さ約 0.14 m を測る。

埋土の掘削後、貼床面直上で遺構の検出を行い、カマドと周壁溝、中央土坑、支柱穴 (S P 1 ～ 4)、土坑 (S K 6)、ピット (S P 8) を確認した。

埋土は暗褐シルトで、土師器破片が出土した。貼床は暗褐シルトで、貼床直上のカマド周辺では須恵器杯身 (39) が出土した。須恵器杯身 (39) は焼土の上に置かれ被熱が認められる。また南縁部床面より 2 ～ 3 cm 上の位置から、須恵器杯蓋 (37) の上に杯身 (38) を組み合わせた状態で出土した。

カマドは北側中央に長方形に作り付けられ、内部に掘り込みが確認できた。カマド構築材は、褐細砂～シルトと地山ブロック土を含む褐シルトである。カマド内部は、焚口部分に炭化物や焼土塊が確認できた。遺物は燃焼部から土師器腹 (43)・甕 (42)、被熱を受けた支脚石が出土している。

周壁溝は、幅約 0.09 m、深さ約 0.05 m を測る。埋土は暗褐シルト～粘土である。遺物は出土していない。

中央土坑は、不整形な楕円形を呈し、長径約 1.03 m、短径約 0.76 m、深さ約 0.04 m を測る。断面形状は逆台形である。埋土は暗褐シルトである。炭化物や焼土塊を多く含む灰・炭溜まりである。炉のような火処の可能性がある。遺物は出土していない。

支柱穴は、4 基確認できたが、やや歪な配置となっている。S P 1 は楕円形を呈し、長径約 0.55 m、短径約 0.44 m、深さ約 0.23 m を測る。断面形状は不整形である。埋土は褐シルトである。S P 2 は円形を呈し、直径 0.46 m、深さ 0.14 m を測る。断面形状は逆台形である。S P 3 は円形を呈し、直径約 0.23 m、深さ約 0.16 m を測る。断面形状は

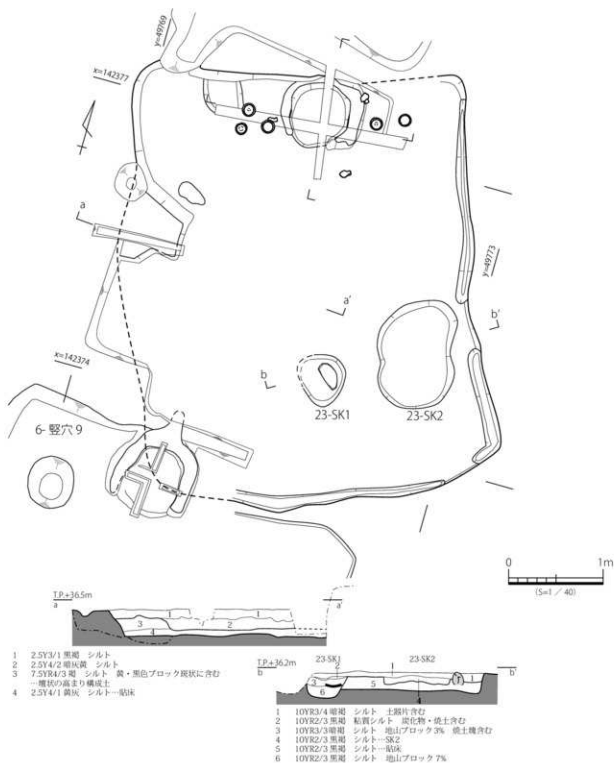


図 14 6・23-竪穴 8 平・断面図

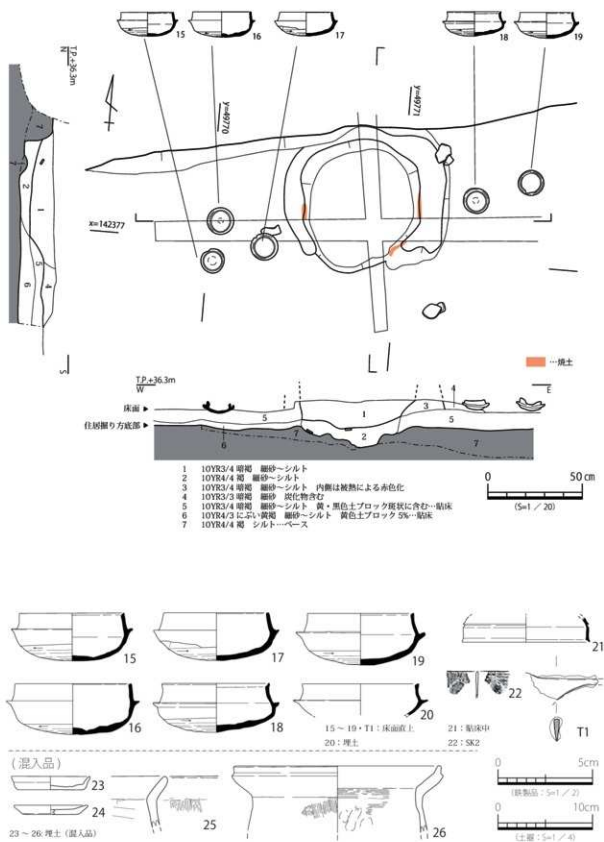


図 15 6・23- 竪穴 8 カマド及び出土遺物実測図

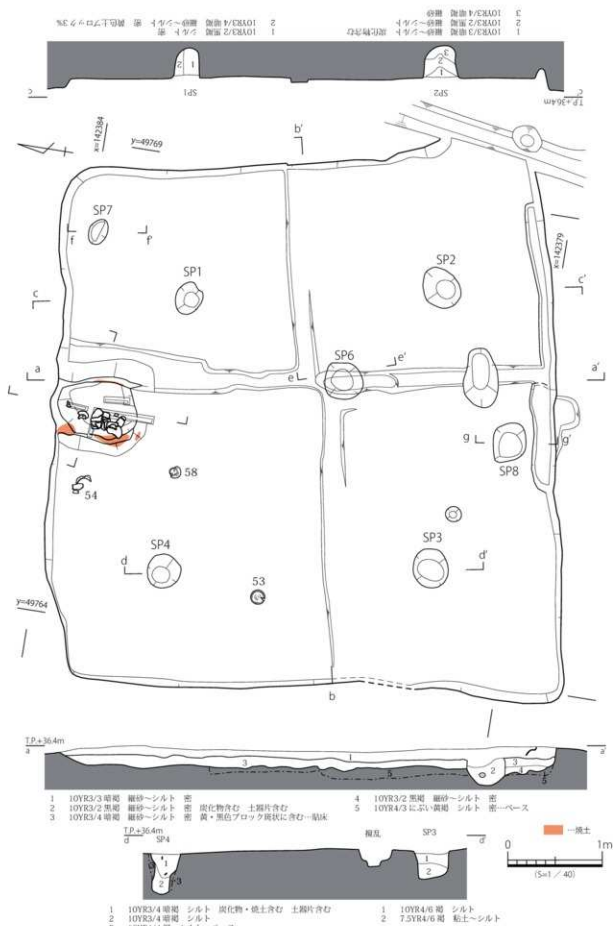


図 16 6- 竪穴 7 平・断面図

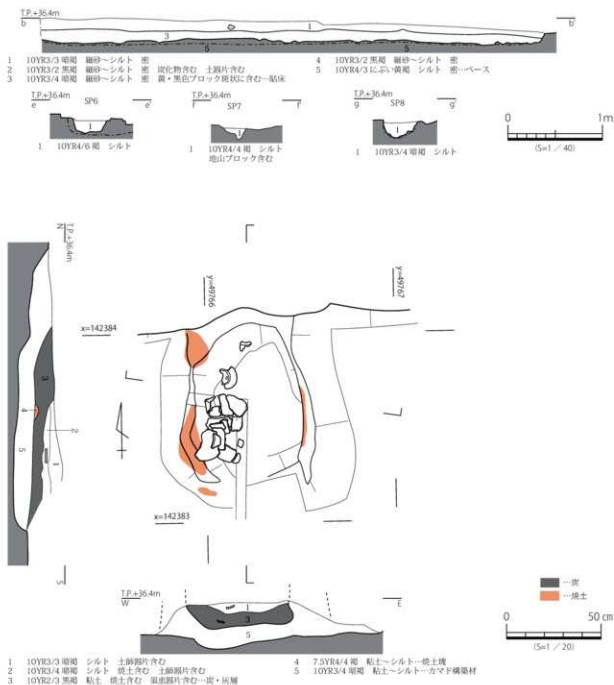


図 17 6- 竪穴 7 カマド

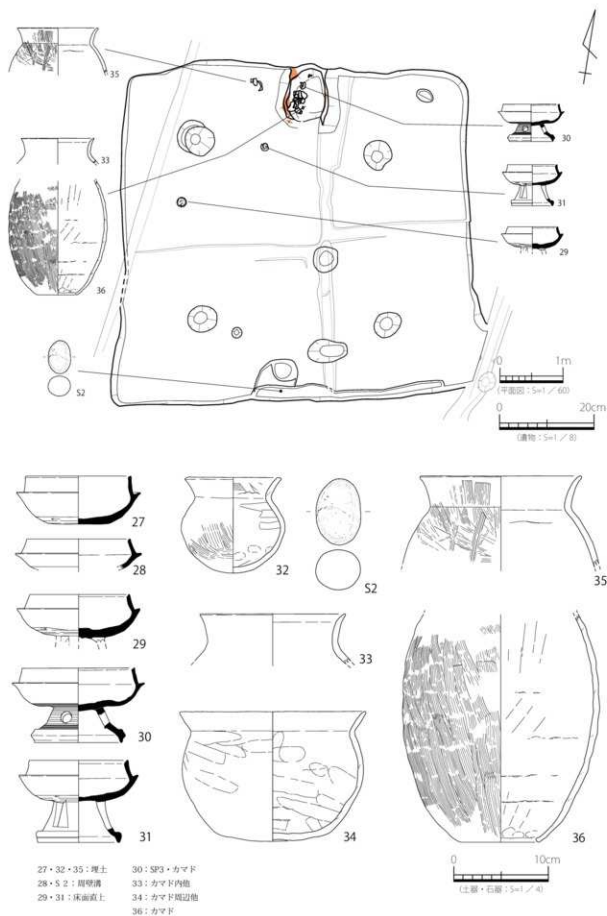


図 18 6- 竪穴 7 床面遺物出土状況及び出土遺物実測図

逆台形である。埋土は暗褐シルトである。他の支柱穴に比べ、やや小振りである。SP4は楕円形を呈し、長径約0.45m、深さ約0.10mを測る。断面形状は不整形である。底部は不整形に掘り込まれている。埋土は上層が暗褐細砂～シルト、下層が暗褐シルトである。

SK6は、カマドの東側で検出した楕円形の土坑である。長径約0.59m、短径約0.37m、深さ約0.10mを測る。断面形状は逆台形である。埋土は暗褐シルトである。土坑内からは、土師器甕(40)と鍋(41)が出土した。

SP8は竪穴建物南縁で検出した円形のピットである。直径約0.30m、深さ約0.10mを測る。断面形状は逆台形である。遺物は砂岩の石皿(S3)の上に、須恵器体部片と製塩土器片が置かれていた。

出土遺物から、TK47型式併行期と判断できる。

8-竪穴4(図22～25)

第8調査区の中央で検出した竪穴建物である。平面形状はやや縦長の方形で、主軸方位N-23°-W、検出面の標高は36.45mである。規模は、長辺約4.14m、短辺約3.90m、深さ約0.70mを測る。

埋土の掘削を行い、貼床面直上で遺構の検出を行い、カマドと周壁溝、ピットを検出した。

埋土は上層から暗褐シルト、にぶい黄褐シルト、暗褐シルトである。遺物は須恵器杯蓋(44・45)・杯身(46・47・50)、土製紡錘車(D1)、二次加工のあるサヌカイト剥片(S5)、須恵器杯身片・杯蓋片・高杯片、土師器甕片・甕片・杯片が出土した。

貼床は、にぶい黄褐シルトと褐シルトで、貼床の上面には炭化物や焼土を多量に含む暗褐シルトが認められる。貼床直上からは、須恵器杯身(48・49)・広口壺(51)、土師器甕(53)、手捏ね土器(52)、石製紡錘車(S4)、砥石(S6・S7)が出土した。そのうち須恵器杯身(48)は8-SD7出土の破片と接合した。このほか須恵器杯蓋片・甕体部片が出土している。

カマドは北側中央に馬蹄形に作り付けられ、内部に掘り込みが確認できた。カマド構築材は、褐細砂～シルトである。カマド内部は、上層がにぶい黄褐細砂～シルトで、カマドの上部構造の崩落土と考えられる。焚口部分に炭化物を層状に確認できた。遺物は土師器鍋(54)・底部を欠いた粗製甕(55)が出土した。粗製甕はカマド中央部に正位で置かれてお

り、支脚として使われた可能性がある。このほか須恵器体部片が出土している。

周壁溝は、幅約0.08m、深さ約0.03mを測る。埋土は暗褐シルトである。遺物は出土していない。

出土遺物の年代から、TK47～MT15型式併行期と判断できる。

3-竪穴55・21-竪穴10(図26～28)

第3調査区・第21調査区の中央で検出した竪穴建物である。3-竪穴35・4-竪穴18に切られる。平面形状は方形を呈し、主軸方位N-22°-W、検出面の標高は36.2mである。規模は、長辺約5.20m、短辺約5.00m、最深部で約0.3mを測る。

竪穴建物南側は礫層となっており、建物プランの検出が困難であった。後述する地震痕跡である噴霧の影響によるものと考えられる。調査開始当初、南側を竪穴82・SK20として検出したが、出土遺物の接合関係と堆積の状況から、本建物と同一の遺構とする認識に至った。

埋土の掘削を行い、貼床面直上で遺構検出を実施し、カマドと周壁溝、支柱穴(SP83)を確認した。

埋土は、暗オリーブ褐シルトと黒褐シルト～粘土である。遺物は須恵器杯身(58)・杯身片・杯蓋片・高杯片、土師器甕片・甕片、製塩土器片が出土した。その他、調査時に別遺構として取り上げた南半分(3-竪穴82・SK20)から須恵器杯身(62・63・64)・杯蓋(61)・高杯(65・66・67)・甕(68)、鉄器(T2)が出土している。

貼床は、極暗褐シルトと黒褐シルト～粘土である。遺物は貼床直上で須恵器杯蓋(56)が出土した。

カマドは北側中央に馬蹄形に作り付けられ、内部に掘り込みが確認できた。カマド構築材は、黒褐シルトと暗褐シルトである。カマド袖内面には、被熱が認められる。カマド内部上層の黒褐粘土～シルトは、カマドの上部構造の崩落土と考えられる。また焚口部分に焼土を層状に確認できた。遺物は土師器甕(59・60)・甕片、骨片、粘土塊が出土した。カマド中央から正位で出土した土師器甕(59)は支脚の可能性がある。カマドの近くから須恵器杯身(57)が出土している。

周壁溝は北西隅の一部で確認できた。幅約0.19m、深さ約0.17mを測る。埋土は褐シルトである。遺物は出土していない。

支柱穴は北東側の1基を確認できた。SP83は

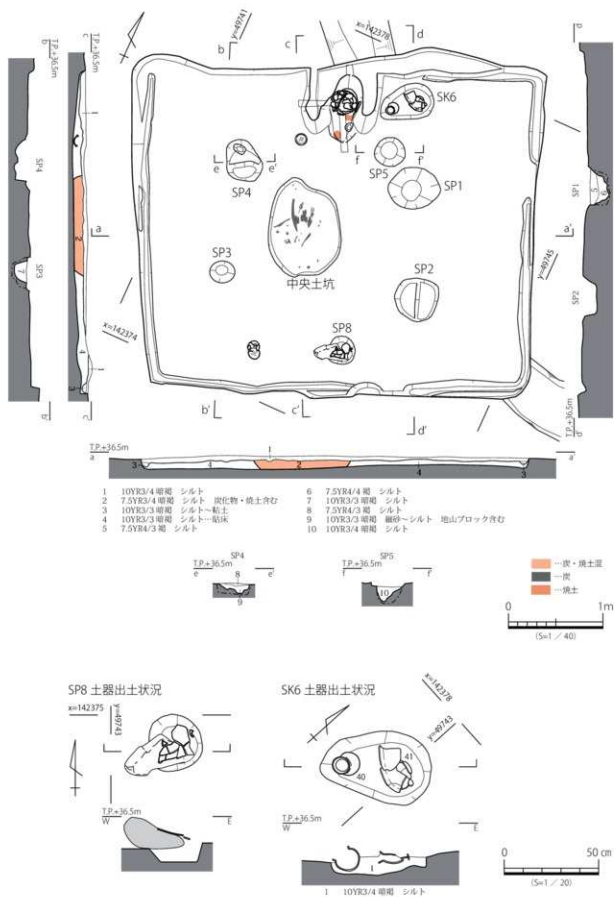


図 19 8- 竪穴 I 平・断面図

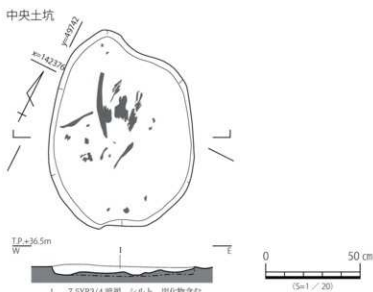
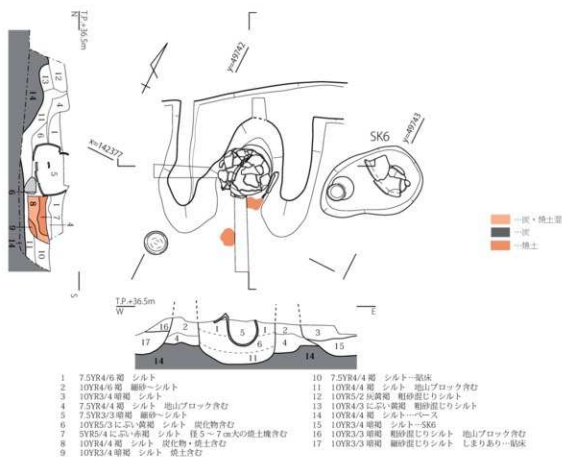


図 20 8- 竪穴 1 カマド及び遺物出土状況

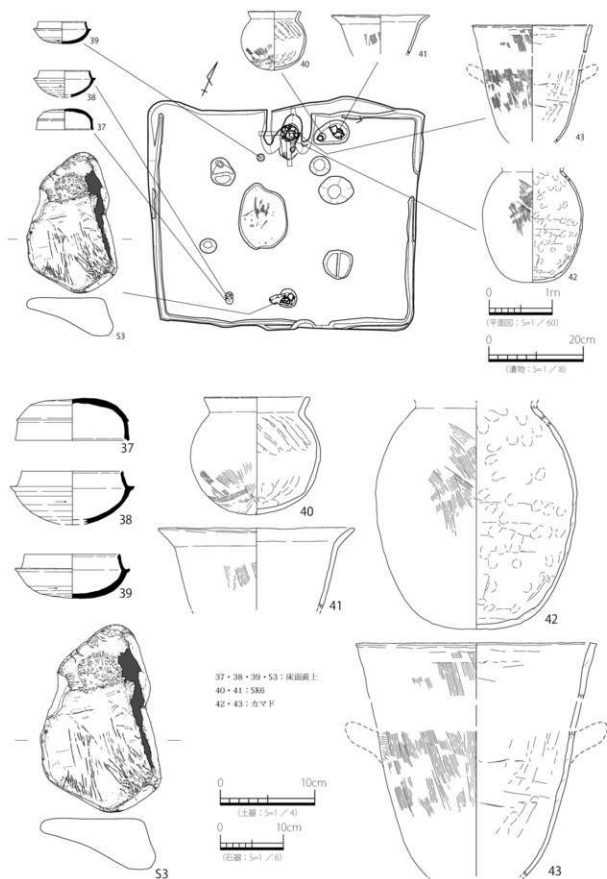


図 21 8- 竪穴 I 床面遺物出土状況及び遺物実測図

円形を呈し、直径約 0.46 m、深さ 0.32 m を測る。断面形状は V 字形である。柱痕が確認でき、埋土は黒褐粘土、掘方がにぶい黄褐シルト～粘土である。遺物は出土していない。

出土遺物の年代から、T K 23 ～ T K 47 型式併行期と判断できる。

4-1 竪穴 1 (図 29)

第 4 調査区南側に検出した竪穴建物の可能性がある遺構である。主軸方位 N - 30° - E、検出面の標高は 36.4 m である。平面形状は方形を呈すると考えられる。第 21 調査区では検出できなかった。これは遺構のベース層が礫層であることから、地震の影響の可能性が考えられる。規模は、長辺約 4.00 m、短辺約 1.8 m 以上、最深部で約 0.2 m を測る。

埋土が確認できず、貼床面直上で遺構検出を行った。

貼床は黒褐細砂～シルトである。遺物は貼床直上で須恵器高杯 (69) が、貼床内から須恵器杯身片が出土した。

出土遺物の年代から、T K 23 ～ T K 47 型式併行期と判断できる。

6・23-竪穴 6 (図 30 ～ 31)

第 6・23 調査区中央の東側に検出した竪穴建物である。平面形状は隅丸方形で、主軸方位 N - 18° - W、検出面の標高は 36.25 m である。規模は、長辺約 4.80 m、短辺約 4.62 m、深さ約 0.1 m を測る。

埋土の掘削後、貼床面直上で遺構検出を行い、カマドと周壁溝、支柱穴 (6・S P 1・23・S P 2)、土坑 (23・S K 3・4) を確認した。

埋土は褐細砂と炭化物を多量に含む暗褐シルト、黒褐細砂～シルトである。遺物は須恵器杯蓋片、土師器甕片・甕片が出土した。

貼床は、暗灰黄細砂～シルトで、建物北東隅で炭化物を検出した。遺物は出土していない。

カマドは竪穴建物北側やや東より馬蹄形に作り付けられ、内部は掘り込まれている。カマド構築材は、にぶい褐細砂～シルトと褐細砂～シルトで、カマド袖内側には被熱の痕跡が認められる。遺物はカマド内部から白玉片が出土した。

周壁溝は、北西側の一部で確認でき、幅約 0.16 m、深さ約 0.05 m を測る。埋土は暗褐シルトである。

支柱穴は南側の 2 基が確認できた。6・S P 1 は

円形を呈し、直径約 0.30 m、深さ約 0.34 m を測る。断面形状は V 字形である。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が暗褐シルト、掘方が褐シルトと褐細砂～シルトである。23・S P 2 は円形を呈し、直径約 0.22 m、深さ約 0.24 m を測る。断面形状は U 字形である。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が暗灰黄シルトと灰黄細砂～シルト、掘方がにぶい黄細砂である。

23・S K 3 は不定形な形状で、長軸約 0.85 m、短軸約 0.59 m、深さ約 0.14 m を測る。断面形状は不整形である。埋土は上層が暗褐シルト、下層が黒褐シルトである。遺物は須恵器杯蓋 (70)、土師器杯 (71)・小型甕 (72) が出土した。

23・S K 4 は攪乱によって切られるため、全体の形状は不明である。深さ約 0.09 m を測る。断面形状は不整形である。遺物は土師器甕体部片が出土した。底部中央に円孔が穿たれているので轆轤用甕と考えられる。

時期は、出土遺物から T K 23 ～ M T 15 型式併行期と判断できる。

6-1 竪穴 2 (図 32 ～ 33)

第 6 調査区北側、6-竪穴 1 の南側に検出した竪穴建物である。6・S K 45 を切っていることから、竪穴 1 よりも新しい建物と考えられる。平面形状はやや横長の方形を呈する。主軸方位 N - 20° - W、検出面の標高は 36.3 m である。規模は、長辺約 5.30 m、短辺約 4.60 m、深さ約 0.24 m を測る。

埋土の掘削後、貼床面直上で遺構検出を行い、カマドと周壁溝、支柱穴 (S P 1 ～ 4)、土坑 (S K 6)、ピット (S P 5) を確認した。

埋土はにぶい褐礫混じりシルトと暗褐細砂～シルトで、遺物は須恵器杯蓋 (73 ～ 76)、有蓋高杯蓋 (76)、土師器甕 (77)、埋土上層から須恵器杯身片・短頸甕片・甕片が出土した。

貼床は地山ブロック土を含む粗砂混じり細砂～シルトである。床面直上で、炭化物が散らばるように検出した。遺物は出土していない。

カマドは、竪穴建物北側中央に作り付けられ、北側に煙道が延びる。カマドの残りが悪く、袖の一部のみ確認できた。カマド構築材は灰黄褐シルト～粘土である。遺物は須恵器杯身片・焼成不良の杯蓋片・高杯片・甕片、土師器甕片・甕片が出土した。

周壁溝は幅約 0.11 m、深さ約 0.15 m を測る。埋土は暗オリーブ褐礫混じりシルトである。

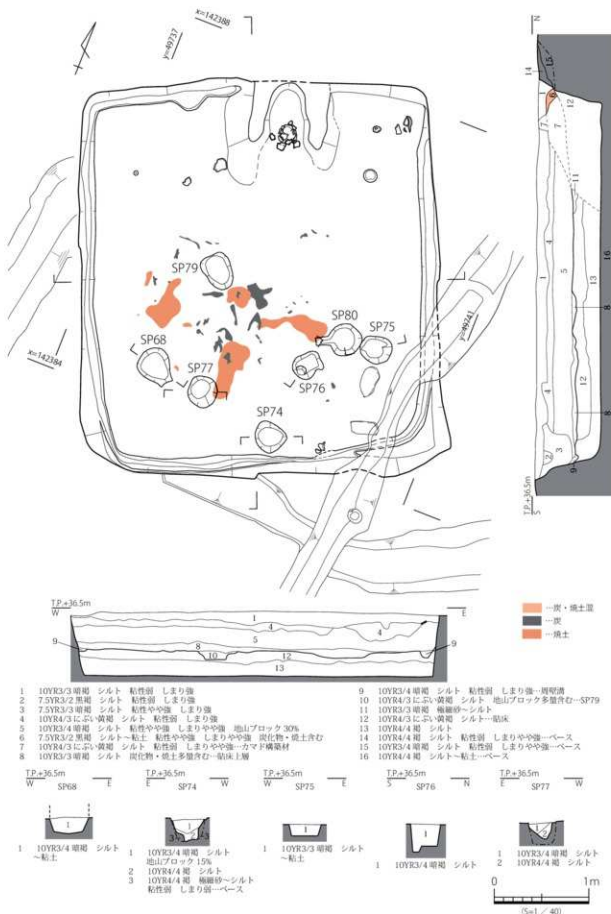


図 22 8- 竪穴 4 平・断面図

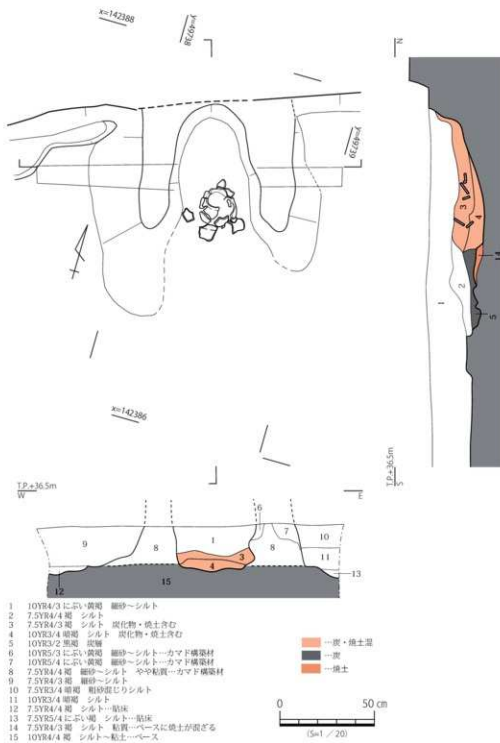


図 23 8- 竪穴 4 カマド

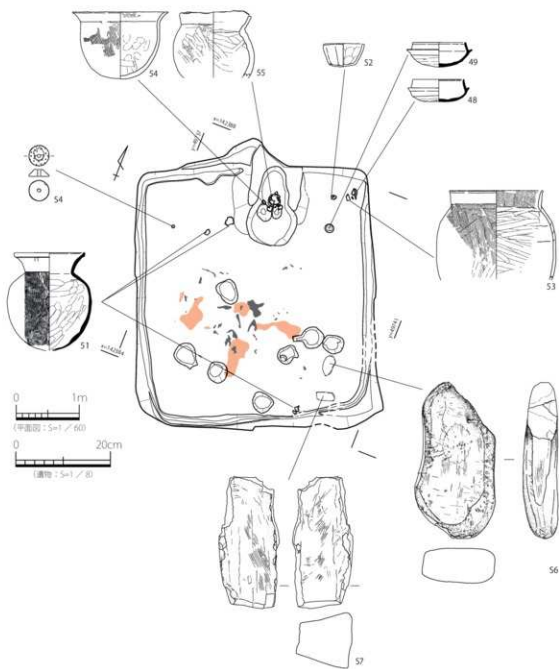


図 24 8- 竪穴 4 床面遺物出土状況

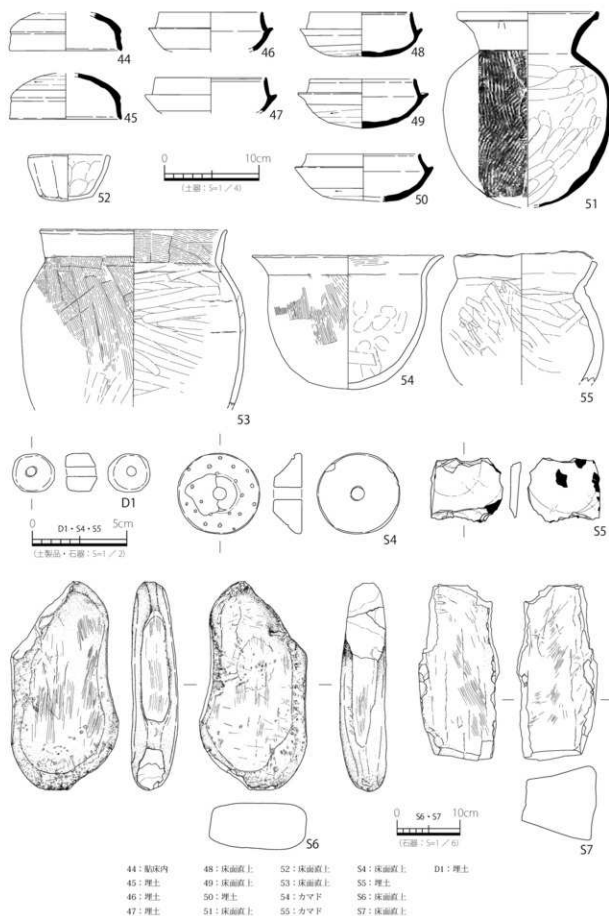


図 25 8-壁穴 4 出土遺物実測図

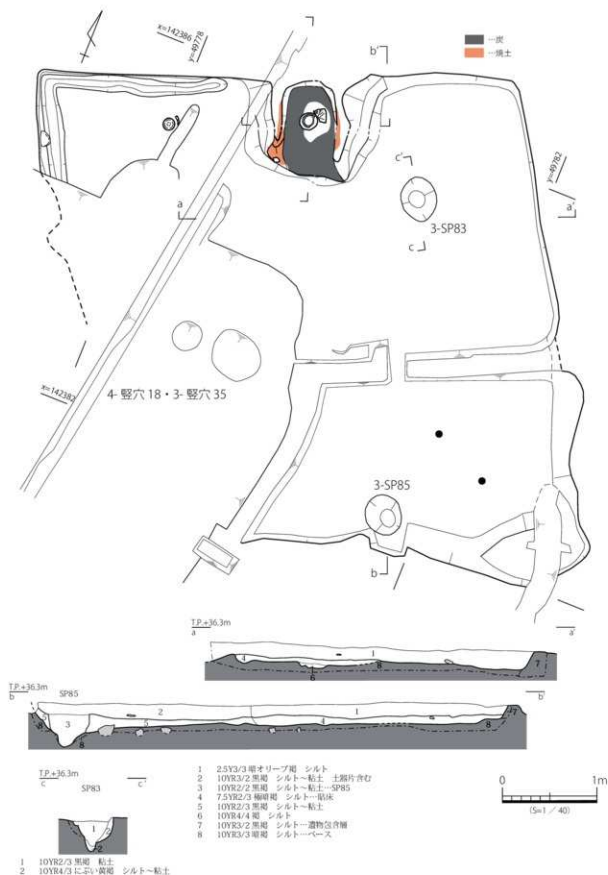


図 26 3- 竪穴 55・21- 竪穴 10 平・断面図

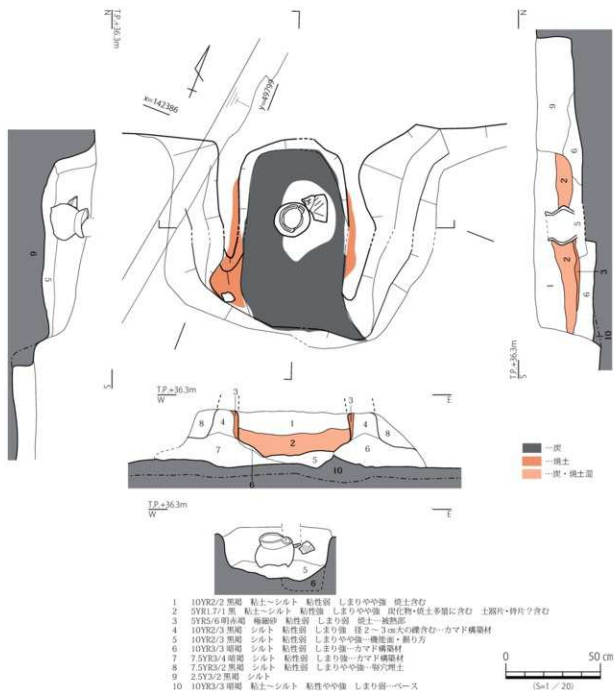
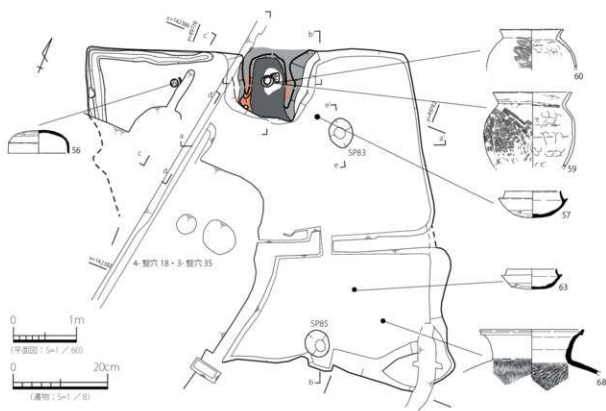
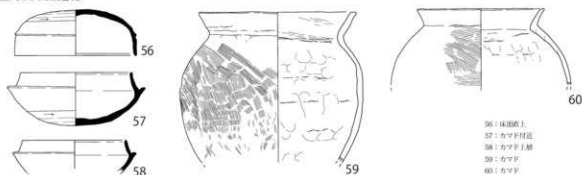


図 27 3- 竪穴 55・21- 竪穴 10 カマド



竪穴 55 出土遺物



竪穴 55 南半出土遺物

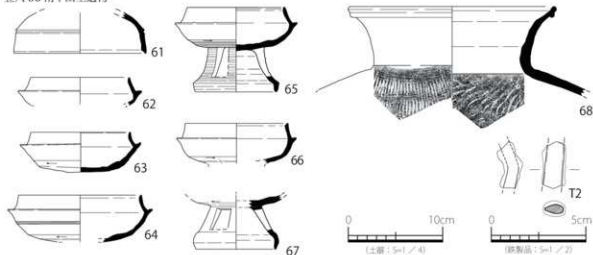


図 28 3- 竪穴 55・21- 竪穴 10 遺物出土状況及び出土遺物実測図

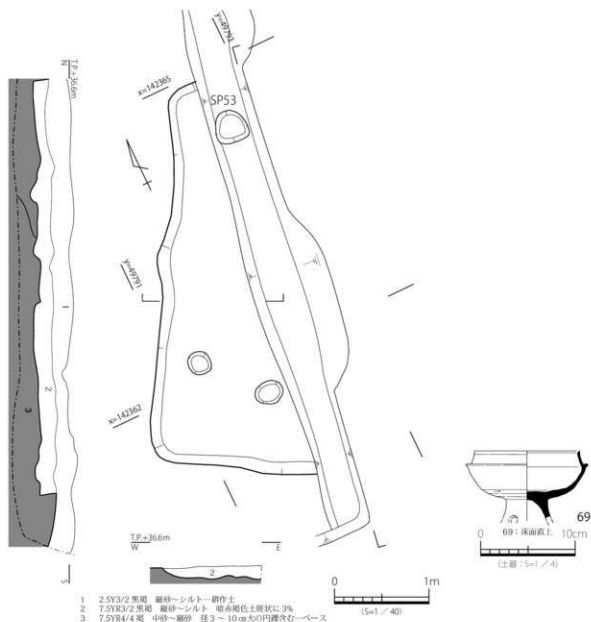


図 29 4- 竪穴 1 平・断面図及び出土遺物実測図

支柱穴は4基確認できた。S P 1は円形を呈し、直径約0.35m、深さ約0.18mを測る。断面形状は逆台形である。埋土は上層がオリーブ褐粗砂～シルト、下層がオリーブ褐細砂～シルトである。S P 2は円形を呈し、直径約0.36m、深さ約0.17mを測る。断面形状は逆台形である。埋土は褐粗砂である。S P 3は円形を呈し、直径約0.44m、深さ約0.29mを測る。断面形状はU字形である。埋土は上層が暗褐シルト～極細粒砂、下層が褐極細粒砂である。S P 4は円形を呈し、直径約0.32m、深さ約0.23m

を測る。断面形状は楕形である。埋土は上層がにぶい黄褐シルト、下層が褐シルトである。

S K 6は楕円形を呈し、長径約0.78m、短径約0.63m、深さ約0.23mを測る。断面形状は不整形である。埋土は上層が暗褐シルト、下層が褐細砂～シルトである。

出土遺物の年代から、T K 23～T K 47 型式併行期と考えられる。

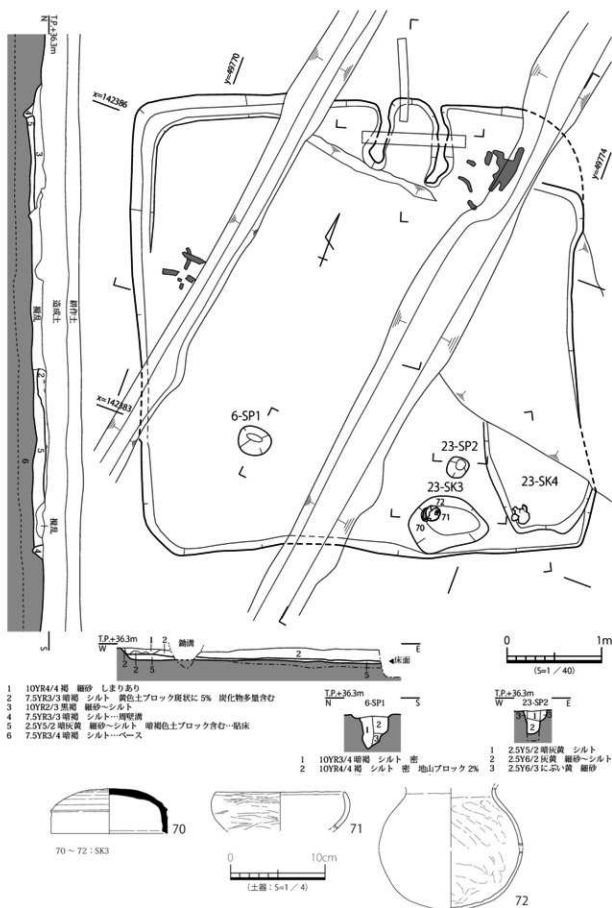


図 30 6・23- 竪穴 6 平・断面図及び出土遺物実測図

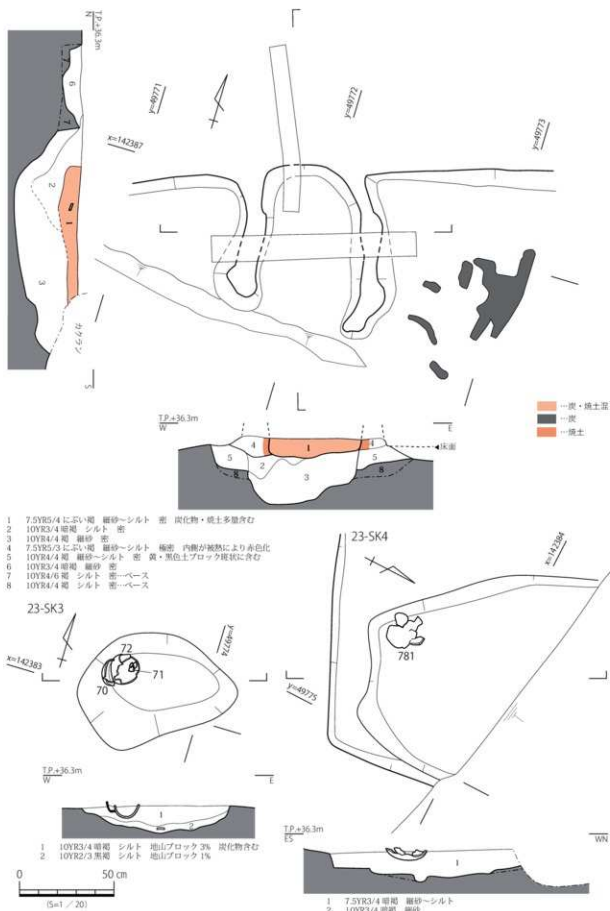


図 31 6・23- 竪穴 6 カマド及び遺物出土状況

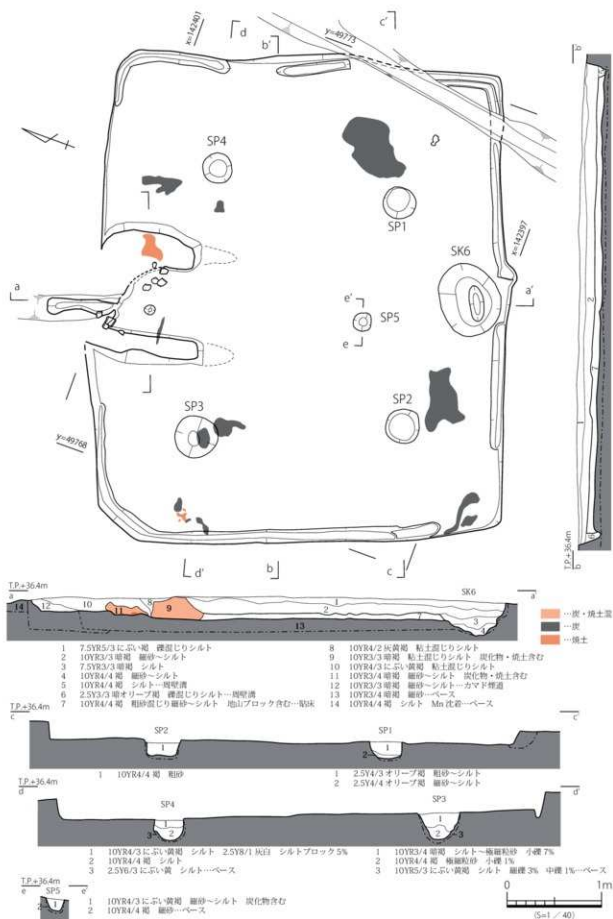
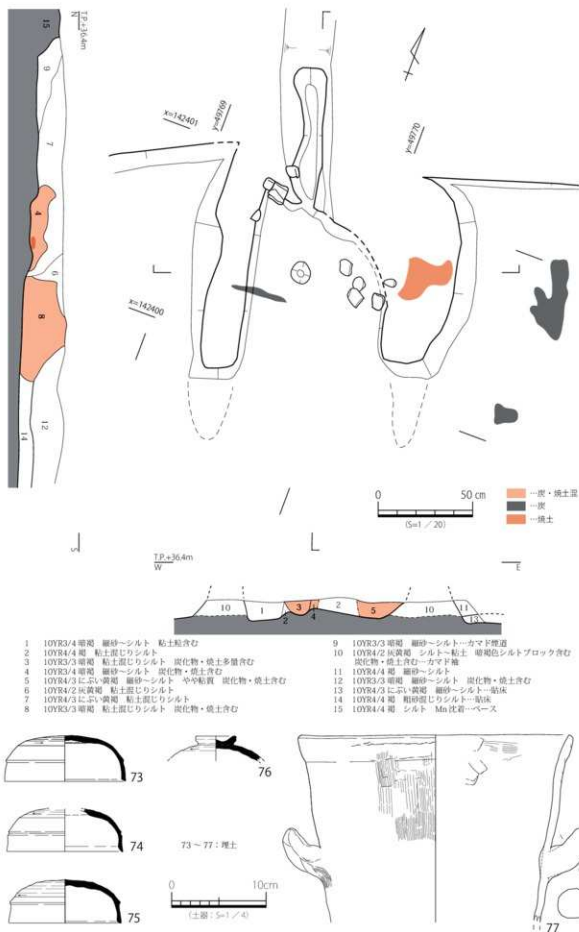


図 32 6-竪穴2 平・断面図



8-竪穴 2 (図 34～35)

第 8 調査区中央で検出した竪穴建物である。平面形状は隅丸方形を呈する。主軸方位 N -21.5° - W、検出面の標高は 36.4m である。規模は、長辺約 4.22m、短辺約 4.14m、深さ約 0.18m を測る。

埋土の掘削後、貼床面直上で遺構の検出を行い、カマドと周壁溝、ピット (S P 37・56・65・72・73) を検出したが、支柱穴は確認できなかった。

埋土は暗褐シルトで、遺物は須恵器杯身 (80)、

須恵器杯身片・杯蓋片・高杯片・壺片、土師器甕片・高杯片が出土した。

貼床は地山ブロック土を含む暗褐細砂～シルトで、貼床直上から須恵器杯身 (79)・杯蓋 (78) が出土した。

カマドは竪穴建物北側中央に作り付けられる。カマドの残存状態が悪いため、全体の形状は不明である。カマド中央を掘窪めたのち、地山ブロック土を含む暗褐シルト～粘土でカマドを構築する。カマ

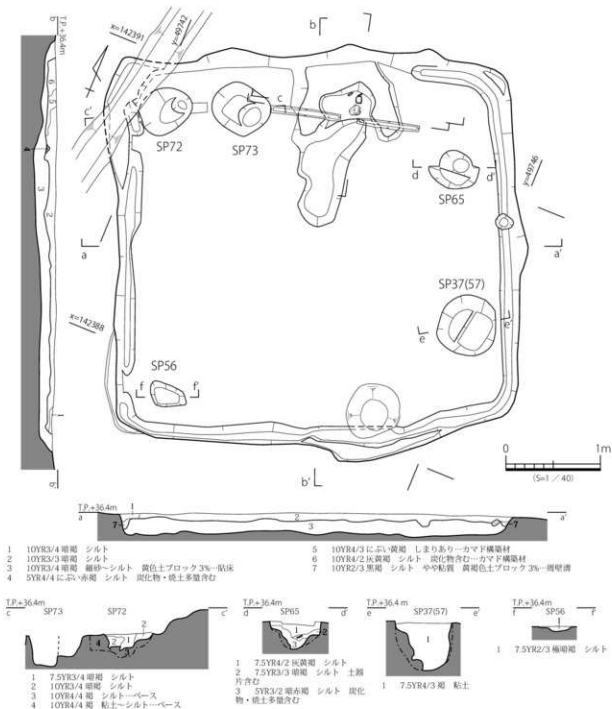


図 34 8-竪穴 2 平・断面図

ド内部中央には、支脚石が据えられる。

周壁溝はほぼ全面で確認でき、幅約 0.11 m、深さ約 0.11 m を測る。埋土は暗褐シルトと黒褐シルトである。

S P 72 はやや不整形な円形を呈し、直径約 0.52 m、深さ約 0.16 m を測る。断面形状は不整形である。埋土は暗褐シルトである。S P 73 は円形を呈し、直径約 0.56 m、深さ約 0.33 m を測る。断面形状は逆台形である。S P 65 は不整形な形状を呈し、長軸約 0.54 m、短軸約 0.40 m、深さ約

0.29 m を測る。断面形状は不整形である。埋土は 3 層に分類でき、上層が灰黄褐シルト、中層が暗褐シルト、下層が暗赤褐シルトである。S P 37 (57) は円形を呈し、直径約 0.60 m、深さ約 0.52 m を測る。断面形状は不整形である。埋土は褐粘土である。S P 56 はやや歪な楕円形を呈し、長径約 0.40 m、短径約 0.24 m、深さ約 0.05 m を測る。断面形状は浅い皿状である。埋土は極暗褐シルトである。

出土遺物の年代から、T K 47 型式併行期と判断できる。

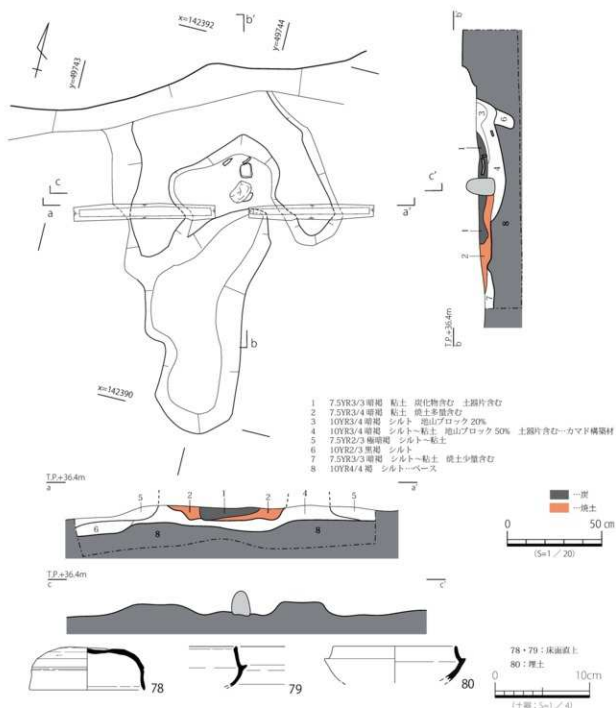


図 35 8- 竪穴 2 カマド及び出土遺物実測図

10-竪穴 90(図 36～37)

第 10 調査区の南東側で検出した竪穴建物である。調査区外に展開するため、全体の形状は不明である。主軸方位 N-0°-W、検出面の標高は 35.9m である。規模は、長辺約 4.00m、短辺約 2.4m 以上、最深部で約 0.3m を測る。

埋土の掘削後、貼床面直上で遺構検出を実施し、カマドと周壁溝、支柱穴 (S P 1) を確認した。

埋土は暗褐色シルト～粘土と暗褐色シルト、炭化物・焼土塊を含む黒褐色シルトである。遺物は土師器甕 (81)、製塩土器 (82)、白玉 (S8)、土師器甕片、白玉片が出土した。

貼床は暗褐色シルト～粘土と暗褐色粘土である。遺物は出土していない。

カマドは竪穴建物北側中央に作り付けられる。また竪穴建物北側には、煙道が確認できた。カマドの構築材は、暗褐色シルト～粘土である。カマド内部には、一部に炭化物と焼土層が確認でき、カマドの上部構造の崩落土と考えられる。

周壁溝は東縁部で確認でき、幅約 0.08 m、深さ約 0.08 m を測る。埋土は黒褐色シルト～粘土である。遺物は出土していない。

支柱穴は北東側の 1 基が確認できた。S P 1 は、半分が調査区外のため、全体の形状は不明である。深さ約 0.19 m を測り、底部の形状は傘である。埋土は暗褐色シルトである。

出土遺物の年代から、古墳時代中期中葉～後期前葉と考えられる。

3-竪穴 45(図 38～43)

第 3 調査区中央東側で検出した竪穴建物である。3-S K 23 に切られ、調査区外に広がるため全体の形状は不明であるが、やや横長の隅丸方形を呈すると考えられる。主軸方位 N-30°-W、検出面の標高は 36.0m である。規模は、長辺 6.40m 以上、短辺約 6.40m、最深部約 0.3m を測る。

埋土の掘削後、貼床面直上で遺構検出を実施し、カマドと周壁溝、支柱穴 (S P 70・71・73) を確認した。

埋土は灰黄褐色細砂混じりシルトである。多量の炭化物と焼土粒が含まれ、特徴として床面直上に 1 cm 程度の厚さで、炭化物の集中層を確認した。遺物は須恵器杯身片・杯蓋片・高杯片・甕片・壺片・甕片、土師器甕片・甕片・高杯片、製塩土器片など多数の

遺物が出土した。

貼床は暗褐色土と、遺構のベースとなる黄褐色土が貼られており、硬く踏みしめられていた。貼床は全体に薄く約 10cm 前後の厚さであった。

床面の北半部に炭化物が広がっていたが (図 38)、垂木や建築部材の形は確認できず、多くは粉末状となっていた。その中で、北東部は、床面から厚さ 10cm 程と特に厚く堆積した。

遺物は中央部分に南北方向に一列に並んで出土した。短頸壺 (92)・広口壺 (94・95・96)・平瓶 (90)、土師器甕 (109・110)・壺 (102・103・111)・甕 (97・98・100) や、碧玉製管玉 (S10)、その他図示できなかったが須恵器甕体部片などが良好な遺存状態で出土した。これらは、土圧により潰れた状態で出土しており、建物の廃絶時期を示している。北側の周壁溝の近くからは須恵器杯蓋 (83)・杯身 (88)・壺 (93)、土師器甕 (105・106) が出土した。その他、南西部の床面近くで須恵器杯身 (87)・高杯 (89) が出土した。貼床内から土師器甕 (104) が出土した。

カマドは北側中央に作り付けられ、カマド中央は掘り込まれている。また竪穴建物北側に煙道が確認できた。カマド構築材は、褐色砂混じりシルト～粘土と灰黄褐色粗砂混じりシルト～粘土である。カマド内からは土師器甕 (107・108)、カマド焚口から土師器甕 (106) が出土した。このほか須恵器杯身片、高杯脚部片、土師器甕片・甕片、被熱した支脚石が 2 点出土した。

周壁溝は幅約 0.15 m、深さ約 0.13 m を測る。埋土は黒褐色シルトである。南壁際を除く北壁から西壁の北半部のみ検出できた。カマドより東側の周壁溝は幅 15cm 程度のテラス状になっていて、須恵器壺 (93) はそこから転落したと考えられる。その他図示できなかったが須恵器杯身片・土師器甕片が出土した。

支柱穴は 3 基確認できた。S P 70 は円形を呈し、直径約 0.33 m、深さ約 0.52 m を測る。断面形状は V 字形である。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が極暗褐色シルト、掘方が暗褐色細砂である。S P 71 は円形を呈し、直径約 0.42 m、深さ約 0.53 m を測る。断面形状は V 字形である。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が暗褐色シルトで、掘方が褐色シルトである。遺物は土師器精製高杯片が出土した。S P 73 は円形を呈し、直径約 0.39 m、深さ約 0.46 m を測る。断

面形状はV字形である。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が暗褐色細砂シルトと暗褐色シルトである。

この建物は、調査時には認識できなかったが南西隅を3・SK23をカマドとする竪穴建物に一部切られている。そして北半部に焼土や炭化物を多く含む層に被覆されていることから、いわゆる焼失住居の様相を示す。床面やカマド付近に遺物が依存した状態であったため、土器類を持ち出す間もなく被災したと考えられる。よって、これらの土器組成などから、当時の生活痕跡を色濃く残す建物と言える。

出土炭化物の樹種同定とAMS分析を実施した結果、樹種はコナラ属コナラ亜属クヌギ節で、炭化物のAMS年代は補正年代でcal AD421-539という結果を得た。

出土遺物の年代から、この建物の廃絶時期はTK10型式併行期と判断できる。

10-竪穴110(図44～48)

第10調査区の東側に検出した竪穴建物である。平面形状は隅丸正方形を呈する。主軸方位N-10°-E、検出面の標高は35.8mである。規模は、長辺約6.00m、短辺約5.90m、最深部で約0.3mを測る。

埋土の掘削後、貼床面直上で遺構の検出を行い、カマドと周壁溝、支柱穴(SP1～4)、ピット(SP5～7)を確認した。

埋土にはぶい黄褐色シルトで、遺物は須恵器杯蓋(114・115・116)、土師器甕(123)、須恵器杯蓋片・杯身片、土師器高杯片、焼土塊、木片が出土した。

貼床は地山ブロックを含む褐色シルトである。遺物は貼床直上から須恵器杯身(117・118・120)・杯蓋(112・113)、土師器甕(125～128)、台石(S11・S12)が、貼床内から須恵器杯身(119・121)、須恵器杯蓋片・土師器高杯片が出土した。

カマドは、北側中央やや東よりに作り付けられ、馬蹄形を呈する。カマドの構築材は、灰褐色シルトである。カマド中央は掘窪められ、中央に土師器甕(122)が正位で出土した。底部と正面を欠き、正面側にくる外面にだけ被熱痕があり、口縁内面に土師器甕(127)を上に乗せて合致する薄い煤の付着が観察できる。このことから、(122)はカマドの構築材として転用されたと考えられる。このほか土師器甕(124)、須恵器杯身片、土師器精製高杯片、支脚石、粘土塊が出土した。

周壁溝はほぼ全面で確認でき、幅約0.23m、深

さ約0.09mを測る。埋土は暗褐色シルトと褐色シルトである。遺物は出土していない。

支柱穴は4基確認できた。SP1は不整形で、長軸約1.00m、短軸約0.49m、深さ約0.46mを測る。断面形状はW字形である。埋土は暗褐色シルトと黒褐色シルト、灰褐色シルト、褐色シルトである。平面形状や断面・底部の形状が不整形であることから、抜取の可能性が考えられる。SP2は不整形で、長軸約0.72m、短軸約0.64m、深さ約0.44mを測る。断面形状はU字形である。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が極暗褐色シルト～粘土、掘方が暗褐色シルトと暗褐色シルト～粘土である。SP3は歪な円形を呈し、直径約0.50m、深さ約0.42mを測る。断面形状は逆台形である。埋土が暗褐色シルト、柱痕が暗褐色シルト～粘土、掘方が暗褐色シルトと暗褐色シルト～粘土である。SP4はやや歪な楕円形を呈し、長径約0.59m、短径約0.48m、深さ約0.38mを測る。断面形状はU字形である。埋土は暗褐色シルトと暗褐色シルトで、堆積状況から抜取の可能性が考えられる。支柱穴からは、遺物は出土していない。

出土遺物の年代からTK10型式併行期と考えられる。

10-竪穴201(図49～50)

第10調査区の西側に検出した竪穴建物である。10-SK207に切られる。平面形状はやや横長の方形を呈する。主軸方位N-33.5°-W、検出面の標高は36.25mである。規模は、長辺約5.40m、短辺約4.80m、最深部で約0.3mを測る。

埋土の掘削後、貼床面直上で遺構の検出を行い、カマドと周壁溝、支柱穴(SP2・4・6)、ピット(SP1・3・5・7)を確認した。このうちSP1・2・3・7は掘方まで掘削した段階で検出した。

埋土は暗褐色シルトで、遺物は須恵器杯身(131・132)・甕(134)、土師器甕(135)・甕(136・137)、須恵器杯身片・杯蓋片・高杯片・壺片、土師器甕片・高杯片が出土した。

貼床は褐色シルトで、遺物は貼床直上から須恵器杯身(129・133)が、貼床内から須恵器杯身片・高杯脚部片が出土した。

カマドは北側中央に作り付けられ、馬蹄形を呈する。カマド構築材は暗褐色シルトと褐色シルトである。カマド掘方から須恵器杯身(130)、須恵器杯身片・土師器甕片が出土した。

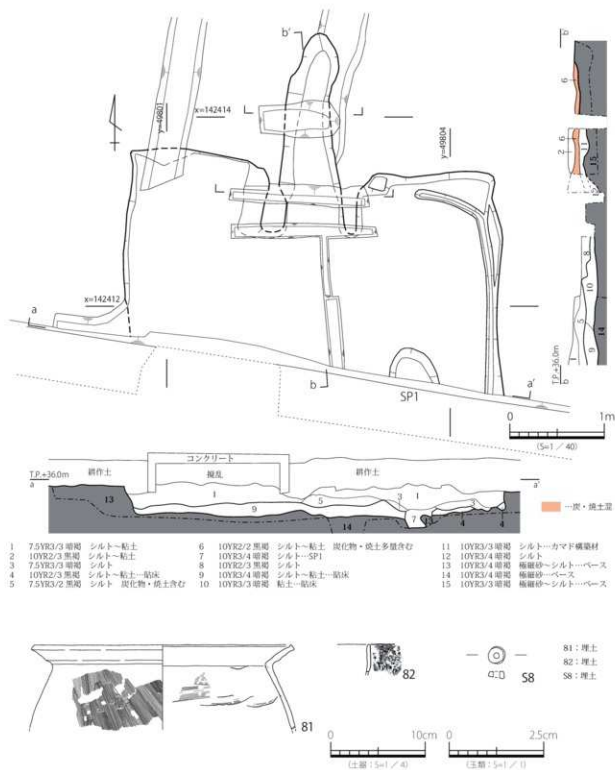


図 36 10- 竪穴 90 平・断面図及び出土遺物実測図

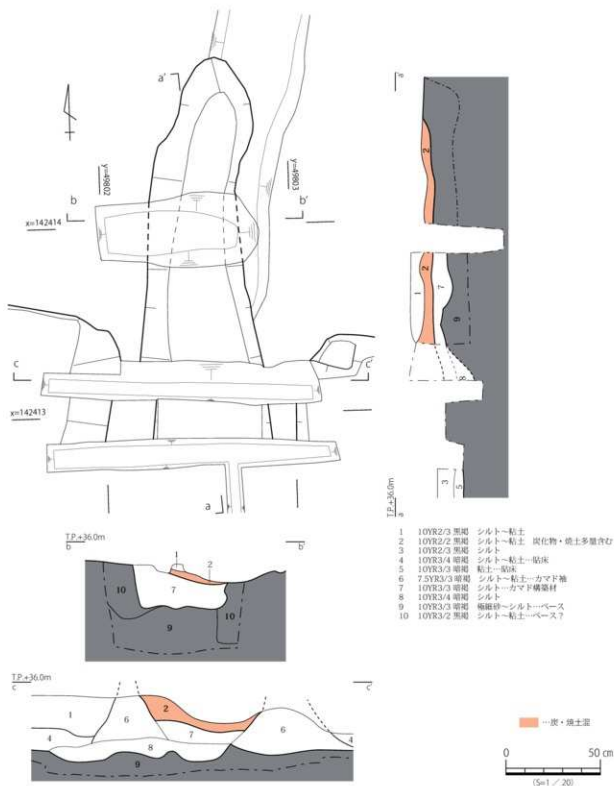


図 37 10- 竪穴 90 カマド

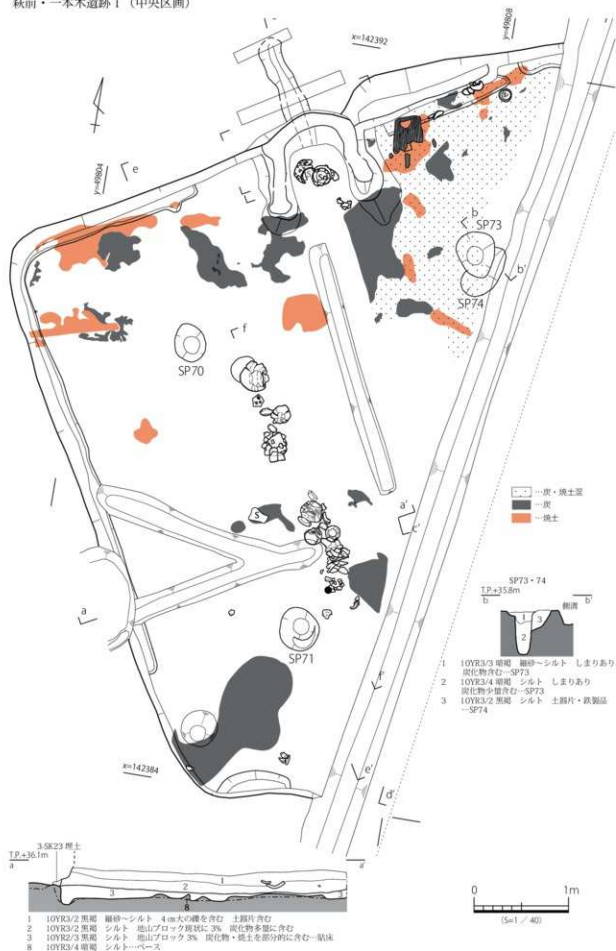


図 38 3- 竪穴 45 平・断面図

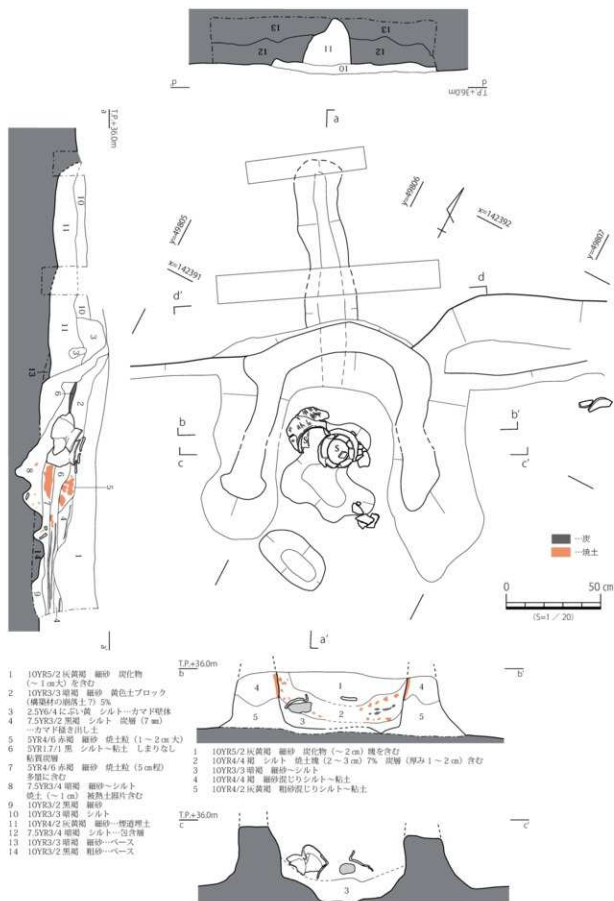


図40 3- 壁穴45 カマド

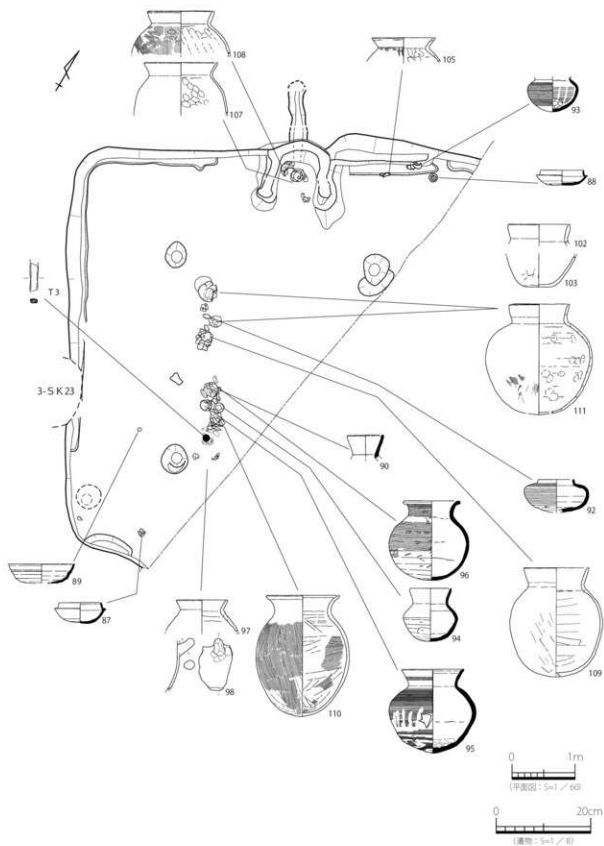


図 41 3- 竪穴 45 床面遺物出土状況

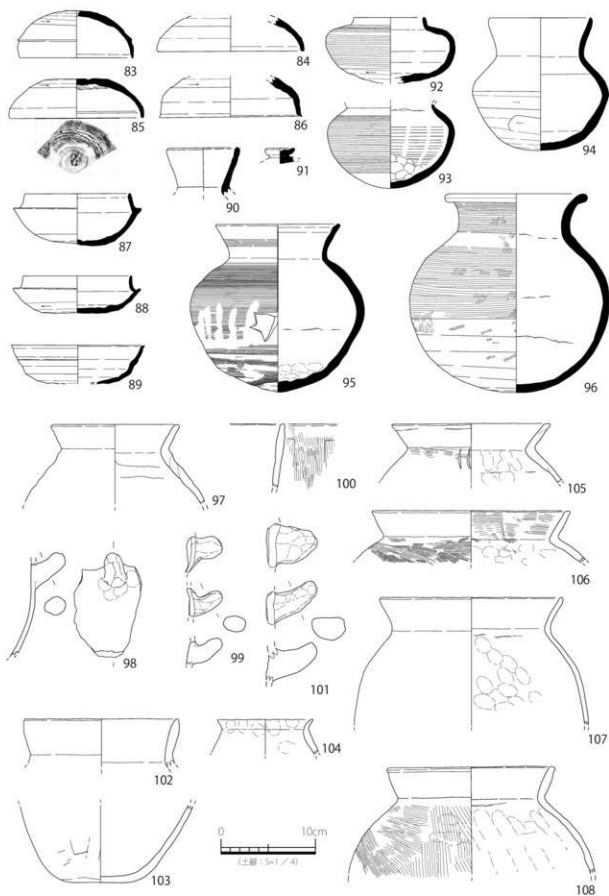


図 42 3- 堅穴 45 出土遺物実測図 (1)

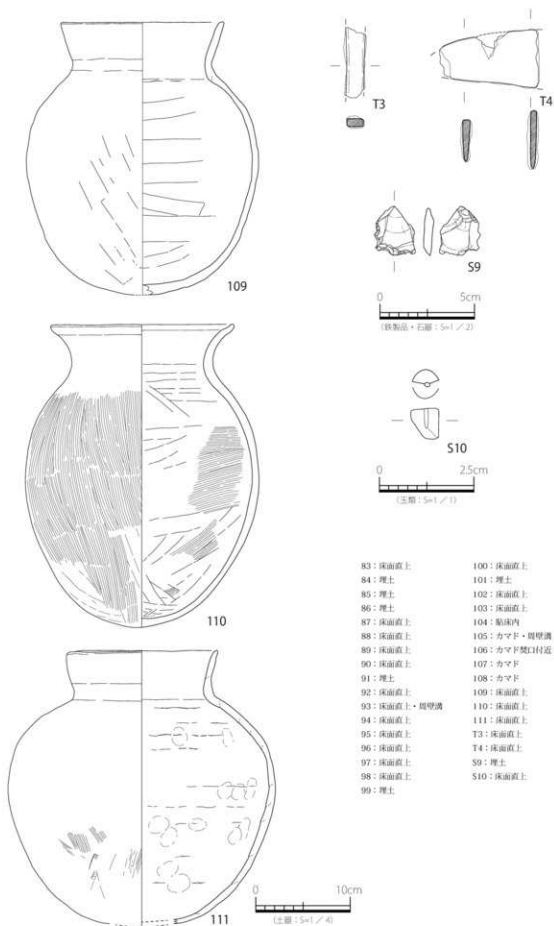


図 43 3- 竪穴 45 出土遺物実測図 (2)

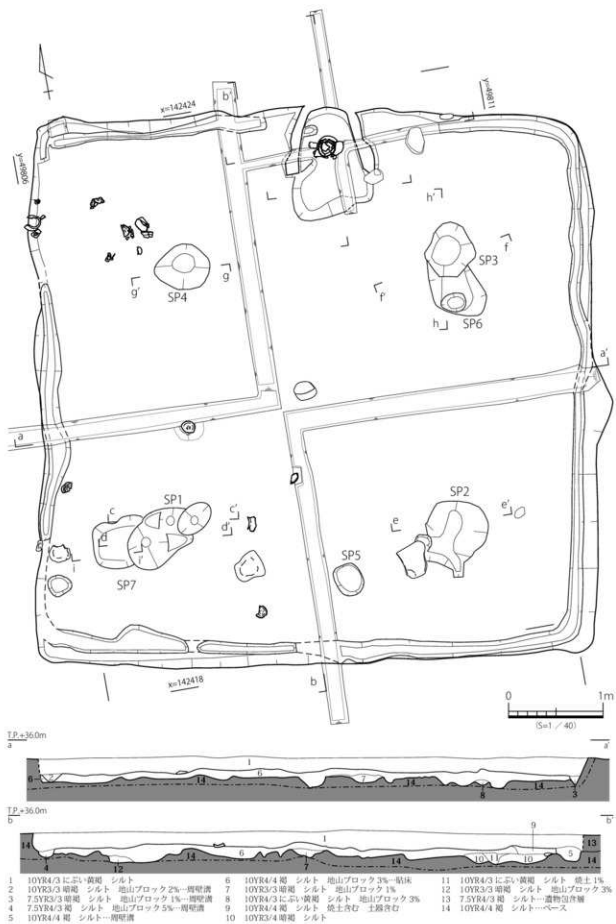


図 44 10- 竪穴 110 平・断面図

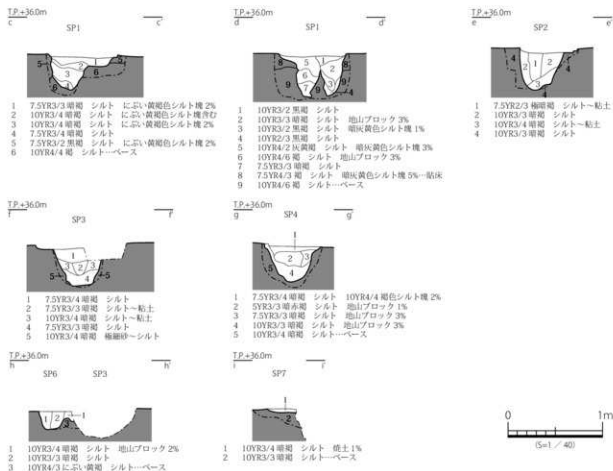


図 45 10- 竪穴 110 断面図

周壁溝は、南縁の一部で確認でき、幅約 0.15m、深さ約 0.17m、埋土は黒褐シルトである。遺物は出土していない。

支柱穴は 3 基確認できた。S P 2 は円形を呈し、直径約 0.18m、深さ約 0.24m を測る。断面形状は逆台形である。埋土は褐砂礫混じりシルトである。S P 4 はやや歪な円形を呈し、長径約 0.55m、短径約 0.52m、深さ約 0.30m を測る。断面形状は U 字形である。埋土は褐シルトと暗褐シルトである。S P 6 は円形を呈し、直径約 0.36m、深さ約 0.13m を測る。断面形状は逆台形である。埋土は褐シルトである。支柱穴から遺物は出土していない。

出土遺物の年代から、T K 10 型式併行期と判断できる。

4- 竪穴 20 (図 51 ~ 52)

第 4 調査区中央で検出した竪穴建物である。4- 竪穴 18 に切られるため、平面形状は不明である。主軸方位 N - 35° - W を仮定した。検出面の標高は 36.2m である。推定規模は長辺約 5.6m、短辺約

5.0m で、最深部は 0.3m を測る。

検出段階では、竪穴プランを正確に検出できず、カマドを S P 67 として掘削した。調査終了後、他の竪穴建物やピット等の配置、遺物の出土状況から推定プランを復元した。

カマドは、カマドの袖部分を確認できなかったため、全体の形状は不明であるが、カマド中央部を掘り込む構造であったと推定できる。遺物は須恵器杯蓋 (138)、土師器鉢 (148)、須恵器杯身片、土師器甕体部片、鉢片が出土した。このうち土師器甕の体部片は支脚として利用されていたと考えられる。

支柱穴は、2 基が推定可能である。S P 14 はやや歪な平面形状を呈し、直径約 0.98m、深さ約 0.38m を測る。断面形状は逆台形に柱痕の段落ちである。埋土は暗褐細砂～シルトと極暗褐細砂～シルトである。S P 71 は楕円形を呈し、長径約 0.99m、短径約 0.69m、深さ約 0.15m を測る。断面形状は逆台形である。埋土は黒褐細砂～シルトである。遺物は須恵器杯蓋 (142)、台付壺の脚部 (145) が出土した。

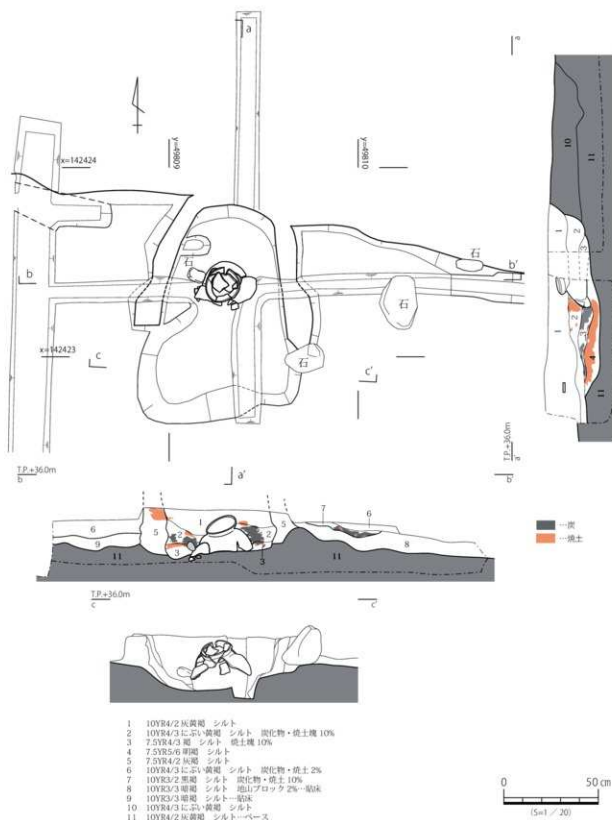


図 46 10- 豎穴 110 カマド

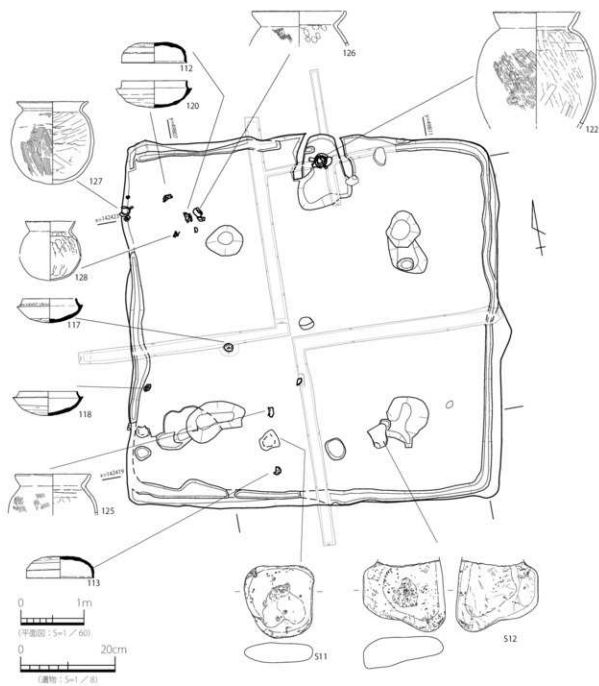


図 47 10- 竪穴 110 床面遺物出土状況

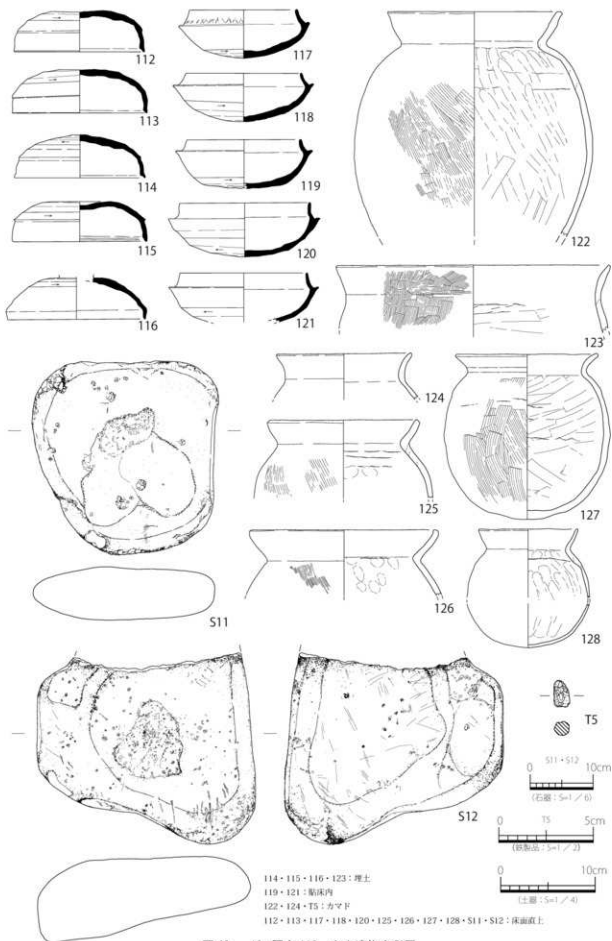


図 48 10- 竪穴 110 出土遺物実測図

S P 72 はやや歪な円形を呈し、直径約 0.66 m、深さ約 0.32 m を測る。断面形状は不整形である。埋土は黒褐細砂～シルトである。S P 70 は、4- 堅穴 18 に切られるため、全体の形状は不明であるが、長径約 0.76 m、短径約 0.67 m、深さ約 0.24 m を測る。断面形状は不整形である。埋土は黒褐シルトである。遺物は上面から土師器甕 (149) が出土した。

遺物は埋土から須恵器杯身片・杯蓋片が、床面直上から須恵器杯蓋 (139・141)・杯身 (143)、土師器杯 (146・147) が出土した。

出土遺物の年代から T K 10 型式併行期と判断できる。

6・23－堅穴 9 (図 53～54)

第 6 調査区の南東で検出した堅穴建物である。平面形状はやや縦長の方角を呈する。6- 堅穴 8 を切る。主軸方位 N - 5.5° - E、検出面の標高は 36.4 m である。規模は、長辺約 4.66 m、短辺約 4.40 m、深さ約 0.14 m を測る。

堅穴建物北側では、埋土の掘削後、貼床面直上で遺構の検出を行い、カマドと支柱穴 (23- S P 3・4、6- S P 42・43)、ビットを検出した。堅穴建物の南側は、埋土の掘削後すぐに礫層が露出し、貼床面を確認することができなかった。後述する地震痕跡の影響と考えられる。

埋土は暗褐シルトで、遺物は須恵器杯身 (153)・杯蓋 (151・152)、須恵器高杯片、土師器甕片が出土している。

貼床は黒褐シルトである。

カマドは堅穴建物北側中央に作り付けられ、馬蹄形を呈する。中央部を掘窪め、石製の支脚を据える。カマド袖の構築材は褐細砂～シルトと暗褐細砂～シルトで、内側は被熱による赤色化が確認できた。カマド埋土の 3・4 層は、赤・黄色粘土塊が散在状に認められる。カマドの上部構築材の崩落によるものと考えられる。カマド内部から須恵器杯蓋 (150) が出土している。

支柱穴は 4 基確認できた。6- S P 42 は円形を呈し、直径約 0.30 m、深さ約 0.18 m を測る。断面形状は逆台形である。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が暗褐シルト、掘方が極暗褐シルトである。6- S P 43 は円形を呈し、直径約 0.54 m、深さ約 0.16 m を測る。断面形状は逆台形である。埋土は灰黄褐シルトである。23- S P 3 は、楕円形を呈し、直径約

0.50 m、深さ約 0.17 m を測る。断面形状は逆台形である。埋土は灰黄褐シルトである。23- S P 4 は、円形を呈し、直径約 0.28 m、深さ約 0.23 m を測る。断面形状は逆台形で段落ちである。埋土は黒褐シルトである。

出土遺物の年代から、T K 10 型式併行期と判断できる。

7・24－堅穴 7・6－堅穴 4 (図 55～56)

第 7・6・24 調査区の中央で検出した堅穴建物である。平面形状はやや縦長の隅丸方形で、6- S K 6 を切り、6- S K 5・16 に切られる。主軸方位 N - 16.5° - W、検出面の標高は 36.2 m である。規模は、長辺約 4.98 m、短辺約 4.75 m、深さ約 0.14 m を測る。

埋土の掘削後、貼床面直上で遺構の検出を行い、カマドと周壁溝、支柱穴 (24- S P 1・3・6、7- S P 3)、ビットを検出した。

埋土は暗褐細砂～シルトと暗褐砂礫混じりシルトである。遺物は須恵器杯蓋 (154)・杯身 (155・156・157)、須恵器杯身片・杯蓋片・高杯片、土師器甕把手が出土した。

貼床はにぶい黄細砂～シルトで、床面直上で炭化物と土師器片が多量に散らばっていた。遺物はカマド焚口付近に土師器甕 (158・159・160) がまわって出土した。

カマドは、堅穴建物北側中央に作り付けられ、カマド内部は掘窪められている。西側の袖は一部崩れているため、全体の形状は不明であるが、焚口部分が外に広がる形状を呈する。カマド構築材は、褐細砂～シルトとにぶい黄褐細砂～シルトである。遺物は須恵器杯身片が出土した。

周壁溝は一部で確認でき、幅約 0.14 m、深さ約 0.03 m を測る。埋土は黒褐細砂～シルトである。

支柱穴は 4 基確認できた。7- S P 3 は円形を呈し、直径約 0.31 m、深さ約 0.12 m を測る。断面形状は逆台形に段落ちである。埋土は暗褐粗砂混じりシルトである。24- S P 6 は円形を呈し、直径約 0.29 m、深さ約 0.15 m を測る。断面形状は逆台形である。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が暗灰黄シルト、掘方が灰黄シルトである。24- S P 3 は円形を呈し、直径約 0.43 m、深さ約 0.26 m を測る。断面形状は「へ」字形である。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が暗灰黄シルト、掘方がにぶい黄シルトであ

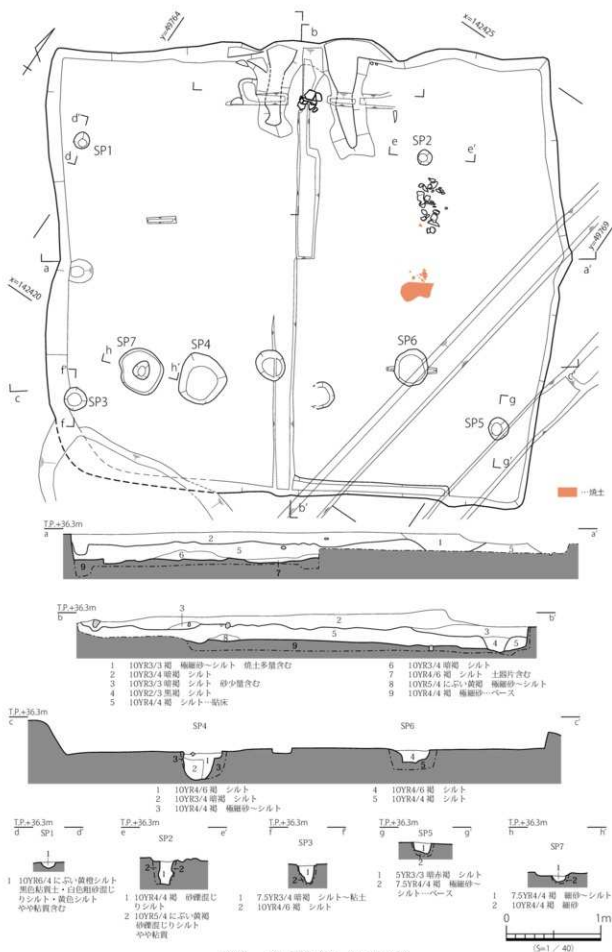


図 49 10- 竪穴 201 平・断面図

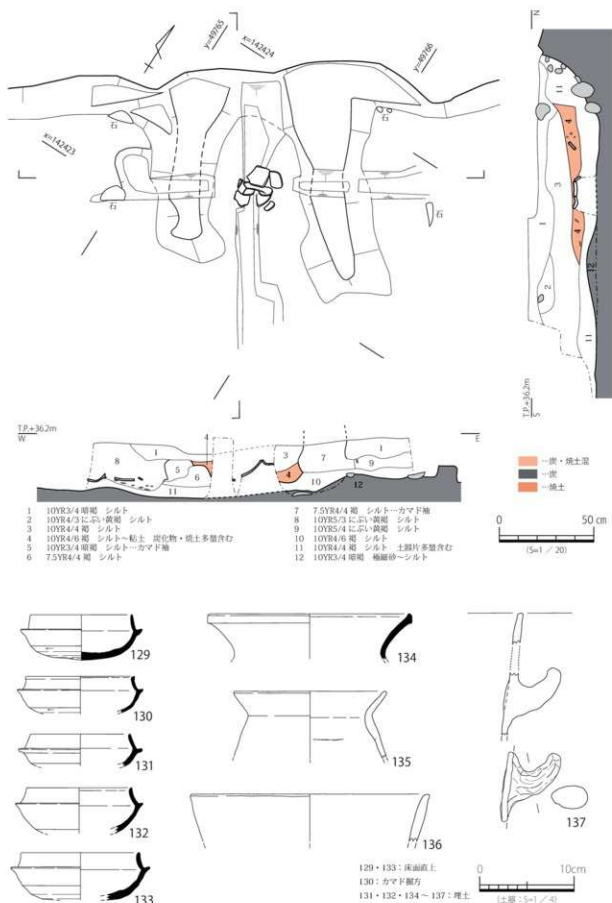


図 50 10- 竪穴 201 カマド及び出土遺物実測図

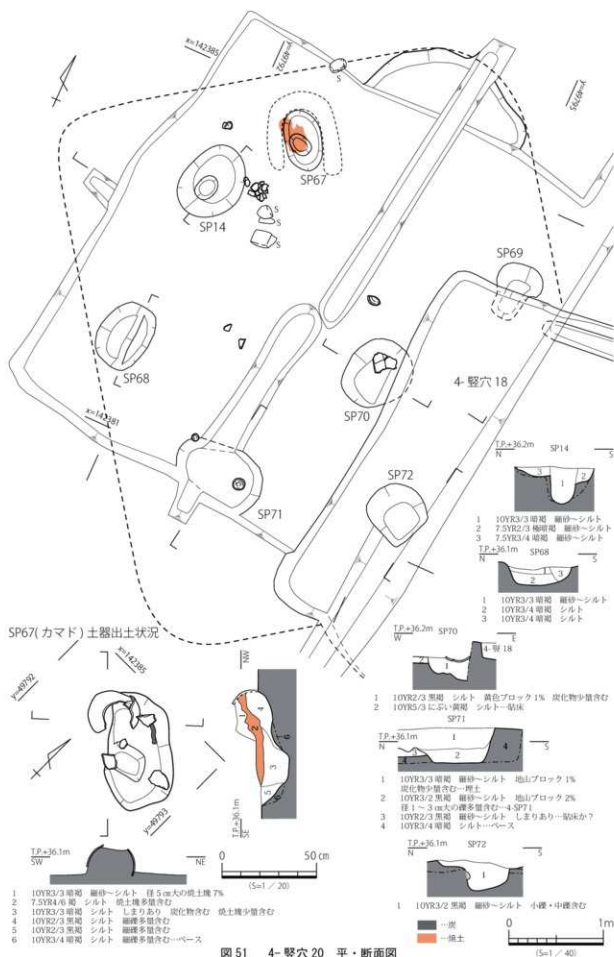


図 51 4- 竪穴 20 平・断面図

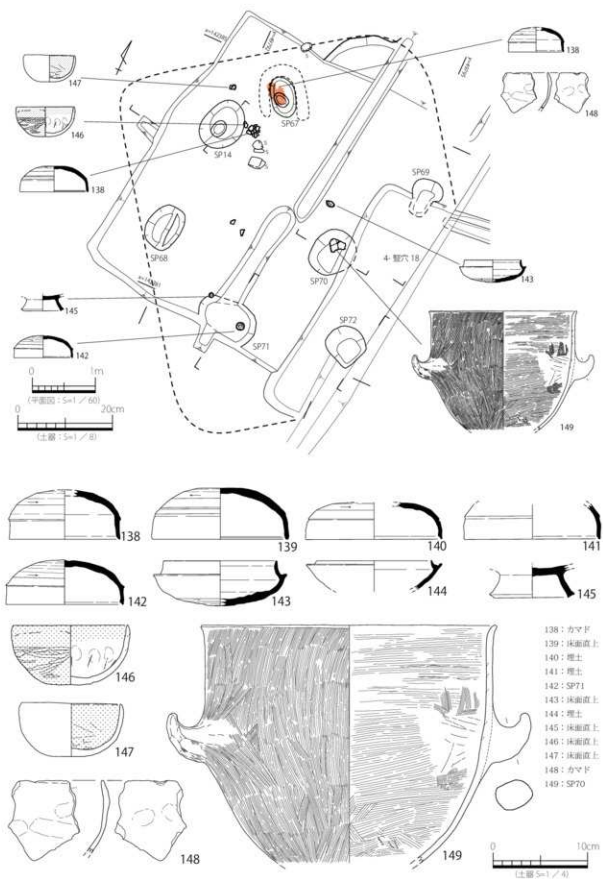


図 52 4- 竪穴 20 床面遺物出土状況及び出土遺物実測図

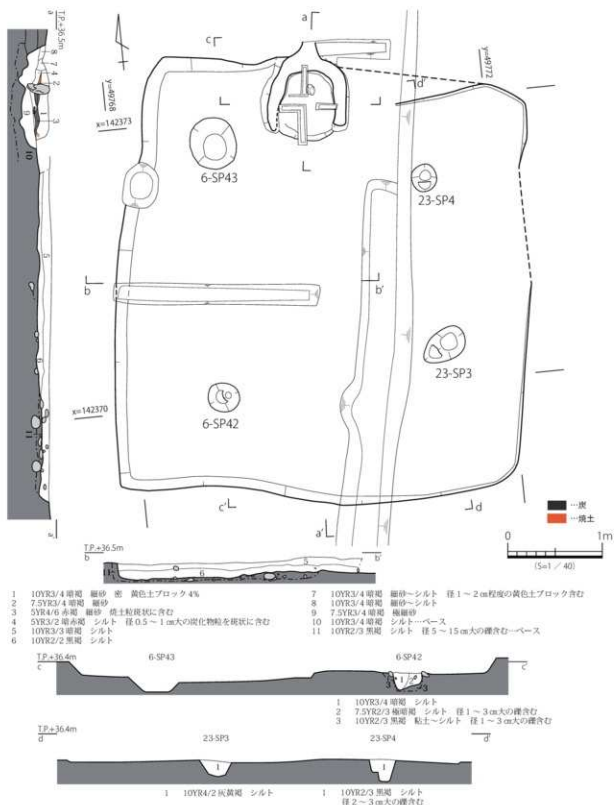


図 53 6・23- 壁穴 9 平・断面図

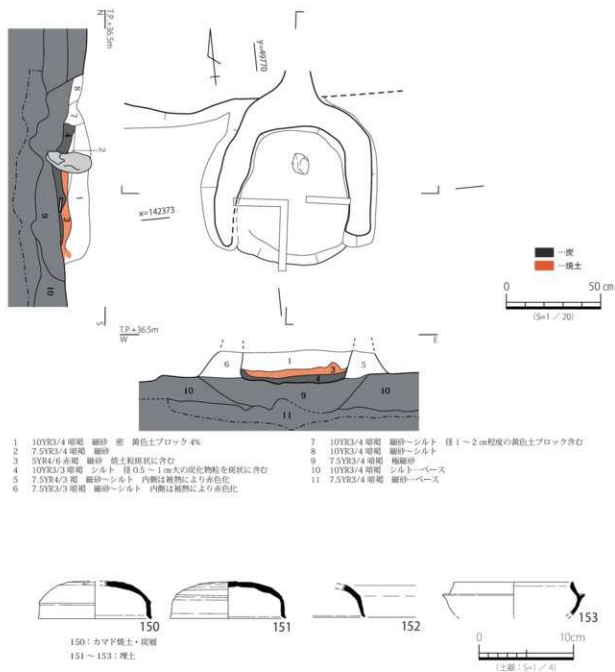


図 54 6・23-竪穴9 カマド及び出土遺物実測図

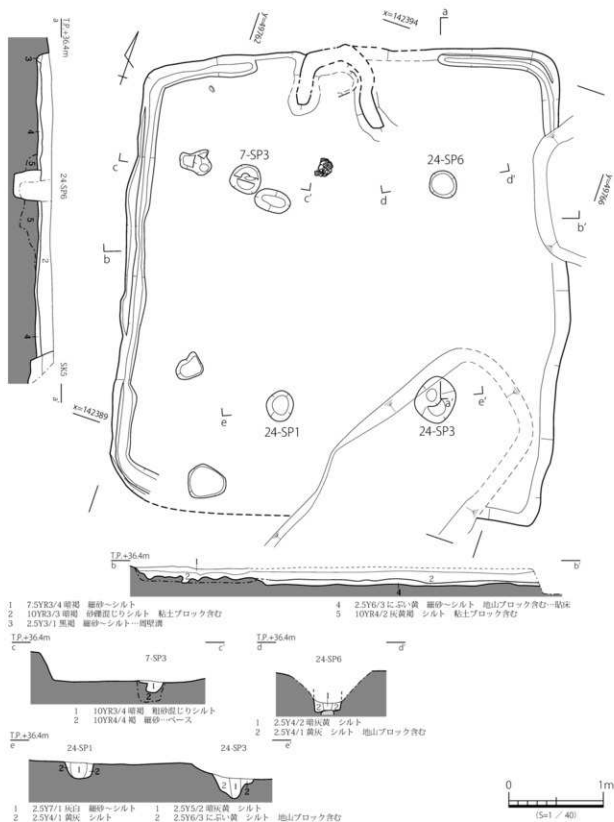


図 55 7・24- 竪穴 7・6- 竪穴 4 平・断面図

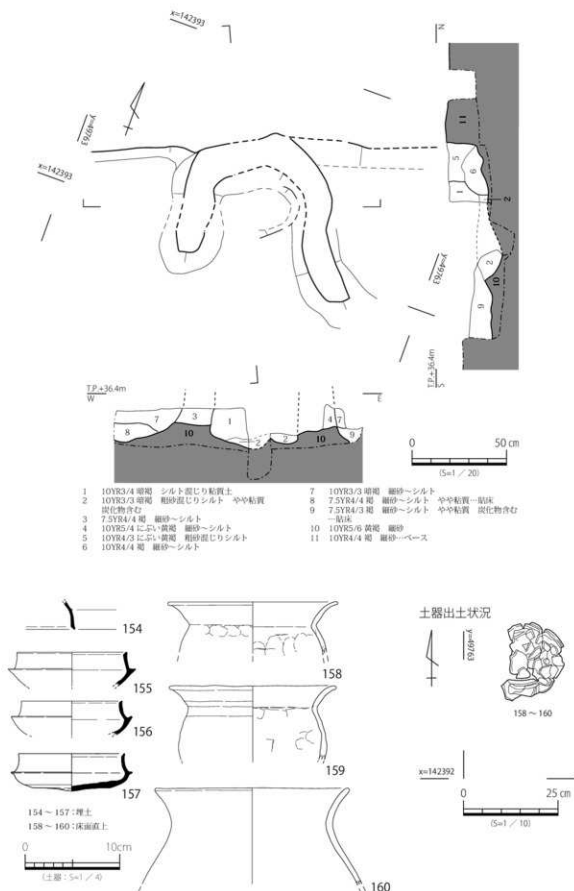


図 56 7・24- 竪穴 7・6- 竪穴 4 カマド及び出土遺物実測図

る。24-SP1は円形を呈し、直径約0.29m、深さ約0.18mを測る。断面形状は逆台形である。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が灰白細砂～シルト、掘方が黄灰シルトである。支柱穴から遺物は出土していない。

出土遺物の年代から、TK10～MT85型式併行期と判断できる。

21-堅穴20・4-堅穴54・3-堅穴34(図57～58)

第21・4・3調査区北側で検出した堅穴建物である。第4調査区では堅穴建物の西半を検出できなかったが、平面形状は方形を呈すると想定できる。4-掘立1に切られる。主軸方位N-14°-W、検出面の標高は36.0mである。規模は、長辺約4.25m、短辺約3.6m以上、最深部で約0.3mを測る。

埋土の掘削後、貼床面直上で遺構の検出を行い、カマドと周壁溝、支柱穴(21-SP1・2、4-SP56)を検出した。

埋土は黒褐細礫混じりシルトで、遺物は須恵器杯蓋(161)、須恵器杯蓋片・杯身片・高杯片、土師器壺片、鉄滓、粘土塊が出土した。

貼床は地山ブロック土を含む暗褐細砂～シルトで、貼床直上には一部に焼土が認められた。遺物は出土していない。

カマドは堅穴建物北側中央に作り付けられている。カマド西側袖の残存状態が悪いため、全体の形状は不明である。カマド袖の構築材は黒褐細砂～シルトで、袖の内側は被熱する。カマド中央を掘窪め、黒褐シルトを貼り、その上に土師器甕の体部を支脚として設置する。

周壁溝は北東隅と南縁部分で確認でき、幅約0.06m、深さ約0.04mを測る。埋土は暗褐シルトである。

支柱穴は3基礎確認でき、南西側のビットは、4-掘立1に切られる。21-SP1は円形を呈し、直径約0.57m、深さ約0.13mを測る。断面形状は逆台形である。埋土は暗褐細砂～シルトである。21-SP2は一部を掘乱しに切られるため、全体の形状は不明である。推定径約0.58m、深さ約0.22mを測る。断面形状は椀形に段落ちである。埋土は上層が極暗褐細砂混じり粘質シルト、中層が暗褐細砂混じり粘土、下層が暗褐細砂混じり粘土である。4-SP56は不整形な形状を呈し、長径約0.68m、短

径約0.38m、深さ約0.22mを測る。断面形状は「へ」字形である。埋土は黒褐シルトである。

出土遺物の年代から、TK10～MT85型式併行期と判断できる。

4-堅穴99・22-堅穴7・5-堅穴30(図59～61)

第4・5・22調査区中央で検出した堅穴建物である。平面形状は横長の隅丸方形を呈する。主軸方位N-12.5°-W、検出面の標高は36.1mである。規模は、長辺約5.90m、短辺約5.00m、深さは最深部で約0.2mを測る。

埋土の掘削後、貼床面直上で遺構の検出を行い、カマドと周壁溝、支柱穴(5-SP1・2、22-SP1・2)、ビット(22-SP3)を検出した。

埋土は地山ブロック土を含む暗褐シルトで、遺物は須恵器杯蓋(162)、須恵器杯蓋片・杯身片、土師器壺片・壺片、製塩土器片、粘土塊が出土した。

貼床は地山ブロック土を含む暗褐細砂～シルトと暗褐シルトで、貼床直上には一部に焼土が確認できた。遺物は貼床直上で白玉(S13)が出土した。

カマドは堅穴建物北側中央やや西寄りに作り付けられ、中央部を掘窪め、土師器甕(163)を支脚として据える。平面形は馬蹄形を呈し、煙道が確認できる。カマド袖は、灰黄シルトで構築する。カマド内上部の堆積は、カマド天井部からの崩落土と考えられる。

周壁溝は一部で確認でき、幅約0.29～0.07m、深さ約0.06mを測る。埋土は地山ブロック土を含む灰黄褐シルトと暗褐シルトである。

支柱穴は4基礎確認できた。22-SP1は円形を呈し、直径0.46m、深さ約0.36mを測る。断面形状は逆台形に柱痕の段落ちである。埋土が褐シルト、柱痕が暗褐粘質シルトである。22-SP2は楕円形を呈し、長径約0.59m、短径約0.47m、深さ約0.39mを測る。断面形状はU字形である。埋土は暗褐シルトである。5-SP1は不整形な円形を呈し、直径約0.59m、深さ約0.30mを測る。断面形状は椀形である。埋土は灰黄褐シルトと褐灰シルトである。5-SP2は円形を呈し、直径約0.73m、深さ約0.33mを測る。断面形状は逆台形である。埋土は暗赤褐シルトと褐シルト、暗褐シルトである。

22-SP3は円形を呈し、直径約0.48m、深さ約0.23mを測る。断面形状は椀形である。埋土は

にぶい黄褐シルトと褐細砂～シルト、暗褐シルトである。

竪穴建物内から出土炭化物の樹種同定と AMS 分析を実施した。樹種同定の結果は、コナラ属コナラ亜属クスノ節であった。AMS 分析の結果は補正年代で、cal AD342-443 であった。

出土遺物の年代から、T K 10 型式併行期と判断できる。

10-竪穴 310(図 62～63)

第 10 調査区の西側に検出した竪穴建物である。10-竪穴 301 に切られる。平面形状は隅丸方形と想定できる。主軸方位 N -41° -W、検出面の標高は 36.0～35.9m である。規模は、長辺約 4.20m、短辺約 3.70m、深さは最深部で約 0.25m を測る。調査時に竪穴建物南側を 10-S X 2 として掘削していたところ、埋土の掘削過程でカマドを確認した。竪穴建物南側は、礫層が広く認められ、貼床面の検出ができなかった。後述する地震の影響で、建物周辺の地層に乱れが生じたことから、平面プランや貼床面の検出ができなかったと考えられる。

埋土は灰黄褐シルトで、遺物は須恵器杯身片・杯蓋片・甕片が出土した。また 10-S X 2 からは須恵器蓋(167)・甕(168)、土師器壺(166)が出土した。

貼床面は竪穴建物北側の一部で確認でき、埋土は暗褐シルトである。

カマドは、竪穴建物北側中央に作り付けられ、中央部を掘窪める。カマド袖は褐シルトで構築される。カマド内部には土師器甕(164・165)が出土している。口縁部を下に底部が残存した状態で確認できたことから、カマド上部からの転落の可能性が想定できる。

出土遺物の年代から、MT 15～T K 10 型式併行期と判断できる。

3-竪穴 108(図 64～67)

第 3 調査区南側に検出した竪穴建物である。3-S D 1 と攪乱に切られるが平面形状は方形を呈すると考えられる。主軸方位 N -57° -W、検出面の標高は 36.2m である。規模は、長辺約 4.20m、短辺 4.0m 以上、深さは最深部で約 0.35m を測る。

埋土の掘削後、貼床面直上で遺構の検出を行い、カマドと周壁溝、支柱穴(S P 112・114・124)、ビット(S P 113)を検出した。

埋土は暗褐細砂～シルトで、遺物は須恵器杯身(177)・杯蓋(176)・高杯(178)、鉄製刀子(T6)、須恵器杯身片・杯蓋片、土師器甕片・高杯片・製塩土器片が出土した。

貼床は、地山ブロック土を多量に含む暗褐細砂～シルトで、貼床面直上から須恵器杯身(170・174)、製塩土器(184)、白玉(S14)が出土した。貼床内から土師器甕(182・183)が出土した。

カマドは、竪穴建物西側中央に作り付けられ、中央部を掘窪める。形状は馬蹄形を呈する。カマド袖は黒褐細砂～シルトで構築され、内面には被熱による赤色化が認められる。カマド内部には支脚として土師器甕(179)が据えられていた。カマド内からは須恵器杯身(175)、土師器甕(181)が出土しており、カマド上部からの転落の可能性が考えられる。またカマド焚口付近で須恵器杯身(171・172・173)、土師器甕(180)、石棒(S15)が出土した。

周壁溝はカマド周辺を除いて確認でき、幅約 0.25 m、深さ約 0.11m を測る。埋土は暗褐細砂～シルトである。遺物は須恵器杯身片・甕片が出土した。

支柱穴は攪乱に切られる南東側を除いて 3 基確認できた。S P 112 はやや不整形な円形を呈し、直径約 0.61 m、深さ約 0.22m を測る。断面形状は楕形である。埋土は暗褐細砂である。遺物は土師器甕片が出土した。S P 114 は円形を呈し、直径約 0.67 m、深さ約 0.41m を測る。断面形状は U 字形である。柱痕が確認でき、柱痕が黒褐シルト、掘方が暗褐細砂～シルトである。遺物は須恵器杯蓋(169)が出土している。S P 124 は不整形な形状で、最大長約 0.67 m、最大幅約 0.30 m、深さ約 0.41m を測る。断面形状は逆台形に柱痕の段落ちである。柱痕が確認でき、柱痕が黒褐シルト、掘方が暗褐シルトである。

S P 113 は S P 114 に切られるため、全体の形状は不明である。幅約 0.46 m、深さ約 0.09 m を測る。断面形状は浅い皿状に柱痕の段落ちである。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が褐シルト、掘方が暗褐細砂～シルトである。

出土遺物の年代から、T K 10～MT 85 型式併行期と判断できる。

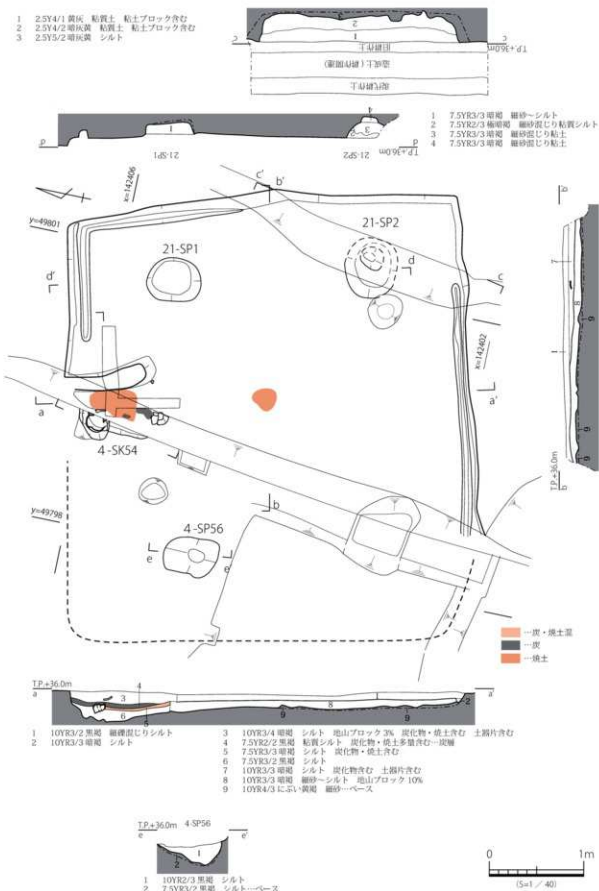


図 57 21- 竪穴 20・4-SK54・3- 竪穴 34 平・断面図

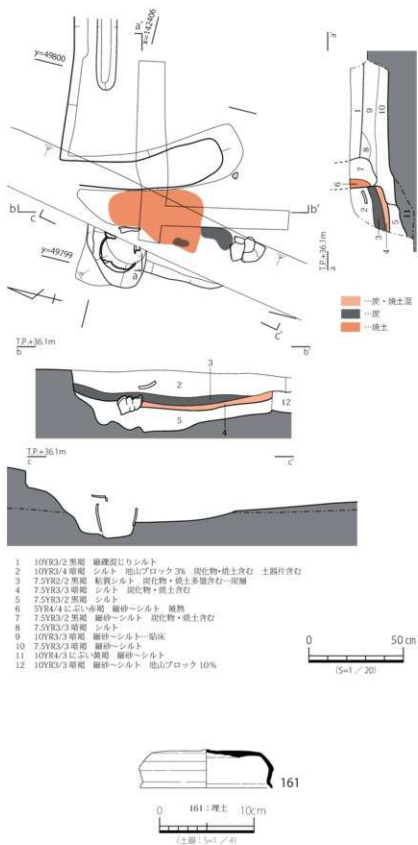


図 58 21- 竪穴 20・4-SK54・3- 竪穴 34 カマド及び出土遺物実測図

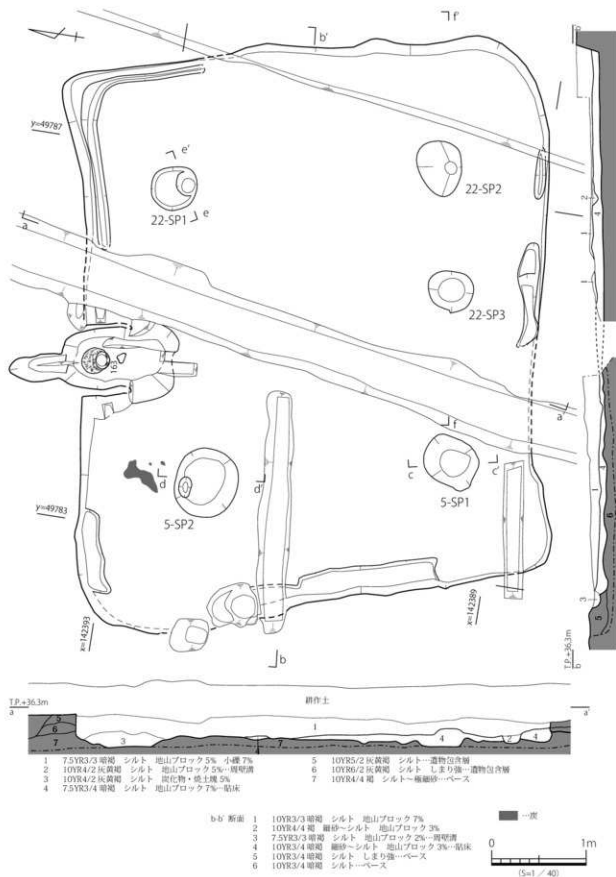


図 59 4- 竪穴 99・22- 竪穴 7・5- 竪穴 30 平・断面図

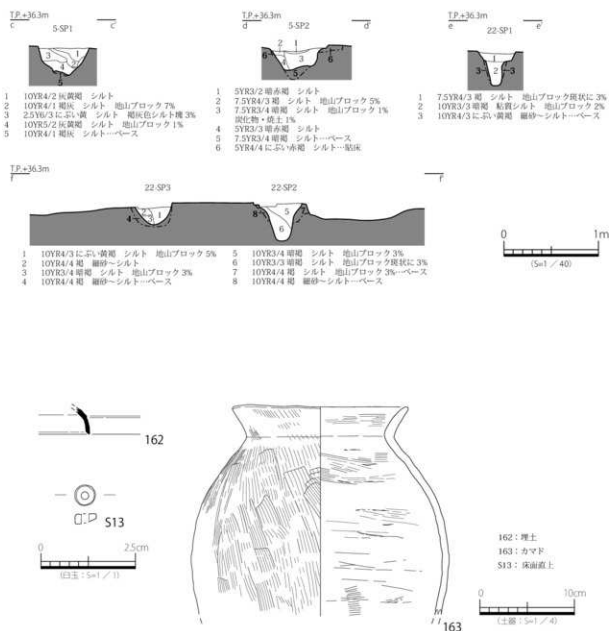


図 60 4- 竪穴 99・22- 竪穴 7・5- 竪穴 30 断面図及び出土遺物実測図

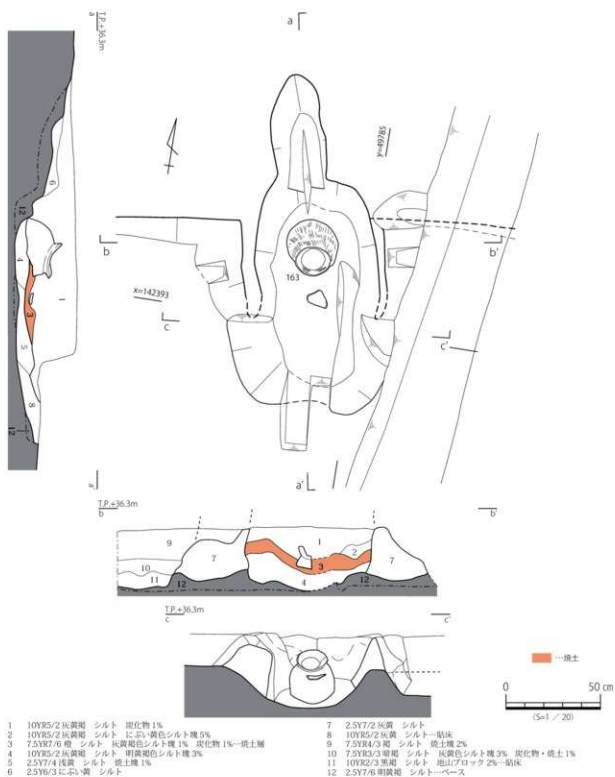


図 61 4- 竪穴 99・22- 竪穴 7・5- 竪穴 30 カマド

4-一堅穴30・22-一堅穴6(図68～70)

第4・22調査区中央で検出した堅穴建物である。主軸方位N-6°-W、検出面の標高は36.3mである。平面形状は方形を呈する。規模は、長辺約5.50m、短辺約4.50m、深さは最深部で0.3mを測る。

調査は埋土掘削の後、貼床面直上で遺構検出を行い、カマドと支柱穴(4-S P 58・73・74、22-S P 1)、ビット(22-S P 2)を検出した。

埋土は黒シルトとにぶい黄褐粗砂混じり細砂～シルトである。遺物は須恵器杯蓋(187・188・189)・高杯(192)、砥石(S16)、不定形鉄片(T7)、サヌカイト製割片(S17)、須恵器杯身片・杯蓋片・高杯片・甕片・壺片・甕片、土師器甕片・甕片・高杯片、サヌカイトチップが出土した。土師器高杯(194)は、遺存状況が良く建物検出中に出土した。

貼床は地山ブロック土を含む暗灰黄細砂～シルトである。遺物は床面直上から須恵器杯蓋(185・186)・杯身(190)・高杯蓋(191)・甕(193)が出土した。

カマドは堅穴建物北側やや西寄りに作り付けられる。カマド構築材はカマド袖がオリブ褐シルト、カマド底部が褐シルトである。カマド内部では、焼土を多量に含む堆積が確認できた。カマド上部構造の崩落上と考えられる。焼土層の下層には炭化物層が確認できたことから、カマドの機能面と考えられる。遺物は土師器甕(195)が出土した。

支柱穴は4基確認できた。22-S P 1は、円形を呈し、直径約0.42m、深さ約0.32mを測る。断面形状はU字形である。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が暗褐細砂混じり粘質土、掘方が褐粘土混じり極細砂である。4-S P 58は円形を呈し、直径約0.78m、深さ約0.43mを測る。断面形状は不整形である。埋土は上層が黒褐シルト、下層が黒褐粘土～シルトである。4-S P 73は歪な円形を呈し、直径約0.37、深さ約0.55mを測る。断面形状はV字形である。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が暗褐粘土～シルト、掘方が褐シルトである。4-S P 74は円形を呈し、直径約0.47m、深さ約0.49mを測る。断面形状はU字形である。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が黒褐シルト、掘方が暗褐シルトである。

22-S P 2は楕円形を呈し、長径約0.52m、短径約0.36m、深さ約0.18mを測る。断面形状は逆台形である。埋土は上層が暗褐粗砂混じり細砂～シルト、下層が暗褐粗砂～シルトである。

出土遺物の年代からTK 10型式併行期と判断できる。

21-一堅穴18・3-一堅穴35・4-一堅穴18(図71～73)

第21・3・4調査区中央で検出した堅穴建物である。平面形状は横長の隅丸方形を呈する。主軸方位N-1°-E、検出面の標高は36.2mである。規模は、長辺約5.80m、短辺約4.50m、最深部で約0.2mを測る。

調査範囲が3調査区に渡ったため、第3調査区、第4調査区、第21調査区の順に調査を実施し、最終的に堅穴建物として認識できたのは、第21調査区でカマドを検出した時である。堅穴建物を含む周辺で礫の盛り上がりが確認でき、後述する地震痕跡の可能性が考えられる。カマドと周壁溝、支柱穴(21-S P 1・2、3-S P 44・80)、ビット(3-S P 81)を検出した。

埋土は、暗褐細砂混じりシルトで、遺物は須恵器杯身(198・199)・杯蓋(196・197)、土師器甕(200)・甕(201)・甕把手(202・203)、鉄釘(T9)、須恵器杯身片・杯蓋片・高杯片・高杯蓋片・台付鉢片・壺片、土師器甕片・甕片、製塩土器片、サヌカイト割片が出土した。

貼床は、黒褐細砂～シルトで、床面から棒状鉄片(T8)、砂岩製の台石(S19)が出土している。

カマドは、堅穴建物北側東寄りに作り付けられ、煙道が延びる。攪乱により、東袖は確認できなかったが、円形を呈すると考えられる。カマド構築材は褐細砂混じりシルトで、袖の内面から底面にかけて被熱の痕跡が認められる。煙道基部から白玉(S18)が出土した。

周壁溝は、幅約0.19m、深さ約0.07mを測る。

支柱穴は4基確認でき、21-S P 1は不整形な円形を呈し、直径約0.5m、深さ約0.43mを測る。断面形状はU字形である。埋土は暗褐シルト、柱痕が地山ブロック土を含む暗褐シルト、掘方が黒褐細砂～シルトである。21-S P 2は円形を呈し、直径約0.51m、深さ約0.51メートルを測る。断面形状はU字形である。埋土は柱痕が暗褐シルト、掘方が暗褐細砂～シルトと黒褐粘質シルトである。3-S P 80は円形を呈し、直径約0.31m、深さ約0.21mを測る。断面形状はU字形である。埋土は暗褐粘土～シルトと黒褐粘土～シルトである。3-S P 44

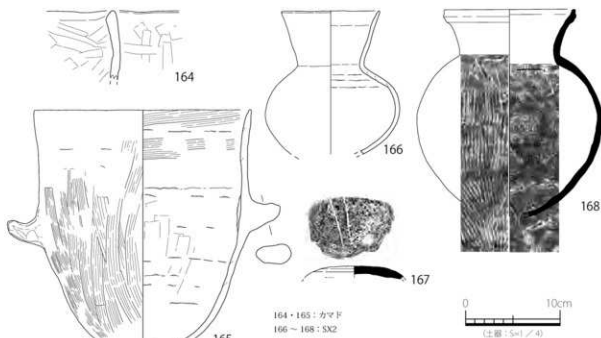
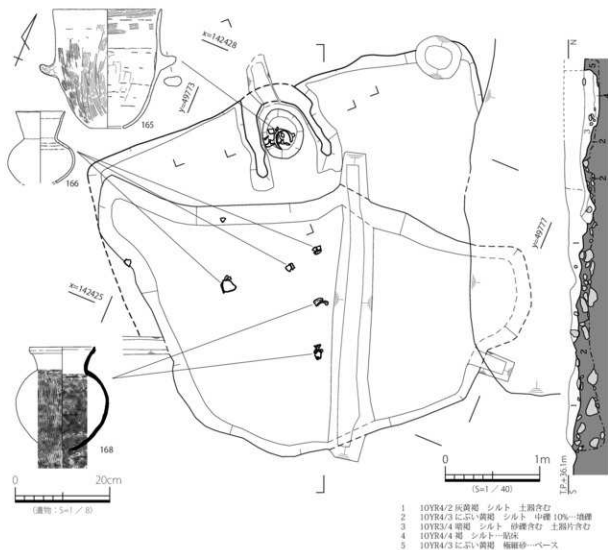


図 62 10- 竪穴 310 平・断面図及び出土遺物実測図

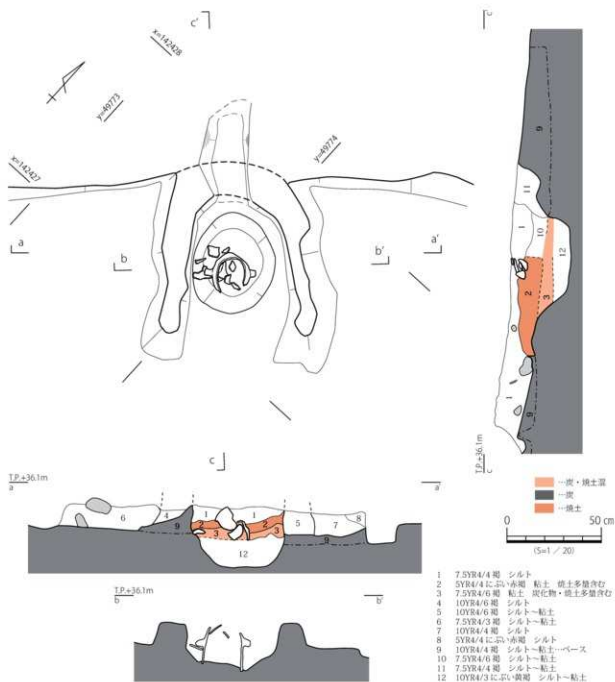


図 63 10- 壁穴 310 カマド

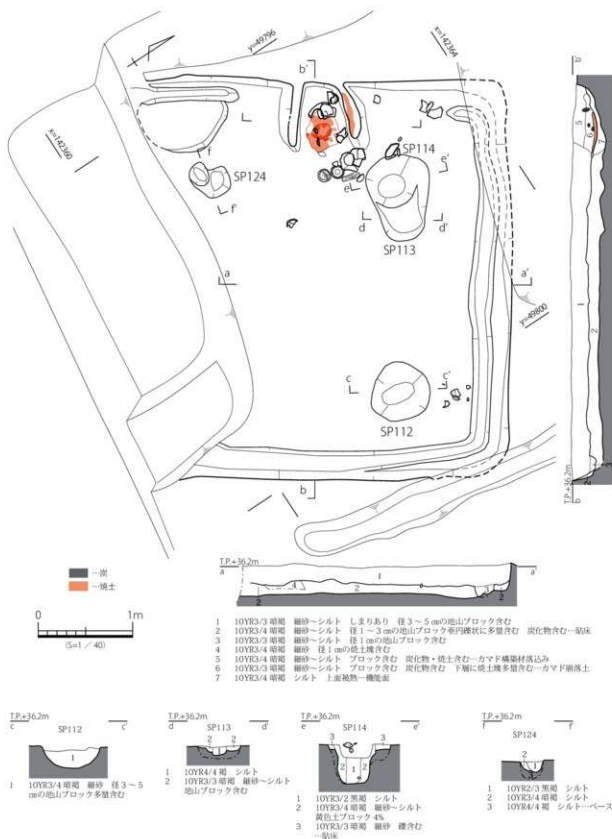


図 64 3- 竪穴 108 平・断面図

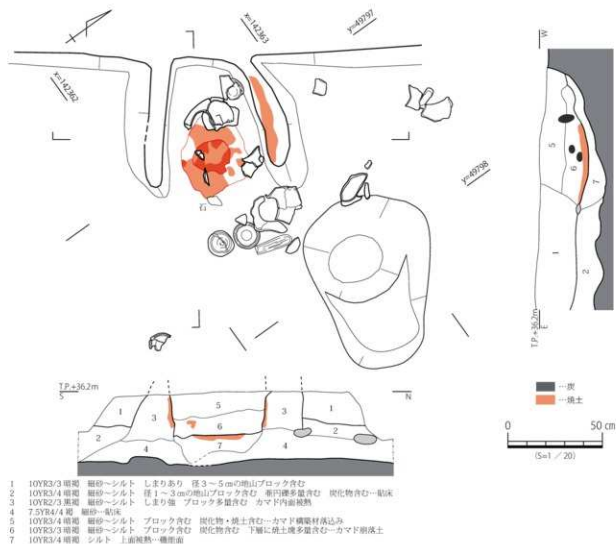


図 65 3- 堅穴 108 カマド

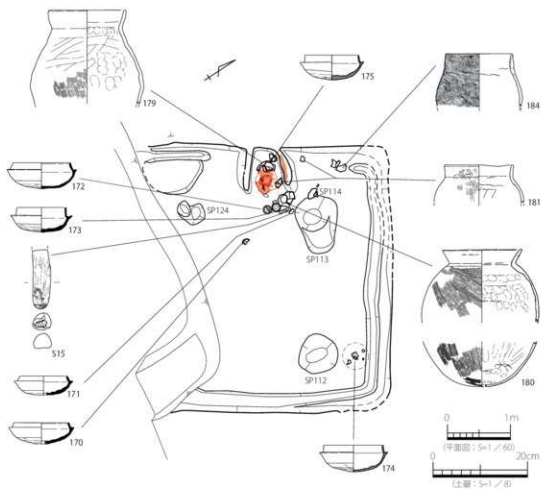


图 66 3- 豎穴 108 床面遺物出土状況

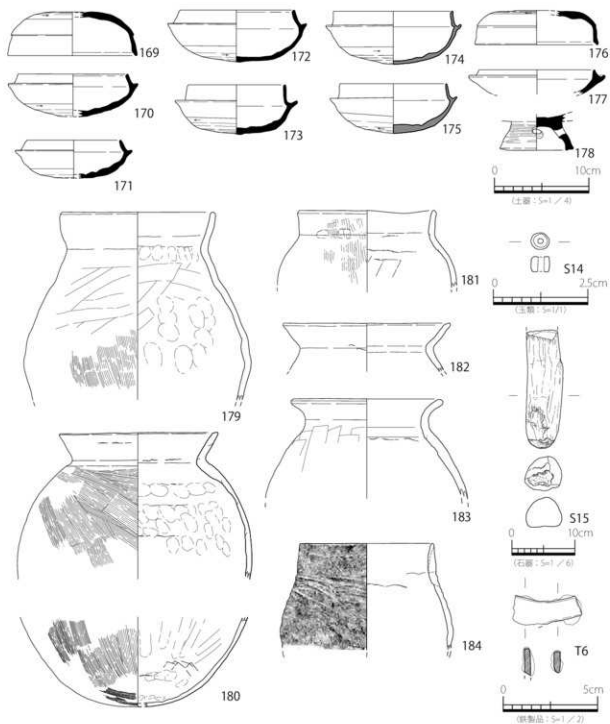


図 67 3- 竖穴 108 出土遺物実測図

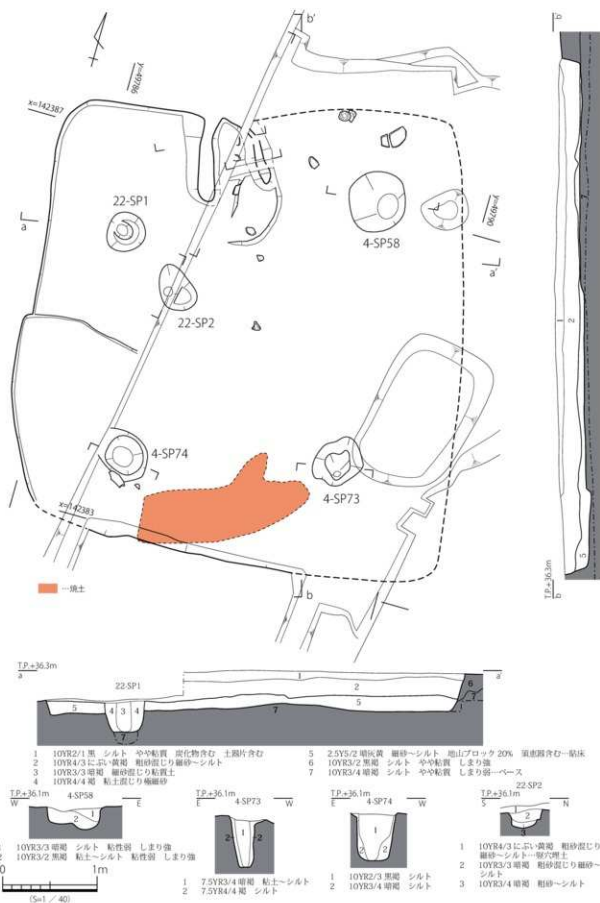


図 68 4-壁穴 30・22-壁穴 6 平・断面図

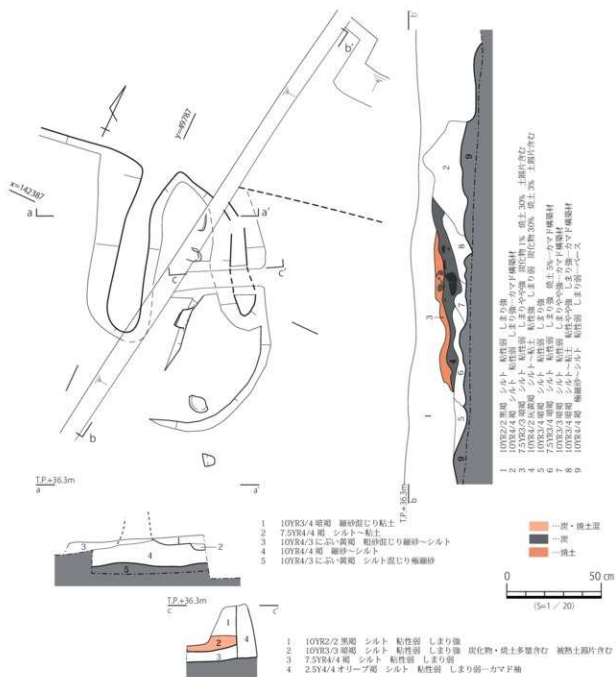


図 69 4- 竪穴 30・22- 竪穴 6 カマド

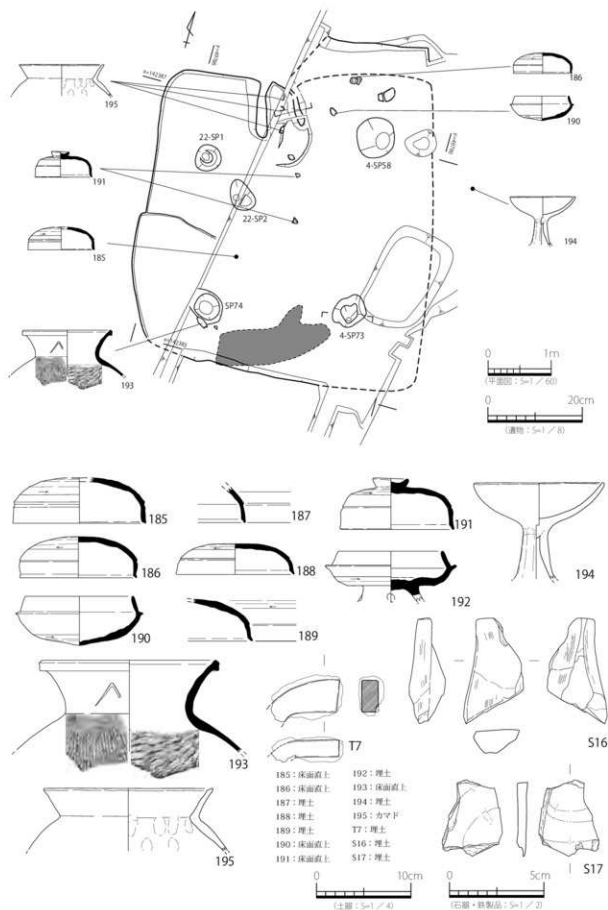


图 70 4-竖穴 30·22-竖穴 6 床面遗物出土状况及び出土遺物実測図

は円形を呈し、直径約 0.22 m、深さ約 0.1 m を測る。断面形状は逆台形である。埋土は黒褐シルトである。

3-S P 81 は円形を呈し、直径約 0.56 m、深さ約 0.15 m を測る。断面形状は不整形である。埋土は極暗褐シルト～粘土である。

出土遺物の年代から、MT 85～TK 43 型式併行期と判断できる。

23-堅穴 5(図 74)

第 23 調査区北側で検出した堅穴建物である。5-堅穴 1 に切られ、調査区外に広がるため、全体の形状は不明である。南西隅の一部を検出し、主軸方位 N-15°-W、検出面の標高は 36.05m である。規模は、長辺約 2.7m 以上、短辺約 1.6m 以上、最深部で約 0.1m を測る。

調査は埋土の掘削後、貼床面直上で遺構検出を行い、周壁溝と支柱穴(23-S P 1)、ピット(5-S P 51)を検出した。

埋土はオリーブ褐細砂～シルトである。遺物は土師器甗片が出土した。

貼床は黄褐細砂～シルトで、貼床面直上から土師器甗(205)が出土した。

周壁溝は西壁部で確認でき、幅約 0.07 m、深さ約 0.06m を測る。埋土は暗オリーブ褐細砂～シルトである。

支柱穴は南西側の 1 基が確認できた。S P 1 は楕円形を呈し、長径約 0.47 m、短径約 0.4 m、深さ約 0.22m を測る。断面形状は U 字形である。埋土は上層が黄褐シルト、下層が暗オリーブ褐シルトである。

S P 51 は、攪乱に切られるため、全体の形状は不明である。残存長約 0.66 m、深さ約 0.25m を測る。断面形状は逆台形に段落ちである。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が暗褐シルト、掘方が炭化物を含む暗褐シルトと黒褐シルトである。遺物は土師器甗(204)が出土した。

出土遺物の年代から、古墳時代後期前葉としておく。

5-堅穴 1・23-堅穴 10(図 75～76)

第 5・23 調査区北側で検出した堅穴建物である。平面形状は横長の隅丸方形を呈する。主軸方位 N-15°-W、検出面の標高は 36.05m である。規模は、長辺約 4.70m、短辺約 3.90m、最深部で約 0.26m

を測る。

埋土の掘削後、貼床面直上で遺構の検出を行い、カマドと支柱穴を検出した。周壁溝は確認できなかった。

埋土は炭化物を含む暗褐細砂である。遺物は須恵器杯身(208)、須恵器杯身片・杯蓋片・高杯片が出土した。

貼床は、暗褐細砂で、遺物は貼床直上から須恵器杯身(206・207)、須恵器杯身片が出土した。

カマドは北側中央に作り付けられる。煙道部を 5-S P 51 に切られる。馬蹄形を呈し、カマド内部には支脚石が置かれていた。カマド構築材は褐灰シルトと暗灰黄シルト、浅黄シルトである。遺物は土師器甗(209)、須恵器杯蓋片が出土した。

支柱穴は 4 基確認でき、S P 1 は円形を呈し、直径約 0.35 m、深さ約 0.24 m を測る。断面形状は U 字形に段落ちである。埋土は暗褐シルトと地山ブロック土を含む暗褐シルトである。S P 2 はやや不整形な円形を呈し、直径約 0.45 m、深さ約 0.22 m を測る。断面形状は逆台形に柱痕の段落ちである。埋土は柱痕が褐細砂、掘方が地山ブロック土を含む暗褐細砂～シルトとにぶい黄褐細砂～シルトである。S P 3 は円形を呈し、直径約 0.34 m、深さ約 0.16m を測る。断面形状は楕形である。埋土は地山ブロック土を含む暗褐細砂である。S P 4 はやや不整形な円形を呈し、直径約 0.34 m、深さ約 0.18m を測る。断面形状は逆台形に柱痕の段落ちである。埋土は柱痕が暗褐細砂、掘方が地山ブロック土を含むにぶい黄褐細砂である。

出土遺物の年代から TK 209 型式併行期と判断できる。

10-堅穴 210(図 77～80)

第 10 調査区の西側で検出した堅穴建物である。平面形状はやや横長の方形を呈する。主軸方位 N-17°-W、検出面の標高は 36.2m である。規模は、長辺約 5.32m、短辺約 4.50m、最深部で約 0.4m、を測る。

埋土の掘削後、貼床面直上で遺構を検出し、堅穴に附属する遺構の掘削を行った。その後、掘方面までの掘削を行う過程で、下層にもう 1 面の生活面があることを確認した。上層の生活面を第 1 生活面、下層の生活面を第 2 生活面として報告する。

第 1 生活面では、カマドと周壁溝、支柱穴(S P

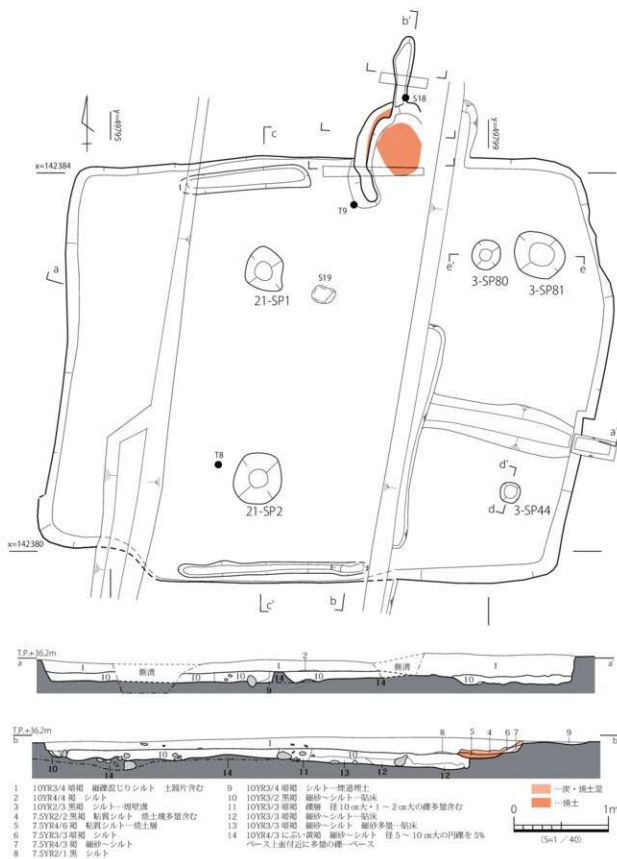


図 71 21-竪穴 18・3-竪穴 35・4-竪穴 18 平・断面図

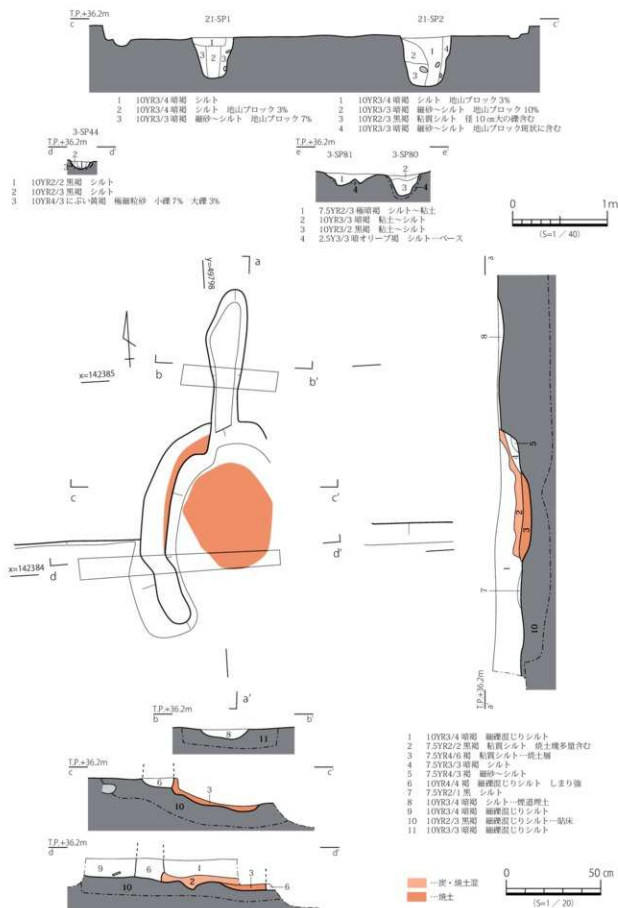


図 72 21- 壁穴 18・3- 壁穴 35・4- 壁穴 18 カマド

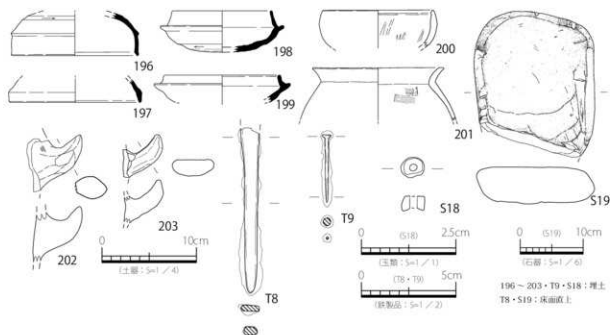


図 73 21-竪穴 18・3-竪穴 35・4-竪穴 18 出土遺物実測図

1～4)を確認した。

埋土はにぶい黄褐粗砂混じり粘質土とにぶい黄褐粘質土である。遺物は須恵器杯身(211・212)、鉄滓(T10)、須恵器杯身片、土師器甕把手が出土した。

貼床はにぶい黄褐粘質土混じりシルトで、竪穴建物中央やや西よりに炭化物和焼土が確認できた。遺物は出土していない。

カマドは、北側中央に作り付けられる。馬蹄形を呈し、カマド構築材は褐粗砂混じり細砂～シルトである。遺物はカマド内部から須恵器杯蓋片、製塩土器片が出土した。

周壁溝は南西部を除く全域で確認でき、幅約0.14 m、深さ約0.08m、埋土はにぶい黄褐粗砂混じりシルトと灰褐粗砂混じりシルトである。

支柱穴は4基確認でき、S P 1は円形を呈し、直径約0.40 m、深さ約0.35mを測る。断面形状は逆台形に柱痕の段落ちである。埋土は柱痕が褐細砂～シルト、掘方が黄褐細砂～シルトである。S P 2は円形を呈し、直径約0.24 m、深さ約0.29mを測る。断面形状はU字形である。埋土は柱痕がにぶい黄褐細砂～シルト、掘方が褐粗砂混じりシルトである。S P 3は円形を呈し、直径約0.17 m、深さ約0.25mを測る。断面形状はやや歪なV字形である。埋土は柱痕が褐シルト、掘方がにぶい黄褐シルトである。S P 4は円形を呈し、直径約0.29 m、深さ約0.20mを測る。断面形状はU字形である。柱痕

が褐細砂～シルト、掘方が褐粘質土である。後述する第2生活面の支柱穴よりもS P 2・4が西側に寄って確認できたことから、竪穴建物を増築したと想定できる。

第2生活面は、第1生活面の貼床を掘削したのち、カマドと支柱穴(S P 5・8)、ピット(S P 6・7)を検出した。

貼床の埋土は地山ブロック土を含む褐細砂～シルト・シルト～粘質土で、貼床面直上から、押しつぶされた状態で須恵器杯蓋(210)が出土した。

支柱穴は2基確認でき、S P 5は円形を呈し、直径約0.28 m、深さ0.35mを測る。断面形状は逆台形に柱痕の段落ちである。埋土は柱痕が暗褐シルト、掘方が褐細砂～シルトである。S P 8は円形を呈し、直径約0.38 m、深さ約0.42mを測る。断面形状は逆台形に柱痕の段落ちである。埋土が暗褐粗砂混じりシルト、柱痕が褐細砂～シルト、掘方が粘性の強い褐細砂～シルトである。

S P 6は、竪穴建物北東側で検出したやや不整形な円形を呈するピットである。直径約0.34 m、深さ約0.20mを測る。断面形状は逆台形である。埋土は3層に分層でき、上層が暗褐粗砂混じり粘質土、中層が褐粘質土、下層が褐細砂～シルトである。遺物は製塩土器(213)が出土した。

出土遺物の年代から、T K 209 型式併行期と判断できる。

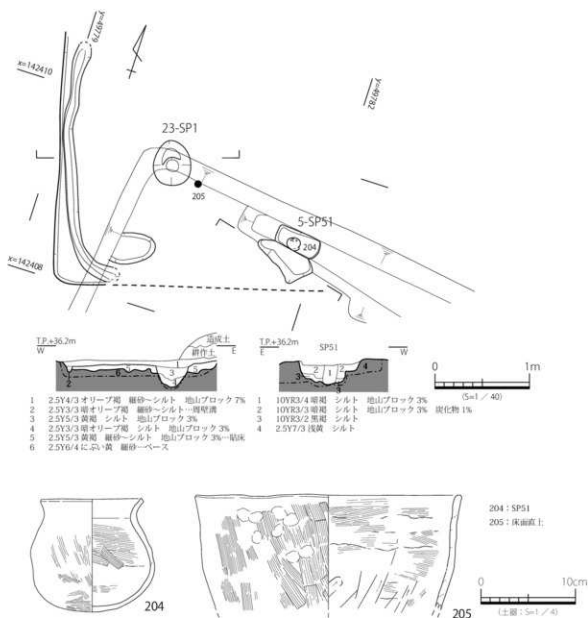


図 74 23- 竪穴 5 平・断面図及び出土遺物実測図

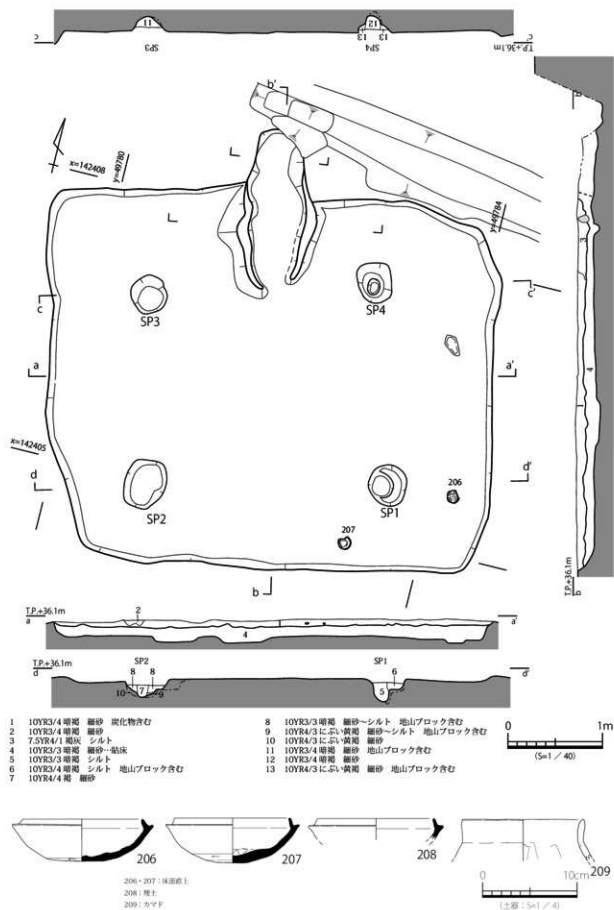


図 75 5- 竪穴 1・23- 竪穴 10 平・断面図及び出土遺物実測図

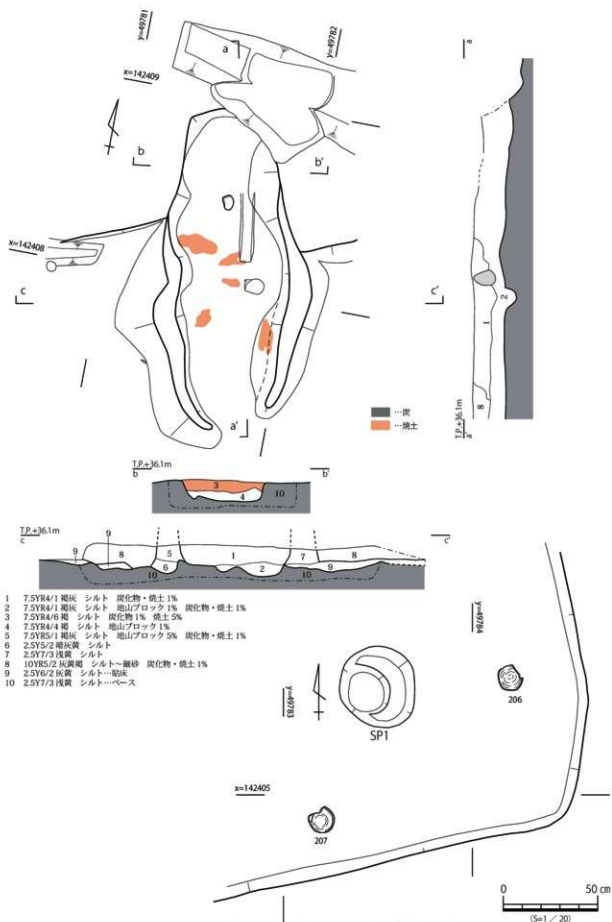


図 76 5- 竪穴 1・23- 竪穴 10 カマド及び遺物出土状況

第1生活面

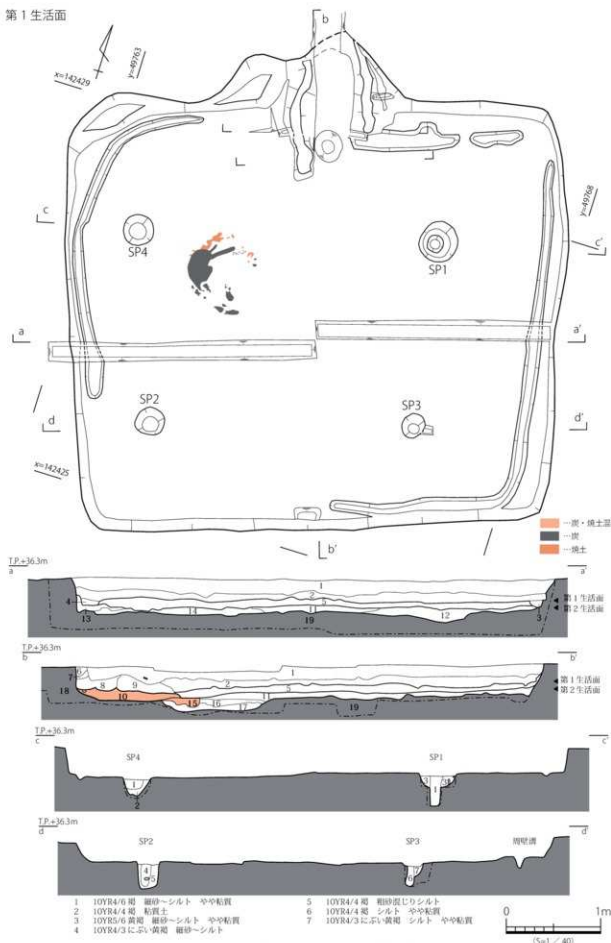


図 77 10- 竪穴 210 平・断面図 (第1生活面)

第2生活面

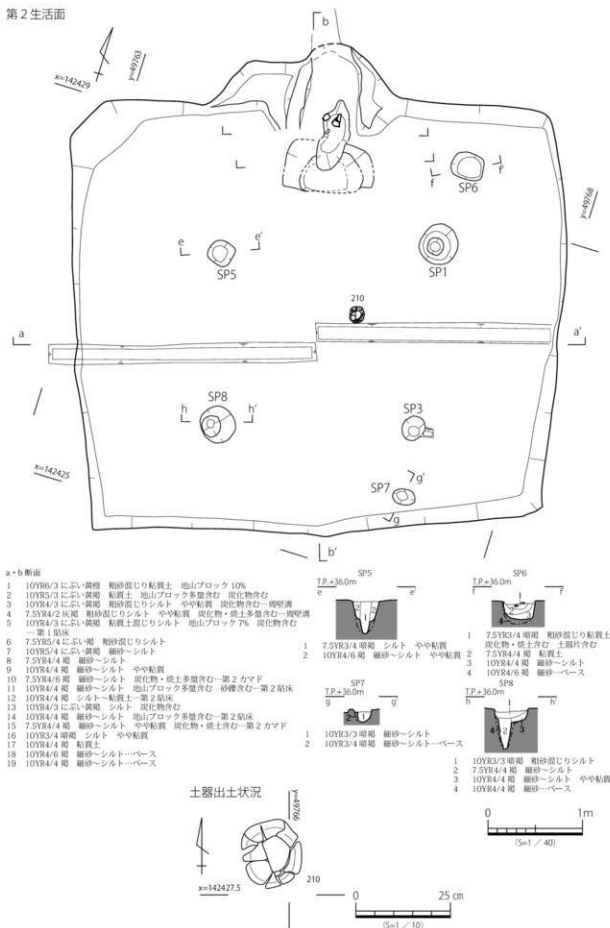


図 78 10- 竪穴 210 平・断面図 (第2生活面)

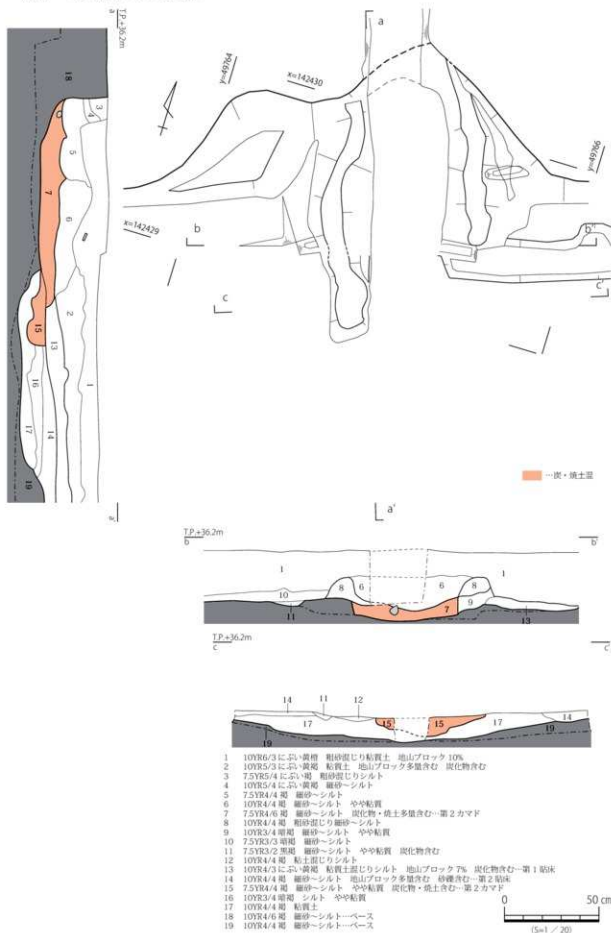


図 79 10- 竪穴 210 カマド (第 1 生活面)

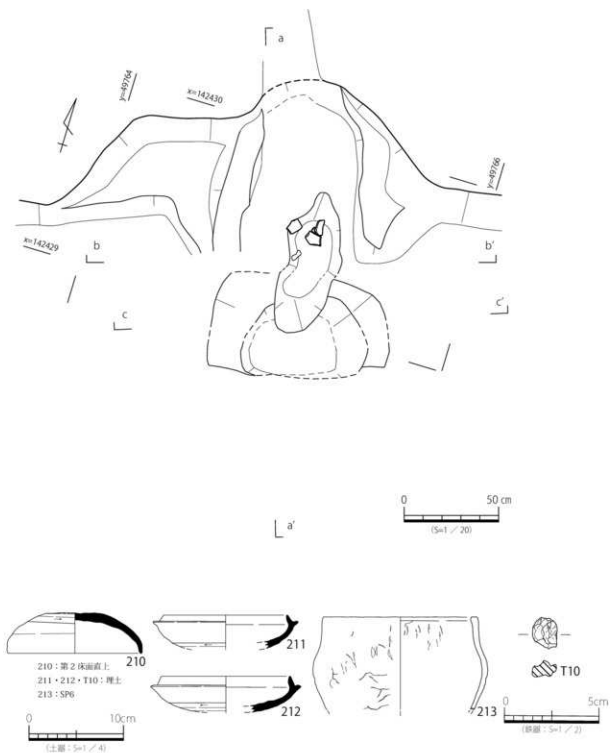


図 80 10- 壁穴 210 カマド (第 2 生活面) 及び出土遺物実測図

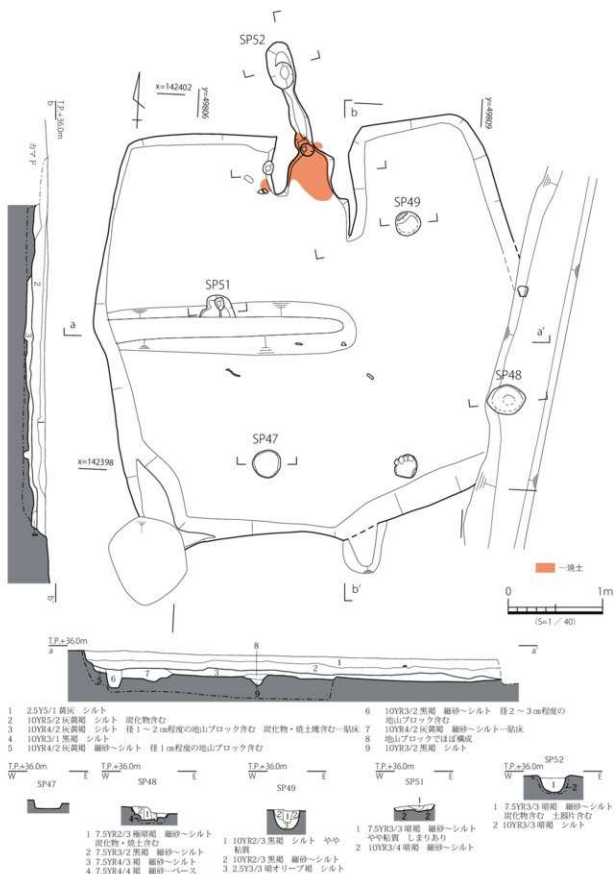


図 81 3- 竪穴 40 平・断面図

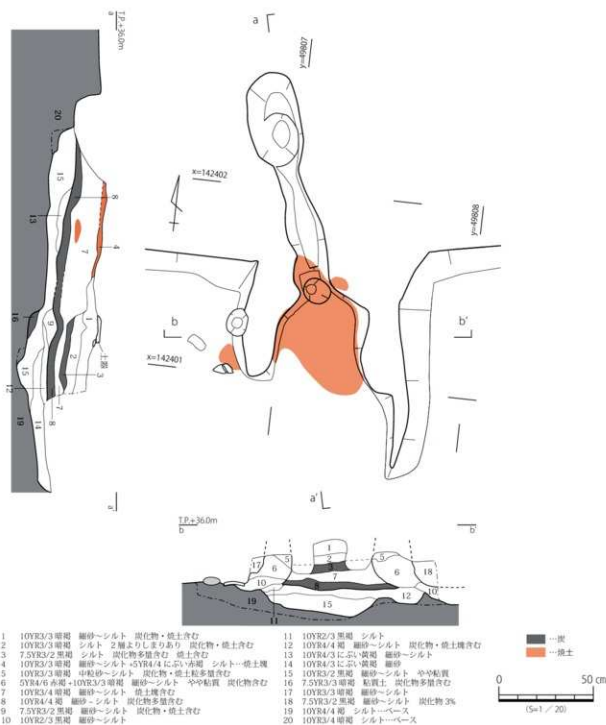


図 82 3-竖穴 40 カマド

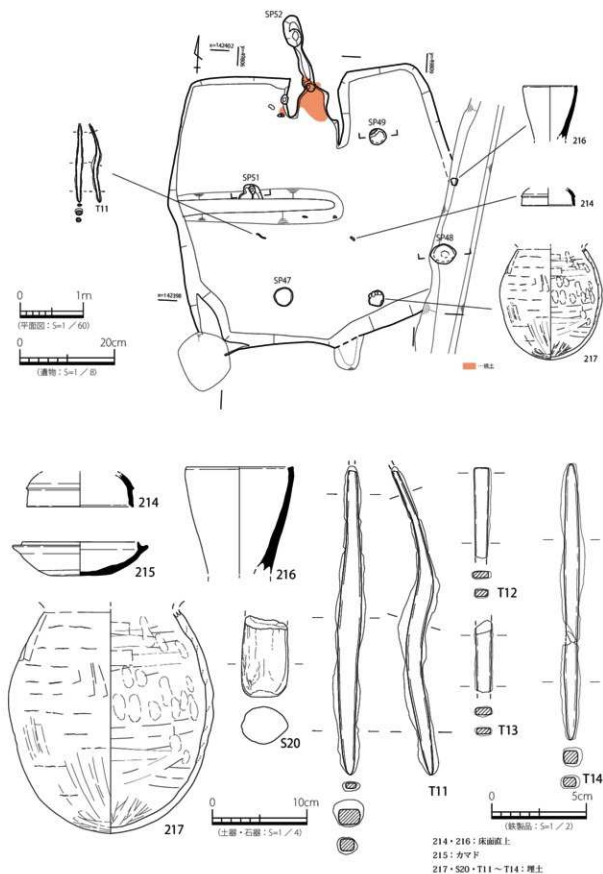


図 83 3- 竪穴 40 床面遺物出土状況及び出土遺物実測図

3- 堅穴 40 (図 81 ~ 83)

第3調査区北側で検出した堅穴建物である。平面形状はやや歪な方形を呈する。主軸方位N -2.5° - W、検出面の標高は35.9mである。3- S K 29 に切られ、調査区外へと広がる。規模は、長辺約4.50m、短辺約4.25m、最深部で約0.25mを測る。

埋土の上層が黄灰シルト、下層が灰黄褐シルトで、遺物は棒状鉄片(T12・T13)、石棒(S20)、須恵器杯身片・高杯片・壺片、土師器甗片が出土した。

埋土は上層が黄灰シルト、下層が灰黄褐シルトで、遺物は棒状鉄片(T12・T13)、石棒(S20)、須恵器杯身片・高杯片・壺片、土師器甗片が出土した。貼床は地山ブロック土を含む灰黄褐シルトで、貼床直上から須恵器蓋(214)・鉢(216)、土師器甗(217)、鉄製ヤリガンナ? (T11)・鉄器(T14)が出土した。

カマドは堅穴建物北側中央に作り付けられる。カマド構築材は暗褐中粒砂〜シルトと暗褐細砂〜シルト、黒褐細砂〜シルトである。カマド内部には、炭化物層が確認でき、当時の機能面と考えられる。カマド内部の上層の堆積は、カマドの上部構造の崩落土と考えられる。遺物はカマド上面で須恵器杯身(215)が、カマド内から須恵器杯身片が出土した。

支柱穴は北東側の1基を除く3基を確認した。S P 4 7 は円形を呈し、直径約0.30m、深さ約0.06mを測る。断面形状は逆台形である。S P 4 8 は楕円形を呈し、長軸約0.38m、短軸約0.3m、深さ約0.13mを測る。断面形状は不整形である。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が暗褐細砂〜シルト、掘方が黒褐細砂〜シルトと褐細砂〜シルトである。S P 49 は円形を呈し、直径約0.28m、深さ約0.20mを測る。断面形状はU字形である。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が黒褐シルト、掘方が黒褐細砂〜シルトと暗オリーブ褐シルトである。

S P 51 は掘乱に切られるため、全体の形状は不明である。直径約0.42m、幅約0.06mを測る。断面形状は浅い皿状である。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が暗褐細砂〜シルト、掘方が暗褐細砂〜シルトである。

出土遺物の年代から、T K 43 ~ T K 209 型式併行期と判断できる。

6- 堅穴 40 (図 84 ~ 85)

第6調査区中央の6- 堅穴 3 に大部分を切られて

検出した堅穴建物である。平面形状は隅丸方形を呈すると考えられる。主軸方位N -11.5° - W、検出面の標高は36.2mである。規模は、長辺約5.00m、短辺約4.2m以上、深さ約0.16mを測る。

埋土は褐灰シルト、貼床は灰黄褐シルトで、床面はベース土が部分的に露出する。

貼床直上から、S P 41 を検出した。S P 41 は円形を呈し、直径約0.44m、深さ約0.13mを測る。断面形状は逆台形である。埋土は上層が炭化物や焼土塊を含む灰黄褐シルト、下層が灰黄褐シルトである。

遺物が出土していないため、詳細な時期は不明であるが、6- 堅穴 3 との切り合い関係から、T K 209 型式併行期以前と判断できる。

6- 堅穴 3 (図 84 ~ 87)

第6調査区北側で検出した堅穴建物である。6- S K 15 に切られ、6- 堅穴 40 を切る。平面形状は隅丸の正方形を呈する。主軸方位N -14.5° - W、検出面の標高は36.2mである。規模は、長辺約5.56m、短辺約5.52m、深さ約0.22mを測る。

埋土の掘削後、貼床面直上で遺構検出を行い、カマドと支柱穴(S P 1 ~ 4)、ビット(S P 6)を確認した。

埋土は褐灰シルトで、遺物は須恵器杯身(220 ~ 223・225)・杯蓋(218・219)・高杯(226・228・230・231)・甗(232)、土師器杯(233)・甗(236)、石製紡錘車(S21)、白玉(S22)、須恵器杯身片・杯蓋片・高杯片・高杯蓋片・壺片・甗片、土師器甗片・甗片・鍋片・高杯片・壺片、白玉が出土した。

貼床は、地山ブロック土を含む灰黄褐シルトと褐灰シルトである。遺物は、カマド西袖周辺から須恵器高杯蓋(227)が、貼床内から棒状鉄片(T15)が出土した。

カマドは堅穴建物北側中央に作り付けられ、煙道が延びる。カマドの形状は馬蹄形を呈し、中央部を掘窪める。カマド構築材はにぶい黄褐シルトである。カマド内部には炭層が確認でき、カマドの機能面と想定できる。カマド内部上層の堆積は、カマドの上部構造の崩落土と考えられる。遺物は須恵器杯身(224)・壺(229)、土師器甗(234・235)が出土した。

支柱穴は4基確認できた。S P 1 は円形を呈し、直径約0.46、深さ約0.20mを測る。断面形状はやや歪な逆台形である。柱痕が確認でき、埋土は柱痕

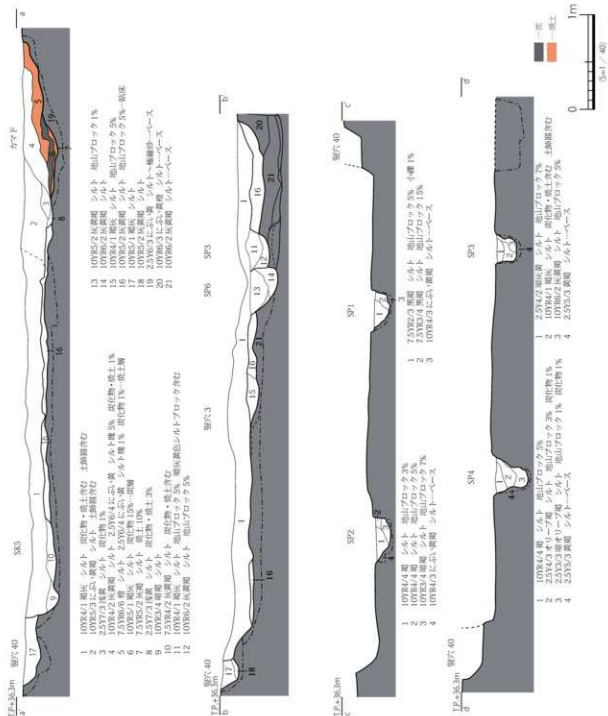


図 85 6- 竪穴 40・6- 竪穴 3 断面図

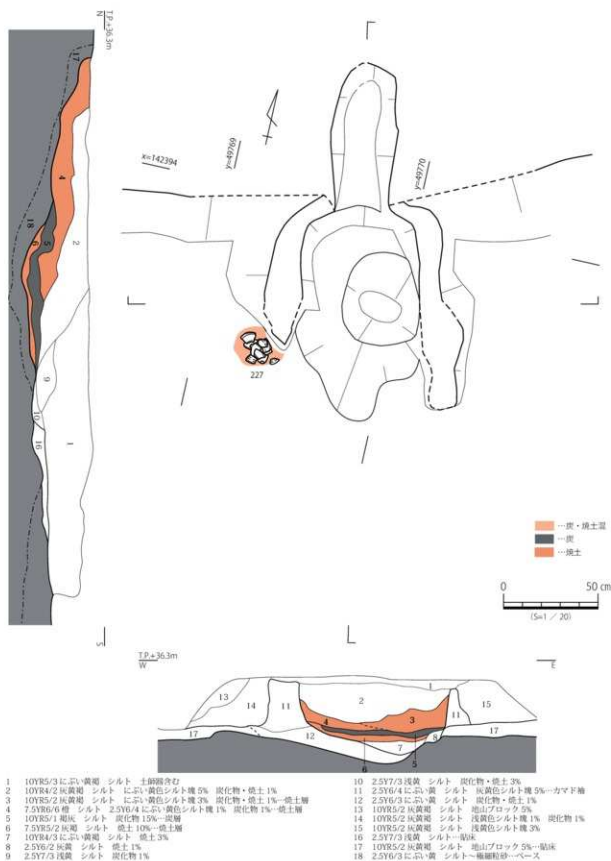


図 86 6- 壁穴 3 カマド

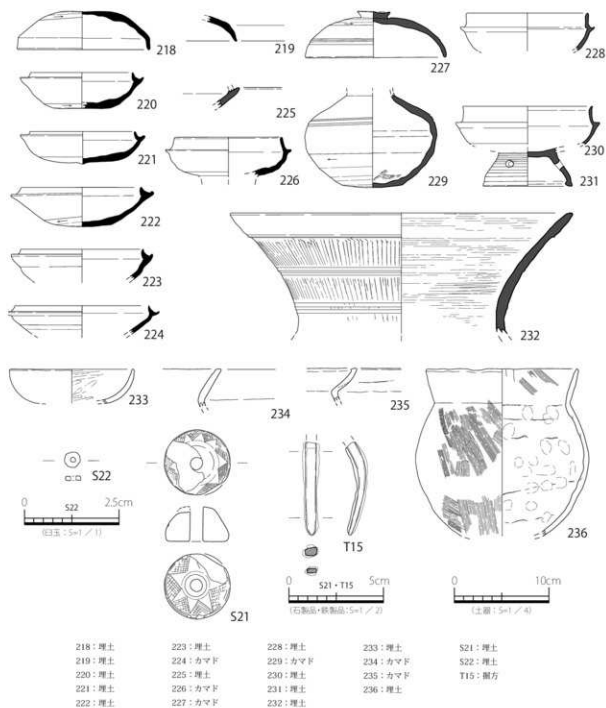


図 87 6- 壁穴 3 出土遺物実測図

が黒褐シルト、掘方が地山ブロック土を多く含んだ黒褐シルトである。S P 2 は円形を呈し、直径約 0.45 m、深さ約 0.18 m を測る。断面形状は逆台形である。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が褐シルト、掘方が地山ブロック土をやや多く含む褐シルトと暗褐シルトである。S P 3 は S P 6 に切られ、形状は不整形である。長径約 0.72 m、短径約 0.39 m、深さ約 0.22 m を測る。断面形状は U 字形である。埋土は上層が暗灰黄シルト、下層がオリブ褐シルト暗オリブ褐シルトである。S P 4 は円形を呈し、直径約 0.47 m、深さ約 0.37 m を測る。断面形状は U 字形である。埋土は上層が褐シルト、中層がオリブ褐シルト、下層が暗オリブ褐シルトである。

S P 6 は不整形な形状を呈し、長径約 0.75 m、深さ約 0.28 m を測る。断面形状はやや歪な U 字形である。埋土は灰黄褐シルトである。

出土遺物の年代から T K 209 型式併行期と判断できる。

3-S K 23・3-S P 72 (図 88)

第 3 調査区中央で検出した土坑とビットである。

3- 堅穴 45 を切る。堅穴建物のカマドと支柱穴の可能性が考えられたが、削平を受けており、堅穴建物の平面プランを検出することができなかった。検出面の標高は 35.9 m である。

S K 23 は楕円形を呈し、長径約 11.8 m、短径約 0.94 m、深さ約 0.23 m を測る。断面形状は不整形である。埋土は 4 層に分層でき、1・3 層が焼土塊を含む褐灰シルト、2 層が炭化物を含む橙シルト(焼土塊層)、4 層が炭化物・焼土塊が混じる褐灰シルトである。遺物は土師器甕(239)・甕(238)が出土した。土師器甕(238)のほとんどは S K 23 の周辺から出土している。

S P 72 は S K 23 の南東側で検出したビットである。円形を呈し、直径約 0.31 m、深さ約 0.17 m を測る。断面形状は楕形である。埋土は暗褐シルトである。須恵器杯蓋(237)も 3- 堅穴 45 の他の遺物より 6 cm ほど高い位置で出土しており、時期幅もあるので S K 23 をカマドとする堅穴に帰属するものと判断した。

出土遺物の年代から T K 209 型式併行期と判断できる。

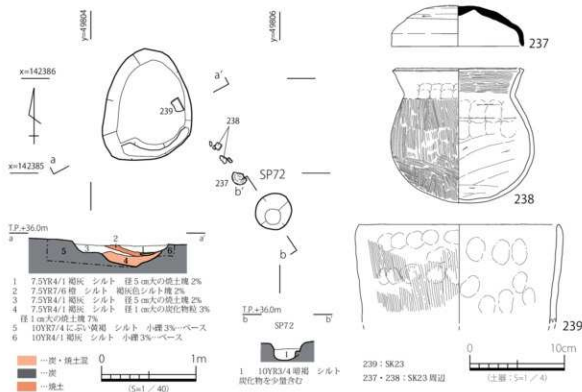


図 88 3-SK23・3-SP72 平・断面図及び出土遺物実測図

21-堅穴 8・3-堅穴 110・4-堅穴 122(図 89～91)

第3・4・21調査区中央で検出した堅穴建物である。平面形状は隅丸方形を呈する。主軸方位N-22°-W、検出面の標高は36.1mである。規模は、長辺約6.00m、短辺約6.06m、最深部で約0.4mを測る。

調査は埋土掘削の後、貼床面直上で遺構検出を行い、カマドと周壁溝、支柱穴(21-SP1～3・3-SP111)、ピット(3-SP126)を検出した。

埋土は暗褐色シルトで、遺物は須恵器杯身(240)・高杯(243)・土師器甕(245・248)・甕(246・247)、須恵器杯身片・高杯片・甕片、土師器甕片・甕片が出土した。

貼床は地山ブロック土を多く含む暗褐色シルトと極暗褐色シルト、にぶい黄褐色シルトである。床面直上から須恵器杯身(241)・須恵器高杯蓋(242)・甕(244)、貼床内から不明鉄器(T16)、須恵器高杯脚部片、土師器甕片が出土した。

カマドは堅穴建物北側中央に作り付けられる。馬蹄形を呈し、煙道が延びる。カマド構築材は暗褐色シルトで、カマド袖内側、カマド底部は被熱が認められる。遺物はカマド内部から須恵器杯身片、土師器甕片が出土した。

周壁溝は、幅約0.18m、深さ約0.14mを測る。埋土は上層が灰黄褐色シルト、下層が暗褐色シルトである。

支柱穴は4基確認できた。21-SP1はやや不整形な円形を呈し、直径約0.37m、深さ約0.30mを測る。断面形状はU字形である。埋土がにぶい黄褐色細砂～シルト、柱痕が黒褐色シルト、掘方が暗褐色シルトである。21-SP2は掘乱に切られるため全体の形状は不明であるが、楕円形を呈すると考えられる。長径約0.91m、短径約0.60m、深さ約0.56mを測る。断面形状はV字形である。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が暗褐色シルト、掘方が暗褐色シルトと黒褐色細砂～シルトである。21-SP3は円形を呈し、直径約0.44m深さ約0.35mを測る。断面形状はU字形である。埋土は黒褐色シルトと暗褐色細砂～シルトである。3-SP111はやや不整形な円形を呈し、直径約0.55m、深さ約0.31mを測る。断面形状は逆台形である。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が黒褐色シルト、掘方が黒褐色シルトと黒褐色細砂～シルトである。

3-SP126は貼床除去後に検出した。やや不整

形な円形を呈し、直径約0.36m、深さ約0.25mを測る。断面形状は逆台形に段落ちである。埋土は暗褐色シルトである。

出土遺物の年代から、TK209型式併行期と判断できる。

10-堅穴301(図92～94)

第10調査区西側で検出した堅穴建物である。10-堅穴310を切り、10-掘立3に切られる。平面形状は横長方形を呈する。主軸方位N-16.5°-W、検出面の標高は35.9mである。規模は、長辺約6.15m、短辺約4.64m、最深部で約0.5mを測る。

調査は埋土掘削の後、貼床面直上で遺構検出を行い、カマドと周壁溝の一部、支柱穴(SP2)、ピット(SP1・3)を検出した。堅穴建物南側は、噴霧の影響を受けており、堆積が乱されている。

埋土は褐色シルト～粘土とにぶい黄褐色シルトである。埋土から須恵器杯蓋片・高杯片・甕片、土師器甕片、粘土塊が出土した。

貼床は褐色シルトと褐色シルト～粘土で、貼床直上から須恵器高杯(250)と土師器甕(252)、鉄鎌(T17)が、貼床内から須恵器杯身(249)・甕(251)・甕片、土師器甕片が出土した。

カマドは堅穴建物北側中央に作り付けられる。幅の狭い馬蹄形を呈する。カマド構築材は西袖が褐色粗砂混じりシルトと褐粘質土、東袖がにぶい黄褐色シルトとにぶい黄褐色シルト～粘質土である。カマド内部には炭層と炭化土と焼土層が確認でき、カマドの機能面と考えられる。遺物は須恵器杯蓋片が出土した。

周壁溝は建物北西側で一部確認でき、幅約0.13m、深さ約0.02mを測る。

支柱穴は1基が確認できた。SP2は楕円形を呈し、長径約0.90m、短径約0.80m、深さ約0.27mを測る。断面形状は逆台形に段落ちである。埋土はにぶい黄褐色砂混じり細砂～シルトで、柱痕が褐色砂混じりシルトと褐色シルト、掘方が暗褐色砂混じり粘質土である。

SP1は円形を呈し、直径約0.55m、深さ約0.23mを測る。断面形状は不整形である。埋土は上層が褐色砂混じりシルト、下層が暗褐色細砂～シルトである。SP3はやや不整形な円形を呈し、直径約0.50m、深さ約0.24mを測る。断面形状は楕形である。埋土は上層が暗褐色シルト～粘土、下層が地

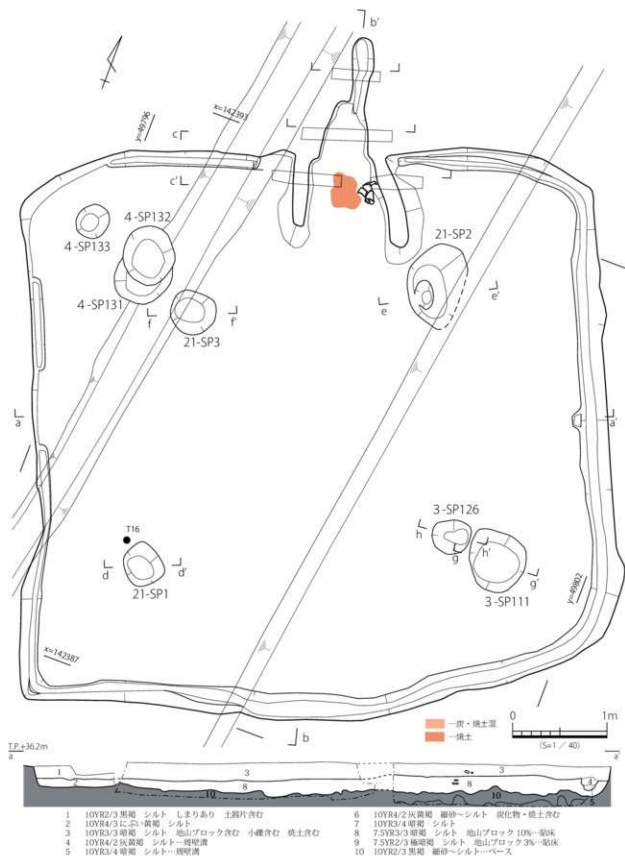


図 89 21- 竪穴 8・3- 竪穴 110・4- 竪穴 122 平・断面図

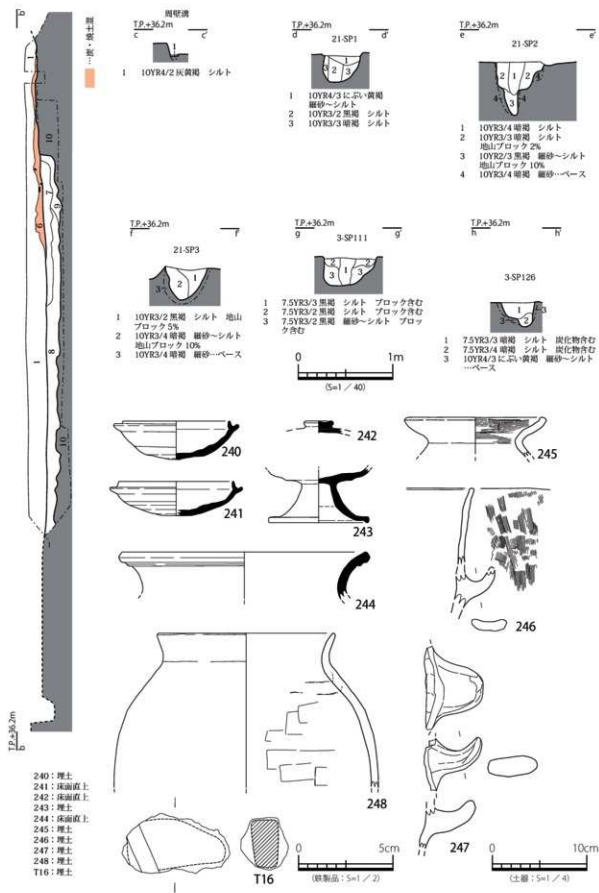


図 90 21- 壁穴 8・3- 壁穴 110・4- 壁穴 122 断面図及び出土遺物実測図

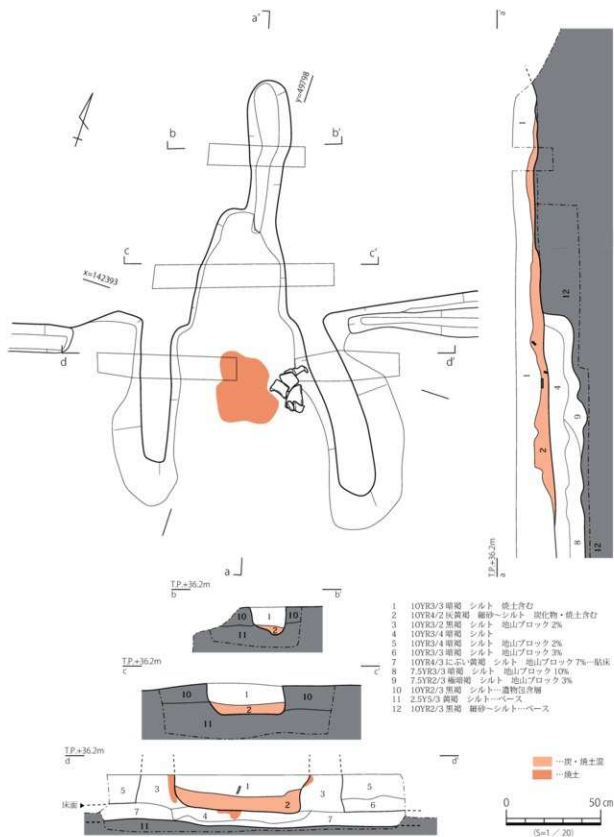


図 91 21- 竪穴 8・3- 竪穴 110・4- 竪穴 122 カマド

山ブロック土を含む褐粘土である。

出土遺物から T K 209 型式併行期と判断できる。

10-竪穴 50(図 95～96)

第 10 調査区の中央南側で検出した竪穴建物である。10- S K 52・55 に切られ、10- 竪穴 30・60 を切る。平面形状はやや横長の方形を呈する。主軸方位 N -34° - W、検出面の標高は 36.0m である。規模は、長辺約 4.50m、短辺約 4.30m、深さは最深部で約 0.25m を測る。

調査は埋土掘削の後、貼床面直上で遺構検出を行い、カマドと周壁溝、支柱穴 (S P 4・5・8・9)、ピット (S P 1・2・3・156・6) を検出した。

埋土はにぶい黄褐シルトで、遺物は須恵器杯蓋 (253)、白玉 (S23)、須恵器杯蓋片・杯身片・壺片、白玉片が出土した。

貼床は地山ブロック土を含むにぶい黄褐シルトである。遺物は出土していない。S P 8 と S P 9 の間にある落込み状の遺構から須恵器台付壺 (255) が出土した。

カマドは北側中央やや東寄りに作り付けられ、煙道が延びる。カマド構築材は褐シルトで、一部が残存していた。カマド内部は掘削済み。カマド内部の堆積は、カマドの上部構造の崩落土と考えられる。遺物は須恵器杯身 (254)・土師器杯 (256) が出土した。

周壁溝は、幅約 0.21 m、深さ約 0.13m を測る。埋土は地山ブロック土を含む暗褐シルトである。

支柱穴は 4 基確認できた。S P 8 はやや不整形な円形を呈し、直径約 0.43 m、深さ約 0.31m を測る。断面形状は U 字形である。埋土が褐シルト、柱痕が地山ブロック土を含む褐シルト、掘方が暗褐シルトである。S P 5 は隅丸長方形を呈し、長径約 0.43 m、短径約 0.34 m、深さ約 0.35m を測る。断面形状は U 字形である。埋土は褐シルトと暗赤褐シルト、柱痕が地山ブロック土を含むにぶい赤褐シルト、掘方が暗赤褐シルトである。S P 4 は円形を呈し、直径や約 0.50 m、深さ約 0.24m を測る。断面形状は U 字形である。埋土は褐シルトである。S P 9 は不整形で、長径約 0.53 m、短径約 0.52 m、深さ約 0.30m を測る。断面形状は U 字形である。埋土は暗褐シルトである。

S P 1 は円形を呈し、直径約 0.42 m、深さ 0.17m を測る。断面形状は段落到ち逆台形である。

埋土は暗褐シルトとにぶい黄褐シルトである。S P 2 は円形を呈し、直径約 0.41 m、深さ約 0.11m を測る。断面形状は皿状である。埋土は褐シルトである。S P 3 は円形を呈し、直径約 0.36 m、深さ約 0.30m を測る。断面形状は U 字形である。埋土は地山ブロック土を含む褐シルトと黄褐シルト、褐シルトである。S P 156 は S P 3 に切られるため、全体の形状は不明であるが、不整形な円形を呈する。直径約 0.47 m、深さ約 0.16m を測る。埋土は暗褐シルトである。S P 6 は隅丸長方形を呈し、長径約 0.56 m、短径約 0.35 m、深さ約 0.18m を測る。断面形状は逆台形である。埋土は褐シルトと暗褐シルト、暗褐シルト～粘土、褐シルト～粘土である。

出土遺物の年代から、T K 209～T K 217 型式併行期と判断できる。

10-竪穴 60(図 97～98)

第 10 調査区の中央南側で検出した竪穴建物である。10- 竪穴 50 に切られ、10- 竪穴 30 を切る。調査区外に広がるため、全体の平面形状は不明であるが、方形を呈すると思われる。主軸方位 N -22° - W を仮定でき、検出面の標高は 36.0m である。推定規模は、長辺約 3.0m、短辺約 2.4m 以上、深さは最深部で約 0.2m を測る。

調査は埋土掘削の後、貼床面直上で遺構検出を行い、カマドと周壁溝を検出した。

埋土は灰黄褐シルトである。遺物は須恵器杯身 (257) が出土している。

貼床は地山ブロック土を含むにぶい黄褐シルトと褐シルトである。

カマドは竪穴建物北側西寄りに作り付けられているが、カマドの残存は非常に悪く、基底部のみを確認した。カマド構築材は暗褐シルトである。遺物は土師器甕 (258)、土師器片・粘土塊・骨片が出土した。

周壁溝は断面のみで確認でき、幅約 0.33 m、深さ約 0.07m を測り、埋土は地山ブロック土を含む褐シルトである。

出土遺物の年代から T K 209 型式併行期と判断できる。

10-竪穴 30(図 99)

第 10 調査区の中央南側で検出した竪穴建物である。10- 竪穴 50・60 に切られるため、全体の形状は不明であるが、方形を呈すると思われる。主軸方

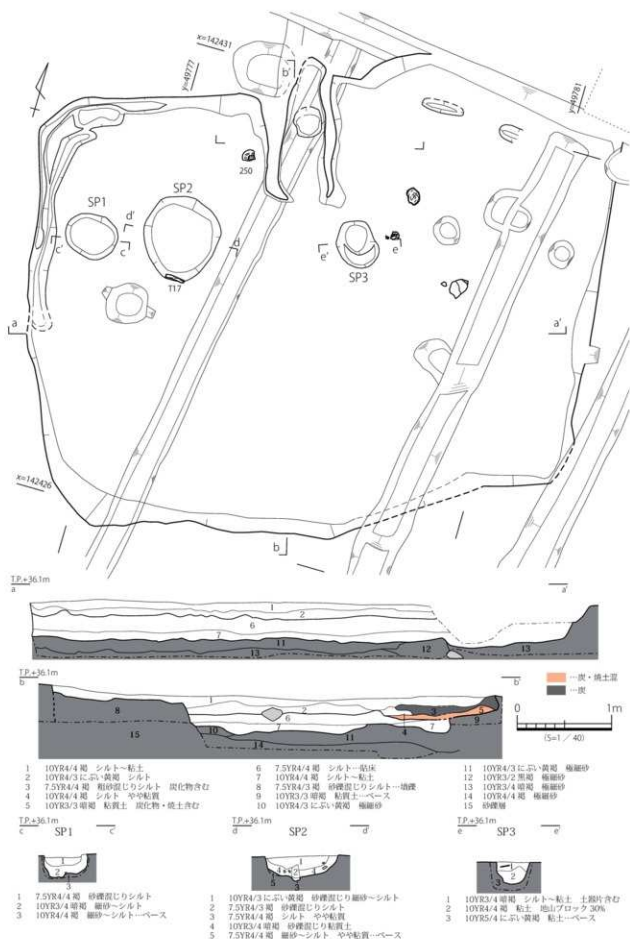


図 92 10- 竪穴 301 平・断面図

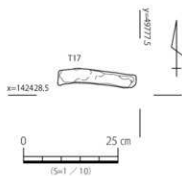
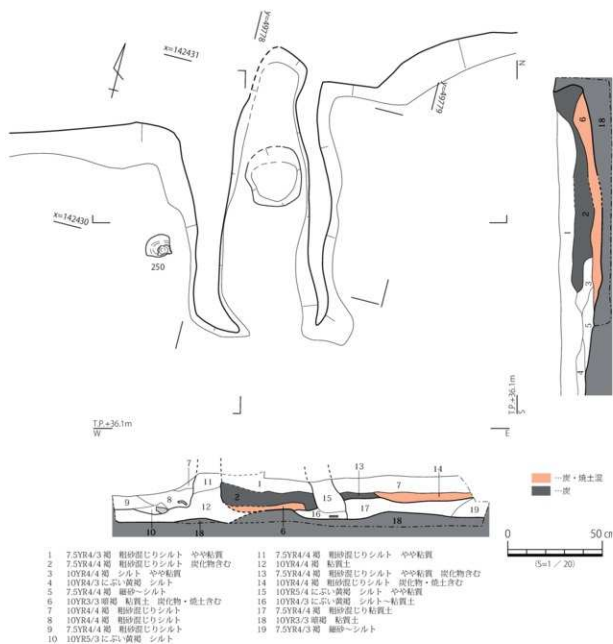


図 93 10- 堅穴 301 カマド及び遺物出土状況

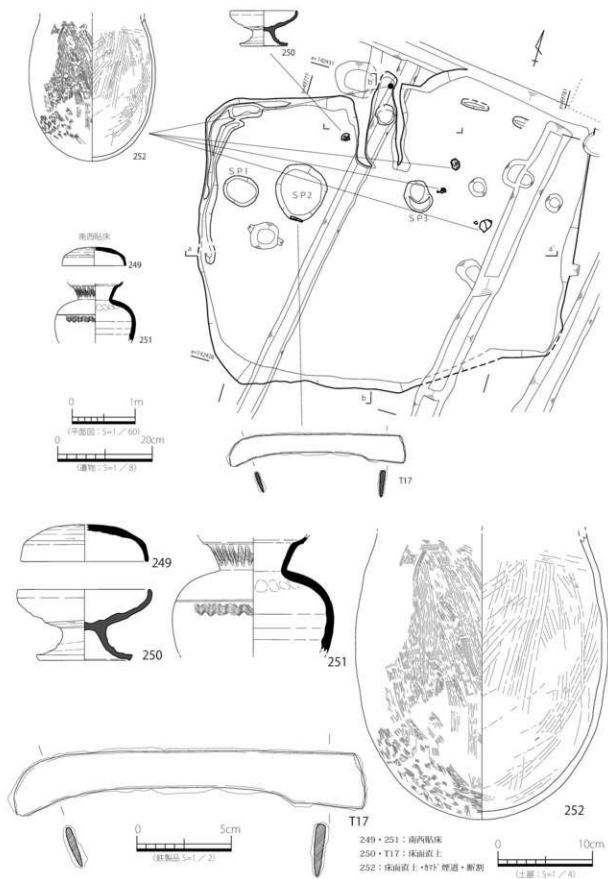


図 94 10- 竖穴 301 遺物出土状況及び出土遺物実測図

位 $N-15^{\circ}-W$ 、検出面の標高は 36.0m である。規模は、長辺約 3.7m 以上、短辺約 3.2m 以上、深さは最深部で約 0.2m を測る。

調査は埋土掘削の後、貼床面直上で遺構検出を行い、周壁溝の一部を検出した。

埋土はにぶい黄褐シルトと灰黄褐シルトである。遺物は白玉 (S24) が出土した。

貼床は地山ブロック土を含む褐シルトである。

周壁溝は一部で確認でき、幅約 0.11 m、深さ約 0.11m を測る。埋土は黒褐シルトと暗褐シルトである。

時期の判明する遺物が出土していないため、遺構の時期は不明である。

5- 竪穴 35 (図 100)

第 5 調査区中央で検出した竪穴建物である。5- 竪穴 30 と 4- 竪穴 30・22- 竪穴 6 と攪乱に切られるため、全体の形状は不明であるが、方形を呈すると想定できる。主軸方位 $N-7^{\circ}-W$ 、検出面の標高は 36.2m である。規模は、長辺約 4.80m、短辺約 2.0m 以上、深さは最深部で 0.2m を測る。

調査は埋土掘削の後、貼床面直上で遺構検出を行い、周壁溝、ビット (S P 63・64・65・66) を検出した。

埋土は褐シルトと黒褐シルト～粘土、暗褐シルトである。

貼床は暗褐シルトである。

周壁溝は一部で確認でき、幅約 0.14 m、深さ約 0.09m を測る。埋土はにぶい黄褐シルトである。

S P 64 は円形を呈し、直径約 0.29 m、深さ約 0.33m を測る。断面形状は逆台形である。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が黒褐シルト、掘方が暗褐シルト～粘土である。S P 65 は不整形な形状を呈し、長径約 0.35 m、短径約 0.35 m、深さ約 0.26m を測る。断面形状は逆台形に段落ちである。埋土は黒褐粘土～シルトである。S P 66 は不整形な形状を呈し、長径約 0.52 m、短径約 0.37 m、深さ約 0.18m を測る。断面形状は逆台形である。埋土は暗褐細砂～シルトである。S P 63 は攪乱に切られるため、全体の形状は不明であるが、残存径約 0.37 m、深さ約 0.14m を測る。断面形状は逆台形である。埋土は暗褐シルトである。

遺物が出土していないため、詳細な時期は不明である。

24- 竪穴 1 (図 101)

第 24 調査区の南側で検出した竪穴建物である。第 7 調査区で検出できなかったが、方形を呈すると想定できる。主軸方位 $N-12^{\circ}-W$ 、検出面の標高は 36.4m である。規模は、長辺約 4.0m、短辺約 2.0m 以上、深さ約 0.16m を測る。埋土や貼床内に礫が浮き上がっていることから、地震の影響を受けていると考えられる。

埋土は暗褐礫混じりシルト、貼床は暗褐礫混じりシルトである。

周壁溝は一部で確認でき、幅約 0.17 m、深さ約 0.06m を測る。

支柱穴は 3 基確認でき、24- S P 2 は円形を呈し、直径約 0.40 m、深さ約 0.30 m を測る。断面形状は U 字形である。埋土はにぶい黄褐シルトである。24- S P 4 は円形を呈し、直径約 0.31 m、深さ約 0.32m を測る。断面形状は U 字形である。埋土はにぶい黄シルトである。7- S P 31 は円形を呈し、直径約 0.31 m、深さ約 0.19m を測る。断面形状は逆台形に段落ちである。埋土は褐灰シルトである。

24- S P 3 は円形を呈し、直径約 0.45 m、深さ約 0.3 m を測る。断面形状は皿状である。埋土は暗褐シルトである。遺物は須恵器杯身片が出土した。

遺物の出土が少ないため、遺構の詳細な時期は不明である。

10- 竪穴 1 (図 102)

第 10 調査区中央西よりで検出した竪穴建物である。平面形状はやや歪な方形を呈する。主軸方位 $N-23^{\circ}-W$ 、検出面の標高は 36.2m である。規模は、長辺約 4.14m、短辺約 4.10m、深さは最深部で約 0.05m を測る。

削平により埋土が確認できず、貼床面直上でカマドの一部と周壁溝、支柱穴 (S P 26～29)、ビット (S P 67・68) を検出した。

貼床はにぶい褐粗砂混じりシルトとにぶい黄褐細砂～シルトである。遺物は土師器片が出土した。

カマドは竪穴建物北側に作り付けられていたと想定できるが、残存状態が極めて悪い。カマド構築材は褐シルトである。カマド内部は浅く掘りぬめる。

周壁溝は一部で確認でき、幅約 0.08 m、深さ約 0.04m を測る。埋土はにぶい黄褐シルトと褐細砂～シルトである。

支柱穴は 4 基確認できた。S P 26 は円形を呈し、

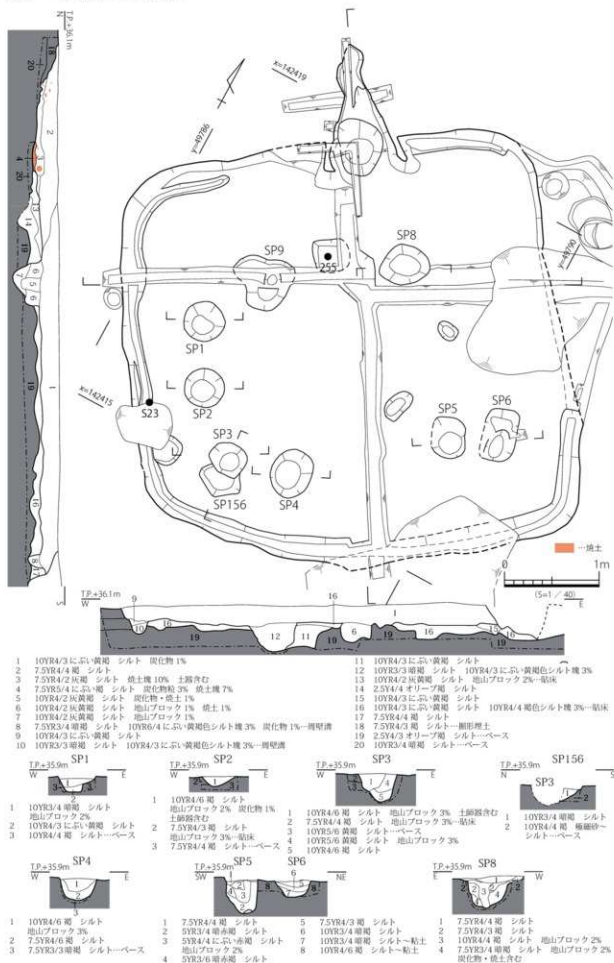


図 95 10- 堅穴 50 平・断面図

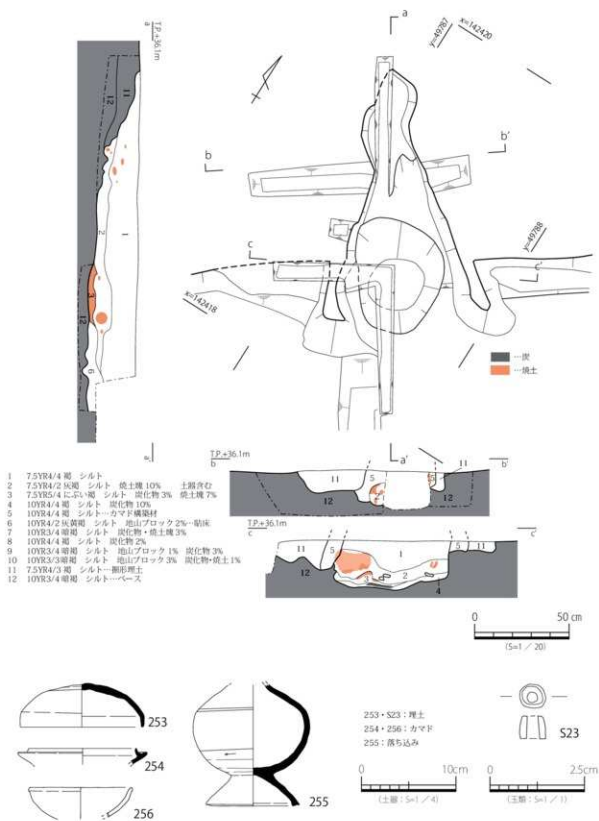


図 96 10- 壁穴 50 カマド及び出土遺物実測図

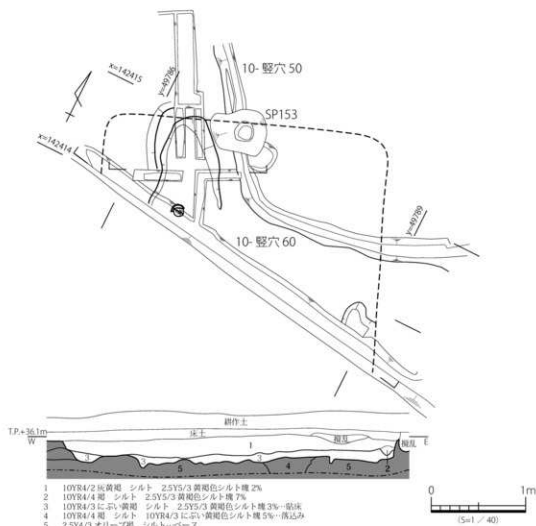


図 97 10- 竪穴 60 平・断面図

直径約 0.34、深さ約 0.10m を測る。断面形状は皿状である。埋土は褐シルトである。S P 27 は逆台形を呈し、直径約 0.34 m、深さ約 0.13m を測る。断面形状は逆台形に段落ちである。埋土はにぶい黄褐細砂～シルトである。S P 28 は円形を呈し、直径約 0.30 m、深さ約 0.10m を測る。断面形状は逆台形である。埋土は褐シルト～粘土である。S P 29 は円形を呈し、直径約 0.33 m、深さ 0.12m を測る。断面形状は逆台形である。埋土は褐シルトである。

S P 67 は円形を呈し、直径約 0.28 m、深さ約 0.13 m を測る。断面形状は桶形である。埋土は褐砂礫混じりシルトである。S P 68 は円形を呈し、直径約 0.28 m、深さ約 0.10 m を測る。断面形状は逆台形である。埋土は褐砂礫混じりシルトである。

出土遺物が少ないため、遺構の時期は不明である。

45- 竪穴 5 (図 103)

第 45 調査区の中央で検出した竪穴建物である。調査区外に広がるため、全体の形状は不明である。45- S D 4 に切られる。主軸方位は N -8°・W と想定でき、検出面の標高は 36.2m である。平面形状は方形で、規模は、長辺約 6.0m 以上、短辺約 4.0m 以上、深さ約 0.20m を測る。

調査は埋土掘削の後、貼床面直上で遺構検出を行い、周壁溝、土坑 (S K 6) を検出した。第 10 調査区では、竪穴建物を検出することが出来なかったが、10- S P 317 が支柱穴である可能性が考えられる。

埋土は灰黄褐細砂～シルトで、貼床はにぶい黄褐

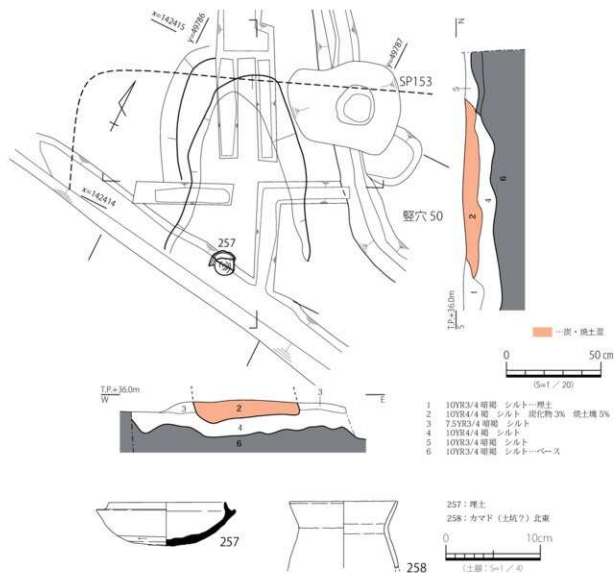


図 98 10- 竪穴 60 カマド及び出土遺物実測図

細砂混じりシルトである。遺物は須恵器杯身片・壺片が出土した。

周壁溝は幅約 0.12 m、深さ約 0.05m、埋土は灰黄褐シルトである。

10- S P 317 は、楕円形を呈し、長径約 0.40 m、短径約 0.29 m、深さ約 0.11m を測る。断面形状は段落ちに逆台形である。埋土は黄褐シルト～細砂である。

S K 6 は竪穴建物中央で検出した土坑である。調査区外へと広がるため、全体の形状は不明である。長さ約 0.74 m 以上、深さ約 0.22m を測る。断面形状は不整形である。埋土は上層が黒褐中粒砂混じりシルト、下層が黒褐中粒砂混じりシルトとにぶい黄褐シルトである。

時期の判明する遺物が出土していないことから、

遺構の時期は不明である。

4- 竪穴 91 (図 104)

第 4 調査区南側で検出した竪穴建物である。主軸方位 N -5° - E、検出面の標高は 36.1m である。現地調査時に、北東側を 4- 竪穴 70 として掘削を行ったが、4- S K 10 (カマド) とピットの配置関係、遺物の出土状況から、竪穴建物と判断した。平面形状は不整形を呈している。規模は、長辺約 4.20m、短辺 3.80m 以上、最深部で約 0.1m を測る。

調査は埋土が残っておらず、貼床面直上で遺構検出を行い、支柱穴 (S P 123・124・140)、ピット (S P 137) を検出した。

貼床は暗褐シルトと地山ブロック土を含む黒褐シルトである。遺物は須恵器杯身片・長脚高杯片・

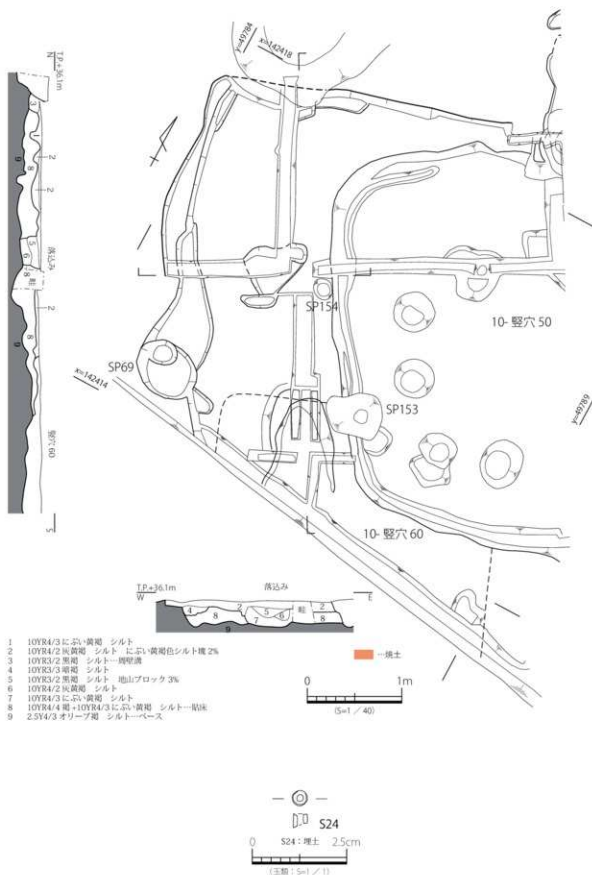


図 99 10- 竪穴 30 平・断面図及び出土遺物実測図

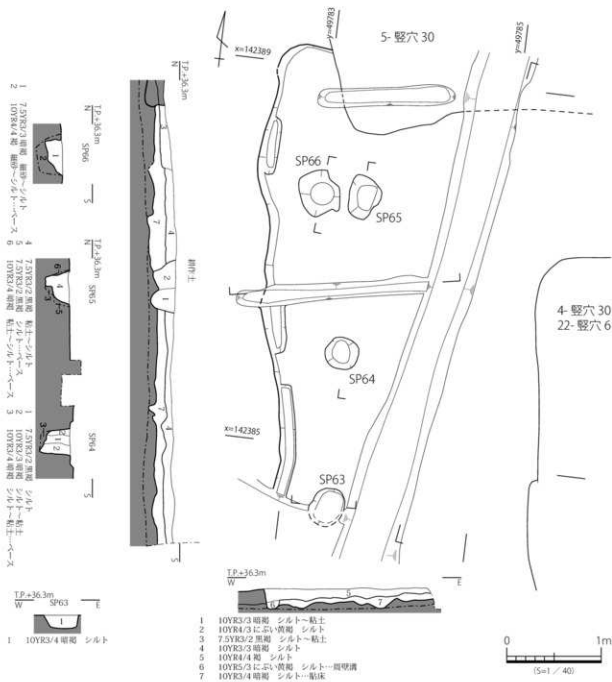


圖 100 5-豎穴 35 平·断面圖

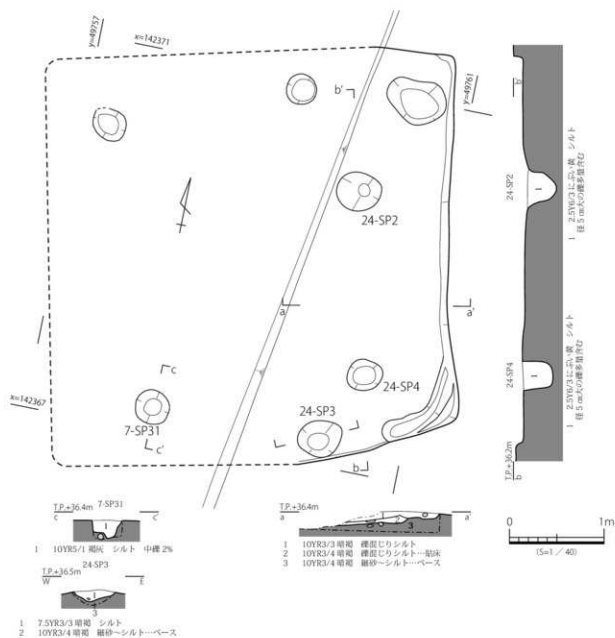


図 101 24- 竪穴 I 平・断面図

短脚高杯片が出土した。焼成不良の須恵器が多い。

支柱穴は3基確認でき、S P 123 は円形を呈し、直径約 0.49 m、深さ約 0.26 m を測る。断面形状は逆台形である。埋土は灰黄褐シルトである。S P 124 は円形を呈し、直径約 0.43 m、深さ約 0.18 m を測る。断面形状は椀形である。埋土は上層が暗灰黄シルト、下層が灰黄褐シルトである。S P 140 は楕円形を呈し、長軸約 0.5 m、短軸約 0.32 m、深さ約 0.42 m を測る。断面形状は逆台形である。

S P 137 は円形を呈し、直径約 0.8 m、深さ約 0.1 m を測る。断面形状は皿状である。埋土は暗褐細礫混じりシルトである。

出土遺物の年代から T K 43 型式以降と判断できる。

21-堅穴 2(図 105 ~ 106)

第 21 調査区南側で検出した堅穴建物である。主軸方位 N - 0° - W、検出面の標高は 36.1 m である。3-堅穴 50 に切られる。第 3・4 調査区で堅穴建物の一部を確認したが、全体の形状が判明したのは、第 21 調査区の調査段階である。平面形状はほぼ正方形を呈する。規模は、長辺約 5.50 m、短辺約 5.00 m、最深部で約 0.2 m を測る。

調査は埋土掘削の後、貼床面直上で遺構検出を行い、カマドと周壁溝、支柱穴(S P 1・2)を検出した。

埋土は暗褐粗砂混じり細砂〜シルトである。遺物は須恵器杯身(260)・高杯(261)、土師器把手(262)、製塩土器片、不明鉄器が出土した。

貼床は地山ブロック土を含む黒褐シルトで、貼床直上から須恵器杯蓋(259)が出土した。

カマドは堅穴建物北側中央に作り付けられ、煙道が延びる。カマド構築材は、カマド袖が暗褐粗砂混じりシルト〜粘土、カマド底部が黒褐粗砂混じりシルト〜粘土である。カマド内部には炭層が確認できた。カマドの機能面と考えられる。またカマド内部上層の堆積は、焼土や炭化物が確認でき、カマドの上部構造の崩落土と考えられる。煙道は長さ約 1.24 m、幅約 0.25 m、深さ約 0.13 m を測る。埋土は黒褐細礫混じりシルト〜粘土である。遺物はカマド内から須恵器杯身片が出土した。

周壁溝は一部で確認でき、幅約 0.11 m、深さ約 0.13 m を測る。埋土は極暗褐粘土混じり粗砂である。

支柱穴は2基確認でき、S P 1 は楕円形を呈し、

長径約 0.60 m、短径約 0.43 m、深さ約 0.17 m を測る。断面形状は「へ」字形である。埋土は単層で、灰褐細砂〜シルトである。S P 2 は円形を呈し、直径約 0.47 m、深さ約 0.22 m を測る。断面形状は逆台形である。埋土は3層に分層でき、上層が黒褐シルト〜粘土、下層が黒褐細砂〜シルトと暗褐粘土混じり細砂〜シルトである。

出土遺物の年代から、T K 209 型式併行期と判断できる。

3-堅穴 50(図 107 ~ 108)

第3調査区南側で検出した堅穴建物である。主軸方位 N - 12° - W、検出面の標高は 36.3 m である。21-堅穴 2 を切る。建物南側では礫の盛り上がりがある。確認でき、後述する地震痕跡の可能性が考えられる。平面形状はやや歪な方形を呈している。規模は、長辺約 5.80 m、短辺約 5.30 m、最深部で約 0.35 m を測る。

調査は埋土掘削の後、貼床面直上で遺構検出を行い、カマドと支柱穴(S P 61・63 ~ 65)、ピットを検出した。

埋土は黒褐シルト〜極細砂と褐灰シルト、暗褐シルト〜極細砂、灰黄褐極細砂、暗褐シルト、褐灰極細砂である。遺物は須恵器杯蓋(264)・高杯蓋(265・266)、土師器壺(267)・甕(269)、白玉(S25)、鉄畿(T18)、須恵器杯身片・杯蓋片・高杯片・甕片、土師器甕片・高杯片・製塩土器片が出土した。

貼床は地山ブロック土を含む黒褐シルトである。堅穴建物南側では、床面を確認できなかった。遺物は須恵器杯蓋(263)、土師器鉢(268)が出土した。

カマドは堅穴建物北側やや東寄りに作り付けられる。カマド構築材は、にぶい黄褐シルトと地山ブロック土を含む褐灰シルト〜極細砂である。カマド内部では、下層で炭化物層が確認できた。カマドの機能面と想定できる。またカマド内部上層の堆積は、焼土塊や炭化物を含む堆積層が確認できたことから、カマドの上部構造物の崩落土と考えられる。遺物は須恵器甕片が出土した。

支柱穴は4基確認できた。S P 61 は円形を呈し、直径約 0.59 m、深さ約 0.19 m を測る。断面形状は不整形である。埋土は黄灰シルトと黒褐シルトである。遺物は須恵器杯身片が出土した。S P 63 は円形を呈し、直径約 0.46 m、深さ約 0.29 m を測る。断面形状は逆台形である。埋土は上層が地山ブ

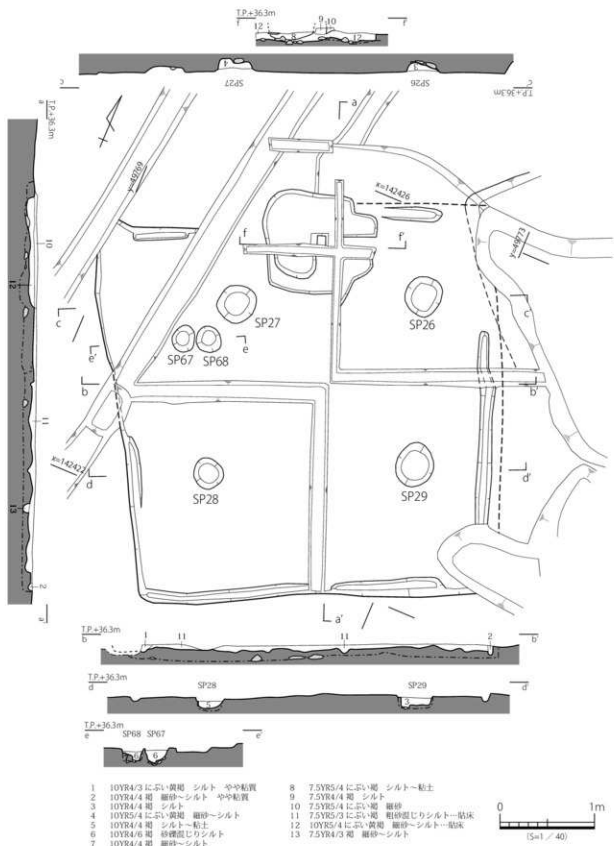


图 102 10-竖穴 1 平·断面图

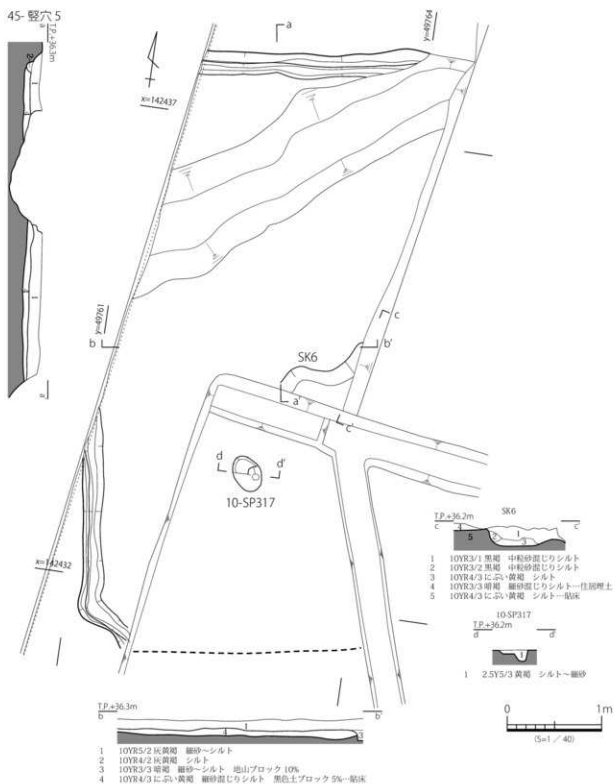


図 103 45- 壁穴 5 平・断面図

ロック土を含む黄灰シルト、下層が黄灰シルトである。S P 64 は円形を呈し、直径約 0.38 m、深さ約 0.20 m を測る。断面形状は楕円形である。埋土は褐灰シルトと黒褐シルトである。S P 65 は円形を呈し、直径約 0.32 m、深さ約 0.25 m を測る。断面形状は逆台形である。埋土は黒褐シルトである。

出土遺物の年代から T K 209 ～ T K 217 型式併行期と判断できる。

22-竪穴 1 (図 109 ～ 110)

第 22 調査区中央で検出した竪穴建物である。平

面形状は方形を呈すると想定できる。主軸方位 N - 5° - E、検出面の標高は 36.1 m である。4-竪穴 30・90 を切る。規模は、長辺約 5.70 m、短辺約 5.50 m 以上、深さは最深部で 0.2 m を測る。

調査は埋土掘削の後、貼床面直上で遺構検出を行い、カマドと周壁溝、支柱穴 (4-S P 95・125、22-S P 5・7)、ピット (22-S P 6) を検出した。

埋土は褐粗砂混じりシルト～粘土である。遺物は須恵器高杯片・壺片、土師器甕片・製塩土器片が出土した。

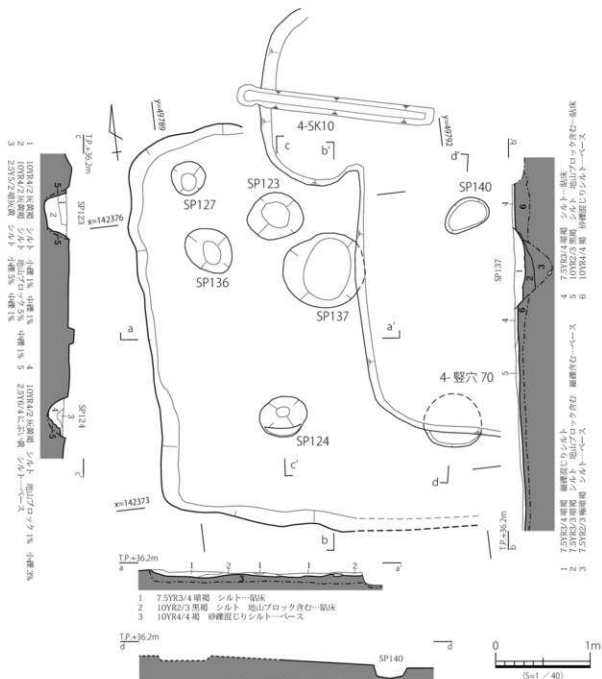


図 104 4-竪穴 91 平・断面図

貼床は、暗褐色礫混じり極細砂～シルトと黒色シルトブロックを含む暗褐色細砂である。遺物は床面直上から須恵器杯身(270)、土師器壺片が出土した。

カマドは竪穴北側中央に作り付けられ、内部をやや掘窪める。カマド構築材は、にぶい黄褐色細砂混じりシルト～粘土である。カマド内部には、炭化物を多量に含む黒褐シルト混じり粘土が堆積しており、機能面と考えられる。機能面上面の堆積は、カマド上部構造の崩落土の可能性が高い。

周壁溝は一部で確認でき、幅約0.34 m、深さ約0.08mを測る。埋土は暗褐色粗砂混じり極細砂である。

支柱穴は4基確認でき、4-S P 95は円形を呈し、直径約0.42 m、深さ約0.22mを測る。断面形状は逆台形である。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が黒褐細砂～シルト、掘方が地山ブロック土を含む暗褐色細砂である。4-S P 125は円形を呈し、直径約0.42 m、深さ約0.37mを測る。断面形状はやや歪なU字形である。埋土は黒褐シルトと炭化物を含む黒シルト、黒褐シルト～粘土である。22-S P 5は円形を呈し、直径約0.47 m、深さ約0.50mを測る。断面形状は逆台形である。埋土は暗褐色シルトである。22-S P 7は円形を呈し、直径約0.44 m、深さ約0.30mを測る。断面形状は逆台形に段落ちである。埋土は暗褐色シルトである。

22-S P 6は楕円形を呈し、直径約0.43 m、短径約0.36 m、深さ約0.45mを測る。断面形状はU字形である。埋土は黒褐粘質シルトである。遺物は製塩土器片が出土した。

出土遺物の年代から、TK 209 型式併行期と判断できる。

10-竪穴120(図111)

第10調査区の東側で検出した竪穴建物の可能性がある遺構である。攪乱に切られ、調査区外に広がるため、全体の形状は不明であるが、方形を呈する可能性がある。主軸方位N-9°-W、検出面の標高は35.8mである。規模は、長辺約5.0m以上、短辺約3.8m以上、最深部で約0.2mを測る。

竪穴プランや貼床面、掘方底部が非常に歪な状況となっており、後述する地震痕跡の可能性が考えられる。

埋土は褐シルト、貼床が暗褐色シルトである。

貼床面でS P 114を、掘方でS P 117・118を

検出した。S P 114は攪乱に切られるため、全体の形状は不明であるが、楕円形を呈すると考えられる。長径約0.83 m、短径約0.57 m、深さ約0.18mを測る。断面形状は不整形である。埋土は暗褐色シルトである。S P 117は瓢箪状を呈し、直径約0.68 m、短径約0.38 m、深さ約0.32mを測る。断面形状はU字形である。埋土は上層が暗褐色シルト～粘土、下層が黒褐シルトである。S P 118はやや歪な円形を呈し、直径約0.31 m、深さ約0.37mを測る。断面形状はV字形である。埋土は上層が暗褐色シルト、下層が暗褐色細砂～シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

7・24-竪穴3(図112)

第7・24調査区の北側で検出した竪穴建物である。主軸方位N-63°-E、検出面の標高は36.1mである。平面形状はやや横長の方形を呈する。規模は、長辺約3.50m、短辺約3.20m、深さ約0.32mを測る。平面での確認はできなかったが、東カマドであったことが断面で確認できた。埋土を掘削後、貼床面で検出を行い周壁溝と支柱穴2基を確認したが、残りの支柱穴は確認出来なかった。

埋土は褐細砂～シルトである。遺物は須恵器杯蓋片が出土した。

貼床は暗褐色礫混じりシルトと暗褐色細砂混じりシルト、褐色粗砂混じりシルトである。床面直上から土師器鍋(271)、貼床内から須恵器高杯脚部片・壺が出土した。

カマドは東カマドで、カマド構築材は褐粗砂混じりシルトで、カマド内部の堆積は、暗褐色粗砂混じり細砂～シルトと黒褐色粗砂混じり粘質土で、カマドの上部構造の崩落土と考えられる。

周壁溝は幅約0.10 m、深さ約0.09mを測る。埋土は暗褐色粗砂混じり細砂～シルトである。

24-S P 1は円形を呈し、直径約0.25 m、深さ約0.21mを測る。断面形状は逆台形に柱痕の段落ちである。柱痕が確認でき、柱痕の埋土がにぶい黄褐色シルト、埋土が地山ブロック土を含むにぶい黄褐色細砂～シルトである。

7-S P 1は円形を呈し、直径約0.25 m、深さ約0.21mを測る。断面形状は逆台形に段落ちである。埋土は暗褐色細砂～シルトである。

出土遺物の年代から、古墳時代後期前半と推定しておく。

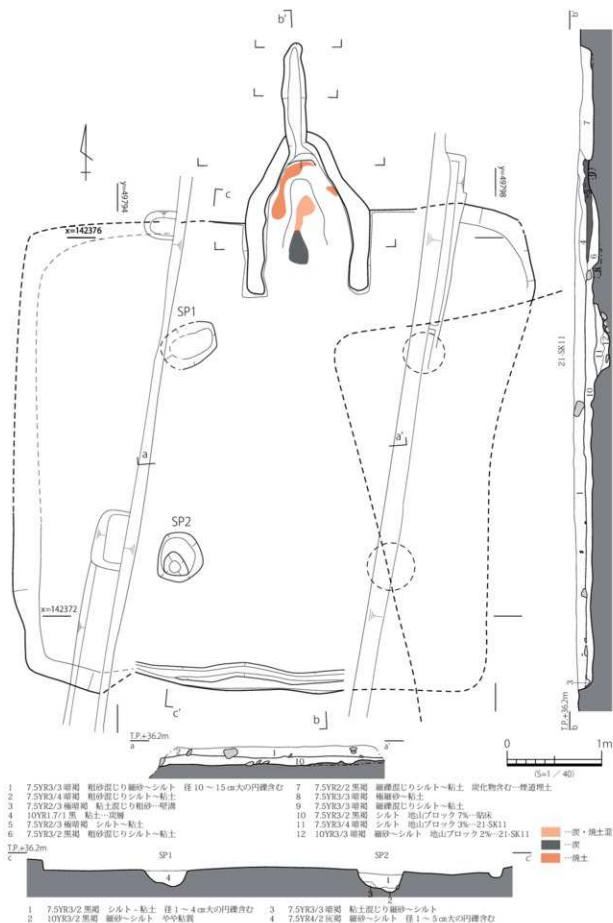


図 105 21- 竪穴 2 平・断面図

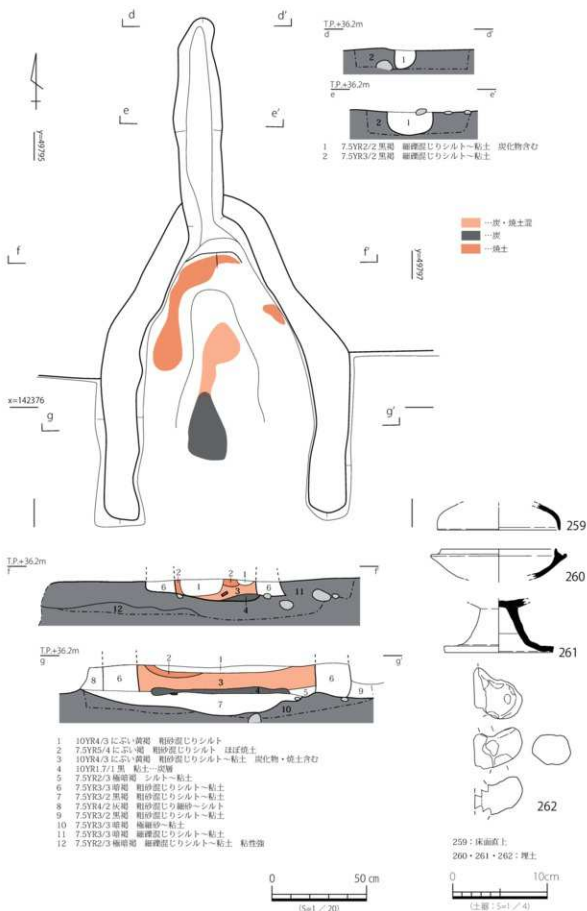


図 106 21- 壁穴 2 カマド及び出土遺物実測図

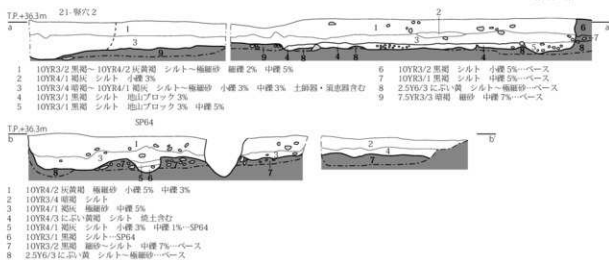
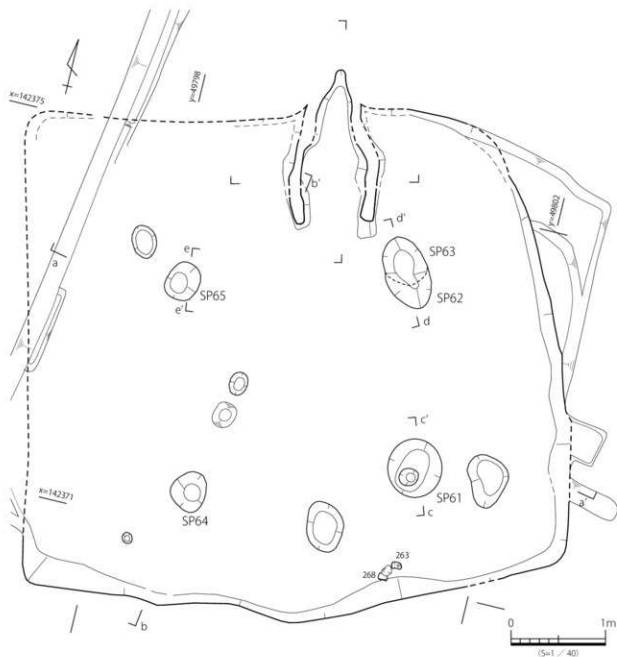


図 107 3- 壁穴 50 平・断面図

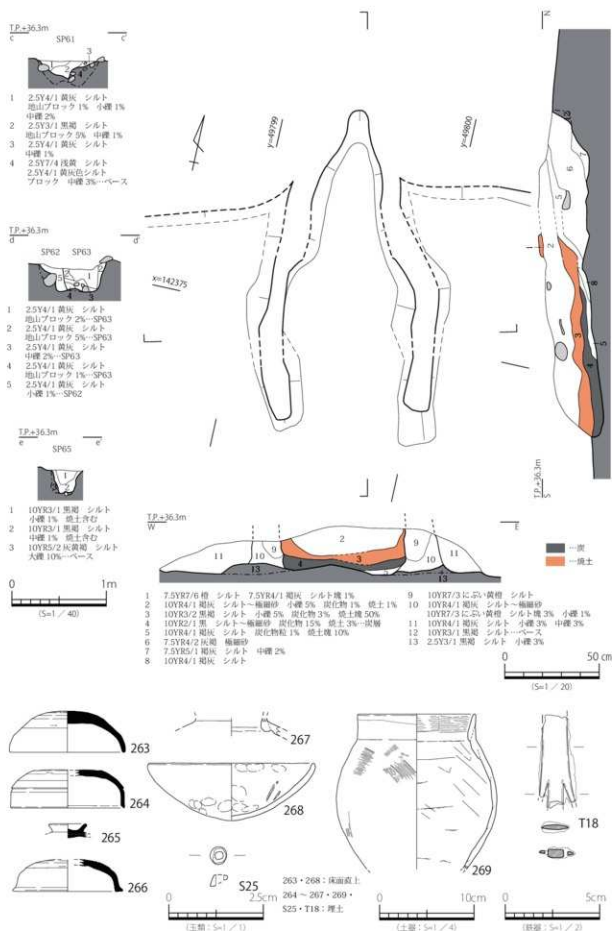


図 108 3- 竪穴 50 カマダ及び出土遺物実測図

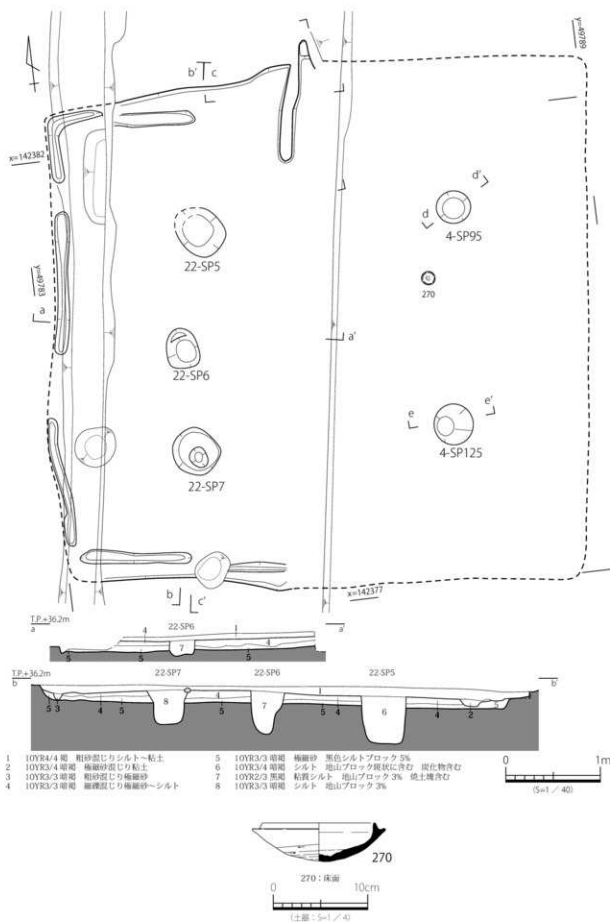


図 109 22- 竪穴 1 平・断面図及び出土遺物実測図

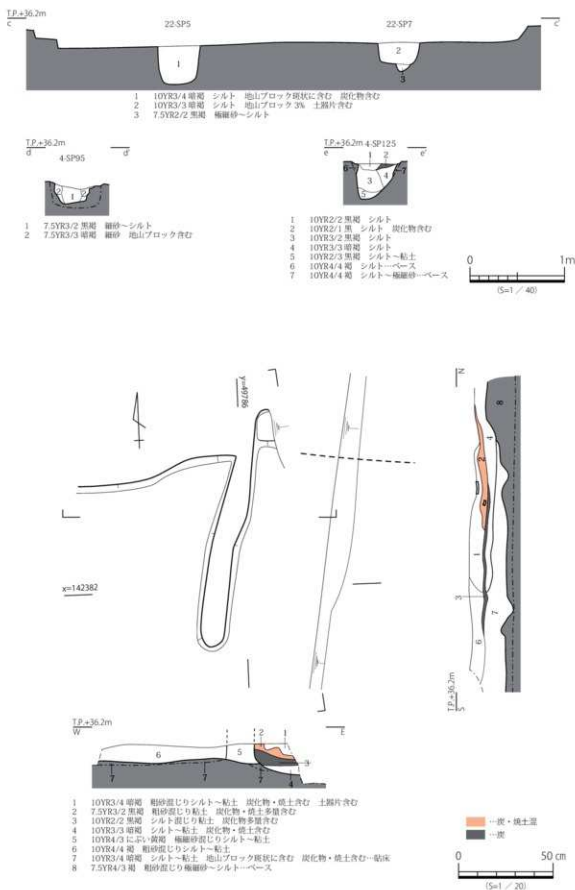


図 110 22- 壁穴 カマド

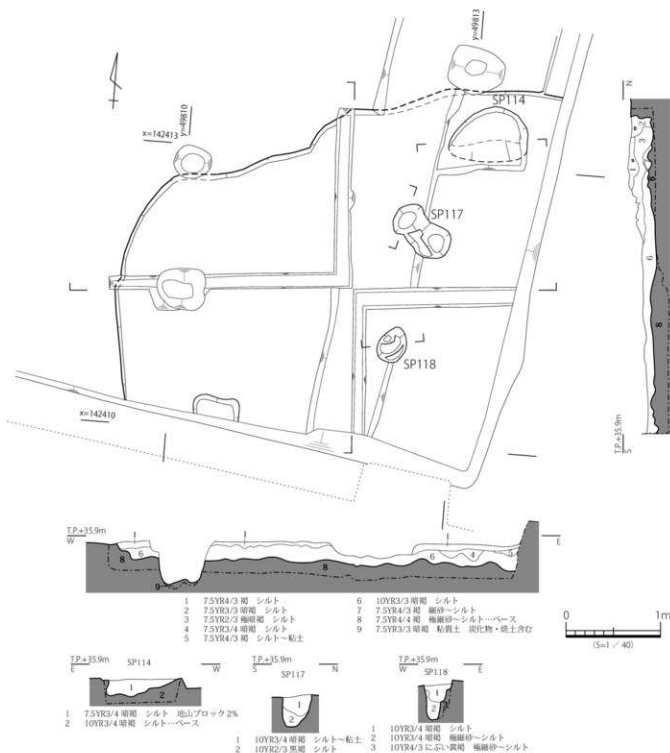


図 111 10- 竪穴 120 平・断面図

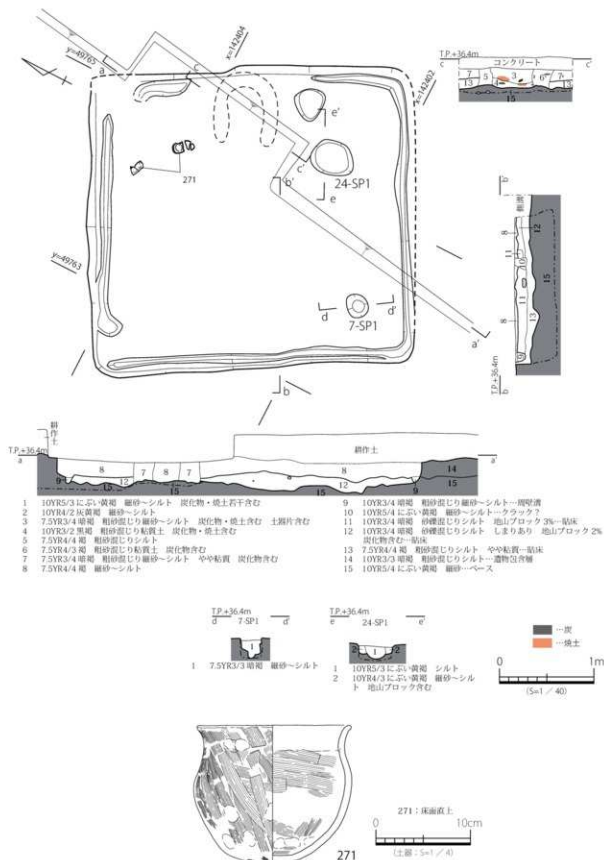


图 112 7·24- 竖穴 3 平·断面图及び出土遺物実測図

42-Ⅰ 竪穴 1(図 113)

第 42 調査区の南側に検出した竪穴建物の可能性がある遺構である。調査区外に広がるため、全体の形状は不明である。主軸方位 N-12°-W、検出面の標高は 36.4m である。規模は、長辺約 2.0m 以上、短辺約 0.7m 以上、深さ 0.20m を測る。

埋土は暗褐シルト質極細砂で、貼床は地山ブロック土を含むにぶい黄褐シルト混じり細砂である。

遺物は須恵器杯身片・杯蓋片が出土したが、いずれも細片のため、時期は不明である。

42-Ⅱ 竪穴 3(図 113)

第 42 調査区の北側に検出した竪穴建物の可能性がある遺構である。調査区外に広がる。主軸方位 N-10°-W、検出面の標高は 36.3m である。平面形状は不明で、規模は、長辺約 1.5m 以上、短辺約 1.2m 以上、深さ約 0.30m を測る。

埋土は褐シルト混じり細砂、貼床がにぶい黄褐シルト混じり細砂である。

遺物は須恵器片、土師器片が出土したが、いずれも細片のため、時期は不明である。

43-Ⅰ 竪穴 7(図 113)

第 43 調査区の中央に検出した竪穴建物の可能性がある遺構である。調査区外に広がるため、全体の形状は不明である。主軸方位 N-20°-W、検出面の標高は 36.3m である。規模は、長辺約 1.2m 以上、短辺約 0.8m 以上、深さ約 0.30m を測る。

埋土は黒褐粗砂混じりシルト、貼床がにぶい黄褐細砂～シルトである。

遺物は土師器片が出土したが、細片のため時期は不明である。

5-Ⅰ 竪穴 45(図 113)

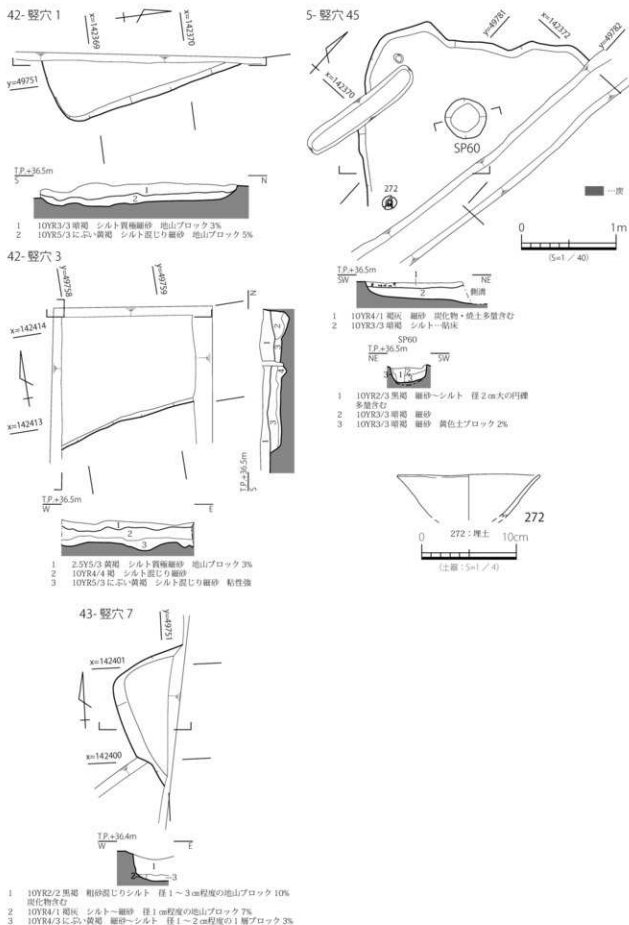
第 5 調査区南側に検出した竪穴建物の可能性がある遺構である。第 22 調査区では確認できなかった。主軸方位 N-42°-W、検出面の標高は 36.4m である。検出プランは歪であるが、平面形状は方形を呈すると想定できる。規模は、長辺約 2.3m 以上、短辺約 2.0m 以上、最深部で約 0.2m を測る。

埋土は炭化物・焼土多量含む褐灰細砂、貼床は暗褐シルトである。遺物は土師器高杯(272)が出土した。

S P 60 は支柱穴と考えられる。平面形状は円形

を呈し、直径約 0.38 m、深さ約 0.17m を測る。断面形状は逆台形である。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が黒褐細砂～シルト、掘方が暗褐細砂である。

出土遺物の年代から、古墳時代中期後半頃と判断できる。



(2) 掘立柱建物

5・23-掘立2(図114)

第5・23調査区中央やや北寄りで検出した2間×2間の掘立柱建物である。5-SD11に切られる。23-SP12・14・15、5-SP22・18・50の6基で構成する。主軸方位はN-19°-W、検出面の標高は36.2~36.1mである。梁行総長約4.2m、桁行総長約4.7m、床面積は約19.7㎡を測る。柱穴の

芯間距離は約0.75~2.2mである。

23-SP12は円形を呈し、直径約0.6m、深さ約0.2mを測る。断面形状は逆台形に柱痕の段落ちである。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が黒褐シルト、掘方が地山ブロック土を含む黒褐シルトと暗褐シルトである。23-SP14は楕円形を呈し、長径約0.5m、短径約0.4m、深さ約0.18mを測る。断面形状は逆台形である。埋土は上層が暗褐シルト、

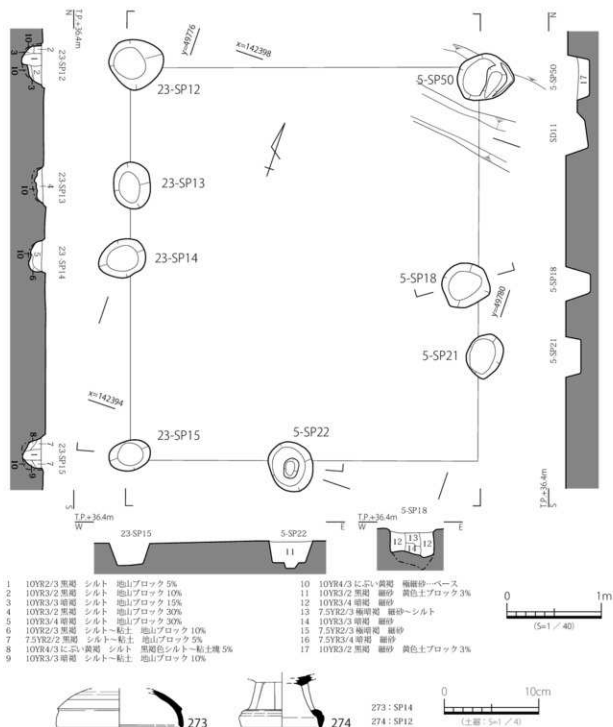


図114 5・23-掘立2 平・断面図及び出土遺物実測図

下層が黒褐シルト～粘土である。23- S P 15は楕円形を呈し、長径約0.45 m、短径約0.32 m、深さ約0.23 mを測る。断面形状は逆台形に柱痕の段落ちである。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が黒褐シルト、掘方が黒褐シルト～粘土とにぶい黄褐シルトである。5- S P 22は円形を呈し、直径約0.56 m、深さ約0.3 mを測る。断面形状は逆台形に柱痕の段落ちである。埋土は黒褐細砂である。5- S P 18は円形を呈し、直径約0.5 m、深さ約0.26 mを測る。断面形状は逆台形である。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が極暗褐細砂～シルトと暗褐細砂、掘方が暗褐細砂である。5- S P 50は円形を呈し、直径約0.6 m、深さ約0.24 mを測る。断面形状は逆台形である。埋土は黒褐細砂である。

遺物は23- S P 14から須恵器杯蓋(273)、23- S P 12から須恵器高杯(274)が出土した。図示した遺物の他に、23- S P 15から須恵器高杯片・壺片、5- S P 18から須恵器杯身片が出土した。

出土遺物からMT 15～TK 10型式併行期と判断できる。

5・22-掘立1(図115)

第5・22・4調査区の北側で検出した2間×3間の総柱建物である。22- S P 4・9・11・14・15、5- S P 5～8・10・13、4- S P 88の12基で構成する。主軸方位はN-75°-E、検出面の標高は36.1mである。梁行総長約4.1m、桁行総長約4.5m、床面積は約18.5㎡を測る。芯間距離は約2.1～1.5mである。

5- S P 7は隅丸方形を呈し、長辺約0.64 m、短辺約0.5 m、深さ約0.3 mを測る。断面形状は逆台形である。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が暗褐シルト、掘方が褐細砂～シルトと黒褐シルトである。5- S P 10は不整形な形状を呈し、長辺約0.78 m、短辺約0.58 m、深さ約0.38 mを測る。断面形状は逆台形に柱痕の段落ちである。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が暗褐シルト、掘方が黒褐シルトと暗褐細砂～シルトである。5- S P 13は隅丸方形を呈し、長辺約0.7 m、短辺約0.58 m、深さ約0.28 mを測る。断面形状は不整形である。埋土は暗褐シルトと黒褐シルト、褐細砂である。抜取の可能性が考えられる。5- S P 6は隅丸方形を呈し、長辺約0.6 m、短辺約0.52 m、深さ約0.3 mを測る。断面形状は逆台形である。柱痕が確認でき、埋土は柱

痕が暗褐シルト、掘方が褐細砂～シルトと黒褐シルトである。5- S P 8は一部を攪乱に切られるため、全体の形状は不明であるが、やや歪な円形を呈すると考えられる。直径約0.8 m、深さ約0.3 mを測る。断面形状は逆台形に柱痕の段落ちである。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が暗褐シルト、掘方が黒褐シルトと暗褐細砂である。22- S P 14は一部を攪乱に切られるため、全体の形状は不明であるが、楕円形を呈すると考えられる。長径約0.86 m、短径約0.56 m、深さ約0.3 mを測る。断面形状はU字形である。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が黒褐シルト、掘方が地山ブロック土を含む黒褐シルトと暗褐シルトである。5- S P 5は隅丸長方形を呈し、長辺約0.75 m、短辺約0.58 m、深さ約0.37 mを測る。断面形状は逆台形に柱痕の段落ちである。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が暗褐シルト、掘方が黒褐シルトである。22- S P 9は隅丸長方形を呈し、長辺約0.7 m、短辺約0.54 m、深さ約0.4 mを測る。断面形状は逆台形に柱痕の段落ちである。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が暗褐シルト、掘方が暗褐シルトと褐シルトである。22- S P 15は隅丸方形を呈し、長辺約0.64 m、短辺約0.62 m、深さ約0.33 mを測る。断面形状はU字形である。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が黒褐シルト、掘方が暗褐シルトと黒褐シルトである。22- S P 4は隅丸方形を呈し、長辺約0.6 m、短辺約0.54 m、深さ約0.32 mを測る。断面形状はU字形である。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が黒褐細砂～シルトと灰黄褐シルト、掘方が暗褐シルトと褐シルトである。22- S P 11は攪乱に切られるため、形状は不明である。直径約0.66 m、深さ約0.33 mを測る。断面形状は逆台形である。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が黒褐シルトと灰黄褐シルト、にぶい黄褐細砂～シルトである。掘方が暗褐シルトと褐シルトである。4- S P 88は不整形な形状を呈する。直径約0.64 m、深さ約0.6 mを測る。断面形状は逆台形である。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が黒褐細砂、掘方が黒褐シルトと暗褐シルト、黒褐細砂～シルトである。

遺物はS P 4から須恵器片、土師器片が出土している。

出土遺物が細片であるため、詳細な時期は不明であるが、主軸方位から古墳時代後期と想定できる。

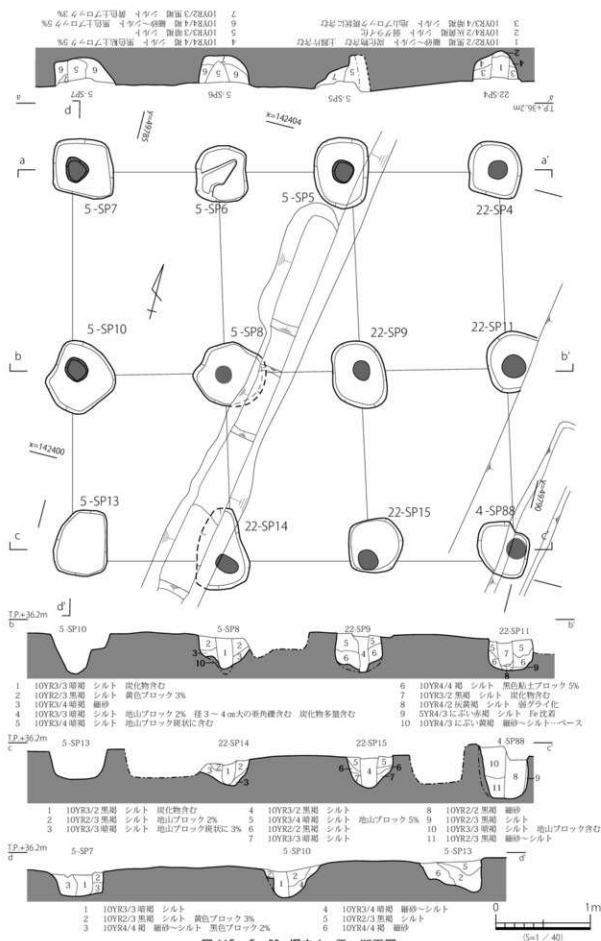


図 115 5・22-掘立 I 平・断面図

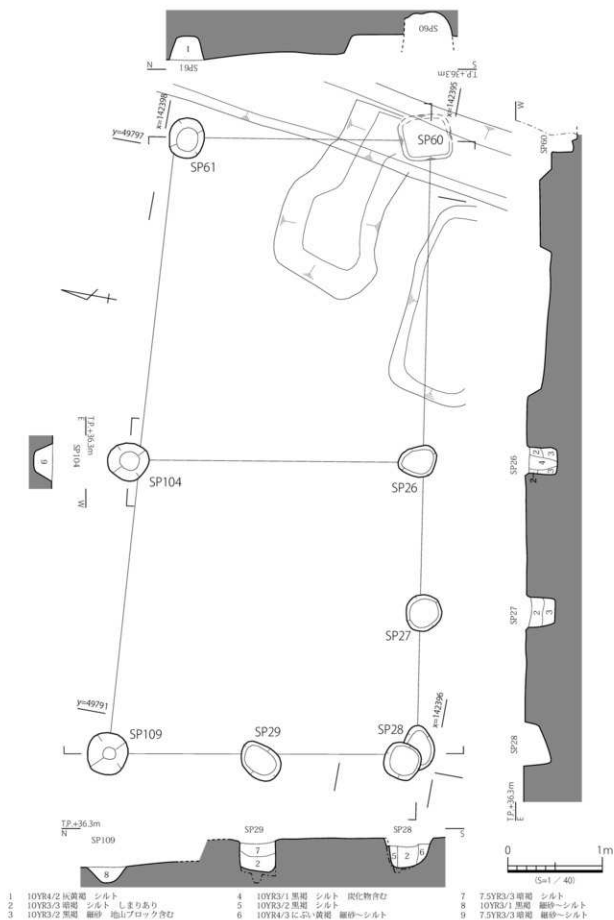


図 116 4-掘立2 平・断面図

4-1 掘立 2 (図 116)

第 4 調査区の中央やや北寄りで検出した 2 間×2 間の掘立柱建物である。S P 26・27・28・29・61・104・109 の 7 基で構成する。主軸方位は N-81°-E、検出面の標高は 36.2m である。梁行総長約 3.80m、桁行総長約 6.45m、床面積は約 24.5 m²を測る。芯間距離は約 1.6～3.4m である。

S P 61 は円形を呈し、直径約 0.4 m、深さ約 0.26 m を測る。断面形状は逆台形である。埋土は灰黄褐シルトである。S P 104 は円形を呈し、直径約 0.45 m、深さ約 0.2 m を測る。断面形状は逆台形である。埋土は暗褐細砂～シルトである。S P 109 は円形を呈し、直径約 0.45 m、深さ約 0.08 m を測る。断面形状は U 字形である。埋土は黒褐細砂～シルトである。S P 29 は楕円形を呈し、長径約 0.48 m、短径約 0.36 m、深さ約 0.34 m を測る。断面形状は筒型である。埋土は暗褐シルトである。S P 28 は円形を呈し、直径約 0.4 m、深さ約 0.3 m を測る。断面形状は U 字形である。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が暗褐シルト、掘方が黒褐シルトとにぶい黄褐細砂～シルトである。S P 27 は円形を呈し、直径約 0.4 m、深さ約 0.3 m を測る。断面形状は逆台形である。埋土は上層が暗褐シルト、下層が黒褐細砂である。S P 26 はやや歪な円形を呈し、直径約 0.4 m、深さ約 0.33 m を測る。断面形状は筒型である。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が黒褐シルト、掘方が暗褐シルトと黒褐細砂である。

遺物は出土していないため、時期は不明である。

4-1 掘立 3 (図 117)

第 4 調査区の北側で検出した 2 間×2 間の側柱建物である。4-1 掘立 1 と 4-S K 25 に切られる。S P 60・82・89・101・103・119・134 の 7 基で構成する。主軸方位は N-19°-W、検出面の標高は 36.0m である。梁行総長約 4.00m、桁行総長約 4.20m、床面積は約 16.8m²を占める。芯間距離は約 2.2～2.0m である。

S P 89 は S P 35 に切られるため、全体の形状は不明であるが、円形を呈すると想定できる。直径約 0.9 m、深さ約 0.6 m を測る。断面形状は逆台形に段落ちである。埋土は暗褐シルトと黒褐シルト、にぶい黄褐細砂～シルトである。S P 134 は円形を呈し、直径約 0.7 m、深さ約 0.18 m を測る。断面形状は逆台形に柱痕の段落ちである。柱痕が確認

でき、埋土は柱痕が黒褐シルト、掘方が黒褐細砂～シルトと暗褐シルト、暗褐細砂～シルトである。S P 103 は楕円形を呈し、長径約 0.84 m、短径約 0.66 m、深さ約 0.3 m を測る。断面形状は逆台形に段落ちである。埋土は暗褐細砂～シルトと黒褐細砂～シルトである。S P 119 は円形を呈し、直径約 0.9 m、深さ約 0.28 m を測る。断面形状は逆台形に柱痕の段落ちである。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が暗褐細砂～シルト、掘方が暗褐粗砂混じりシルトと暗褐細砂～シルトである。S P 101 は円形を呈し、直径約 0.7 m、深さ約 0.33 m を測る。断面形状は逆台形に柱痕の段落ちである。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が黒褐細砂～シルト、掘方が暗褐シルトと黒褐シルトである。S P 60 は攪乱に切られるため、全体の形状は不明であるが、隅丸方形を呈すると考えられる。長辺約 0.5 m、深さ約 0.22 m を測る。断面形状は逆台形である。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が暗褐細砂～極細砂、掘方が黒褐シルトと黒褐細砂～シルト、黒シルトである。

遺物が出土していないため、詳細な時期は不明であるが、主軸方位から、古墳時代後期前半と想定できる。

4-1 掘立 4 (図 118)

第 4 調査区の北側で検出した 2×2 間の側柱建物である。4-1 掘立 1 に切られる。S P 49・57・84・85・86・108・112・116 の 8 基で構成する。主軸方位は N-11°-W、検出面の標高は 36.0m である。梁行総長約 3.90m、桁行総長約 4.00m、床面積は約 15.6m²を測る。芯間距離は約 2.0～1.9m である。

S P 85 は楕円形を呈し、長径約 0.8 m、短径約 0.66 m、深さ約 0.23 m を測る。断面形状は逆台形である。埋土は上層が暗オリーブ褐細砂～シルト、下層がオリーブ褐シルトである。S P 84 は楕円形を呈し、長径約 0.68 m、短径約 0.6 m、深さ約 0.3 m を測る。断面形状は不整形である。埋土は上層が黒褐シルト、下層が暗褐細砂である。S P 112 は楕円形を呈し、長径約 0.68 m、短径約 0.56 m、深さ約 0.22 m を測る。断面形状は不整形である。埋土は上層がにぶい黄褐細砂～シルト、下層が

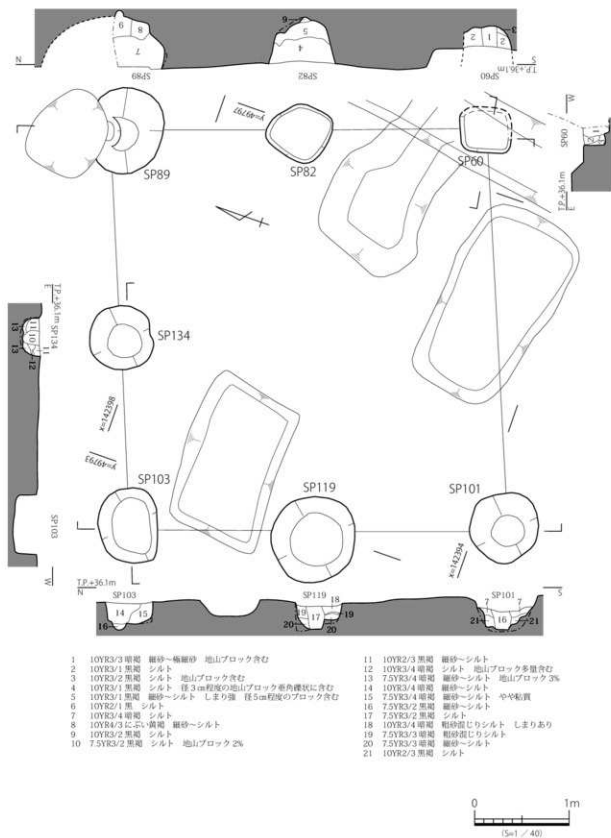


図 117 4-掘立 3 平・断面図

暗褐色細砂～シルトである。S P 108 は不整形な形状を呈し、直径約 0.6 m、深さ約 0.3 m を測る。断面形状は不整形である。埋土は上層が暗褐色細砂、下層が暗褐色細砂～シルトである。S P 86 は不整形な形状を呈し、直径約 0.55 m、深さ約 0.27 m を測る。断面形状は逆台形である。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が暗褐色シルト、掘方が地山ブロック土を含む暗褐色シルトとにぶい黄褐色シルト、黒褐色細砂～シルトである。S P 49 は不整形な形状を呈し、長径約 0.77 m、短径約 0.66 m、深さ約 0.3 m を測る。埋土は暗褐色細砂～シルトである。S P 57 は楕円形を呈し、長径約 0.64 m、短径約 0.4 m、深さ約 0.2 m を測る。断面形状は不整形である。埋土は黒褐色シルトである。S P 116 は楕円形を呈し、長径約 0.7 m、短径約 0.54 m、深さ約 0.06 m を測る。断面形状は逆台形である。埋土は褐色シルトである。

遺物が出土していないため、詳細な時期は不明であるが、主軸方位から古墳時代後期前半と想定できる。

6-掘立 1 (図 119)

第 6 調査区中央のやや南寄りに検出した 2 間×2 間の掘立柱建物である。S P 30～34 の 5 基で構成する。S P 33 と S P 34 が 6-S K 18 に切られる。南・東辺は礫層が広がり、柱穴を検出できなかった。主軸方位は N-73°-E、検出面の標高は 36.4 m である。梁行総長約 3.8 m、桁行総長約 3.9 m、床面積は約 14.8 m² を測る。芯間距離は約 2.1～1.9 m である。

S P 30 は不整形な形状を呈し、長辺約 0.9 m、短辺約 0.8 m、深さ約 0.17 m を測る。断面形状は不整形である。埋土は上層が暗褐色シルト、下層が褐色シルトである。S P 31 は隅丸長方形を呈し、長辺約 0.78 m、短辺約 0.74 m、深さ約 0.2 m を測る。断面形状は逆台形である。埋土は上層が暗褐色シルト、中層がにぶい黄褐色シルト、下層が暗褐色シルトと極暗褐色シルトである。S P 32 は隅丸長方形を呈し、長辺約 0.77 m、短辺約 0.64 m、深さ約 0.15 m を測る。断面形状は逆台形に段落ちである。埋土は上層が褐色シルト、下層が灰褐色シルトである。S P 33 は S K 18 に切られるため、全体の形状は不明である。直径約 0.74 m、深さ約 0.11 m を測る。断面形状は逆台形である。埋土は褐色シルトと暗褐色シルトである。S P 34 は S K 18 に切られるため、全体の形状は

不明である。直径約 0.8 m、深さ約 0.12 m を測る。断面形状は不整形である。埋土は暗褐色シルトである。

遺物は S P 33 から土師器破片が出土した。

遺物は細片のため詳細な時期は不明であるが、主軸方位から古墳時代後期前半と想定できる。

8-掘立 3 (図 120)

第 8 調査区の中央やや西寄りに検出した 2 間×2 間の総柱建物である。S P 20・21・24・49・51・52・54・55・70 の 9 基で構成する。主軸方位は N-43°-E、検出面の標高は 36.4 m である。梁行総長約 3.44 m、桁行総長約 3.6 m、床面積は約 12.4 m² を測る。芯間距離は 1.8～1.6 m である。

S P 52 は楕円形を呈し、長軸約 0.48 m、短軸約 0.4 m、深さ約 0.38 m を測る。断面形状は逆台形である。埋土は上層が暗褐色シルト、下層が褐色細砂～シルトである。S P 55 は隅丸長方形を呈し、長辺約 0.44 m、短辺約 0.33 m、深さ約 0.32 m を測る。断面形状は U 字形に段落ちである。埋土は灰黄褐色シルトである。S P 54 は円形を呈し、直径約 0.5 m、深さ約 0.42 m を測る。断面形状は U 字形に段落ちである。埋土は上層が灰黄褐色シルト、中層がにぶい黄褐色シルトと黒褐色シルト、下層がにぶい黄褐色シルトである。S P 20 は円形を呈し、直径約 0.4 m、深さ約 0.32 m を測る。断面形状は U 字形に段落ちである。S P 51 は楕円形を呈し、長軸約 0.4 m、短軸約 0.34 m、深さ約 0.08 m を測る。断面形状は不整形である。埋土は褐色シルトと暗褐色シルトである。S P 49 は楕円形を呈し、長径約 0.4 m、短径約 0.34 m、深さ約 0.4 m を測る。断面形状は U 字形である。埋土は暗褐色シルトと褐色シルトである。S P 21 は不整形な形状を呈する。深さ約 0.14 m を測る。断面形状は逆台形である。埋土は上層が褐色シルト、下層が暗褐色シルトである。S P 70 は不整形な形状を呈する。長径約 0.46 m、短径約 0.28 m、深さ約 0.2 m を測る。断面形状は逆台形に段落ちである。埋土は暗褐色シルトである。S P 24 は円形を呈し、直径約 0.53 m、深さ約 0.37 m を測る。断面形状は逆台形に柱痕の段落ちである。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が暗褐色シルト、掘方が黒褐色シルトと暗褐色シルトである。

遺物は S P 52 から土師器片が出土している。細片のため詳細な時期は不明であるが、主軸方位から古墳時代後期前半と想定できる。

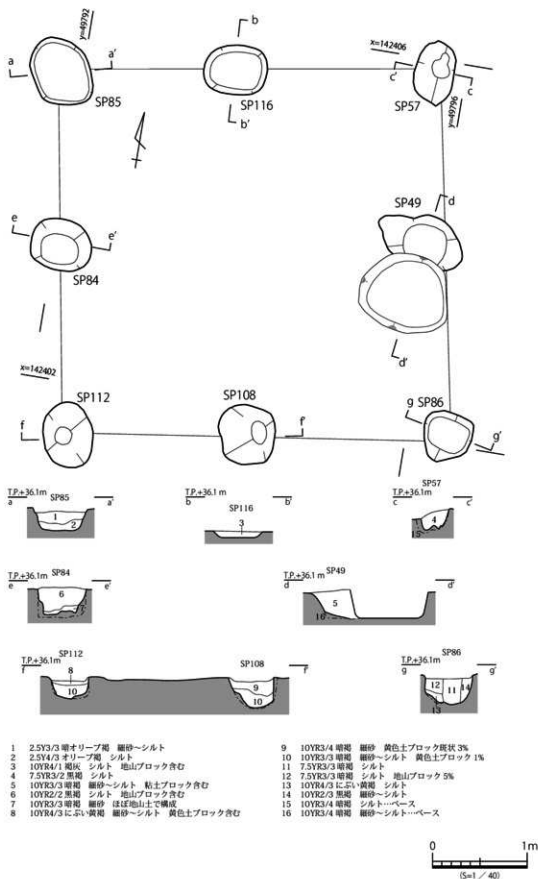


図 118 4- 掘立 4 平・断面図

7・42-掘立 I (図 121)

第 7・42 調査区の中央で検出した 3 間×2 間以上の掘立柱建物である。調査区外に延びるため、全体の規模は不明である。7・S P 24～27、42・S P 28・30 の 6 基で構成する。主軸方位は N-35°-W、検出面の標高は 36.45m である。検出した梁行総長約 1.80m、桁行総長約 4.30m、床面積は約 7.74㎡を測る。芯芯間距離は約 1.8～1.1m である。

42・S P 28 は円形を呈し、直径約 0.5 m、深さ約 0.26 m を測る。断面形状は方形である。埋土は上層が暗褐シルト混じり極細砂とにぶい黄褐シルト混じり極細砂、褐シルト質極細砂、下層がにぶい黄褐シルト質極細砂である。S P 7-27 は円形を呈し、直径約 0.58 m、深さ約 0.1 m を測る。断面形状は逆台形である。埋土はにぶい黄褐シルトと暗褐シルト、灰黄褐シルトである。7・S P 26 は円形を呈し、直径約 0.58 m、深さ約 0.14 m を測る。断面形状は逆台形である。埋土は黒褐シルトである。7・S P 25 は円形を呈し、直径約 0.6 m、深さ約 0.1 m を測る。断面形状は逆台形である。埋土は灰黄褐シルトである。7・S P 24 は円形を呈し、直径約 0.6 m、深さ約 0.1 m を測る。断面形状は逆台形である。埋土は暗褐細砂～シルトである。42・S P 30 は調査区外へと展開するため、全体の形状は不明である。直径約 0.52 m、深さ約 0.28 m を測る。断面形状は方形である。埋土は上層が褐シルト質極細砂と褐シルト混じり極細砂、中層がにぶい黄褐シルト混じり細砂、下層がにぶい黄褐粘土質シルトである。

遺物は S P 27 から須恵器短頸瓶 (275) が出土した。出土遺物の年代から 6 世紀末～7 世紀初頭頃と判断できる。

23-掘立 I (図 122)

第 23 調査区の中央で検出した 1 間×2 間の掘立柱建物である。S P 17～22 の 6 基で構成する。主軸方位は N-15°-E、検出面の標高は 36.2m である。梁行総長約 1.5m、桁行総長約 3.0m、床面積は約 4.5㎡を測る。芯芯間距離は約 1.5～1.4m である。

S P 20 は円形を呈し、直径約 0.5 m、深さ約 0.22 m を測る。断面形状は逆台形である。埋土はオリブ褐細砂～シルトである。S P 19 はやや歪な楕円形を呈し、長軸約 0.5 m、短軸約 0.34 m、深さ約 0.14 m を測る。断面形状は不整形である。

埋土は上層が黒褐シルト、下層が暗オリブ褐細砂～シルトである。S P 18 は楕円形を呈し、長径約 0.52 m、短径約 0.34 m、深さ約 0.12 m を測る。断面形状は逆台形である。埋土はオリブ褐シルトである。S P 17 は楕円形を呈し、長径約 0.66 m、短径約 0.5 m、深さ約 0.23 m を測る。断面形状は逆台形である。埋土は上層が暗オリブ褐シルト、下層が暗灰黄細砂～シルトである。S P 22 は楕円形を呈し、長径約 0.62 m、短軸約 0.39 m、深さ約 0.16 m を測る。断面形状は逆台形である。埋土はオリブ褐シルトである。S P 21 は不整形な形状を呈する。長径約 0.57 m、短径約 0.52 m、深さ約 0.18 m を測る。断面形状は U 字形である。

遺物は S P 23 から須恵器片、土師器片が出土しているが、細片のため詳細な時期は不明であるが、主軸方位から 6 世紀末～7 世紀初頭頃と想定できる。

7-掘立 2 (図 123)

第 7 調査区の中央で検出した 2 間×2 間の総柱建物である。S P 16～23・49 の 9 基で構成する。主軸方位は N-1°-E、検出面の標高は 36.4m である。梁行総長約 3.74m、桁行総長約 3.74m、床面積は約 14.0㎡を測る。芯芯間距離は約 1.9～1.8m である。

S P 49 は隅丸方形を呈し、長辺約 0.4 m、深さ約 0.2 m を測る。断面形状は逆台形である。埋土は灰黄褐シルトである。S P 22 は円形を呈し、直径約 0.36 m、深さ約 0.18 m を測る。断面形状は不整形である。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が黒褐シルト、掘方が灰黄褐シルトである。S P 23 は隅丸方形を呈し、長辺約 0.42 m、短辺約 0.37 m、深さ約 0.07 m を測る。断面形状は楕形を呈する。埋土はにぶい黄褐シルトである。S P 19 は隅丸方形を呈し、長辺約 0.4 m、短辺約 0.35 m、深さ約 0.17 m を測る。断面形状は逆台形である。埋土は上層が灰黄褐シルト、下層がにぶい黄褐シルトである。S P 20 は隅丸方形を呈し、長辺約 0.43 m、短辺約 0.38 m、深さ約 0.2 m を測る。断面形状は U 字形である。埋土は上層が灰黄褐シルト、下層が黒褐シルトである。S P 21 はやや歪な円形を呈し、直径約 0.4 m、深さ約 0.15 m を測る。断面形状は逆台形である。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が暗褐シルト、掘方が褐シルトである。SP16 は隅丸

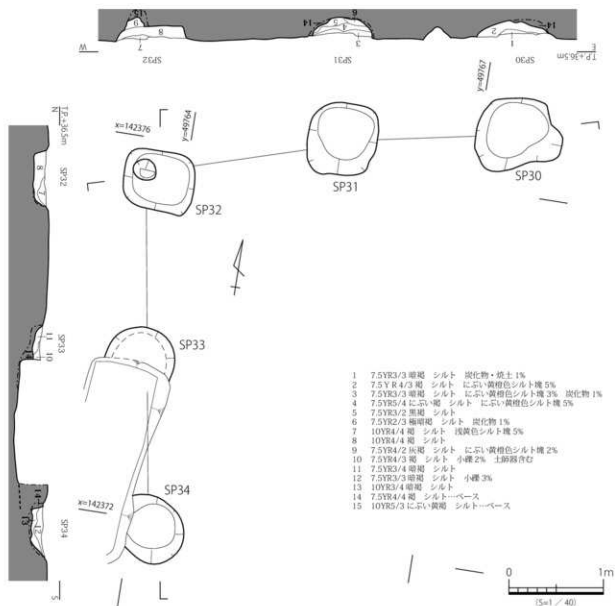
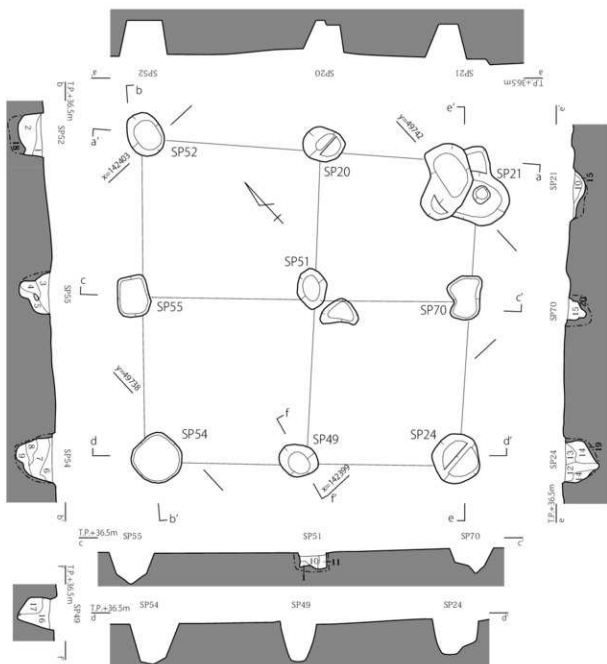


図 119 6-掘立 1 平・断面図



- | | | | |
|----|--------------------------------|----|----------------------------|
| 1 | 7.5YR3/3 暗褐色 シルト | 11 | 7.5YR4/4 暗褐色 シルト |
| 2 | 7.5YR4/3 暗褐色 シルト | 12 | 7.5YR3/3 暗褐色 シルト 地山ブロック 2% |
| 3 | 10YR4/2 灰黄褐色 シルト に赤・黄褐色シルト混 2% | 13 | 7.5YR3/2 暗褐色 シルト |
| 4 | 10YR4/2 灰黄褐色 シルト | 14 | 10YR3/3 暗褐色 シルト 地山ブロック 5% |
| 5 | 10YR3/2 灰黄褐色 シルト 中粒 1% | 15 | 7.5YR3/4 暗褐色 シルト |
| 6 | 10YR4/2 灰黄褐色 シルト に赤・黄褐色シルト混 3% | 16 | 10YR3/3 暗褐色 シルト |
| 7 | 10YR4/3 に赤・黄褐色 シルト 黒褐色シルト混 3% | 17 | 10YR4/4 暗褐色 シルト |
| 8 | 10YR3/2 暗褐色 シルト | 18 | 7.5YR3/3 暗褐色 シルト…ベース |
| 9 | 10YR4/3 に赤・黄褐色 シルト | 19 | 10YR5/6 黄褐色 シルト…ベース |
| 10 | 7.5YR4/3 暗褐色 シルト | 20 | 10YR3/4 暗褐色 シルト…ベース |



図 120 8-掘立 3 平・断面図

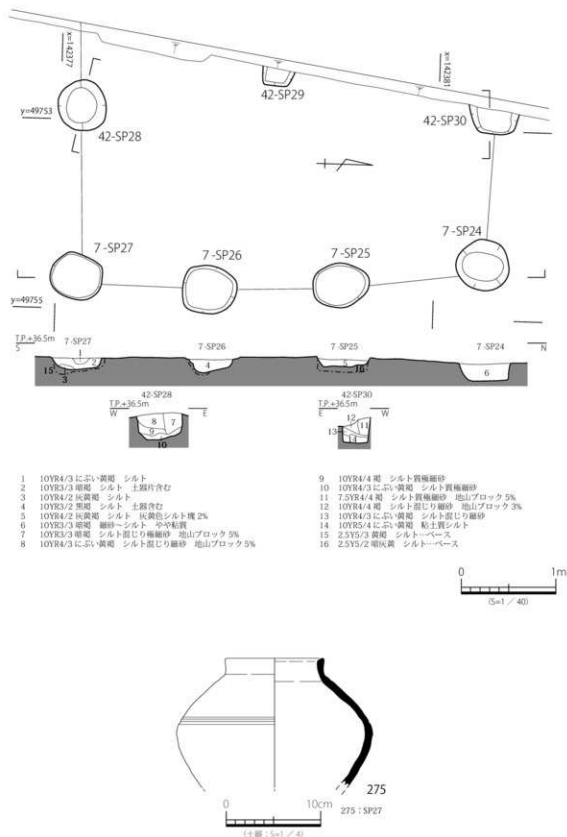


図 121 7・42-掘立 1 平・断面図及び出土遺物実測図

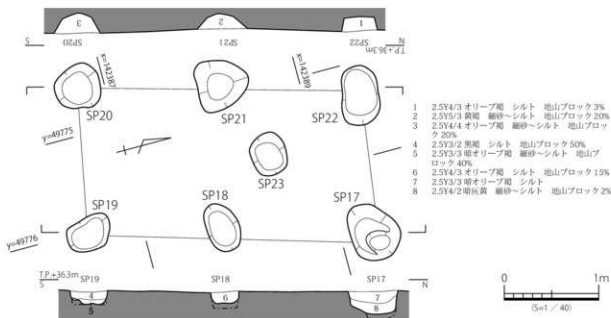


図 122 23-掘立 I 平・断面図

方形を呈し、長辺約 0.44 m、深さ約 0.17 m を測る。断面形状は逆台形に柱痕の段落ちである。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が灰黄褐シルト、掘方が地山ブロック土をやや多く含む灰黄褐シルトである。S P 17 は円形を呈し、直径約 0.37 m、深さ約 0.23 m を測る。断面形状は U 字形である。埋土は暗褐シルトである。S P 18 はやや歪な円形を呈し、直径約 0.6 m、深さ約 0.25 m を測る。断面形状は U 字形である。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が暗褐シルト、掘方が褐極細砂～シルトと黒褐シルト、黒褐シルト～粘土、暗褐シルトである。

遺物は S P 17・25・26 から土師器片が出土している。細片のため詳細な時期は不明であるが、主軸方位から 6 世紀末～7 世紀初頭頃と想定できる。

10-掘立 2 (図 124)

第 10 調査区の中央北側で検出した 2 間×2 間の総柱建物である。S P 17・19・35・36・38・39・315 の 7 基で構成する。主軸方位は N-29°-W、検出面の標高は 36.1～36.0m である。梁行総長約 3.4m、桁行総長約 4.0m、床面積は約 13.6 m² を測る。芯間距離は約 2.0～1.6m である。

S P 35 は擾乱に切られるため、全体の形状は不明であるが、円形を呈すると考えられる。直径約 0.4 m を測る。S P 17 は不整形で、長径約 0.77 m、

短径約 0.63 m、深さ約 0.2 m を測る。断面形状は楕円状である。埋土は灰褐細砂～シルトである。S P 19 は円形を呈し、直径約 0.54 m、深さ約 0.12 m を測る。断面形状は逆台形である。埋土は灰褐粗砂混じりシルトである。S P 36 はやや歪な円形を呈し、直径約 0.8 m、短径約 0.6 m、深さ約 0.26 m を測る。断面形状は不整形である。埋土は褐灰細砂～シルトである。S P 38 は円形を呈し、直径約 0.67 m、短径約 0.54 m、深さ約 0.13 m を測る。断面形状は逆台形である。埋土は上層が灰褐粗砂混じりシルト、下層が褐灰細砂～シルトである。S P 315 は調査区外へと広がるため、全体の形状は不明であるが、円形を呈すると考えられる。直径約 0.64 m、深さ約 0.34 m を測る。断面形状は逆台形である。埋土は上層が暗褐シルト、下層が黒褐シルト～粘土である。S P 39 はやや歪な円形を呈し、直径約 0.68 m、深さ約 0.28 m を測る。断面形状は歪な逆台形である。埋土は上層が灰褐細砂～シルト、下層が暗褐細砂～シルトである。

遺物は S P 17 から須恵器杯身 (276) が出土した。図示した遺物の他に、S P 315 から須恵器高杯片が出土した。出土遺物の年代から、古墳時代後期前半と判断できる。

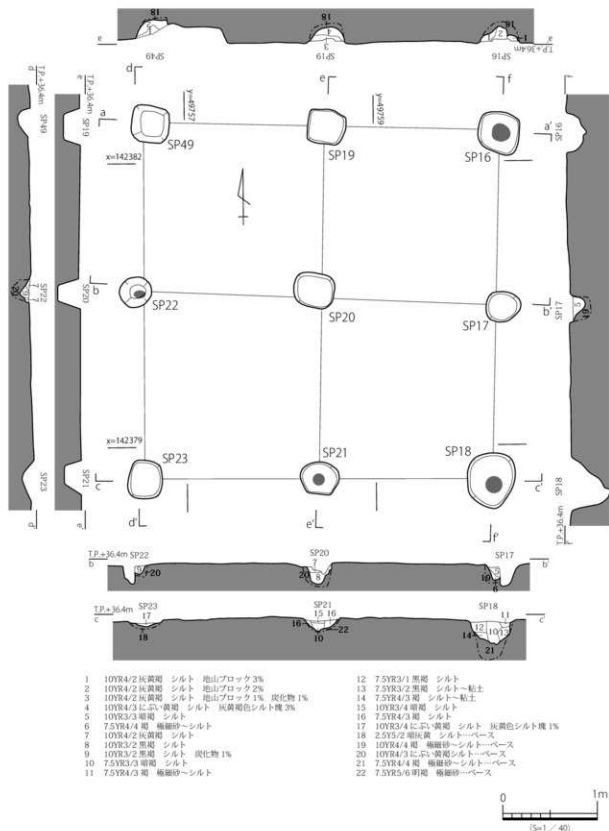


図 123 7-掘立 2 平・断面図

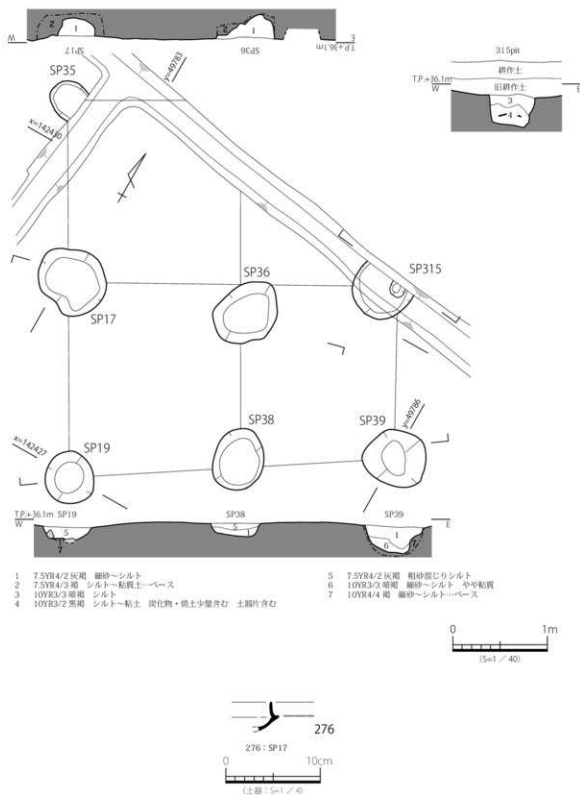


図 124 10-掘立 2 平・断面図及び出土遺物実測図

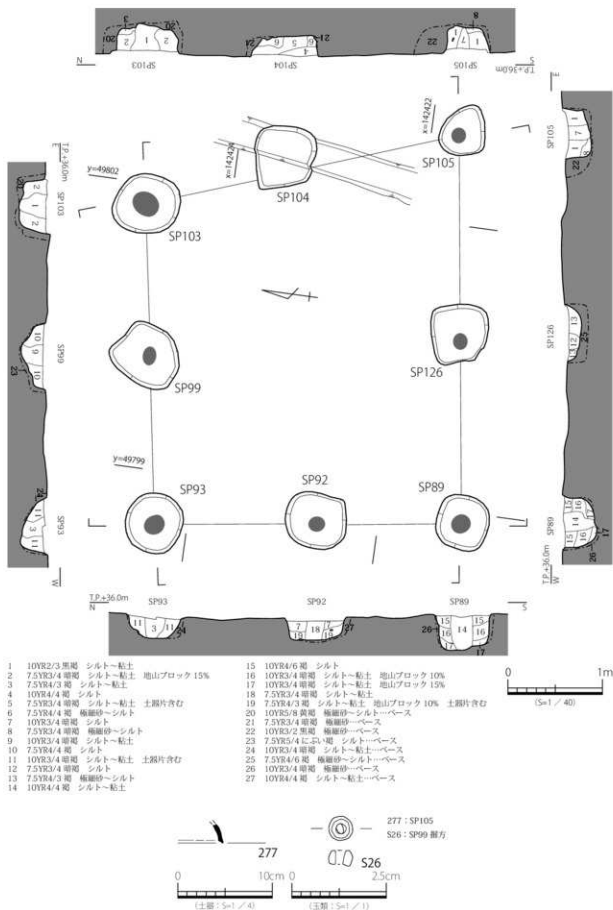


図 125 10-掘立 1 平・断面図及び出土遺物実測図

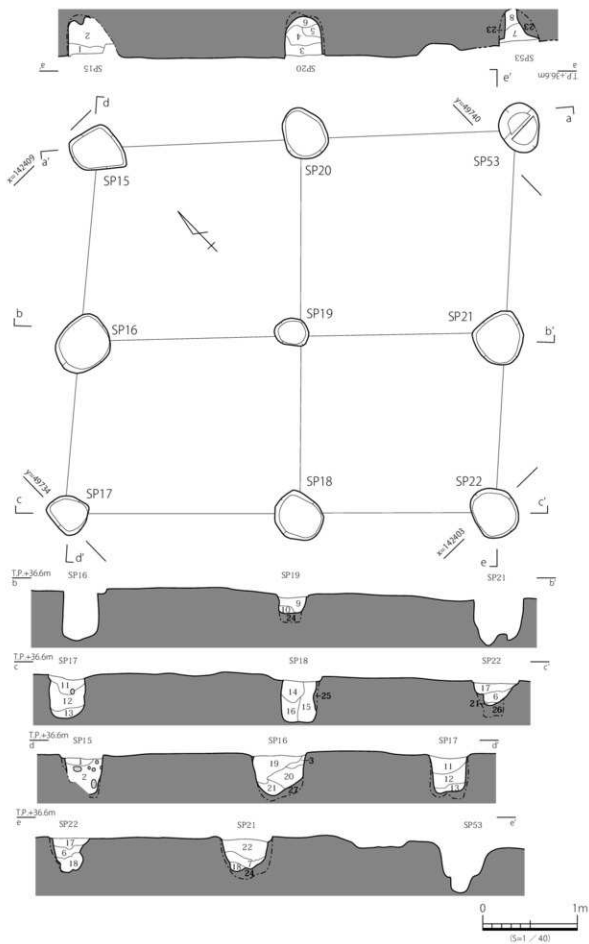


図 126 9-掘立 I 平・断面図

1	10YR3/3 暗褐 シルト 小礫 30%
2	10YR4/3 にぶい黄褐色 シルト 地山ブロック 3% 中礫 2%
3	10YR3/3 暗褐 シルト 小礫 3%
4	10YR4/4 暗褐 シルト 地山ブロック 2% 中礫 2%
5	10YR4/6 暗褐 シルト 10YR3/3 暗褐色シルト 3%
6	10YR4/3 にぶい黄褐色 シルト 地山ブロック 2%
7	7.5YR3/2 黒褐 シルト
8	7.5YR3/3 暗褐 シルト
9	10YR4/4 暗褐 シルト
10	7.5YR4/4 暗褐 シルト
11	10YR3/4 暗褐 シルト 細砂 にぶい黄褐色シルト 3%
12	10YR3/4 暗褐 シルト 10YR6/3 にぶい黄褐色シルト 1%
13	10YR2/3 にぶい黄褐色 シルト
14	10YR2/3 にぶい黄褐色 シルト にぶい黄褐色シルト 2% 小礫 2%
15	10YR3/3 暗褐 シルト 中礫 1%
16	10YR3/4 暗褐 シルト 小礫 3%
17	10YR3/4 暗褐 シルト
18	10YR3/3 暗褐 シルト
19	10YR3/3 暗褐 シルト にぶい黄褐色シルト 2% 小礫 2%
20	10YR4/3 にぶい黄褐色 シルト 暗褐色シルト 2% 中礫 1%
21	10YR4/4 暗褐 シルト 中礫 1%
22	7.5YR3/4 暗褐 シルト 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 3%
23	7.5YR3/4 暗褐 シルト…ベース
24	10YR3/4 にぶい黄褐色 シルト…ベース
25	10YR3/4 暗褐 シルト…ベース
26	10YR3/3 暗褐 シルト…ベース
27	10YR4/3 にぶい黄褐色 細砂 中礫 1%…ベース

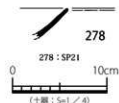


図 127 9-掘立 1 出土遺物実測図

10-掘立 1 (図 125)

第 10 調査区の中央で検出した 2 間×2 間の側柱建物である。S P 89・92・93・99・103・105・126 の 8 基で構成する。やや歪な平面形を呈する。主軸方位は N-82°-E、検出面の標高は 35.9m である。梁行総長約 3.2m、桁行総長約 4.1 ~ 3.4m、床面積は約 12m²を測る。芯芯間距離は梁行約 1.7 ~ 1.5m、桁行約 2.2 ~ 1.6m である。

S P 103 は円形を呈し、直径約 0.74 m、深さ約 0.3 m を測る。断面形状は逆台形である。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が黒褐シルト～粘土、掘方が暗褐シルト～粘土である。S P 99 は不整形な形状で、直径約 0.74 m、短径約 0.62 m、深さ約 0.25 m を測る。断面形状は逆台形である。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が暗褐シルト～粘土、掘方が褐シルトである。S P 93 は円形を呈し、直径約 0.62 m、深さ約 0.28 m を測る。断面形状は逆台形である。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が褐シルト～粘土、掘方が暗褐シルト～粘土である。S P 92 は隅丸方形を呈し、長辺約 0.68 m、短辺約 0.6 m、深さ約 0.26 m を測る。断面形状は逆台形である。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が暗褐シルト～粘土、掘方が暗褐シルトと褐シルト～粘土である。S P 89 は隅丸方形を呈

し、長辺約 0.6 m、短辺約 0.55 m、深さ約 0.4 m を測る。断面形状は逆台形である。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が褐シルト～粘土、掘方が褐シルトと暗褐シルト～粘土である。S P 126 はやや歪な隅丸方形を呈し、長辺約 0.6 m、深さ約 0.15 m を測る。断面形状は逆台形である。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が暗褐シルト、掘方が褐極細砂～シルトである。S P 105 はやや歪な楕円形を呈し、長径約 0.58 m、短径約 0.48 m、深さ約 0.29 m を測る。断面形状は逆台形である。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が暗褐シルト、掘方が黒褐シルト～粘土と暗褐極細砂～シルトである。S P 104 はやや歪な隅丸方形を呈し、長辺約 0.64 m、短辺約 0.6 m、深さ約 0.21 m を測る。断面形状は逆台形である。埋土は上層が褐シルト、下層が暗褐シルト～粘土と褐極細砂～シルトである。

遺物は S P 105 から須恵器杯蓋 (277)、S P 99 から白玉 (S26) が出土した。出土遺物から古墳時代後期頃と判断できる。

9-掘立 1 (図 126 ~ 127)

第 9 調査区の北東側で検出した 2 間×2 間の総柱建物である。S P 15 ~ 22・53 の 9 基の柱穴で構成する。主軸方位は N-45°-W、検出面の標高は 36.5m である。梁行総長約 4.10m、桁行総長約 4.50m、床面積は約 18.5m²を測る。芯芯間距離は 2.4 ~ 1.9m である。

S P 15 は不整形な形状を呈し、長径約 0.65 m、短径約 0.5 m、深さ約 0.4 m を測る。断面形状は不整形である。埋土は上層が暗褐シルト、下層がにぶい黄褐シルトである。S P 16 はやや歪な円形を呈し、直径約 0.6 m、深さ約 0.42 m を測る。断面形状は方形である。埋土は上層が暗褐シルトとにぶい黄褐シルト、下層が褐シルトである。S P 17 はやや歪な円形を呈し、直径約 0.4 m、深さ約 0.43 m を測る。断面形状は U 字形である。埋土は上層が暗褐シルト～細砂、中層が暗褐シルト、下層がにぶい黄褐シルトである。S P 20 はやや歪な円形を呈し、直径約 0.58 m、深さ約 0.4 m を測る。断面形状は U 字形である。埋土は上層が暗褐シルト、中層が褐シルト、下層がにぶい黄褐シルトである。S P 19 は円形を呈し、直径約 0.38 m、深さ約 0.2 m を測る。断面形状は逆台形である。埋土は褐シルトである。S P 18 は円形を呈し、直径約 0.55 m、

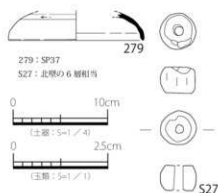


図 129 4-掘立 1 出土遺物実測図

深さ約 0.43 m を測る。断面形状は U 字形である。埋土はにぶい黄褐シルトと暗褐シルトである。S P 53 は円形を呈し、直径約 0.52 m、深さ約 0.38 m を測る。断面形状は逆台形に段落ちである。埋土は上層が黒褐シルト、下層が暗褐シルトである。S P 21 はやや歪な円形を呈し、直径約 0.53 m、深さ約 0.38 m を測る。断面形状は不整形である。埋土は上層が暗褐シルト、中層が黒褐シルト、下層が暗褐シルトである。S P 22 は円形を呈し、直径約 0.58 m、深さ約 0.38 m を測る。断面形状は不整形である。埋土は上層が暗褐シルト、中層がにぶい黄褐シルト、下層が褐シルトと暗褐シルトである。

遺物は S P 21 から須恵器杯 (278) が出土した。

4-掘立 1 (図 128～129)

第 4 調査区の北側で検出した 2 間×3 間の側柱建物である。S P 33～39・41・42・81 の 10 基で構成する。主軸方位は N-73.5°-W、検出面の標高は 36.1 m である。梁行総長約 3.8 m、桁行総長約 4.9 m、床面積は約 18.6 m² を測る。芯芯間距離は約 1.8～1.5 m である。

S P 33 は楕円形を呈し、長径約 0.87 m、短径約 0.63 m、深さ約 0.67 m を測る。断面形状は逆台形に柱痕の段落ちである。埋土は褐シルトとにぶい黄褐細砂～シルト、柱痕が暗褐シルトと褐細砂である。S P 34 は隅丸長方形を呈し、長辺約 0.87 m、短辺約 0.65 m、深さ約 0.35 m を測る。断面形状は逆台形に段落ちである。埋土は上層が褐シルト、下層がにぶい黄褐細砂～シルトである。S P 35 は隅丸長方形を呈し、長辺約 0.92 m、短辺約 0.78 m、深さ約 0.38 m を測る。断面形状は逆台形に段落ちである。埋土は上層が褐シルト、下層がにぶい黄褐細砂～シルトである。S P 36 は隅丸長方形を呈し、

長辺約 0.87 m、短辺約 0.82 m、深さ約 0.32 m を測る。断面形状は逆台形に段落ちである。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が暗褐粘質土、掘方がにぶい黄褐細砂～シルトと暗褐シルト、にぶい黄褐シルト、暗褐細砂～シルトである。S P 37 は円形を呈し、直径約 0.77 m、深さ約 0.53 m を測る。断面形状は逆台形に段落ちである。埋土は上層が灰黄褐シルト、中層が暗褐シルト、下層が暗褐細砂～シルトである。S P 38 は後世の削平を受けているため不整形な形状を呈する。長径約 0.87 m、短径約 0.6 m、深さ約 0.67 m を測る。断面形状は逆台形に段落ちである。埋土は暗褐シルトと黒褐シルト、暗褐細砂～シルト、褐細砂～シルトである。S P 39 は隅丸長方形を呈し、長辺約 0.85 m、短辺約 0.68 m、深さ約 0.38 m を測る。断面形状は逆台形である。埋土は上層が灰黄褐細砂～シルト、下層が灰褐細砂～シルトである。S P 81 は円形を呈し、直径約 0.95 m、深さ約 0.26 m を測る。断面形状は不整形である。埋土は上層が黒褐シルト、下層が暗褐細砂～シルトと灰黄褐粘質土である。S P 41 は不整形な形状を呈する。抜取と考えられる。長径約 1.42 m、短径約 0.45 m、深さ約 0.37 m を測る。断面形状は逆台形に段落ちである。埋土は灰黄褐細砂～微細砂とにぶい黄褐細砂～シルト、黒褐シルト～微細砂である。S P 42 は隅丸長方形を呈し、長辺約 0.74 m、短辺約 0.7 m、深さ約 0.34 m を測る。断面形状は不整形である。埋土は上層が灰黄褐微細砂～シルト、中層が灰黄褐細砂～シルト、下層がにぶい黄褐細砂～シルトと灰黄褐細砂～微細砂、黒褐シルト～微細砂である。

遺物は S P 37 から須恵器杯蓋 (279) が出土している。周辺の精査中にガラス玉 (S27) が出土した。図示した遺物の他に、すべての S P から須恵器杯身片・杯蓋片・高杯片等が出土した。主軸方位が他の掘立柱建物と異なっていることから、古墳時代後期以降と考えられる。

9-掘立 2 (図 130)

第 9 調査区の中央東側で検出した 2 間×3 間の側柱建物である。S P 27～35・60 の 10 基で構成する。主軸方位は N-85°-W、検出面の標高約 36.55 m である。梁行総長約 3.96 m、桁行総長約 5.22 m、床面積は約 20.7 m² を測る。芯芯間距離は約 2.2～1.6 m である。

S P 31 は円形を呈し、直径約 0.35 m、深さ約 0.2 m を測る。断面形状は逆台形に柱痕の段落ちである。柱痕が確認でき、埋土は柱痕がにぶい褐シルト、掘方がにぶい褐シルトである。S P 32 は不整形な形状で、長径約 0.3 m、短径約 0.25 m、深さ約 0.1 m を測る。断面形状は椀状である。埋土はにぶい黄褐シルトである。S P 33 はやや歪な楕円形を呈し、長径約 0.33 m、短径約 0.28 m、深さ約 0.17 m を測る。断面形状は椀状である。埋土は褐シルトである。S P 34 は円形を呈し、直径約 0.38 m、深さ約 0.16 m を測る。断面形状は椀状である。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が褐シルト、掘方がにぶい黄褐シルトである。S P 35 は円形を呈し、直径約 0.38 m、深さ約 0.18 m を測る。断面形状はやや歪な逆台形である。柱痕が確認でき、埋土は柱痕がにぶい黄褐シルト、掘方がにぶい黄褐シルトである。S P 27 は円形を呈し、直径約 0.45 m、深さ約 0.14 m を測る。断面形状は椀状である。埋土はにぶい黄褐シルトである。S P 28 は楕円形を呈し、長径約 0.55 m、短径約 0.36 m、深さ約 0.16 m を測る。断面形状は椀状である。埋土は褐シルトである。S P 29 はやや歪な円形を呈し、直径約 0.32 m、深さ約 0.22 m を測る。断面形状は U 字形である。埋土はにぶい黄褐シルトである。S P 30 は楕円形を呈し、長径約 0.28 m、短径約 0.2 m、深さ約 0.16 m を測る。断面形状は椀状である。埋土はにぶい黄褐シルトである。S P 60 は円形を呈し、直径約 0.16 m、深さ約 0.13 m を測る。断面形状は U 字形である。埋土は褐灰シルトである。

遺物は S P 35 から黒色土器 A 類椀 (280) が出土した。出土遺物の年代から 9 世紀後葉以降と判断できる。

10 掘立 3 (図 131 ~ 132)

第 10 調査区の中央で検出した 2 間×3 間の掘立柱建物である。S P 20・21・24・32・44 ~ 47・142・145 の 10 基で構成する。主軸方位は N-83°-W、検出面の標高は 36.1m である。梁行総長約 3.90m、桁行総長約 6.16m、床面積は約 24㎡を測る。芯間距離は約 2.3 ~ 1.9m である。

S P 24 は円形を呈し、直径約 0.25 m、深さ約 0.1 m を測る。断面形状は逆台形である。埋土は暗褐シルトである。S P 32 はやや歪な円形を呈し、直径約 0.6 m、深さ約 0.37 m を測る。断面形状は

逆台形に段落ちである。埋土は灰黄褐シルトである。S P 44 は円形を呈し、直径約 0.4 m、深さ約 0.11 m を測る。断面形状は逆台形である。埋土は黒褐シルトである。S P 142 はやや歪な円形を呈し、直径約 0.47 m、短径約 0.38 m、深さ約 0.23 m を測る。断面形状は逆台形である。埋土はにぶい黄褐シルトである。S P 45 は円形を呈し、直径約 0.38 m、深さ約 0.18 m を測る。断面形状は逆台形である。埋土は灰黄褐極細砂～シルトである。S P 47 は円形を呈し、直径約 0.3 m、深さ約 0.22 m を測る。断面形状は逆台形に段落ちである。埋土は灰黄褐極細砂である。S P 145 はやや歪な円形を呈し、直径約 0.42 m、深さ約 0.24 m を測る。断面形状は逆台形である。S P 20 は不整形な形状を呈する。長径約 0.64 m、短径約 0.27 m、深さ約 0.35 m を測る。断面形状は逆台形に段落ちである。埋土は灰黄褐シルトである。S P 21 は円形を呈し、直径約 0.3 m、深さ約 0.28 m を測る。断面形状は逆台形である。埋土はにぶい黄褐シルトである。

遺物は S P 20 から砥石 (S28)、S P 32 から黒色土器 A 類椀 (283)、S P 44 から土師器羽釜 (284・285)、S P 45 から黒色土器 A 類椀底部 (281)・鉄滓、S P 47 から黒色土器 A 類椀 (282)、土師器甕 (286) が出土した。図示した遺物の他に、S P 32・142 からは土師質土器皿片が出土した。黒色土器 A 類椀 (281) から 11 世紀前半と判断できる。

12 掘立 1 (図 133)

第 12 調査区の南側で出した 2 間×2 間の側柱建物である。S P 43 ~ 50 の 8 基で構成する。主軸方位は N-45°-E、検出面の標高は 37.0m である。梁行総長約 3.8m、桁行総長約 4.0m、床面積は約 15.2㎡を測る。芯間距離は約 2.1 ~ 1.8m である。

S P 43 は円形を呈し、直径約 0.3 m、深さ約 0.25 m を測る。断面形状は逆台形に段落ちである。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が褐砂礫混じりシルト、掘方が灰黄褐粗砂～細砂とにぶい黄褐粗砂～細砂である。S P 50 は円形を呈し、直径約 0.35 m、深さ約 0.2 m を測る。断面形状は逆台形に段落ちである。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が灰黄褐粗砂混じりシルト、掘方がにぶい黄褐砂礫混じりシルトである。S P 49 は楕円形を呈し、長径約 0.3 m、短径約 0.22 m、深さ約 0.2 m を測る。断面形状は逆

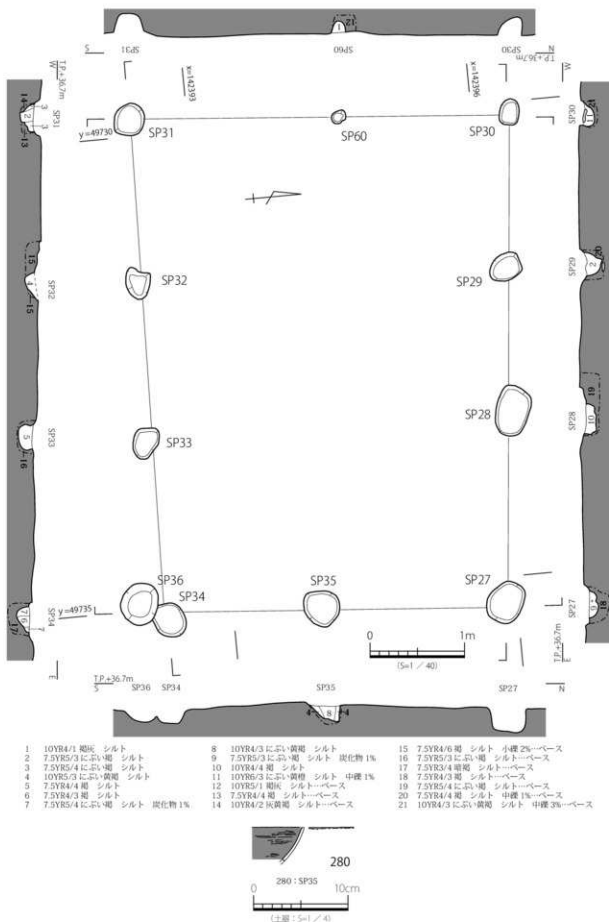


図 130 9-掘立2 平・断面図及び出土遺物実測図

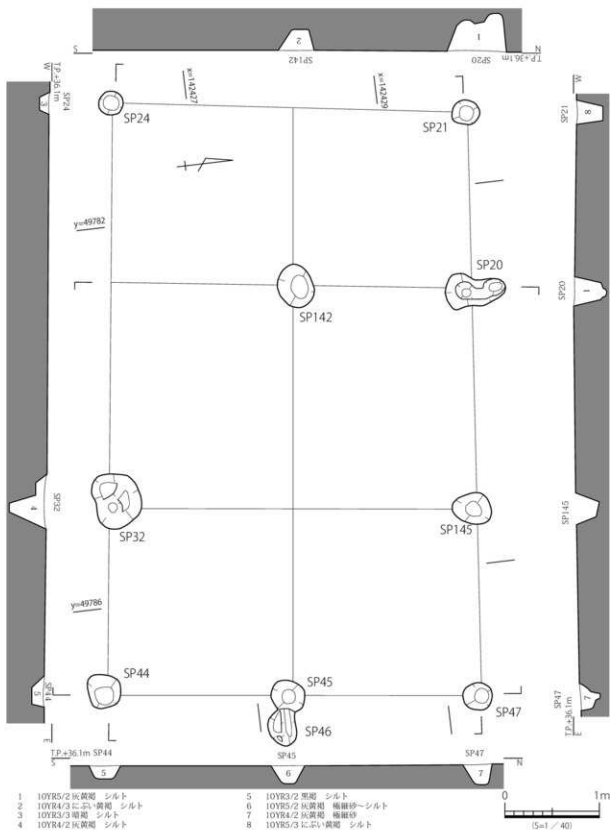


図 131 10-掘立 3 平・断面図

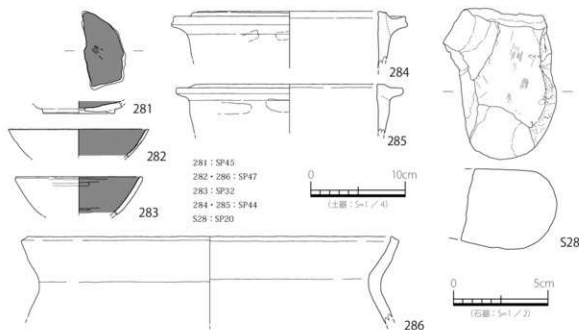


図 132 10-掘立3 出土遺物実測図

台形である。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が灰黄褐細砂～シルト、掘方が褐細砂混じりシルトである。S P 48 は円形を呈し、直径約 0.35 m、深さ約 0.3 m を測る。断面形状は逆台形に段落ちである。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が灰黄褐シルト、掘方がにぶい黄褐細砂～シルトである。S P 47 は円形を呈し、直径約 0.42 m、深さ約 0.1 m を測る。断面形状は U 字形である。底部に根石が据えられていた。埋土は灰黄褐シルトである。S P 46 は楕円形を呈し、長径約 0.5 m、短径約 0.32 m、深さ約 0.1 m を測る。断面形状は皿状である。底部に根石が据えられていた。埋土はにぶい黄褐粗砂混じりシルトである。S P 45 は円形を呈し、直径約 0.3 m、深さ約 0.1 m を測る。断面形状は逆台形である。柱痕が確認でき、埋土は柱痕がにぶい黄褐粗砂～細砂、掘方が灰黄褐粗砂混じりシルトである。S P 44 は円形を呈し、直径約 0.28 m、深さ約 0.05 m を測る。断面形状は皿状である。埋土はにぶい黄褐細砂～シルトである。

遺物が出土していないため詳細な時期は不明であるが、主軸方位から 11 世紀前半以降と想定できる。

12-掘立2(図 134)

第 12 調査区の中央で検出した 2 間×2 間の総柱建物である。S P 14・15・51～57 の 9 基で構成する。主軸方位は N-4.5°-E、検出面の標高は 36.9m である。梁行総長約 3.2m、桁行総長約 3.5m、床面積は約 11.2㎡を測る。芯芯間距離は約 1.8～1.6m である。

S P 51 は不整形な形状を呈し、長径約 0.27 m、短径約 0.18 m、深さ約 0.16 m を測る。断面形状は U 字形である。柱痕が確認でき、埋土は柱痕がにぶい黄褐細砂～シルト、掘方が褐細砂である。S P 52 は楕円形を呈し、長径約 0.3 m、短径約 0.2 m、深さ約 0.15 m を測る。断面形状は椀状に柱痕の段落ちである。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が褐細砂～シルト、掘方がにぶい黄褐細砂である。S P 55 は円形を呈し、直径約 0.3 m、深さ約 0.22 m を測る。断面形状は U 字形である。柱痕が確認でき、埋土は柱痕がにぶい黄褐シルト、掘方が褐シルトである。S P 14 はやや歪な円形を呈し、直径約 0.3 m、深さ約 0.17 m を測る。断面形状は方形である。埋土はにぶい黄褐極細砂～シルトである。S P 53 は不整形な形状を呈する。直径約 0.22 m、深さ約 0.14 m を測る。断面形状は不整形である。埋土は暗褐細

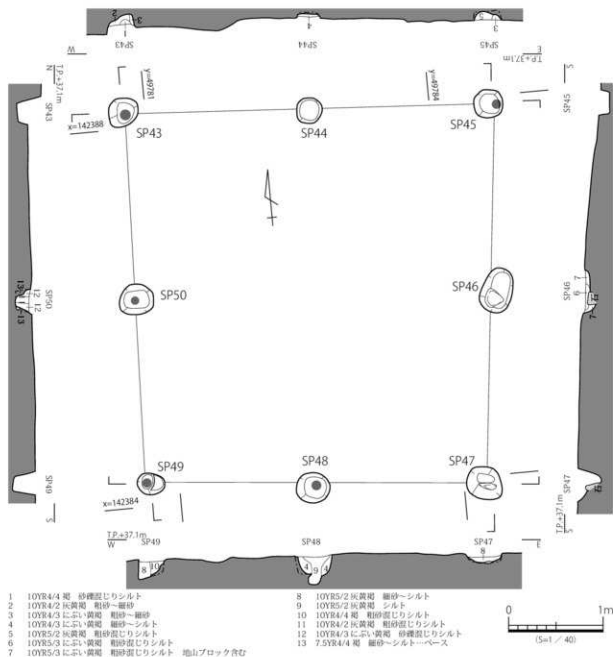


図 133 12- 掘立 I 平・断面図

砂である。S P 56 は円形を呈し、直径約 0.26 m、深さ約 0.16 mを測る。断面形状は椀状である。埋土は上層がにぶい黄褐細砂〜シルト、下層が褐細砂である。S P 15 は円形を呈し、直径約 0.38 m、深さ約 0.18 mを測る。断面形状はU字形である。埋土はにぶい黄褐シルト〜粘土である。S P 54 は円形を呈し、直径約 0.18 m、深さ約 0.08 mを測る。断面形状は椀状である。埋土は褐細砂である。S P 57 は円形を呈し、直径約 0.28 m、深さ約 0.17 m

を測る。断面形状はU字形に段落ちである。埋土はにぶい黄褐細砂である。

遺物は S P 57 から土師器片が出土しているが、細片のため詳細な時期は不明であるが、主軸方位から、11 世紀前半以降と想定できる。

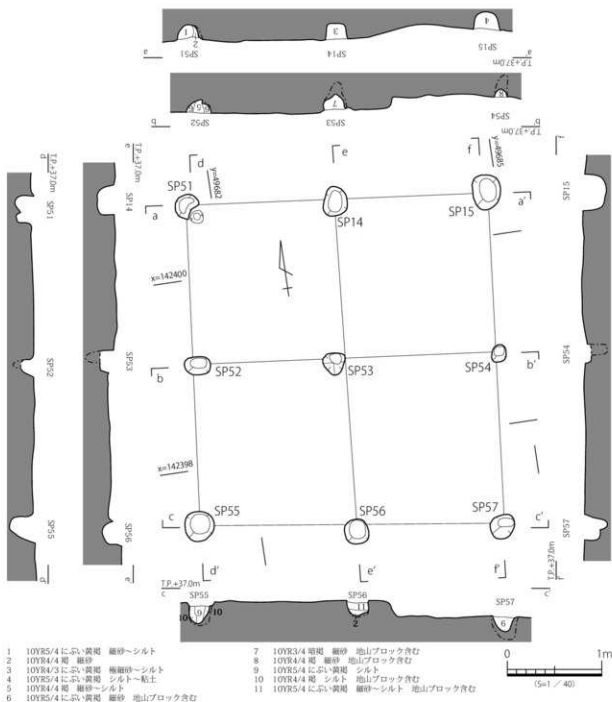


図 134 12-掘立 2 平・断面図

(3) 柵列

3-柵列 I (図 135)

第3調査区の南側で検出した南北5間、東西1間の柵列である。東西方向については、東側の調査区外へと広がる可能性がある。S P 5・36・118・120～123の7基で構成する。主軸方位はN-4°-W、検出面の標高は36.2mである。南北総長約11.90m、東西約2.5mを測る。芯芯間距離は2.5～2.0mである。

S P 118は円形を呈し、直径約0.35 m、深さ約0.15 mを測る。断面形状は逆台形である。埋土は黒褐シルトである。S P 120は円形を呈し、直径約0.35 m、深さ約0.05 mを測る。断面形状は皿状である。埋土は黒褐シルトである。S P 121は円形を呈し、直径約0.35 m、深さ約0.12 mを測る。断面形状は逆台形である。埋土は黒褐シルトである。S P 122は円形を呈し、直径約0.35 m、深さ約0.1 mを測る。断面形状は逆台形である。埋土は黒褐シルトである。S P 123は円形を呈し、直径約0.35 m、深さ約0.15 mを測る。断面形状はU字形である。埋土は黒褐シルトである。S P 36は円形を呈し、直径約0.5 m、深さ約0.3 mを測る。断面形状はU字形である。埋土は黒褐シルト～粘土である。S P 5は円形を呈し、直径約0.35 m、深さ約0.25 mを測る。断面形状はU字形である。柱痕が確認でき、埋土は黒褐シルトである。

遺物が出土していないため、詳細な時期は不明であるが、主軸方位から、古墳時代後期頃と想定できる。

5-柵列 I (図 136)

第5調査区の北側で検出した4間の柵列である。S P 14～17・21の5基で構成する。主軸方位はN-70°-E、検出面の標高は36.2mである。桁行総長約4.60m、芯芯間距離は約1.2～0.7mを測る。

S P 14は不整形な形状を呈し、長径約0.47 m、短径約0.36 m、深さ約0.14 mを測る。断面形状は逆台形に段落ちである。埋土は暗褐細砂である。S P 15は隅丸方形を呈し、長辺約0.46 m、深さ約0.17 mを測る。断面形状は逆台形に段落ちである。埋土は暗褐細砂である。S P 16は隅丸方形を呈し、長辺約0.44 m、短辺約0.36 m、深さ約0.2 mを測る。断面形状は逆台形に段落ちである。埋土は暗褐細砂～シルトと暗褐細砂、極暗褐細砂である。

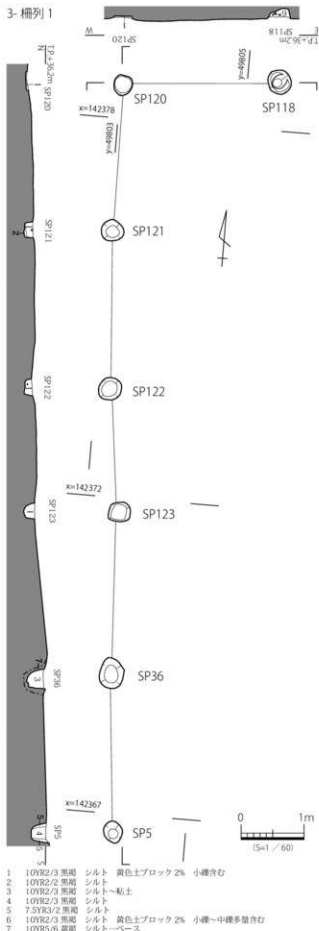


図 135 3-柵列 I 平・断面図

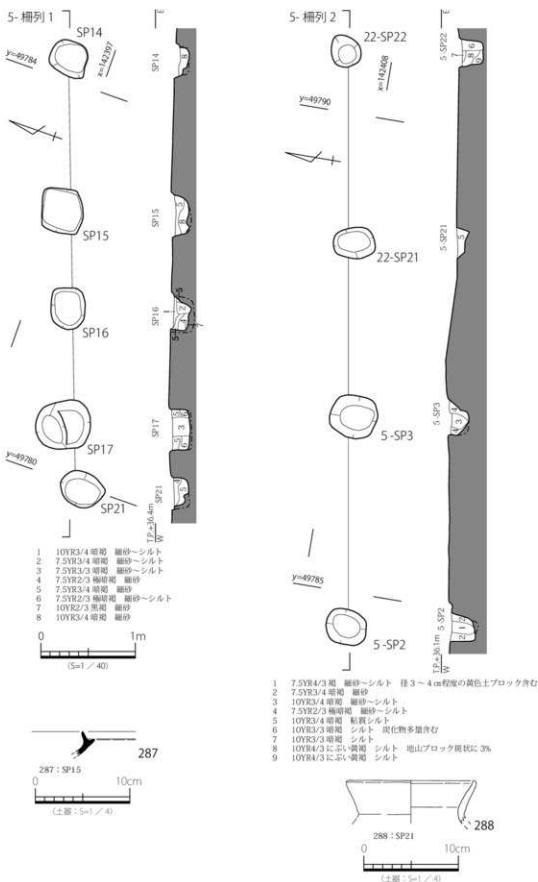


図 136 5- 柵列 1・2 平・断面図及び出土遺物実測図

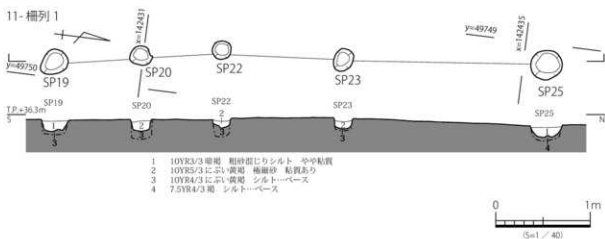


図 137 11- 柵列 1 平・断面図

S P 17 は円形を呈し、直径約 0.6 m、深さ約 0.23 m を測る。断面形状は逆台形である。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が暗褐色細砂～シルト、掘方が暗褐色細砂と極暗褐色細砂～シルトである。S P 21 はやや歪な円形を呈し、直径約 0.46 m、深さ約 0.18 m を測る。断面形状は逆台形に段落ちである。埋土は上層が極暗褐色細砂、下層が暗褐色細砂である。

遺物は S P 15 から須恵器杯身 (287) が出土した。出土遺物から T K 43 型式併行期と判断できる。

5・22 柵列 2 (図 136)

第 5・22 調査区の北で検出した 3 間の柵列である。5・S P 2・3、22・S P 21・22 の 4 基で構成する。主軸方位は N-80°-E、検出面の標高は 36.0m である。桁行総長約 6.16m、芯芯間距離は 2.2～2.0m を測る。

22・S P 22 は円形を呈し、直径約 0.34 m、深さ約 0.25 m を測る。断面形状は逆台形である。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が暗褐色シルト、掘方が暗褐色シルトとにぶい黄褐色シルトである。22・S P 21 は楕円形を呈し、長径約 0.45 m、短径約 0.34 m、深さ約 0.14 m を測る。断面形状は不整形である。5・S P 3 は円形を呈し、直径約 0.48 m、深さ約 0.22 m を測る。断面形状はやや歪な U 字形である。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が暗褐色細砂～シルト、掘方が極暗褐色細砂～シルトである。5・S P 2 は円形を呈し、直径約 0.46 m、深さ約 0.24 m を測る。

断面形状は逆台形である。柱痕が確認でき、埋土は柱痕が暗褐色細砂～シルト、掘方が暗褐色細砂である。

遺物は 22・S P 21 から土師器甕 (288) が出土した。出土遺物から古墳時代後期頃と判断できる。

11 柵列 1 (図 137)

第 11 調査区の東側で検出した南北 4 間の柵列である。S P 19・20・22・23・25 の 5 基で構成する。主軸方位は N-9°-W、検出面の標高は 36.2m である。東西総延長約 5.2m、芯芯間距離は 2.2m～0.9m を測る。

S P 19 は円形を呈し、直径約 0.28 m、深さ約 0.11 m を測る。断面形状は逆台形である。埋土は暗褐色粗砂混じりシルトである。S P 20 は円形を呈し、直径約 0.2 m、深さ約 0.11 m を測る。断面形状は逆台形である。埋土はにぶい黄褐色極細砂である。S P 22 は円形を呈し、直径約 0.2 m、深さ約 0.09 m を測る。断面形状は逆台形である。埋土はにぶい黄褐色極細砂である。S P 23 は円形を呈し、直径約 0.24 m、深さ約 0.1 m を測る。断面形状は逆台形である。埋土はにぶい黄褐色極細砂である。S P 25 は円形を呈し、直径約 0.3 m、深さ約 0.11 m を測る。断面形状は逆台形である。埋土は暗褐色粗砂混じりシルトである。

遺物が出土していないため詳細な時期は不明であるが、主軸方位から古墳時代後期頃と想定できる。

(4) SD

3・4-S D 23(図 138)

第3・4調査区の中央で検出した溝である。3-
 竪穴 110 に切られる。検出面の標高は 36.2m、主
 軸方位 N-60°-E である。

長さ約 15.4 m を検出し、幅約 0.38m、深さ約
 0.12m、断面形状は U 字形である。埋土は黒褐シ
 ルトである。

遺物は出土していないため、詳細な年代は不明
 であるが、切り合い関係から古墳時代後期以前と考
 えられる。

5-S D 27・23-S D 16(図 139)

第5・23調査区の中央で検出した不整形な溝状
 の遺構である。5-S K 53 に切られる。主軸方位
 N-89°-E、検出面の標高は 36.2m である。

長さ約 5.6 m を検出し、幅は約 1.4 ~ 0.94m、
 深さ約 0.1m を測る。断面形状は逆台形、段落ちを
 有する部分がある。埋土は単層で暗褐細砂〜シルト
 である。

遺物は出土していないため、時期は不明である。

5-S D 49(図 139)

第5調査区の中央で検出した溝である。一部が擾
 乱に切られる。主軸方位 N-29.5°-W、検出面の標
 高は 36.2m である。

長さ約 3.57 m を検出し、幅約 0.3m、深さ約
 0.12m を測る。断面形状は逆台形である。埋土は
 単層で地山ブロック土を含む褐細砂〜シルトであ
 る。

遺物は出土していないため、時期は不明である。

5-S D 52(図 139)

第5調査区の中央から南側で検出した不整形な
 形状の溝である。22-竪穴 1 に切られる。主軸方
 位 N-19.5°-W でやや蛇行する。検出面の標高は
 36.2 ~ 36.1m である。

長さ約 11.0 m を検出し、幅は約 1.83m、深さは
 約 0.14m を測る。断面形状は不整形である。

埋土は2層に分層でき、a断面で上層が黒褐粘
 土〜シルト、下層が暗褐シルト、b断面で上層が砂
 礫を含む暗褐シルト、下層が暗褐シルトである。

遺物は図示できなかったが、須恵器表片が出土
 した。細片であるため、詳細な時期は不明である。

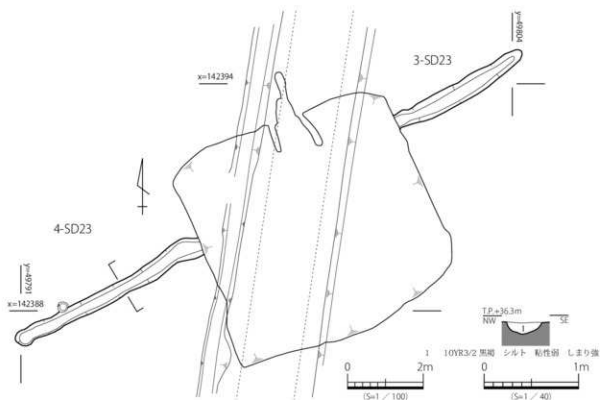


図 138 3・4-SD23 平・断面図

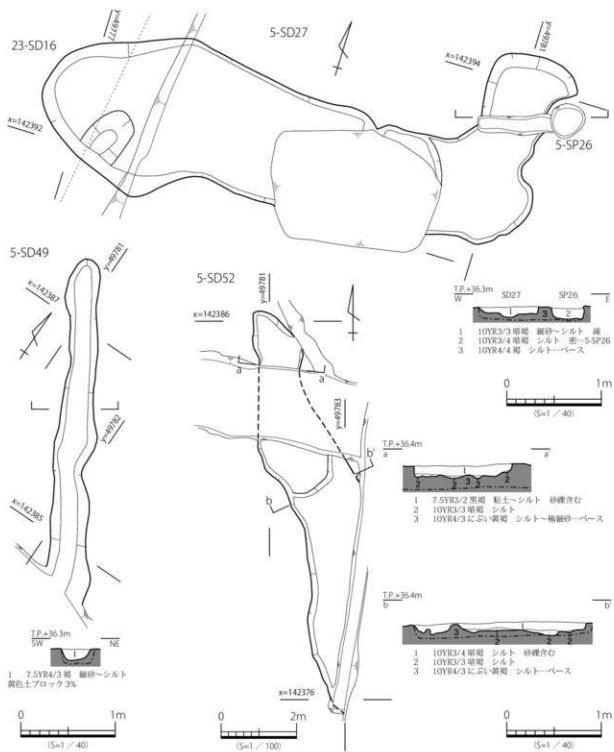


図 139 5-SD27・23-SD16、5-SD49、5-SD52 平・断面図

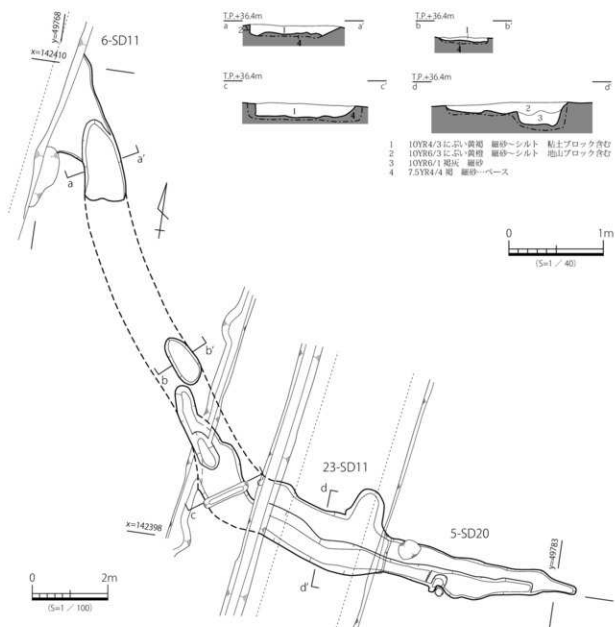


図 140 6-SD11・23-SD11・5-SD20 平・断面図

6-S D 11・23-S D 11・5-S D 20(図 140)

第 5・6・23 調査区の北側で検出した不整形な溝である。主軸方位は北西 N-30°-W から東 N-85°-W へ湾曲する。途中で途切れるも、第 10 調査区まで展開する。検出面の標高は 36.3 ～ 36.2m である。

長さ約 20.9 m を検出し、幅は約 1.28m から 0.5m と不規則で、断面形状は不整形ながらも段落ちを有する部分がある。深さは約 0.24 ～ 0.05m を測る。

埋土は a・b・c 断面が単層でにぶい黄褐細砂～シルト、d 断面の上層がにぶい黄橙細砂～シルト、下層が褐灰細砂である。

遺物は図示できなかったが、白玉が 1 点出土した。時期の判断できる遺物が出土していないため、時期は不明である。

8・9-S D 3(図 141～142)

第 8・9 調査区を南西から北東方向に直線的に横切って検出した溝である。42-S D 2・7-S D 1 へとつながる。主軸方位 N-54°-E、検出面の標高は 36.6 ～ 36.3m である。

長さ約 38.5 m を検出し、幅は約 1.3 ～ 0.56m、深さは 0.36 ～ 0.07m、西側では浅く、東側が深くなる。断面形状は逆台形で段落ちを有する部分がある。

埋土は①断面で上層が黒褐シルト、中層がラミナを含む暗赤褐細砂～シルト、下層が暗褐シルトと褐シルトである。②・③断面では単層で、暗褐細砂～シルトである。

遺物は土師器甕(290)・甕(291)が出土した。図示した遺物の他に、須恵器壺片、土師器高杯片(精製品)・壺片・甕片が出土した。出土遺物から古墳時代後期と判断できる。

8・9-S D 5(図 141)

第 8・9 調査区で検出した 8・9-S D 3 に並行する溝である。第 7 調査区では検出できなかった。主軸方位 N-54°-E、検出面の標高は 36.6 ～ 36.3m である。

長さ約 27.0 m を検出し、幅は約 1.26 ～ 0.4m、深さ 0.3 ～ 0.08m、西側で浅く、東側で深い。途中途切れる部分があり、幅は一定しない。断面形状は逆台形である。

埋土は、①断面で上層が黒褐細砂～シルト、下層が暗褐細砂～シルトとにぶい黄褐細砂～シルトである。②断面では、上層が褐灰シルト、下層が灰黄シルトである。③断面では単層で、暗褐細砂である。

遺物は土師器片が出土している。8・9-S D 3 と並走することから、同時期の溝と考えられる。

8・43-S D 6(図 141～142)

第 8・43 調査区で検出した南東から湾曲後、北に直線的に延びる溝である。8- 堅穴 1 に切られ、8- 堅穴 2・4、8・9-S D 3・5 を切る。主軸方位は N-90°-E から N-85°-E に変化し、直線的に調査区外まで展開するが、第 11 調査区では検出できなかった。検出面の標高は 36.4 ～ 36.3m である。調査時は、一連の溝として調査を行ったが、8- 堅穴 1 との切り合い関係から、8- 堅穴 2 以北については、別遺構である可能性が想定できる。

長さ約 41.0 m を検出し、幅は約 0.68 ～ 0.28m で、深さは約 0.20 ～ 0.05m を測る。北側が深く、中央でやや浅く、南東側では深い傾向にある。断面形状は逆台形である。

埋土は a 断面で 3 層に分層でき、上層がにぶい黄褐細砂～シルト、中層が暗赤褐細砂～シルト、下層が地山ブロック土を含む褐シルトである。b・c 断面は単層で、それぞれ暗褐粘土と、暗褐細砂である。d 断面では上層が褐シルトと暗褐細砂～シルト、下層が地山ブロック土を含む暗褐シルトである。e 断面は単層で、暗褐細砂～シルトである。

遺物は土師質土器杯(289)が出土した。図示した遺物の他に、須恵器壺片が出土した。

出土遺物や方向が条理地割に合致することから古代と判断できる。

7-S D 1・42-S D 2(図 142)

第 7 調査区の北で検出した溝である。8・9-S D 3 から途中で途切れるも、直線的に方位 N-62°-E、検出面の標高は 36.3 ～ 36.2m である。

長さ約 9.5 m を検出し、幅は約 0.7m で、深さは 0.24m を測る。断面形状は不整形で、段落ちを有する部分がある。埋土はにぶい黄褐砂礫混じりシルトである。

遺物は土師器片が出土しているが、細片のため詳細な時期は不明である。

42-S D 4(図 142)

第 42 調査区の北側で検出した溝である。主軸方位 N-73°-E、検出面の標高は 36.2m である。調査区外に延び、8・9-S D 5 に続くと考えられるが、第 7 調査区では検出できなかった。

長さ約 1.5 m を検出し、幅は約 1.90m、深さは約 0.28m を測る。断面形状は不整形である。

遺物は図示できなかったが、須恵器片・土師器片が出土した。出土遺物が細片のため、詳細な時期は不明であるが、8・9-S D 5 との関係から、古墳時代後期頃と推定できる。

8-S D 7(図 143)

第 8 調査区の中央で検出した溝である。8-竪穴 4 と 8-S D 6 に切られる。主軸方位 N-81°-E で、やや蛇行する。検出面の標高は 36.4m である。

長さ約 7.0 m を検出し、幅は約 0.84 ~ 0.28m で、深さ約 0.16m を測る。断面形状は浅い皿状である。

埋土は 2 層に分層でき、上層がにぶい黄褐シルト・粘土、下層が褐シルト・粘土である。

遺物は底面から土製鉄鍾車 (D2) と土師器壺 (292)・鍋 (293)、須恵器杯身が出土した。この須恵器杯身は 8-竪穴 4 出土の出土破片 (48) と接合した。図示した遺物の他に、土師器破片が出土した。

出土遺物と 8-竪穴 4 との接合関係から T K 47 型式併行期と判断できる。

9-S D 6(図 144)

第 9 調査区の中央から南東側で検出した溝である。南側は調査区外へと展開する。直線的に主軸方位 N-20°-W、検出面の標高は 36.5m 前後である。

長さ約 19.5 m を検出し、幅は約 1.3 ~ 0.38m、深さは 0.34 ~ 0.17 m を測る。北側が浅く、南側が深い。断面形状は逆台形で段落を有する部分がある。

埋土は、a・b 断面で 2 層に分層でき、上層が黒褐細砂～シルト、下層が地山ブロック土を含む暗褐シルトである。c・d 断面も同様で、上層が黒褐細砂～シルト、下層が地山ブロック土を含む暗褐細砂～シルトである。

遺物は図示できなかったが、須恵器壺片が出土した。遺物が細片のため、遺構の詳細な時期は不明である。8・9-S D 3 との切り合い関係から、古墳時代後期以降と考えられる。

9-S D 200(図 145)

第 9 調査区の北西で検出した溝である。やや蛇行して第 11 調査区まで延び、11-S D 1 へと続く。主軸方位 N-7°-E、検出面の標高は 36.7 ~ 36.5m である。

長さ約 17.5 m を検出し、幅約 0.58 ~ 0.48m、深さは 0.12 ~ 0.1m を測る。断面形状は逆台形から浅い皿状である。

埋土は a・b 断面とも 3 層に分層でき、a 断面の上層が褐細砂、中層がにぶい褐シルト、下層が褐シルトである。b 断面では上層が褐シルト、中層がにぶい褐極細砂、下層が褐極細砂である。

遺物は図示できなかったが、須恵器杯身片・高杯片・壺片、土師器皿片・製塩土器片が出土した。いずれの遺物も細片のため、詳細な時期は不明であるが、第 11 調査区で S D 2 を切っていることから、飛鳥Ⅲ以降の溝と考えられる。

9-S D 105(図 145)

第 9 調査区の南側で検出した溝である。やや湾曲して 9-S D 110 に合流する。主軸方位 N-51°-E、検出面の標高は 36.5m である。

長さ約 1.5 m を検出し、幅は約 0.32m、深さは 0.06m を測る。断面形状は浅い皿状である。

埋土は 2 層に分層でき、上層が暗褐細砂～シルト、下層が褐シルトである。

遺物は出土していないため、時期は不明である。

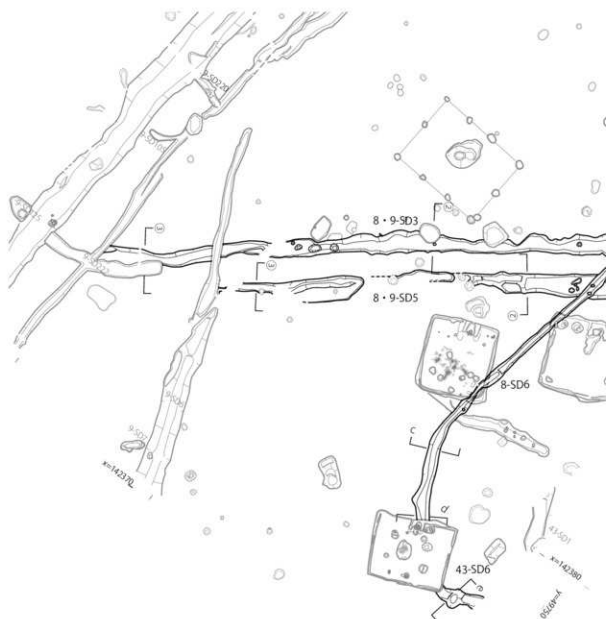
9-S D 110(図 145)

第 9 調査区の中央を南北方向に検出した溝である。9-S K 106・219 に切られ、9-S D 117 を切る。北側で屈曲して 9-S D 205 に向かう。主軸方位 N-5°-E、検出面の標高は 36.5m 前後である。

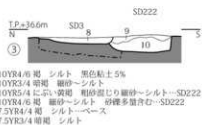
長さ約 40.0 m を検出し、幅は約 0.94 ~ 0.44m、深さは 0.28 ~ 0.06 を測る。北側と南側で深く、中央部分が浅い。断面形状は逆台形である。

埋土は a・b 断面で 4 層に分層でき、a 断面では上層から灰白シルト、黄灰シルト、灰白極細砂、細砂ブロックを含む黄灰シルトである。b 断面では上層から暗褐細砂～シルト、灰黄極細砂、暗褐細砂～シルト、黒褐粗砂泥じりシルトである。d 断面は 3 層に分層でき、上層が極暗褐シルト、中層がにぶい黄褐細砂、下層が黒褐細砂～シルトである。

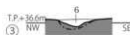
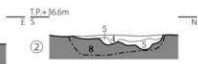
遺物は須恵器壺片が出土した。遺物が細片のた



8 • 9-SD3



8 • 9 • 43-SD5



1	10YR2/3 黒褐	細砂～シルト	
2	10YR3/3 暗褐	細砂～シルト	地山ブロック 3%
3	10YR4/3 にぶい黄褐	細砂～シルト	
4	10YR4/1 褐灰	シルト	

5	2.5Y6/2 灰黄	シルト	湖灰色シルト塊2%
6	10YR3/3 暗褐	細砂	
7	7.5YR3/3 暗褐	シルト…ベース	
8	2.5Y6/2 灰黄	シルト…ベース	

图 141 8·9-SD3、8·9-SD5、8·43-SD6 平·断面图

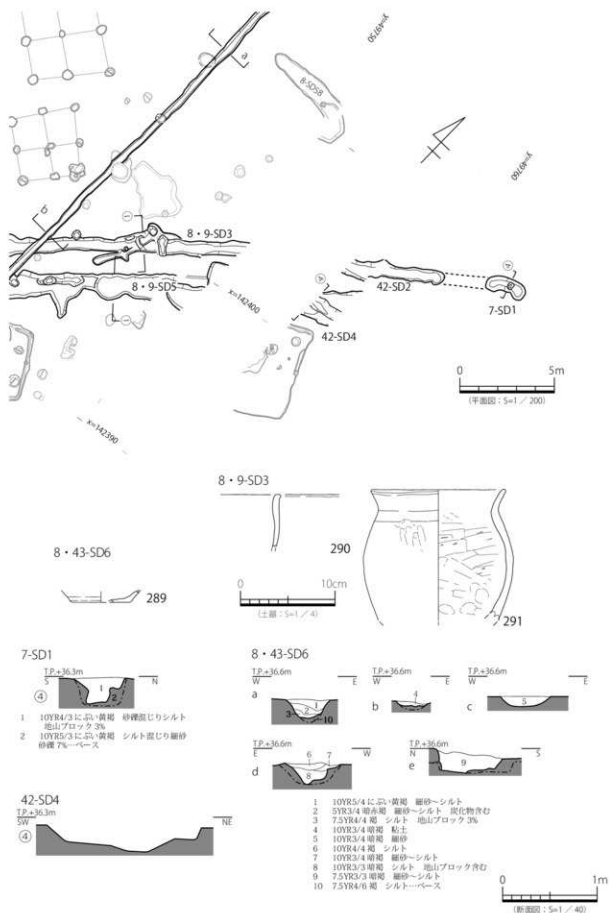


図 142 42-SD2・7-SD1、42-SD4、8・43-SD6 平・断面図及び出土遺物実測図

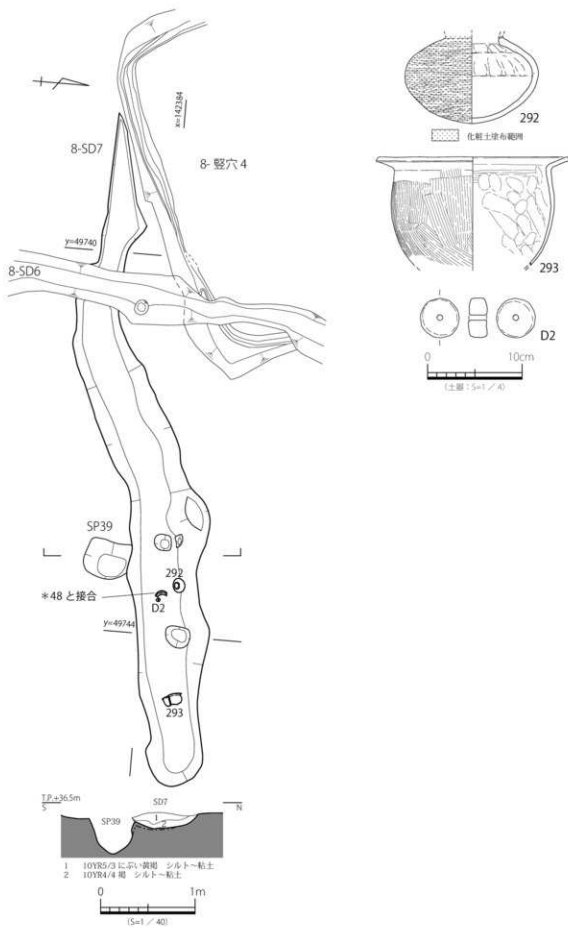


図 143 8-SD7 平・断面図及び出土遺物実測図

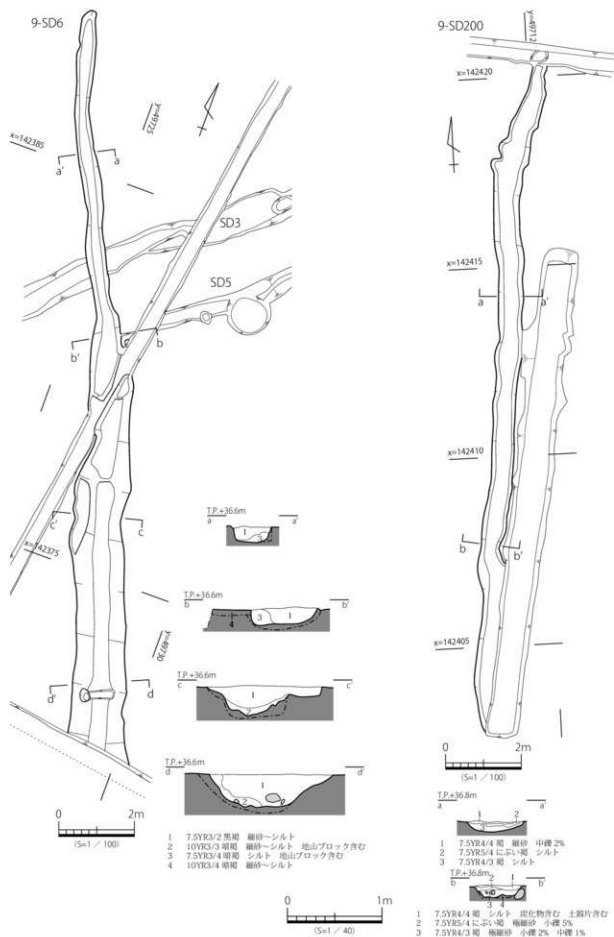


図 144 9-SD6・200 平・断面図

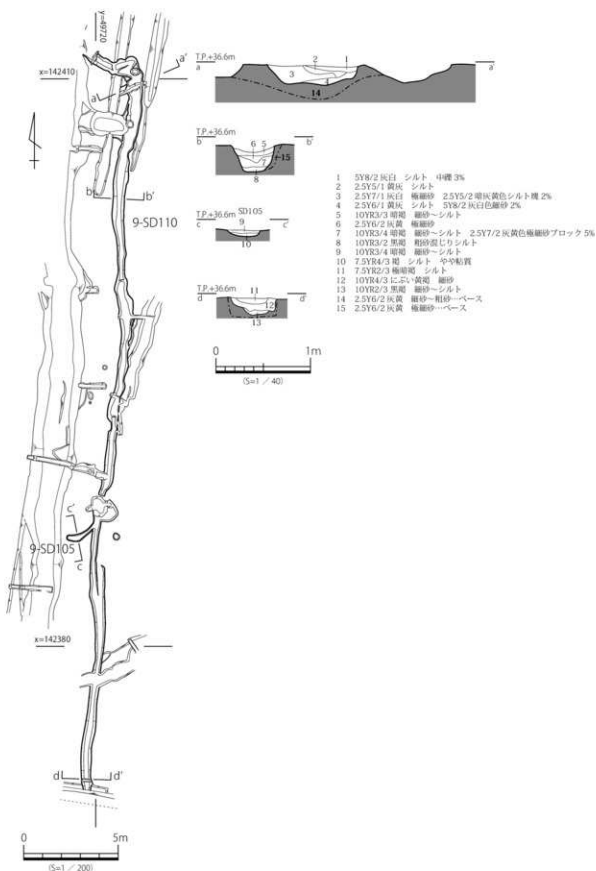


図 145 9-SD105・110 平・断面図

め、詳細な時期は不明である。

9-S D 117(図 146)

第9調査区の中央から直線的に北東方向へ延びる溝である。9-S D 110に切られ、9-S K 5を切る。主軸方位 N-25°-E、検出面の標高は 36.5m 前後である。

長さ約 30.5 mを検出し、幅は約 0.62 ~ 0.48m、深さ約 0.22mを測る。断面形状は逆台形である。

埋土から掘り直しの痕跡が認められ、掘り直し部は2層に分層でき、b断面では上層が褐シルト、下層が暗褐細砂〜シルト、c断面では上層がにぶい黄褐シルト、下層が暗褐細砂〜シルト、d断面では、上層が暗褐シルト、下層が暗褐細砂〜シルトである。掘り直し以前の堆積は、b断面で上層がにぶい黄褐細砂〜シルト、下層が地山ブロック土を含む褐細砂〜シルト、c断面で上層が暗赤褐シルト、下層が地山ブロック土を含む暗褐細砂、d断面で暗褐細砂〜シルトである。

遺物は北側の土器集中部から土師器甕(294)が出土した。その他に、土師器甕片が出土した。出土遺物から古墳時代後期頃と判断できる。

9-S D 115(図 147)

第9調査区北側で検出した溝である。調査区外へと延びるが、第11調査区では検出できなかった。主軸方位 N-11°-E、検出面の標高は 36.6 ~ 36.5m である。

長さ約 2.50 mを検出し、幅は約 0.38m、深さは約 0.12mを測る。断面形状は逆台形である。

埋土は2層に分層でき、上層が褐シルト、下層が灰白色シルト塊を含む褐シルトである。遺物が出土していないため、詳細な時期は不明である。

9-S D 216(図 148)

第9調査区の北西で検出した溝状の遺構である。主軸方位 N-37°-E、検出面の標高は 36.6 ~ 36.5m である。

長さ約 4.4 m、幅は 0.74m、深さは 0.18mを測る。断面形状は方形である。

埋土は2層に分層でき、上層がにぶい黄褐極細砂、下層がにぶい赤褐シルトである。

遺物は須恵器片が出土しているが、細片のため詳細な時期は不明である。

9-S D 220(図 147)

第9調査区の中央で検出した溝である。9-S D 205に切られる。9-S D 110に切られる。主軸方位 N-72°-W、検出面の標高は 36.5m である。

長さ約 1.84 mを検出し、幅約 0.32m、深さ約 0.3mを測る。断面形状はU字形である。

埋土は2層に分層でき、上層が暗褐砂礫混じり細砂〜シルト、下層が極暗褐シルト混じり砂礫である。

遺物は出土していないため、詳細な時期は不明である。

9-S D 222(図 147)

第9調査区の南側で検出した溝状の遺構で湾曲する。9-S D 110・S D 205に切られ、8・9-S D 3を切る。9-S D 125と同一の溝である。主軸方位 N-60°-E、検出面の標高は 36.6 ~ 36.5m である。

長さ約 9.2 mを検出し、幅約 0.65m、深さは 0.18mを測る。断面形状は逆台形である。

埋土は2層に分層でき、上層がにぶい黄褐粗砂混じり細砂〜シルト、下層が褐細砂〜シルトである。

遺物は出土していないため、詳細な時期は不明である。

11-S D 7・44・S D 3・45-S D 4(図 148)

第11・44・45調査区で検出した溝である。やや直線的に主軸方位 N-65°-Eで第45調査区まで延びる。検出面の標高は 36.3 ~ 36.2m である。

長さ約 22.5 mを検出し、幅は 1.44 ~ 0.8mで、断面形状は逆台形で部分的に段落ちを有する。検出面からの深さは 0.46mを測る。第10調査区では確認できなかった。

埋土は、a断面で上層が褐細砂、下層がにぶい黄褐砂で礫を含む。b断面で上層が褐シルトと暗褐粘土、中層が褐シルト、下層が暗褐シルトである。c断面で褐シルト、d断面で上層が灰黄褐中粒砂混じりシルト下層が暗褐中粒砂混じりシルトである。

遺物は須恵器甕(295)、土師器鍋(296)が出土した。出土遺物から古墳時代後期後半としておく。

10-S D 202(図 150)

第10調査区の西側で検出した溝である。南北に直線的に主軸方位 N-11.5°-Wで調査区外に延びる。

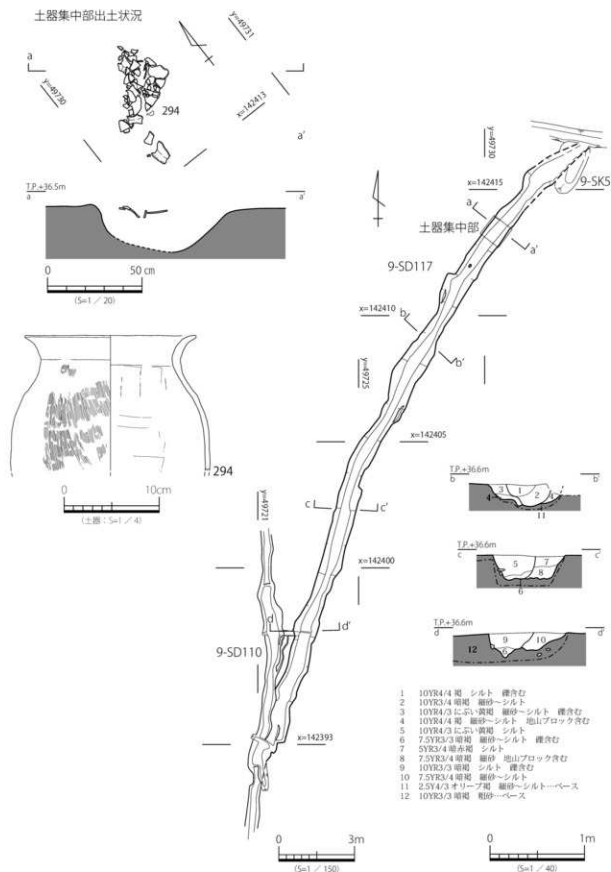


図 146 9-SD117 平・断面図及び出土遺物実測図

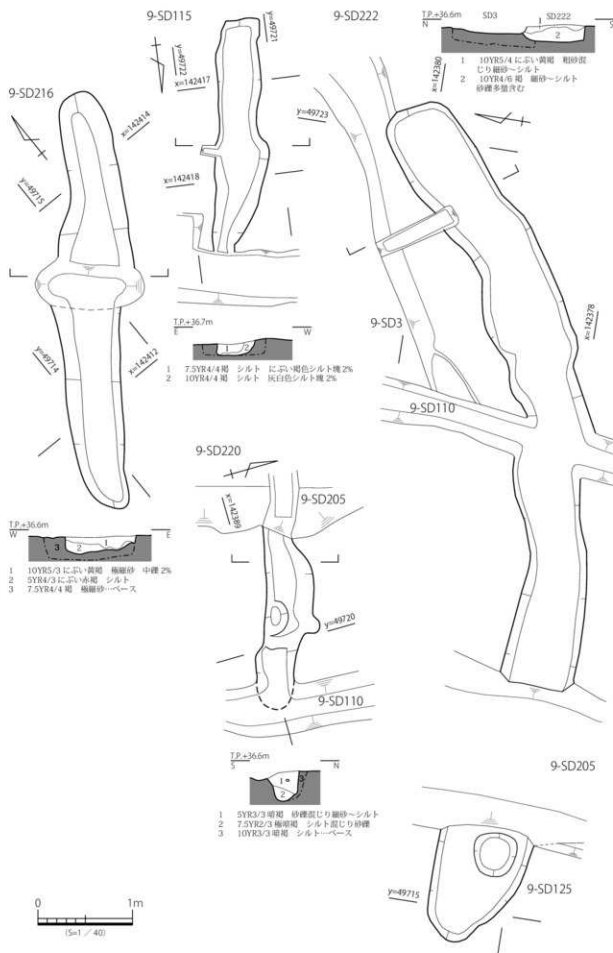


図 147 9-SD115・216・220・222 平・断面図

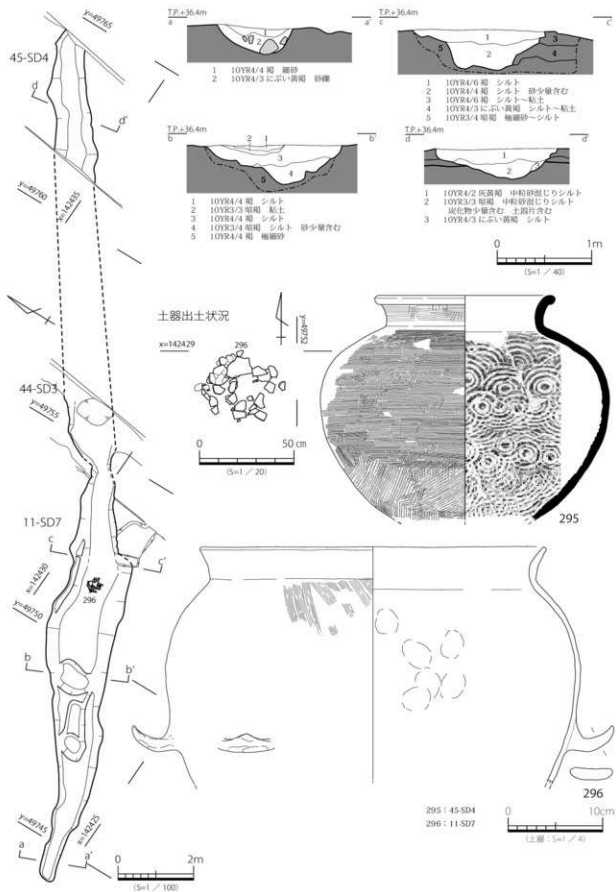


図 148 11-SD7・44-SD3・45-SD4 平・断面図及び出土遺物実測図

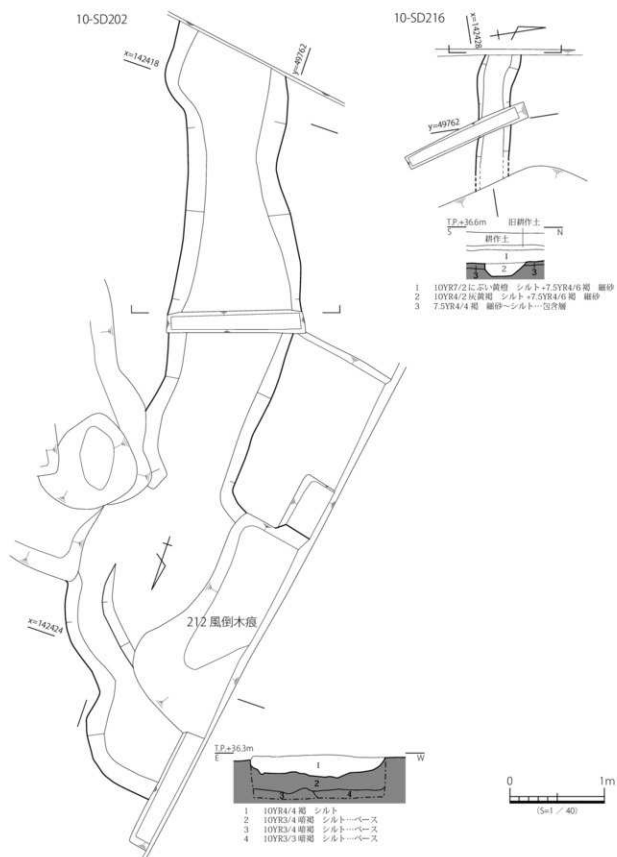


図 149 10-SD202・216 平・断面図

検出面の標高は 36.3m である。

長さ約 7.0 m を検出し、幅は約 1.42m、深さは約 0.25m を測る。断面形状は浅い皿状である。

埋土は単層で、褐シルトである。

遺物が出土していないため、詳細な時期は不明である。

10-S D 216(図 149)

第 10 調査区の西側で検出した溝である。10- 竪穴 210 に切られ、やや湾曲して調査区へと延びると想定していたが、第 45 調査区では確認できなかった。主軸方位 N-80° -W、検出面の標高は 36.2m である。

長さ約 1.38 m を検出し、幅は約 0.44m、深さは約 0.14m を測る。断面形状は逆台形である。

埋土は単層で、灰黄褐シルトに細砂を含む。

遺物は須恵器片が出土しているが、細片のため

詳細な時期は不明である。

11-S D 12(図 150)

第 11 調査区の東側で検出した溝である。11- S D 8 に切られる。主軸方位 N-52° -E でやや湾曲する。検出面の標高は約 36.2m である。

長さ約 1.68 m、幅は 0.56m で、断面形状は不整形である。検出面からの深さは 0.18m を測る。

埋土は上層が褐粘質土、下層が暗褐細砂～シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

11-S D 9(図 150)

第 11 調査区の東側で検出した溝である。11- S D 8 に切られる。主軸方位 N-86° -W から N-14.5° -W で湾曲して調査区外に延びる。検出面の標高は約 36.2m である。

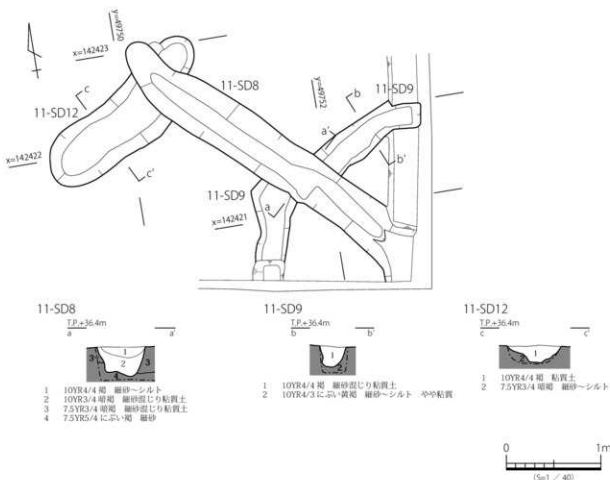


図 150 11-SD12・9・8 平・断面図

長さ約 1.9 m を検出し、幅は約 0.26 m、深さは約 0.24 m を測る。断面形状は U 字形である。埋土は単層で褐細砂混じり粘質土である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

11-S D 8(図 150)

第 11 調査区の東側で検出した溝である。直線的に主軸方位 N-44.5°-W で調査区外に延びる。検出面の標高は約 36.2 m である。

長さ約 3.6 m を検出し、幅は約 0.5 m で、深さ 0.3 m を測る。断面形状は逆台形である。埋土は 2 層に分層でき、上層が褐細砂～シルト、下層が暗褐細砂混じり粘質土である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

45-S D 2(図 151)

第 45 調査区の南側で検出した溝状の遺構である。直線的に方位 N-60°-W で延び、調査区外に延びる。検出面の標高は約 36.2 m である。幅約 3.10 m、深さは 0.20 m を測る。断面形状は方形である。

埋土は単層で黒褐シルトである。遺物は図示できなかったが、須恵器破片が出土したが、細片であるため、詳細な時期は不明である。

遺物が出土していないため、詳細な時期は不明である。

44・45-S D 1(図 151)

第 44・45 調査区の南側で検出した溝状の遺構である。西側で屈曲して方位 N-7°-W から N-80°-W で延びる。検出面の標高は約 36.3～36.2 m である。11-S K 10・45-S D 1へと続き、11-S D 7に切られる。幅は約 2.3 m 以上で、断面形状は逆台形にテラスである。検出面からの深さは 0.50 m を測る。

埋土は 44-S D 1 で上層が黒褐細砂混じりシルト、下層が褐灰細砂と灰黄褐細砂である。45-S D 1 で上層が黒褐シルト、下層が灰黄褐シルトと暗褐細砂～シルトである。

遺物は 45-S D 1 から須恵器杯身(297・298)、砥石(S29)が出土している。出土遺物から T K 43 型式併行期と判断できる。

3-S D 1・4-S D 3(図 152)

第 3・4 調査区の南側で検出した不整形な溝状の遺構である。主軸方位 N-72°-W、検出面の標高は

36.5～36.3 m である。

長さ約 18.5 m を検出し、幅は約 2.7～1.0 m で、断面形状は浅い皿状から碗状で段落ちを有する部分が認められた。深さは約 0.33～0.1 m を測る。幅や深さの起伏が大きい。

埋土は a・b 断面は単層で地山ブロック土を含む黒褐細砂～シルト。碗状に断落する c 断面では上層が暗褐シルト、中層がにぶい黄褐礫混じりシルト、下層が暗褐砂礫と暗褐細砂～シルトである。d 断面では単層で、灰褐細砂～シルトである。

遺物は須恵器杯蓋(301)・杯身(299)・高杯(300)・壺(302)、土師器杯(303～306)・高杯(307・308)・直口壺(309)が出土した。そのうち溝底から(299・302・305・308・309)がまとめて出土した。図示した遺物の他に、須恵器杯蓋片・杯身片・甕片、土師器高杯片・甕片・壺片、白玉が出土した。なお、本溝から出土した須恵器杯蓋(301)は 6 壺穴 2 の遺物(74)と接合した。不整形な溝状の遺構であり、出土遺物も年代差が認められることから、人為的な整地層の可能性も考えられる。

出土遺物の年代から飛鳥Ⅲと判断できる。

9-S D 205(図 153～156)

第 9 調査区西側で検出した南北方向の溝である。主軸方位 N-5°-E で直進した後、軸を N-10°-W に変えてやや蛇行し、11-S D 2へとつながる。検出面の標高は 36.6～36.5 m である。

長さ約 47.0 m、幅は約 1.4～2.2 m で、深さは約 0.76～0.44 m を測る。断面形状は逆台形で数箇所段落ちを有する。

埋土は、a 断面では、13～17 層、7～12 層、1～6 層の順に堆積したと考えられる。1～6 層を上層、7～12 層を中層、13～17 層を下層として扱う。上層は中層まで埋没した後、溝の掘り直し後の堆積と考えられる。埋土は褐細砂～シルトと褐粗砂混じりシルト、褐細砂～シルト、褐シルトである。中層の埋土は褐細砂～シルトと褐粗砂～細砂、褐粗砂混じりシルト、にぶい黄褐細砂～シルト暗褐細砂～シルト、褐粗砂混じりシルトである。下層は暗褐シルトと暗褐極細砂、灰黄褐細砂、暗褐粗砂、暗褐砂礫で、流水堆積が確認できた。

b 断面では、7～10 層、1～6 層の順に堆積したと考えられる。1～6 層を上層、7～10 層を下層として扱う。上層は下層が埋没した後、溝の掘り

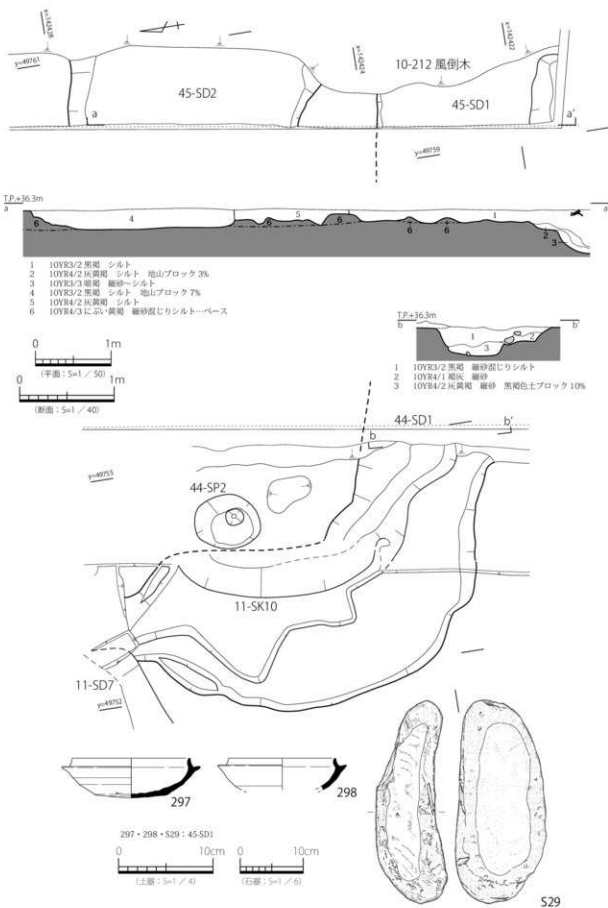


図 151 44・45-SD1・45-SD2 平・断面図及び出土遺物実測図

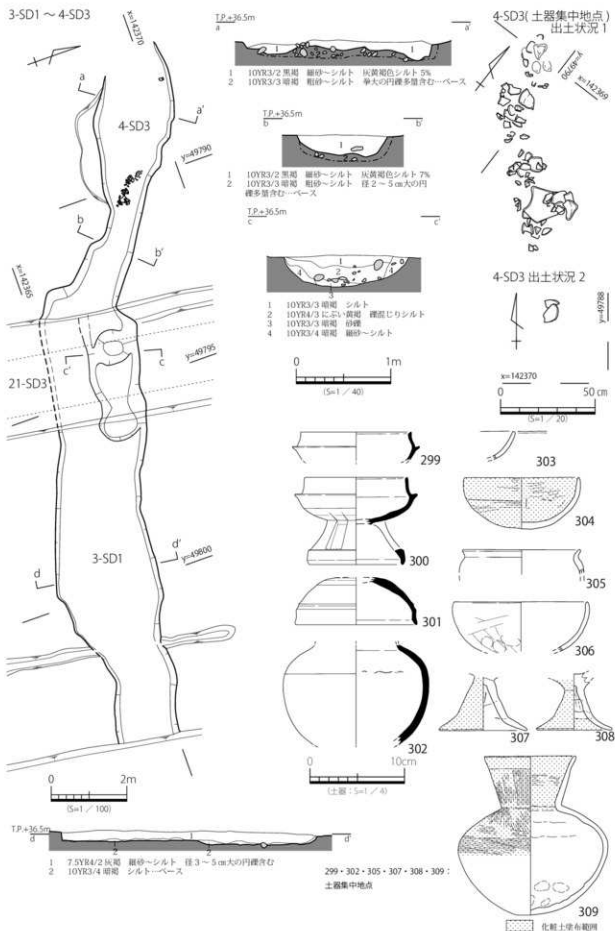


図 152 3-SD1・4-SD3 平・断面図及び出土遺物実測図

直し後の堆積と考えられる。埋土は褐シルト～細砂と暗褐極細砂、暗褐シルト～細砂、暗褐細砂～極細砂、暗褐細砂～シルト褐細砂～極細砂である。下層の埋土は暗褐シルトと褐細砂、褐細砂～シルト、暗赤褐シルトである。一部に流水堆積が確認できた。

c 断面では 8～10 層、7 層、1～6 層の順に堆積したと考えられる。1～6 層を上層、7 層を中層、8～10 層を下層として扱う。上層は下層が埋没した後、溝の掘り直し後の堆積と考えられる。埋土はにぶい黄褐粗砂混じり細砂とにぶい黄褐細砂、暗褐シルト混じり細砂、暗褐粗砂混じり細砂～シルト、にぶい黄褐粗砂～細砂、暗褐細砂である。中層の埋土は暗褐砂礫混じりシルトである。下層は暗褐細砂～シルトと暗褐粗砂混じりシルトである。

d 断面では 10・11 層、7～9 層、1～6 層の順に堆積したと考えられる。1～6 層を上層、7～11 層を下層として扱う。上層は下層が埋没した後、溝の掘り直し後の堆積と考えられる。埋土は褐粗砂混じりシルトとにぶい黄褐粗砂～細砂、褐粗砂～細砂、暗褐粗砂混じりシルト、にぶい黄褐細砂～シルトである。下層は東側の肩の褐砂礫混じりシルトと暗褐粗砂混じりシルトが埋没した後、黒褐細砂～シルトと暗褐砂礫混じりシルト、黒褐細砂混じりシルトが堆積していた。

e 断面では溝の掘り直しが確認できなかった。溝の周辺のベースが砂礫層であり、ここで溝幅が狭くなっている。当初から溝幅が狭く、溝の掘り直しの際に、溝幅すべてを掘り直したと考えられる。埋土はにぶい黄褐細砂～シルトと暗褐粗砂混じりシルト、にぶい黄褐極細砂、黒褐細砂～シルト、暗褐粗砂混じりシルトである。一部に流水堆積が確認できた。

f 断面では、4 層、1～3 層の順に堆積していた。埋土は暗赤褐細砂混じりシルトと極暗褐細砂、暗褐シルト、にぶい赤褐細砂～シルトである。

遺物は最下層から土師器杯 (326)・皿 (327)、須恵器杯蓋 (325)・杯 (321・322・323)・盤 (324)、石甕 (S30) が出土した。掘方から須恵器蓋 (310)、土師器甕 (317) が出土した。その他は、層位不明か埋土出土で取り上げを行った。また図示した遺物の他に、須恵器高杯片・甕片・壺片、土師器甕片・甕片・高杯片・杯片・精製土器片・把手・碗片、さされ石が出土した。

最下層出土の畿内系土師器 (362) から、本溝の開

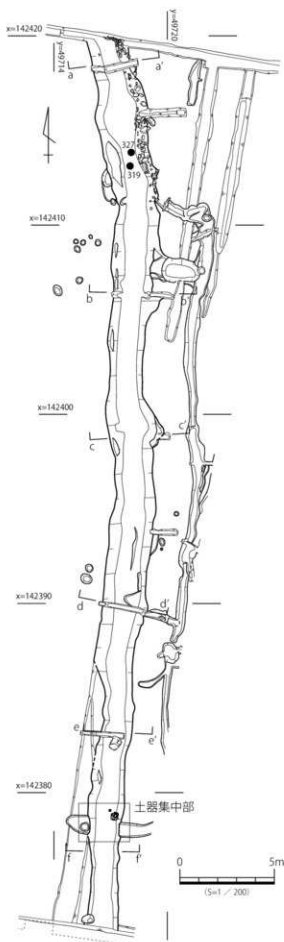


図 153 9-S0205 平面図

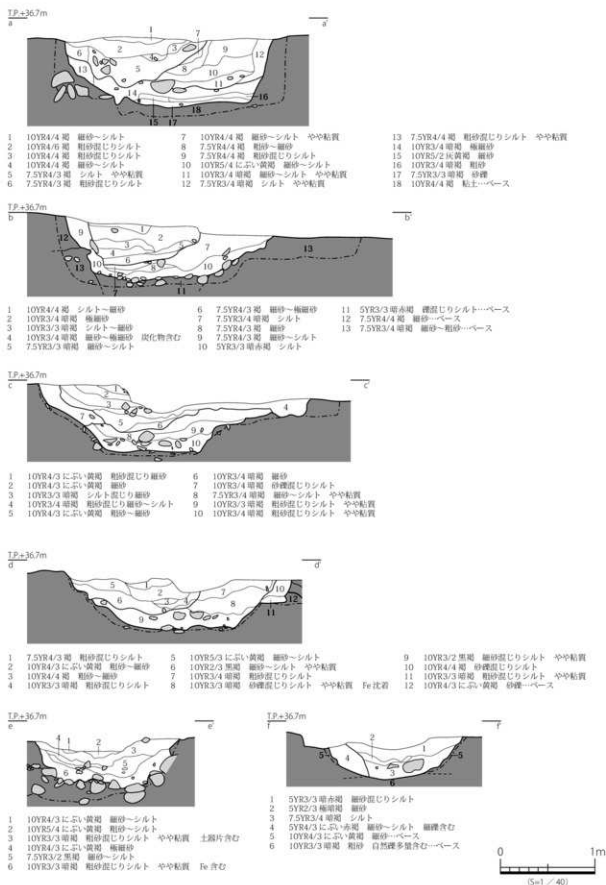


図 154 9-SD205 断面図

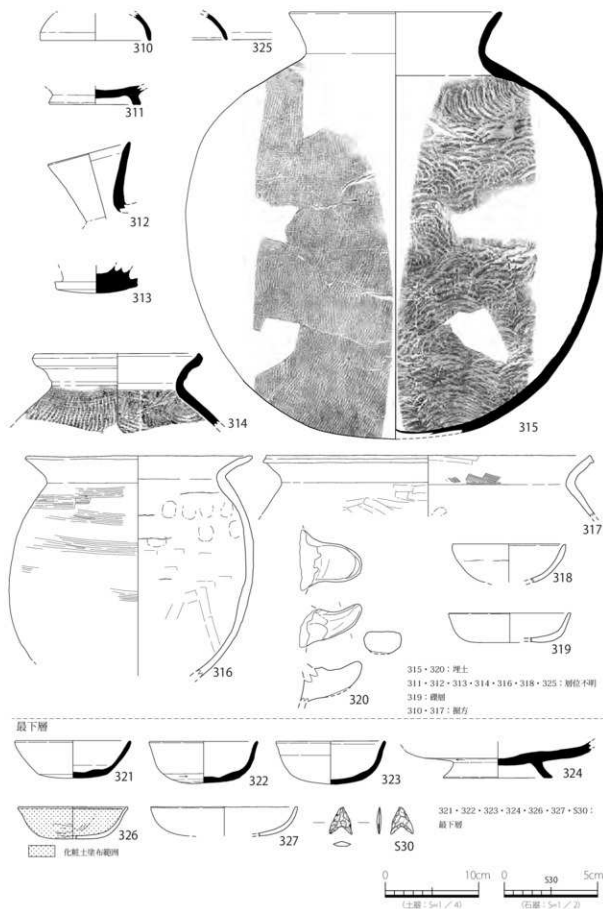


図 155 9-SD205 出土遺物実測図

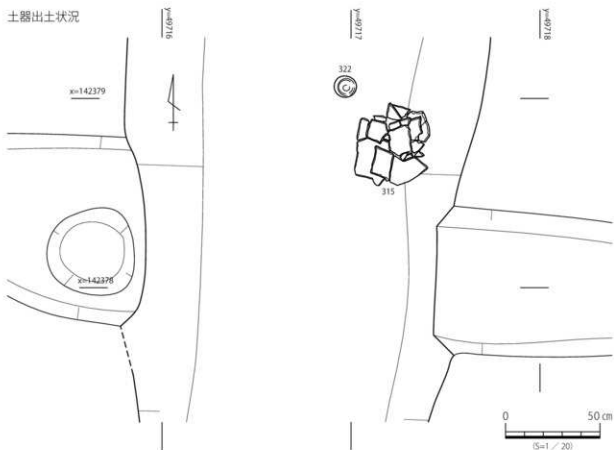


図 156 9-SD205 土器出土状況図

掘時期は、7 世紀中葉と判断できる。

11-S D 2(図 157)

第 11 調査区の西側で南北に検出した 9-S D 205 と同一の溝である。直線的に方位 N-16°-W で、11-S D 1 に切られ、調査区外に延びる。検出面の標高は約 36.5m 前後である。幅は約 1.62m、深さは 1.08m を測る。断面形状は逆台形から V 字形に変化する。

溝の掘り直しが確認でき、少なくとも 5 段階にわたり溝が埋没していった過程が読み取れる。埋土を上層から①～⑤段階に分けて記載する。最終埋没である①段階の埋土は、にぶい黄褐粗砂と灰黄褐シルト～粘土、にぶい黄褐粗砂と暗褐砂礫混じりシルト～粘土である。②段階の埋土は暗褐シルト～粘土とにぶい黄褐粘土混じり細砂、黒褐シルト混じり粘土、にぶい黄褐シルト～粘土、灰黄褐粗砂～細砂、黒褐シルト～粘土、灰黄褐粗砂である。③段階の埋

土はにぶい黄褐シルト混じり粘土と灰黄褐細砂～シルト、④段階では灰褐シルト～粘土と黒褐シルト～粘土である。⑤段階では褐砂礫と灰黄褐粗砂、灰褐細砂の水平堆積が確認できた。

遺物は土師器片が出土している。

11-S D 3(図 157)

第 11 調査区の西側で南北に検出した溝である。直線的に方位 N-6.5°-W で調査区外に延びる。11-S D 4 に切られる。第 9 調査区で確認できなかったことから、9-S D 205 から分岐した可能性が考えられる。検出面の標高は約 36.5～36.4m である。幅約 3.5m 深さは 0.44m を測る。断面形状は浅い皿状である。

溝の掘り直しが確認でき、最終埋没時の堆積が褐細砂～シルトとにぶい黄褐粗砂～シルト。機能時の堆積の上層かにぶい黄褐粗砂混じりシルトと褐細砂～シルト、にぶい黄褐細砂～シルト、下層がにぶ

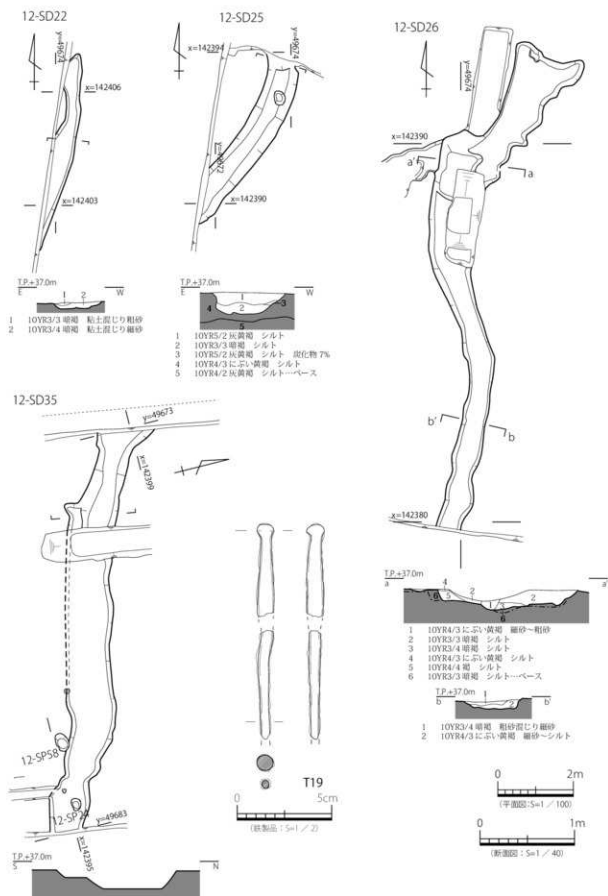


図 158 12-SD22・25・26・35 平・断面図及び出土遺物実測図

13-SD1

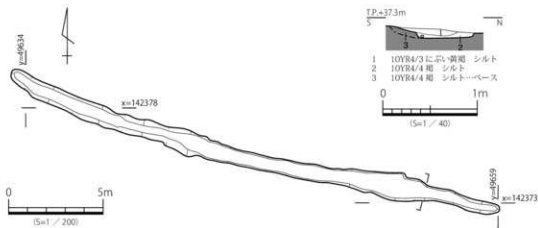


図 159 13-SD1 平・断面図

い黄褐シルト～粘土と褐細砂混じり粘土である。

遺物は土師器片が出土しているが、細片であるため、詳細な時期は不明である。

11-S D 4(図 157)

第 11 調査区の西側で南北に検出した溝である。直線的に方位 N-8.5°-W で調査区外に延びる。11-S D 3 を切る。第 9 調査区で確認できなかったことから、9-S D 205 から分岐した可能性が考えられる。検出面の標高は約 36.5m である。幅約 1.34m 深さは 0.34m を測る。断面形状は逆台形である。

埋土は、上層が褐粗砂と暗褐シルト～粗砂、中層が暗褐粗砂混じりシルトと暗褐粗砂～細砂、下層が褐粗砂～シルトである。

遺物は図示できなかったが、須恵器破片・壺片、土師器高杯片が出土している。出土遺物が小片のため、詳細な時期は不明である。

11-S D 1(図 157)

第 11 調査区の西側で南北に検出した 9-S D 200 と同一の溝である。直線的に方位 N-1°-W で調査区外まで延びる。検出した標高は 36.6～36.5m である。幅は 0.56～0.85m、深さは約 0.7m を測る。断面形状は逆台形である。

埋土は上層がにぶい黄褐粘土混じり砂礫、中層がにぶい黄褐粗砂、下層がにぶい黄褐粘土混じり粗砂～細砂である。

遺物は須恵器片が出土しているが、細片のため詳

細な時期は不明である。9-S D 205 との切り合い関係から、7 世紀半ば以降と考えられる。

12-S D 22(図 158)

第 12 調査区の中央やや西で検出した溝である。主軸方位 N-11°-W、調査区外からやや直線的に延びる。検出面の標高は 36.9～36.8m である。

長さ約 5.23m を検出し、幅は約 0.48m、深さは約 0.06m を測る。断面形状は浅い皿状である。

埋土は、暗褐粘土混じり粗砂である。

遺物は図示できなかったが、須恵器壺片、土師器足釜片が出土した。出土遺物から、中世と考えられる。

12-S D 25(図 158)

第 12 調査区の南西で検出した溝である。調査区外から延び、主軸方位 N-32°-E でやや湾曲する。検出面の標高は約 37.0m である。

長さ約 4.5m を検出し、幅は約 0.76m、深さは 0.42m を測る。断面形状は逆台形である。埋土は、上層が灰黄褐シルト、下層が暗褐シルトである。

遺物は須恵器高杯片が出土したが、細片のため詳細な時期は不明である。

12-S D 26(図 158)

第 12 調査区の南西で検出した溝である。調査区外から延び、主軸方位 N-9°-E で蛇行する。検出面の標高は約 37.0m である。長さ約 13.4m、幅約

1.46～0.6m、深さは0.2mを測る。断面形状は浅い皿状から不整形である。埋土はa断面で上層が暗褐シルト、下層が暗褐シルトと褐シルトである。b断面では上層が暗褐粗砂混じり細砂、下層がにぶい黄褐細砂～シルトである。

遺物は図示できなかったが、須恵器杯身片・壺片・杯A片、土師器皿片、黒色土器A類片が出土した。

12-S D 35(図158)

第12調査区の中央で検出した溝である。調査区外から延び、方位N-70°-Wで直行する。検出面の標高は約36.9mである。検出長約11m、幅約1.25m、深さは約0.2mを測る。断面形状は浅い皿状を呈し、一部テラスがある。底部の傾斜はほぼ無い。

遺物は鉄製丸釘(T19)、その他図示できなかったが、土師器甕把手、須恵器鐏鉢、陶磁器碗・紅皿、瓦質羽釜、土師質碗・蓋・皿・野壺・燈明皿、瓦、金属製品(キセル?)、サヌカイト剥片、火打石などが出土した。

13-S D 1(図159)

第13調査区の北側で検出した溝である。主軸方位N-74°-Wで、やや湾曲して調査区外に延びる。検出面の標高は約37.2mである。

長さ約26.7mを検出し、幅は約1.3～0.8mで、深さは約0.3～0.1mを測る。断面形状は浅い皿状から椀状である。

埋土は上層がにぶい黄褐シルト、下層が褐シルトである。

遺物は図示できなかったが、須恵器杯身片・壺片・甕片・杯片、土師器高杯片・皿片、黒色土器A類片が出土した。

13-S D 2(図160)

第13調査区の中央で検出した東西方向の溝である。主軸方位N-70°-Wで、やや湾曲して調査区外に延びる。検出面の標高は約37.8～37.5mである。

長さ約33.6mを検出し、幅は約1.0～0.4m、深さは0.4～0.1mを測る。断面形状は椀状から不整形である。

埋土はa断面で、暗褐シルトと褐シルト、b断面でにぶい黄褐シルトである。

遺物が出土していないため、詳細な時期は不明である。

ある。

13-S D 3(図160)

第13調査区の中央で検出した溝である。13-S D 2と併行する。主軸方位N-70°-Wで、やや湾曲して調査区外に延びる。検出面の標高は約37.85～37.5mである。

長さ約34.0m、幅は約1.3～0.6m、深さは約0.2～0.02mを測る。断面形状は浅い皿状から不整形である。

埋土はa断面で上層がにぶい黄褐シルト、下層が褐シルト、b断面で灰黄褐シルトである。

遺物が出土していないため、詳細な時期は不明である。

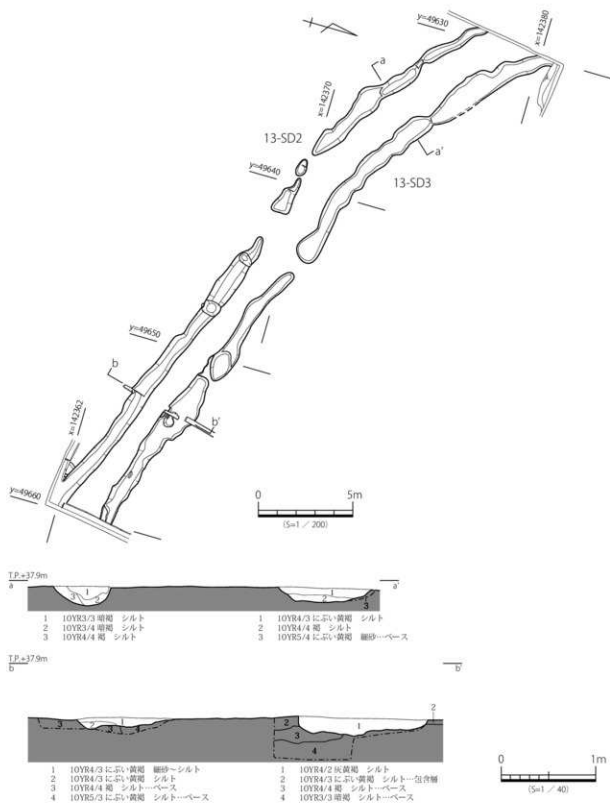


図 160 13-SD2・3 平・断面図

(5) SK

3-SK 3(図 161)

第3調査区の南側で検出した土坑である。主軸方位 N-2° -E、検出面の標高は 35.8m である。

平面形状は不整形円形で、長軸約 0.88m、短軸約 0.7m、深さ約 0.24m を測る。断面形状は椀状である。

埋土は上層が暗褐色細砂、下層が暗褐色細砂～シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

3-SK 28(図 161)

第3調査区の北側で検出した土坑である。主軸方位 N-14.5° -W、検出面の標高は 36.0m である。

平面形状は楕円形で、長軸約 0.96m、短軸約 0.76m、深さ約 0.28m を測る。断面形状は逆台形である。底部に炭が敷かれてあった。埋土は上層が黒褐色細砂～シルト、下層が炭層で暗褐色細砂～シルト混じる。

遺物は図示できなかったが、土師器甕の把手が出土した。炭化物で樹種同定と AMS 分析を行った結果、樹種がクリ近種、AMS が cal SD406 - 537 と 534 - 636、394 - 534 という分析結果を得た。

3-SK 102(図 161)

第3調査区中央で検出した土坑である。主軸方位 N-53° -E、検出面の標高は 36.0m である。

平面形状は不整形で、長軸約 2.42m、短軸約 1.43m、深さ約 0.56m を測る。断面形状は「へ」の字形である。埋土は、上層がにぶい黄褐色シルト、下層が黒褐色細砂～シルトと暗褐色シルト、地山ブロック土を多量に含む褐色細砂～シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

3-SK 29(図 161)

第3調査区の北側で検出した土坑である。3 - 壁 40 に切られる。主軸方位 N-0° -W、検出面の標高は 35.9m である。

平面形状は長方形を呈し、長軸約 2.1m、短軸約 1.0m、深さ約 0.32m を測る。断面形状は方形である。埋土は単層で暗褐色シルトである。

遺物は図示できなかったが、須恵器杯身片・高杯片が出土した。いずれも細片のため、詳細な時期は不明である。切り合い関係から、古墳時代後期頃

と考えられる。

3-SK 101(図 161)

第3調査区の中央で検出した土坑である。主軸方位 N-5.5° -E、検出面の標高は 36.0m である。

平面形状は不整形で、長軸約 1.54m、短軸約 0.68m、深さ約 0.6m を測る。断面形状は V 字形である。埋土は黒褐色シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

3-SK 106(図 161)

第3調査区の中央で検出した土坑である。主軸方位 N-89° -E、検出面の標高は 35.9m である。

平面形状は長方形で、長軸約 2.36m、短軸約 0.76m、深さ約 0.24m を測る。断面形状は不整形である。埋土は単層で、黒褐色シルトである。

遺物は須恵器杯蓋(328)・杯身(329)が出土した。図示した遺物の他に、須恵器杯身片が出土した。出土遺物の年代から T K 43 型併行期と判断できる。

3-SK 107(図 161)

第3調査区の中央で検出した土坑である。主軸方位 N-87° -E、検出面の標高は 35.9m である。

平面形状は長方形で、長軸約 2.55m、短軸約 0.96m、深さ約 0.35m を測る。断面形状は逆台形である。埋土は上層が黒褐色シルト、下層が地山ブロック土を含む黒褐色シルトである。

遺物は須恵器高杯蓋(330)が出土した。SK 106 との関係から同時期の遺構の可能性が考えられる。

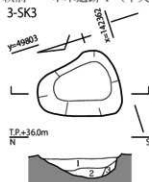
3-SK 37(図 162)

第3調査区の北側で検出した土坑である。調査区外へと広がるため、全体の形状は不明である。風倒木痕の可能性がある。主軸方位 N-85.5° -W、検出面の標高は 36.0m である。

平面形状は不整形で、長軸約 1.82m 以上、短軸約 1.82m、深さ約 0.20m を測る。断面形状は逆台形で段落ちを有する。埋土は 2 層に分層でき、上層が黒褐色シルト、下層が黒褐色細砂混じりシルトである。

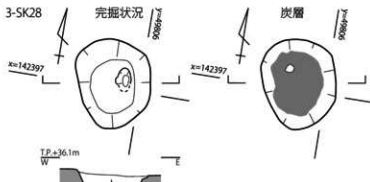
遺物は図示できなかったが、土師器片が出土した。細片のため、詳細な時期は不明である。

萩前・一本木遺跡 I (中央区画)
3-SK3



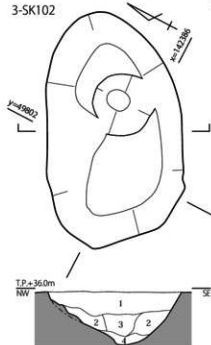
- 1 10YR3/4 暗褐色 径2~5cm大の円形含む
- 2 10YR3/4 暗褐色 細砂~シルト
- 3 10YR4/1 暗灰色 細砂~シルト

3-SK28



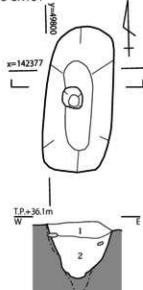
- 1 10YR2/3 黒褐色 細砂~シルト ブロック7% 下層に炭散じる
- 2 炭層

3-SK102



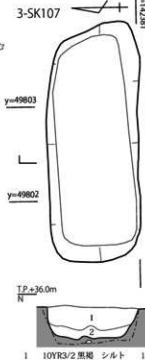
- 1 10YR4/3 に近い黄褐色 シルト
- 2 7.5YR3/2 黒褐色 細砂~シルト
- 3 7.5YR3/3 暗褐色 シルト
- 4 7.5YR4/3 暗褐色 細砂~シルト 地山ブロック多量含む

3-SK101



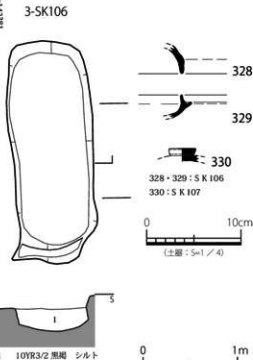
- 1 10YR3/2 黒褐色 シルト しまり強
- 2 10YR2/2 黒褐色 シルト しまりあり

3-SK107



- 1 10YR3/2 黒褐色 シルト 地山ブロック含む
- 2 10YR2/2 黒褐色 シルト 粘質 地山ブロック含む

3-SK106



- 1 10YR3/3 暗褐色 シルト やや粘質 炭化物含む 土器片含む

3-SK29

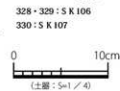
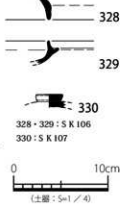
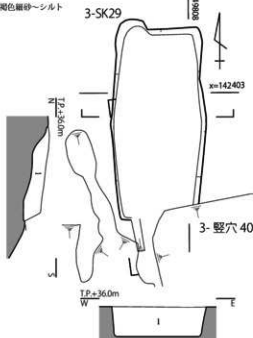


図 161 3-SK3・28・29・101・102・106・107 平・断面図及び出土遺物実測図

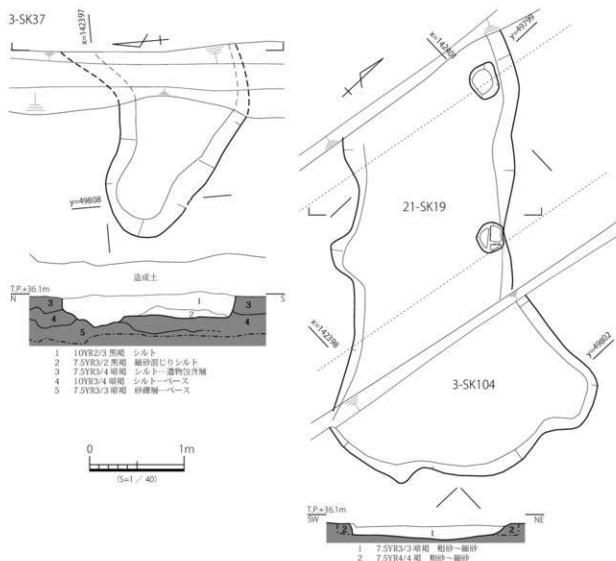


図 162 3-SK37、3-SK104・21-SK19 平・断面図

3-SK104・21-SK19 (図 162)

第3・21調査区の北側で検出した土坑である。調査区外へと広がるため、全体の形状は不明である。主軸方位 N-48°-W、検出面の標高は 35.9m である。

平面形状は不整形で、長軸約 4.2m 以上、短軸約 2.7m、深さ約 0.14m を測る。断面形状は不整形である。埋土は単層で、暗褐粗砂～細砂である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

4-SK25 (図 163)

第4調査区の北側で検出した土坑である。主軸方位 N-79°-W、検出面の標高は 36.15m である。

平面形状は隅丸方形で、長軸約 2.1m、短軸約 1.0m、深さ約 0.34m を測る。断面形状は方形である。埋土は2層に分層でき、上層が暗褐シルト、下層が黒褐シルト～粘土である。

遺物は図示できなかったが、須恵器片・土師器片が出土した。いずれも細片のため、詳細な時期は不明である。

4-SK102 (図 163)

第4調査区の北側で検出した土坑である。主軸方位 N-90°-W、検出面の標高は 36.0m である。

平面形状は不整形で、長軸約 1.59m、短軸約 0.98m、深さ約 0.24m を測る。断面形状は逆台形で段落ちを有する。埋土は2層に分層でき、上層が黒褐シルト、下層が褐細砂～シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

4-SK100 (図 163)

第4調査区の北側で検出した土坑である。主軸方位 N-90°-W、検出面の標高は 36.1m である。

平面形状は不整形で、長軸約 5.0m、短軸約 1.06m、深さ約 0.17m を測る。断面形状は不整形である。埋土は単層で、暗褐細砂～シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

4-S K 105(図 163)

第 4 調査区の中央で検出した土坑である。主軸方位 N-76.5°-E、検出面の標高は 36.05m である。

平面形状は不整形で、長軸約 1.5m、短軸約 1.2m、深さ約 0.19m を測る。断面形状は逆台形である。埋土は 2 層に分層でき、上層が黒褐シルト、下層が暗褐シルト～極細砂である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

21-S K 1(図 163)

第 21 調査区の南側で検出した土坑である。調査区外へと広がるため、全体の形状は不明である。主軸方位 N-76.5°-W、検出面の標高は 36.1m である。

平面形状は不整形で、長軸約 1.42m、短軸約 0.7m 以上、深さ 0.42m を測る。断面形状は椀状である。埋土は、上層が地山ブロック土を含む黒褐粘質シルト、中層が黒褐シルト、下層が暗褐シルトと暗褐粘質シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

4-S K 107(図 164)

第 4 調査区の北側で検出した土坑である。主軸方位 N-75°-W、検出面の標高は 35.95m である。

平面形状は長方形で、長軸約 2.8m、短軸約 1.2m、深さ約 0.4m を測る。断面形状は逆台形である。一部に段落ちを有する。埋土は 2 層に分層でき、上層が暗褐シルト、下層がにぶい黄褐細砂である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

4-S K 50(図 164)

第 4 調査区の北で検出した土坑である。4- 掘 50 の掘方掘削後に検出した。主軸方位 N-25°-E、検出面の標高は 35.65m である。

平面形状は洋梨形で、長軸約 2.22m、短軸 1.06m、深さ約 0.46m を測り、断面形状は「へ」の字形である。埋土は黒褐シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

4-S K 120(図 164)

第 4 調査区の北側で検出した土坑である。主軸方位 N-72°-W、検出面の標高は 36.1m である。調査区外へと広がるため、全体の形状は不明である。

平面形状は不整形で、長軸 2.0m 以上、短軸約 0.98m、深さ約 0.3m を測る。断面形状は逆台形で段落ちを有する。埋土は 2 層に分層でき、上層が灰黄褐シルト、下層が地山ブロック土を含む灰黄褐シルト～極細砂である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

21-S K 7(図 165)

第 21 調査区の南側で検出した土坑である。主軸方位 N-46.5°-W、検出面の標高は 36.0m である。

平面形状は不整形で、長軸約 1.48m、短軸約 0.95m、深さ約 0.2m を測る。断面形状は逆台形で、段落ちを有する。埋土は 3 層に分層でき、上層がにぶい黄褐細砂～シルト、中層が黒褐シルト、下層がにぶい黄褐細砂である。

遺物は土師器轆轤(331)が出土したが、詳細な時期は不明である。

4-S K 2(図 165)

第 4 調査区の南側で検出した土坑である。主軸方位 N-95°-E、検出面の標高は 36.3m である。焼土層が確認でき、竪穴建物の可能性がある。

平面形状は不整形で、調査区外に展開する。規模は、長辺約 2.84m、短辺約 0.86m、最深部で約 0.25m を測る。埋土は暗灰黄細砂～シルトである。

遺物は須恵器杯蓋(332・333)・杯身(334)・高杯(335)、土師器甕(336)が出土した。図示した遺物の他に、須恵器杯身片、土師器高杯片・甕片が出土した。出土遺物から T K 23～T K 47 型式併行期と判断できる。

5-S K 11(図 166)

第 5 調査区の北側で検出した土坑である。主軸方位 N-19°-E、検出面の標高は 36.1m である。

平面形状は方形で、長軸約 1.2m、短軸約 0.76m、深さ約 0.06m を測る。断面形状は浅い皿状である。埋土は単層で暗褐細砂～シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

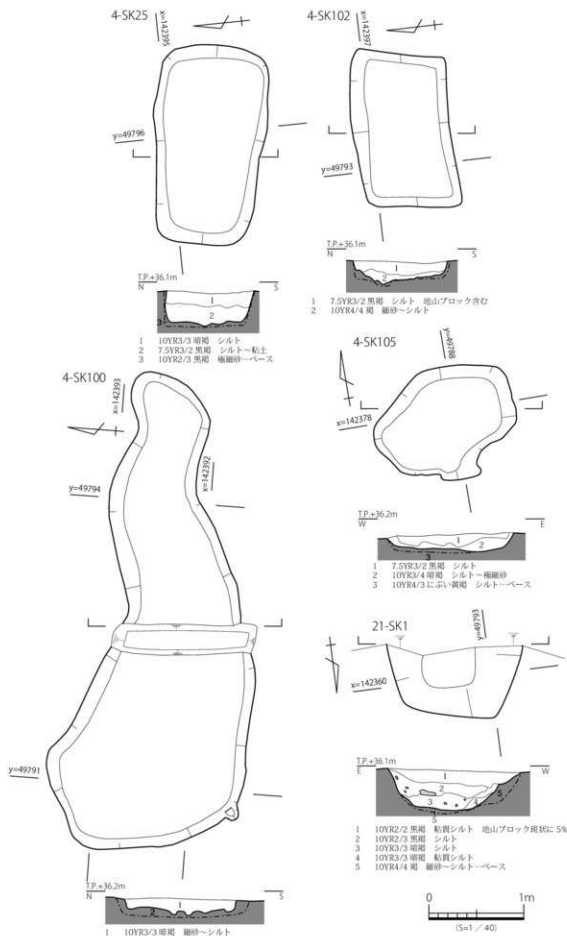


図 163 4-SK25・100・102・105、21-SK1 平・断面図

5-S K 67 (図 166)

第5調査区の中央で検出した土坑である。5- 竪穴 35 の掘方掘削後に検出した。主軸方位 N-52.5° -E、検出面の標高は 36.0m である。

平面形状は不整形で、長軸約 1.36m、短軸約 0.3m、深さ約 0.1m を測る。断面形状は浅い皿状である。埋土は単層で暗褐シルトである。

遺物が出土していないため、詳細な時期は不明である。切り合い関係から古墳時代後期以前と考えられる。

5-S K 68 (図 166)

第5調査区の中央で検出した土坑である。5- 竪穴 35 の掘方掘削後に検出した。主軸方位 N-83.5° -E、検出面の標高は 36.0m である。

平面形状は不整形で、長軸約 1.6m、短軸約 0.72m、深さ約 0.29m を測る。断面形状は逆台形である。埋土は2層に分層でき、上層が暗褐細砂混じりシルト、下層が褐細砂〜シルトである。

遺物が出土していないため、詳細な時期は不明である。切り合い関係から古墳時代後期以前と考え

られる。

5-S K 53 (図 166)

第5調査区の中央で検出した土坑である。主軸方位 N-75.5° -E、検出面の標高は 36.15m である。平面形状は方形で、長軸約 1.8m、短軸約 1.22m、深さ約 0.5m を測る。断面形状は不整形である。埋土は3層に分層でき、上層が褐シルト、中層が褐細砂〜シルト、下層がにぶい黄褐粘質土である。風倒木痕の可能性が考えられる。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

5-S K 69 (図 166)

第5調査区の中央で検出した土坑である。5- 竪穴 30 の掘方掘削後に検出した。主軸方位 N-41° -W、検出面の標高は 35.9m である。

平面形状は不整形で、長軸約 1.4m、短軸約 1.0m、深さ約 0.19m を測る。断面形状は逆台形である。埋土は2層に分層でき、上層が暗褐シルト、下層がにぶい赤褐シルトである。

遺物が出土していないため、詳細な時期は不明

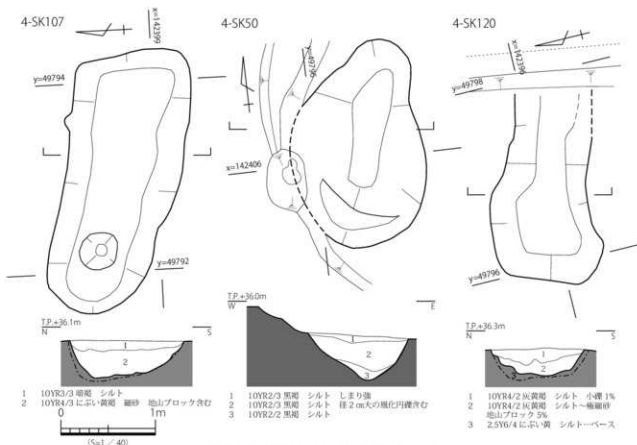


図 164 4-SK50・107・120 平・断面図

である。切り合い関係から古墳時代後期以前と考えられる。

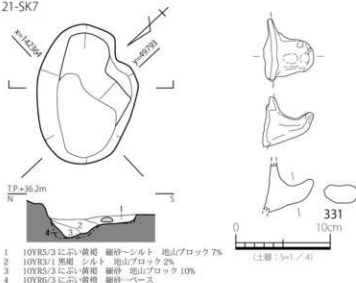
22-S K 2(図 166)

第22調査区の南側に検出した土坑である。主軸方位 N-45°・W、検出面の標高は 36.2m である。

平面形状は楕円形で、長軸約 1.27m、短軸約 0.4m、深さ約 0.21m を測る。断面形状は逆台形である。埋土は 2 層に分層でき、上層が暗褐色シルト、下層が黒褐色細砂〜シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

21-SK7



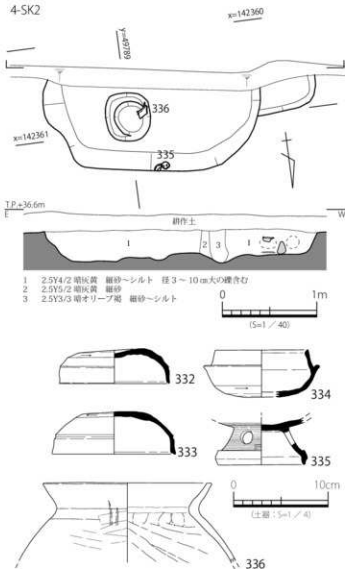
6-S K 12(図 167)

第6調査区の北側に検出した土坑である。主軸方位 N-20.5°・E、検出面の標高は 36.25m である。土坑墓の可能性が想定できたため、平面を複数回に分けて下げて平面観察を行い、棺材の検出を試みたが、確認することができなかった。

平面形状は長方形で、長軸約 1.90m、短軸約 0.84m、深さ約 0.24m を測る。断面形状は方形である。埋土は 2 層に分層でき、上層が褐色細砂〜シルト、下層が暗褐色細砂〜シルトである。

遺物は須恵器杯蓋 (337) が出土した。図示した遺物の他に、須恵器杯蓋片・杯身片・高杯片が、土師器高杯片が出土した。須恵器杯蓋 (337) や焼成不良の杯身なども出土しているため、TK 10 型式以降と考えられる。

4-SK2



6-S K 15(図 167)

第6調査区の中央に検出した土坑である。主軸方位 N-12.5°・E、検出面の標高は 36.3m である。土坑墓の可能性が想定できたため、平面を複数回に分けて下げて平面観察を行い、棺材の検出を試みたが、確認することができなかった。

平面形状は長方形で、長軸約 1.88m、短軸約 0.54m、深さ約 0.2m を検出した。断面形状は方形である。埋土は 2 層に分層でき、上層が暗褐色シルト、下層が暗赤褐色シルトであ

図 165 21-SK7、4-SK2 平・断面図及び出土遺物実測図

る。

遺物は図示できなかったが、須恵器片・土師器片が出土した。いずれも細片のため、詳細な時期は不明である。

6-S K 16(図 167)

第6調査区の中央で検出した土坑である。主軸方位 N-11.5°-E、検出面の標高は 36.3m である。7- 堅穴 7 を切る。

平面形状は五角形で、長軸約 1.94m、短軸約 1.26m、深さ約 0.22m を測る。断面形状は方形である。埋土は単層で、暗褐色シルトである。

遺物は図示できなかったが、須恵器杯身片が出土した。細片のため、詳細な時期は不明である。切り合い関係から、古墳時代後期以降と考えられる。

6-S K 45(図 167)

第6調査区の北側で検出した土坑である。6- 堅穴 2 に切られる。主軸方位 N-67°-W、検出面の標高は 36.3m である。土坑墓の可能性が想定できたため、平面を複数回に分けて下げて平面観察を行い、棺材の検出を試みたが、確認することができなかった。

平面形状は長方形で、長軸約 2.14m、短軸約 0.72m、深さ約 0.26m を測る。断面形状は方形である。埋土は2層に分層で、上層が褐細砂～シルト、下層が暗褐色シルトである。

遺物は図示できなかったが、須恵器杯蓋片・杯身片が出土した。いずれも細片のため、詳細な時期は不明である。

6-S K 39(図 167)

第6調査区の北側で検出した土坑である。主軸方位 N-61.5°-W、検出面の標高は 36.3m である。土坑墓の可能性が想定できたため、平面を複数回に分けて下げて平面観察を行い、棺材の検出を試みたが、確認することができなかった。

平面形状は長方形で、長軸約 2.20m、短軸約 0.76m、深さ約 0.24m を測る。断面形状は方形である。埋土は単層で、褐細砂～シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

6-S K 14(図 167)

第6調査区の北側で検出した土坑である。6-S

K 39・45 と規模と主軸方位を等しくして並ぶ。6- 堅穴 1 を切る。主軸方位 N-62°-W、検出面の標高は 36.25m である。土坑墓の可能性が想定できたため、平面を複数回に分けて下げて平面観察を行い、棺材の検出を試みたが、確認することができなかった。

平面形状は長方形で、長軸約 2.38m、短軸約 0.82m、深さ約 0.16m を測る。断面形状は方形である。埋土は2層に分層で、上層が褐細砂混じりシルト、下層が暗褐色シルトである。

遺物は須恵器高杯片が出土したが、細片のため、詳細な時期は不明である。

6-S K 10(図 167)

第6調査区の南側で検出した土坑である。主軸方位 N-3°-W、検出面の標高は 36.4m である。土坑墓の可能性が想定できたため、平面を複数回に分けて下げて平面観察を行い、棺材の検出を試みたが、確認することができなかった。

平面形状は長方形で、長軸約 1.94m、短軸約 0.66m、深さ約 0.20m を測る。断面形状は方形である。埋土は2層に分層で、上層が暗褐色細砂～シルト、下層が褐シルトである。

遺物は、須恵器杯身片が出土したが、細片のため詳細な時期は不明である。

6-S K 18(図 168)

第6調査区の南側で検出した土坑である。主軸方位 N-8°-E、検出面の標高は 36.4m である。6- 掘立 1 を切る土坑墓の可能性が想定できたため、平面を複数回に分けて下げて平面観察を行い、棺材の検出を試みたが、確認することができなかった。

平面形状は長方形で、長軸約 2.20m、短軸約 0.80m、深さ約 0.28m を測る。断面形状は方形である。埋土は、上層が地山ブロック土を含む暗灰黄シルト、下層が黄灰シルトである。遺物は須恵器杯身が出土した。細片のため、詳細な時期は不明である。

6-S K 5・24-S K 5(図 168)

第6・24調査区境の中央で検出した土坑である。7- 堅穴 7 を切る。主軸方位 N-22°-E、検出面の標高は 36.3m である。

平面形状は長方形で、長軸約 3.52m、短軸約

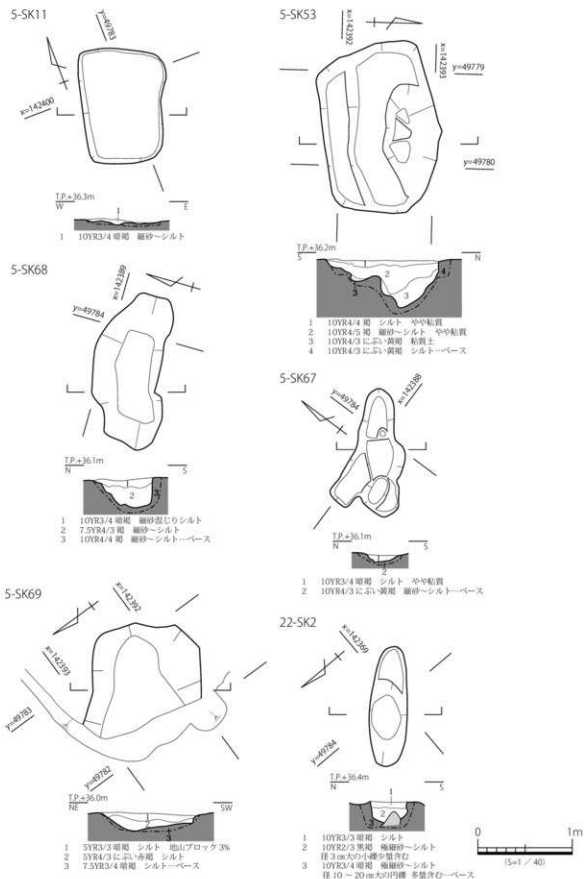


図 166 5-SK11・53・67・68・69、22-SK2 平・断面図

1.62m、深さ約 0.38m を測る。断面形状は方形である。埋土は 2 層に分層でき、上層が黒褐シルト、下層が灰黄褐細砂～シルトである。

遺物は須恵器杯身 (338)・高杯 (339) が出土した。出土遺物から T K 43 型式併行期と判断できる。

24-S K 6 (図 168)

第 24 調査区の中央で検出した土坑である。主軸方位 N-22°-E、検出面の標高は 36.1m である。平面形状は不整長方形で、長軸約 2.18m、短軸約 1.04m、深さ約 0.52m を測る。断面形状は逆台形である。埋土は 7 層に分層でき、上層が黒褐粘質シルト、中層が黒褐シルトと暗褐シルト、黒粘質シルト、黒褐粘質シルト、黒褐シルト、下層が暗褐シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

6-S K 24 (図 169)

第 6 調査区の北側で検出した土坑である。主軸方位 N-14.5°-E、検出面の標高は 36.3m である。

平面形状は隅丸長方形で、長軸約 1.06m、短軸約 0.64m、深さ約 0.22m を測る。断面形状は方形である。埋土は 5 層に分層でき、上層がにぶい黄褐シルトと褐粗砂、褐シルト、下層がにぶい黄褐細砂と灰褐細砂である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

6-S K 29 (図 169)

第 6 調査区の南側で検出した土坑である。主軸方位 N-1°-E、検出面の標高は 36.35m である。

平面形状は不整形で、長軸約 1.70m、短軸約 0.94m、深さ約 0.1m を測る。断面形状は浅い皿状である。埋土は単層で、暗褐細砂である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

23-S K 1 (図 169)

第 23 調査区の中央で検出した土坑である。主軸方位 N-77.5°-W、検出面の標高は 36.2m である。

平面形状は不整形で、長軸約 1.84m、短軸約 1.14m、深さ約 0.6m を測る。断面形状は逆台形で、段落ちを有する。埋土は 6 層に分層でき、上層が黒褐シルトと灰黄褐細砂～シルト、中層がにぶい黄橙細砂とにぶい黄褐細砂～シルト、下層が灰黄褐細砂～シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

24-S K 25 (図 169)

第 24 調査区の北側で検出した土坑である。主軸方位 N-61°-W、検出面の標高は 36.3m である。風倒木痕の可能性が考えられる。

平面形状は三日月形で、長軸約 3.2m、短軸約 2.06m、深さ約 0.76m を測る。断面形状は「へ」の字形で南側にテラスを有する。埋土は 7 層に分層でき、上層が灰黄褐シルトと灰黄褐シルト、中層がにぶい黄褐シルトと褐粘質シルト、下層が暗褐粘質シルトと褐シルト、暗褐粘質シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

24-S K 13 (図 169)

第 24 調査区の北側で検出した土坑である。主軸方位 N-89°-W、検出面の標高は 36.3m である。

平面形状は不整形で、長軸約 1.60m、短軸約 1.14m、深さ約 0.10m を測る。断面形状は不整形である。埋土は単層で、褐シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

24-S K 14 (図 170)

第 24 調査区の北側で検出した土坑である。主軸方位 N-5°-E、検出面の標高は 36.2m である。24-S K 2 が S K 14 を切る。S K 14 は調査区外へと延びる。

平面形状は不整形で、長軸約 1.75m、短軸約 1.1m 以上、深さ約 0.38m を測る。断面形状は不整形である。埋土は 2 層に分層でき、上層が暗褐細砂、下層がにぶい黄褐細砂～シルトである。

遺物は図示できなかったが須恵器片・土師器片が出土した。いずれも細片のため、時期は不明である。

24-S K 2 (図 170)

第 24 調査区の北側で検出した土坑である。24-S K 14 を切る。主軸方位 N-5°-E、検出面の標高は 36.3m である。平面形状は楕円形で、長軸約 0.70m、短軸約 0.58m、深さ約 0.3m を測る。断面形状は逆台形である。埋土は 3 層に分層でき、土器内が灰黄褐細砂～シルト、土器外の上層が暗褐細砂～シルト、下層が褐灰細砂～シルトである。

遺物は須恵器蓋 (340)、棒状鉄片 (T20) が出土し

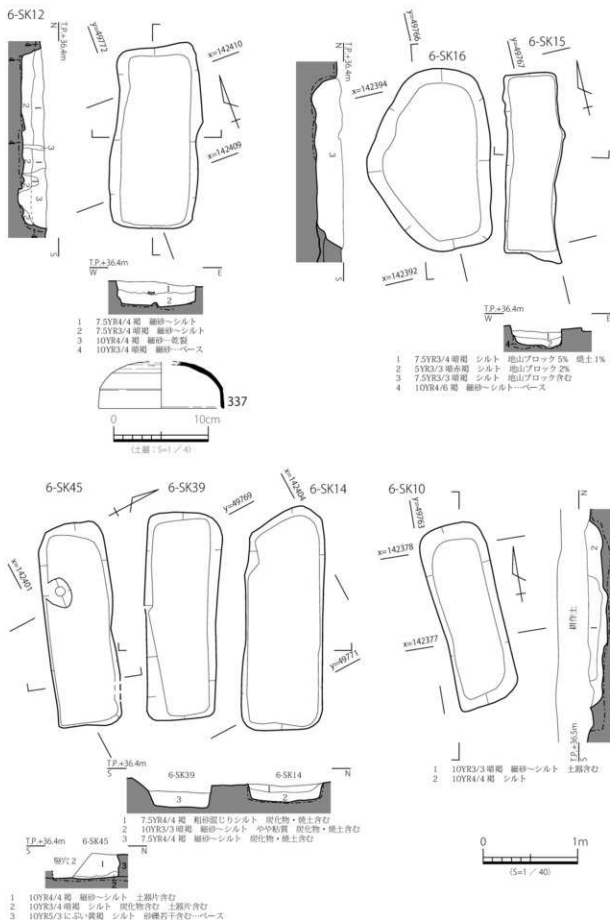


図 167 6-SK10・12・14・15・16・39・45 平・断面図及び出土遺物実測図

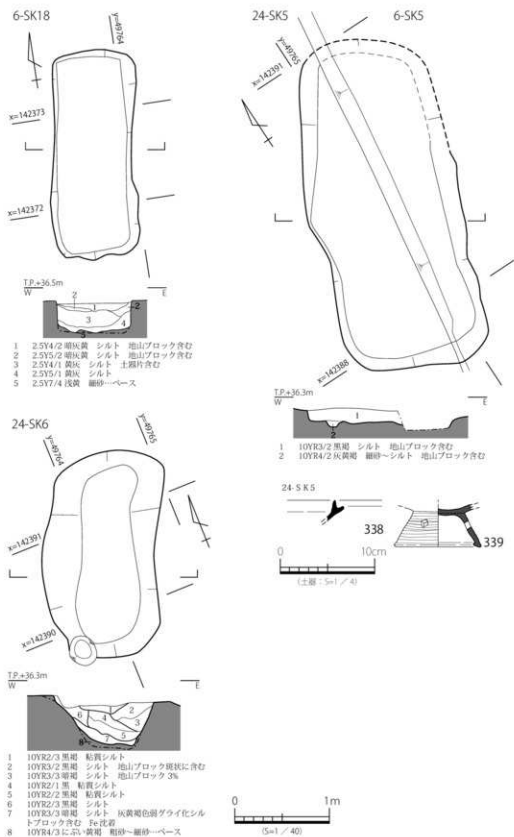


図 168 6-SK18、6-SK5・24-SK5、24-SK6 平・断面図及び出土遺物実測図

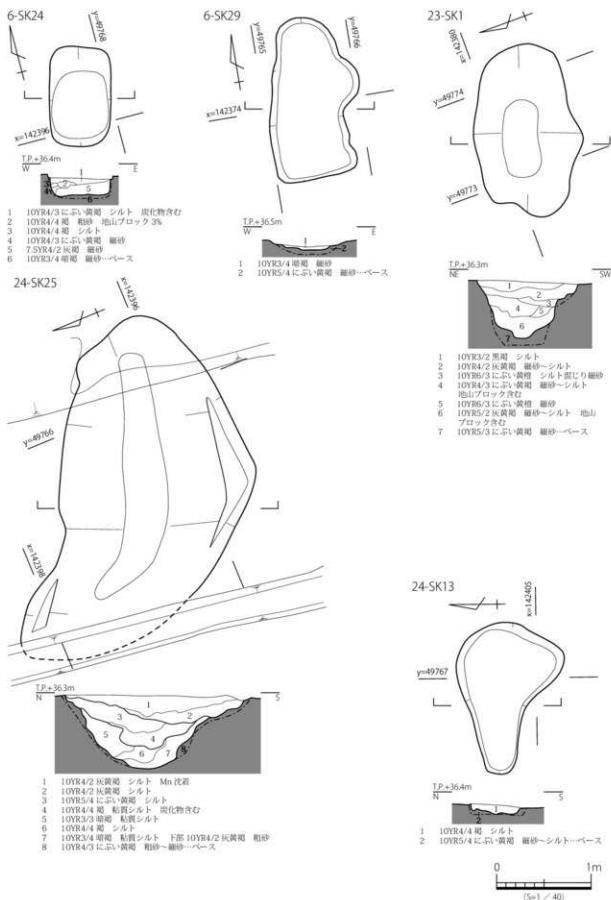


図 169 6-SK24・29、23-SK1、24-SK13・25 平・断面図

た。図示した遺物の他に、須恵器高杯片・甕片が出土した。

出土遺物から T K 23 ~ 47 型式併行期と判断できている。

6-S K 46・24-S K 8(図 170)

第 6・24 調査区の北側で検出した土坑である。6-S P 47 に切られる。主軸方位 N-53.5°-E、検出面の標高は 36.3m である。

平面形状は不整形で、長軸約 3.90m、短軸約 1.38m、深さ約 0.54m を測る。断面形状は逆台形である。埋土は a 断面で 2 層に分層でき、上層が暗褐粘質シルト、下層が暗褐シルトである。b 断面では 3 層に分層でき、上層が暗褐細砂～シルト、中層が暗赤褐細砂～シルト、下層が褐細砂～シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

24-S K 11(図 170)

第 24 調査区の中央で検出した土坑である。主軸方位 N-16.5°-W、検出面の標高は 36.1m である。7-竪穴 7 に切られる。

平面形状は不整形で、長軸約 1.44m、短軸約 1.05m、深さ約 0.22m を測る。

断面形状は不整形である。埋土は 2 層に分層でき、灰黄褐細砂～シルトと褐シルトである。

遺物が出土していないため、詳細な時期は不明であるが、切り合い関係から、古墳時代後期以前と考えられる。

24-S K 10・6-S K 13(図 170)

第 24・6 調査区の北側で検出した土坑である。24-S K 10 が 6-S K 13 を切る。S K 10 は主軸方位 N-82.5°-W、検出面の標高は 36.35m である。平面形状は不整形な長方形で、長軸約 2.54m、短軸約 1.16m、深さ約 0.48m を測る。断面形状は椀状でテラスを有する。埋土はにぶい黄褐細砂とにぶい黄橙粗砂である。

6-S K 13 は、攪乱に切られるため全体の形状は不明である。幅約 1.0 m、深さ約 0.25 m を測る。埋土は単層で暗褐細砂である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

7-S K 6(図 171)

第 7 調査区の北側で検出した土坑である。主軸方位 N-29.5°-W、検出した標高は 36.3m である。

平面形状は楕円形で、長軸約 2.50m、短軸約 1.28m、深さ約 0.54m を測る。断面形状は椀状で、西側にテラスを有する。埋土は 6 層に分層でき、上層が褐シルトとにぶい黄褐シルト、中層が暗褐極細砂と暗褐シルト、下層が褐極細砂～シルトと褐極細砂である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

7-S K 28(図 171)

第 7 調査区の南側で検出した土坑である。調査区外に広がる。主軸方位 N-89°-W、検出面の標高は 36.3m である。

平面形状は不整形で、長軸約 2.8m 以上、短軸約 1.22m、深さ約 0.6m を測る。断面形状は V 字形で北側にテラスを有する。埋土は、褐細砂～シルトとにぶい黄褐細砂～シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

7-S K 33(図 171)

第 7 調査区の南縁で検出した土坑である。調査区外に広がるため、全体の形状は不明である。主軸方位 N-73°-W、検出面の標高は 36.4m である。

平面形状は不整形で、長軸 1.3m 以上、短軸 0.4m 以上、深さ約 0.46m を測る。断面形状は不整形である。埋土は、にぶい黄褐シルトと灰黄褐シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

7-S K 48(図 171)

第 7 調査区の中央で検出した土坑である。第 42 調査区では検出できなかった。主軸方位 N-8.5°-W、検出面の標高は 36.4m である。

平面形状は不整形で、長軸約 0.94m、短軸 0.2m 以上、深さ約 0.26m を測る。断面形状は不整形である。埋土は 4 層に分層でき、上層が暗褐シルト、中層が褐シルトと暗褐シルト、下層が暗褐シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

7-S K 13(図 171)

第 7 調査区の中央で検出した土坑である。攪乱に

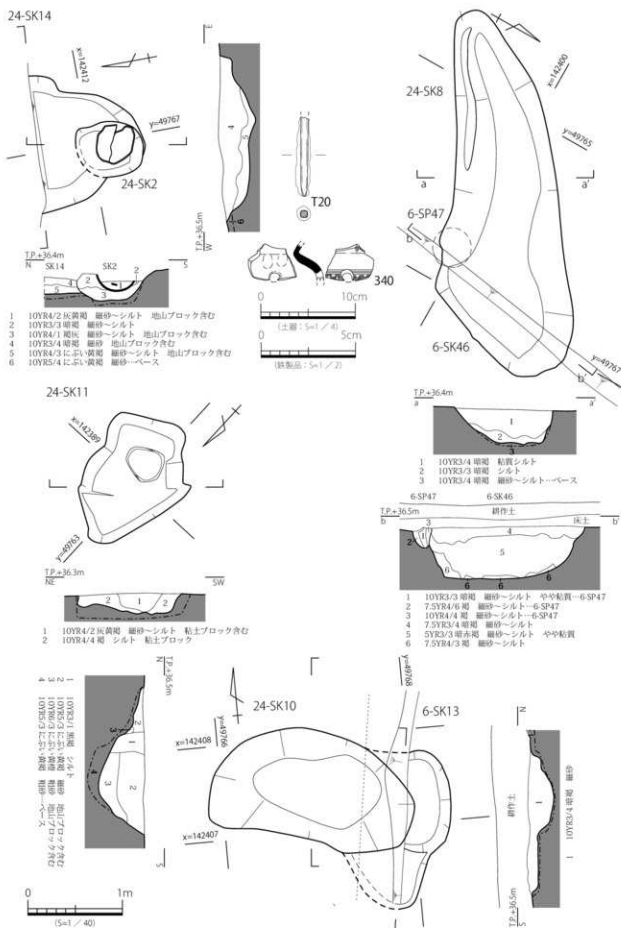
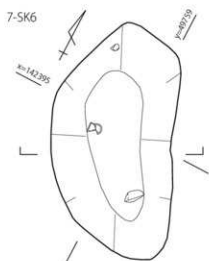


図 170 24-SK2・14、6-SK46・24-SK8、24-SK11、24-SK10・6-SK13 平・断面図及び出土遺物実測図



TP+36.4m
W E

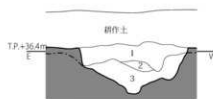
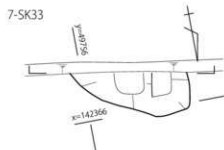


- 1 10YR4/4 堀 シルト
- 2 10YR4/3 堀に黄褐色 シルト
- 3 10YR3/4 堀堀 極細砂
- 4 10YR3/3 堀堀 シルト
- 5 10YR4/4 堀 極細砂-シルト
- 6 10YR4/4 堀 極細砂
- 7 10YR4/4 堀 細砂-シルト-ベース

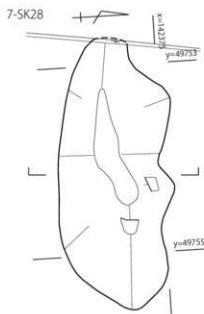


TP+36.4m
S N

- 1 10YR3/4 堀堀 細砂-シルト やや粘質地山ブロック 3%
- 2 10YR4/4 堀 シルト やや粘質 地山ブロック多量含む



- 1 10YR4/3 堀に黄褐色 シルト
- 2 10YR5/3 堀に黄褐色 シルト
- 3 10YR4/2 堀黄褐色 シルト

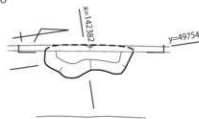


TP+36.4m
S N



- 1 7.5YR4/4 堀 細砂-シルト
- 2 7.5YR4/3 堀 細砂-シルト
- 3 10YR5/3 堀に黄褐色 細砂-シルト-ベース

7-SK48



- 1 5YR4/4 堀に黄褐色 シルト-遺物包含層
- 2 7.5YR3/4 堀堀 シルト
- 3 7.5YR4/4 堀 シルト
- 4 10YR3/4 堀堀 シルト
- 5 7.5YR3/4 堀堀 シルト
- 6 5YR3/4 堀赤褐色 シルト-ベース

0 1m
(5=1/40)

図 171 7-SK6・13・28・33・48 平・断面図

切られるため、全体の形状は不明である。主軸方位 N-81°-W、検出面の標高は 36.35m である。

平面形状は不整形で、長軸 1.2m 以上、短軸約 1.54m、深さ約 0.26m を測る。断面形状は浅い皿状である。埋土は 2 層に分層でき、上層が暗褐細砂～シルト、下層が地山ブロック土を多量に含む褐シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

8-S K 8(図 172)

第 8 調査区の南側で検出した土坑である。主軸方位 N-51°-W、検出面の標高は 36.4m である。

平面形状は不整形で、長軸約 1.72m、短軸約 0.84m、深さ約 0.42m を測る。断面形状は逆台形で、段落ちを有する。埋土は 3 層に分層でき、上層が暗褐細砂、中層が黒褐細砂、下層が暗褐細砂～シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

8-S K 16(図 172)

第 8 調査区の北側で検出した土坑である。8-SD6 に切られる。主軸方位 N-74°-E、検出面の標高は 36.35m である。

平面形状は円形で、長軸約 0.88m、短軸約 0.73m、深さ約 0.22m を測る。断面形状は逆台形である。埋土は上層が暗褐シルト、中層が地山ブロック土を含む極暗褐シルト～粘土、下層が黒粘土で炭化物が広がる。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

9-S K 1(図 172)

第 9 調査区の中央で検出した土坑である。主軸方位 N-39°-E、検出面の標高は 36.5m である。

平面形状は不整形で、長軸約 1.90m、短軸約 1.40m、深さ約 0.36m を測る。断面形状は不整形である。埋土は 3 層に分層でき、上層がにぶい黄褐シルト、中層が黄灰シルト、下層が灰黄褐シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

9-S K 2(図 172)

第 9 調査区の中央東側で検出した土坑である。主軸方位 N-3°-E、検出面の標高は 36.6m である。

平面形状は方形で、長軸約 1.26m、短軸約

0.82m、深さ約 0.18m を測る。断面形状は逆台形である。埋土は 2 層に分層でき、上層が灰黄褐シルト、下層が灰黄シルトである。

遺物は土師質土器杯(341)と、図示した遺物の他に、土師質土器杯片、黒色土器 A 類片、石英塊が出土した。

9-S K 4(図 172)

第 9 調査区の中央東側で検出した土坑である。8-9-S D 3 を切る。主軸方位 N-70°-W、検出面の標高は 36.4m である。

平面形状は台形で、長軸約 1.40m、短軸約 1.40m、深さ約 0.16m を測る。断面形状は浅い皿状である。埋土は単層で、褐細砂～シルトである。

遺物は土師器裏片が出土したが、細片のため、詳細な時期は不明である。切り合い関係から、古墳時代後期以降と考えられる。

9-S K 40(図 172)

第 9 調査区の中央東側で検出した土坑である。8-9-S D 3 を切る。主軸方位 N-89.5°-W、検出面の標高は 36.5m である。

平面形状は楕円形で、長軸約 1.14m、短軸約 0.94m、深さ約 0.16m を測る。断面形状は逆台形で、段落ちを有する。埋土は 2 層に分層でき、上層が炭化物を多量に含む暗褐シルト、下層が暗褐細砂～シルトである。

遺物は出土していない。切り合い関係から、古墳時代後期以降と考えられる。

43-S K 2(図 172)

第 43 調査区の中央で検出した土坑である。主軸方位 N-10°-E、検出面の標高は 36.3m である。第 8 調査区では検出できなかった。

平面形状は台形で、長軸約 0.80m、短軸約 0.5m、深さ約 0.20m を測る。断面形状は不整形である。埋土は 2 層に分層でき、上層が暗褐細砂混じりシルト、下層が褐中粒砂混じりシルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

9-S K 5(図 173)

第 9 調査区の北東で検出した土坑である。9-S D 117 に切られる。主軸方位 N-21.5°-E、検出面の標高は 36.4m である。

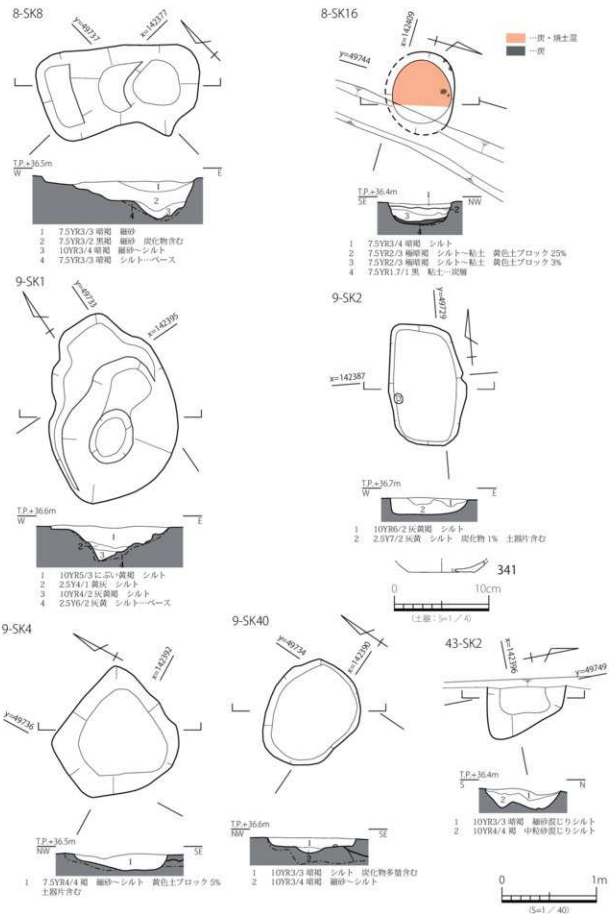


図 172 8-SK8・16、9-SK1・2・4・40、43-SK2 平・断面図及び出土遺物実測図

平面形状は楕円形で、長軸約2.14m、短軸約0.90m、深さ約0.54mを測る。断面形状は逆台形である。埋土は5層に分層でき、上層が暗褐シルトと暗褐細砂～シルト、極暗赤褐細砂～シルト、中層が極暗赤褐細砂、下層が地山ブロック土を含む極暗赤褐細砂～シルトである。

遺物が出土していないため、詳細な時期は不明である。切り合い関係から古墳時代後期以前と考えられる。

9-S K 7(図173)

第9調査区の南東で検出した土坑である。平面形状は不整形で、主軸方位N-49°-E、検出面の標高は36.5mである。

長軸約1.28m、短軸約0.32m、深さは0.26mを測る。断面形状は逆台形で段落ちを有する。

埋土は2層に分層でき、上層が褐細砂～シルト、下層が褐細砂～シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

9-S K 106(図173)

第9調査区の中央で検出した土坑である。主軸方位N-14.5°-W、検出面の標高は36.5mである。

平面形状は楕円形で、長軸約1.12m、短軸約0.64m、深さ約0.18mを測る。断面形状は逆台形である。埋土は2層に分層でき、上層が褐細砂～シルト、下層が暗褐細砂である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

9-S K 202(図173)

第9調査区の中央西側で検出した土坑である。主軸方位N-74.5°-W、検出面の標高は36.8mである。

平面形状は台形で、長軸約2.22m、短軸約0.60m、深さ約0.14mを測る。断面形状は逆台形である。埋土は3層に分層でき、褐シルトとにぶい黄褐細砂、暗褐極細砂である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

9-S K 207(図173)

第9調査区の中央西側で検出した土坑である。主軸方位N-66°-W、検出面の標高は36.7mである。

平面形状は卵形で、長軸約1.52m、短軸約1.00m、深さ約0.24mを測る。断面形状は逆台形である。埋土は3層に分層でき、暗褐粗砂混じり極

細砂と黒褐粗砂～細砂、暗オリーブ褐砂礫混じりシルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

9-S K 219(図173)

第9調査区の中央北側で検出した土坑である。9-S D 110を切る。主軸方位N-81°-W、検出面の標高は36.5mである。

平面形状は楕円形で、長軸約2.04m、短軸約1.18m、深さ約0.46mを測る。断面形状は桶状である。埋土は3層に分層でき、上層が褐粗砂混じりシルト、中層が暗赤褐粗砂混じりシルト、下層が褐粗砂である。

遺物は図示できなかったが、須恵器杯B片・壺片が出土した。出土遺物から古代と判断できる。

10-S K 3(図174)

第10調査区の西側で検出した土坑である。主軸方位N-56.5°-W、検出面の標高は36.1mである。風倒木痕の可能性が考えられる。

平面形状は三日月形で、長軸約2.82m、短軸約1.36m、深さ約0.5mを測る。断面形状は逆台形で、段落ちを有する。埋土は2層に分層でき、上層がにぶい黄褐細砂～シルト、下層が暗褐細砂～シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

10-S K 55(図174)

第10調査区の中央で検出した土坑である。主軸方位N-6°-E、検出面の標高は36.0mである。10-堅穴50を切り、調査区外に広がる。風倒木痕の可能性が考えられる。

平面形状は不整形で、長軸2.7m以上、短軸約1.82m、深さ約0.8mを測る。断面形状は不整形である。埋土は、暗褐シルトと褐シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

10-S K 10(図174)

第10調査区の中央南側で検出した土坑である。調査区外に展開するため、全体の形状は不明である。主軸方位N-39°-W、検出面の標高は36.05mである。

平面形状は不整形で、長軸2.9m以上、短軸約1.35m、深さ約0.1mを測る。断面形状は浅い皿状

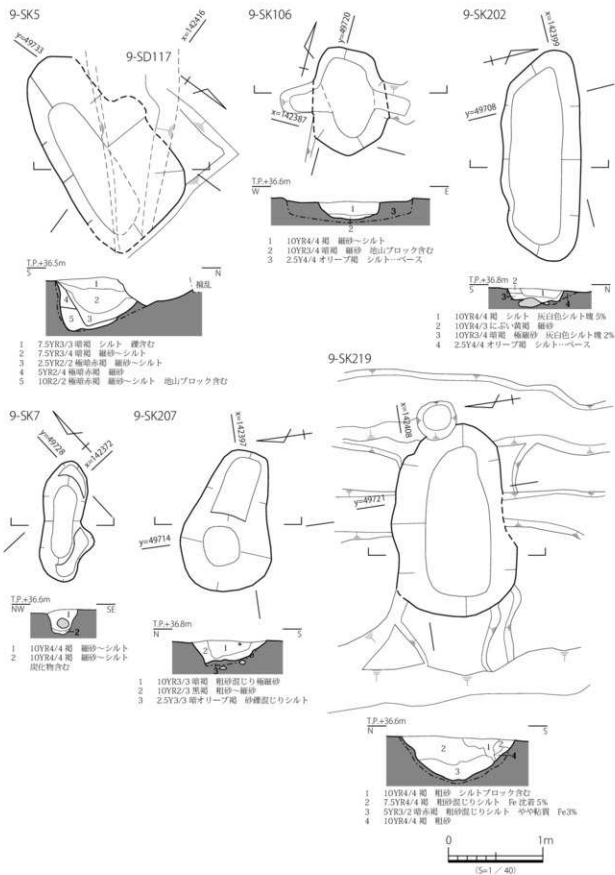


図 173 9-SK5・7・106・202・207・219 平・断面図

である。埋土は2層に分層でき、上層が暗褐細砂～シルト、下層が灰黄褐細砂～シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

10-S K 31 (図 174)

第10調査区の中央で検出した土坑である。主軸方位N-18°-W、検出面の標高は36.0mである。

平面形状は不整形で、長軸約2.00m、短軸約1.94m、深さ約0.42mを測る。断面形状は椀状である。埋土は4層に分層でき、黒褐シルトとにぶい黄褐シルト、灰黄褐細砂～シルト、灰黄褐シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

10-S K 57 (図 175)

第10調査区の中央で検出した土坑である。攪乱に切られるため、全体の形状は不明である。主軸方位N-48°-W、検出面の標高は36.0mである。

平面形状は不整形で、長軸2.4m以上、短軸約1.54m、深さ約0.18mを測る。断面形状は不整形である。埋土は単層で暗褐細砂～シルトである。

遺物は土師器片が出土したが、細片のため、詳細な時期は不明である。

10-S K 52 (図 175)

第10調査区の中央で検出した土坑である。主軸方位N-22°-E、検出面の標高は36.05mである。10-堅穴50を切る。

平面形状は不整形で、長軸約1.67m、短軸約1.16m、深さ約0.38mを測る。断面形状は不整形である。埋土は単層でにぶい黄褐シルトである。

遺物は須恵器片が出土したが、細片のため詳細な時期は不明である。切り合い関係から、古墳時代後期以降と考えられる。

10-S K 58 (図 175)

第10調査区の中央で検出した土坑である。主軸方位N-19.5°-E、検出面の標高は36.0mである。

平面形状は不整形で、長軸約1.35m、短軸約1.00m、深さ約0.1mを測る。断面形状は浅い皿状である。埋土は単層で暗褐粗砂混じりシルトである。

遺物は土師器片が出土したが、細片のため、時期は不明である。

10-S K 106 (図 175)

第10調査区の東側で検出した土坑である。主軸方位N-80°-W、検出面の標高は35.8mである。風倒木痕の可能性が考えられる。

平面形状は不整形で、長軸約2.60m、短軸約1.20m、深さ約0.46mを測る。断面形状は逆台形で、段落ちを有する。埋土は3層に分層でき、上層が暗褐細砂～シルト、中層が暗赤褐極細砂、下層が暗褐極細砂である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

10-S K 111 (図 175)

第10調査区の東側で検出した土坑である。主軸方位N-79°-E、検出面の標高は35.8mである。調査区外に広がるため、全体の形状は不明である。

平面形状は不整形で、長軸2.7m以上、短軸約2.24m、深さ0.3m、を検出した。断面形状は不整形である。埋土は7層に分層でき、1～3層が黒褐～暗褐粗砂混じりシルト、暗褐シルトと褐シルトである。4層が褐粗砂混じりシルト、5層が暗褐細砂～シルト、6層が暗褐粗砂混じりシルト、7層が暗褐細砂である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

10-S K 124 (図 175)

第10調査区の東側で検出した土坑である。10-堅穴110と10-S K 111に切られる。主軸方位N-17.5°-W、検出面の標高は35.7mである。

平面形状は不整形で、長軸約3.00m、短軸約1.40m、深さ約0.18mを測る。断面形状は不整形である。埋土は暗褐粗砂混じりシルトである。

遺物が出土していないため、詳細な時期は不明であるが、切り合い関係から古墳時代後期以前と考えられる。

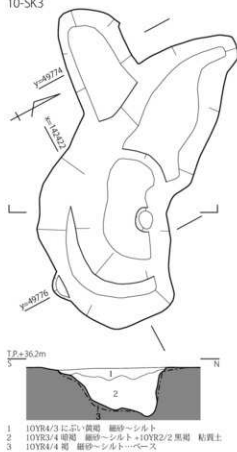
10-S K 112 (図 176)

第10調査区の東側で検出した土坑である。調査区外に広がるため、全体の形状は不明である。主軸方位N-8.5°-E、検出面の標高は35.7mである。

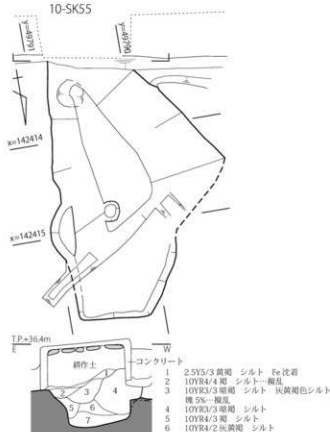
平面形状は不整形で、長軸約1.86m、短軸1.2m以上、深さ約0.3mを測る。断面形状は不整形である。埋土は2層に分層でき、上層が褐粗砂混じりシルト、下層がにぶい黄褐細砂～シルトである。

遺物は土師器片が出土したが、細片のため、詳

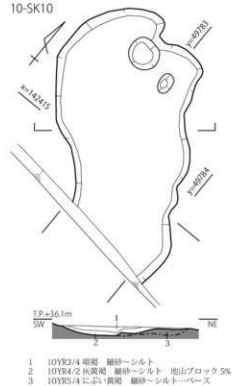
10-SK3



10-SK55



10-SK10



10-SK31

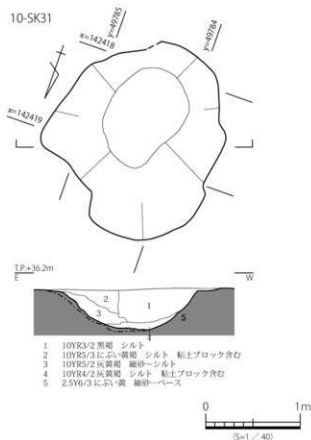
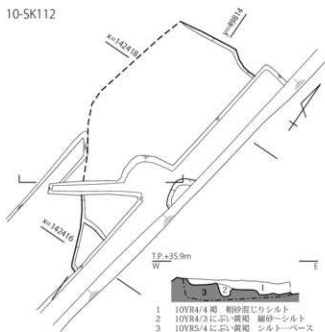
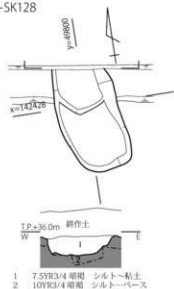


図 174 10-SK3・10・31・55 平・断面図

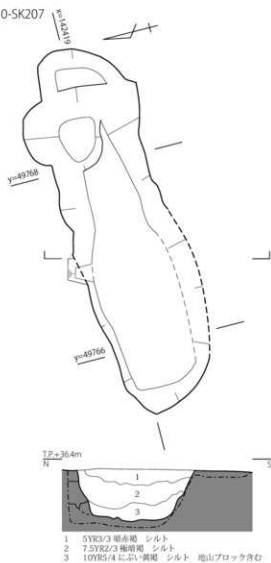
10-SK112



10-SK128



10-SK207



10-SK132

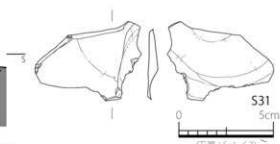
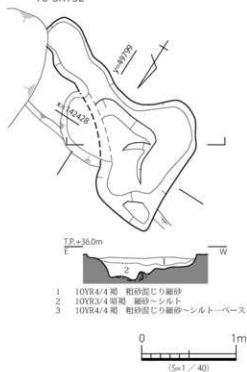


図 176 10-SK112・128・132・207 平・断面図及び出土遺物実測図

細な時期は不明である。

10-S-K 128(図176)

第10調査区の中央北側で検出した土坑である。調査区外に広がるため、全体の形状は不明である。主軸方位N-11°-W、検出面の標高は35.8mである。

平面形状は楕円形で、長軸1.2m以上、短軸約0.66m、深さ約0.20mを測る。断面形状は逆台形である。埋土は単層で暗褐色シルト～粘土である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

10-S-K 207(図176)

第10調査区の西側で検出した土坑である。主軸方位N-89°-E、検出面の標高は36.3mである。

平面形状は不整形で、長軸約4.00m、短軸約1.20m、深さ約0.55mを測る。断面形状は逆台形である。埋土は3層に分層でき、上層が暗赤褐色シルト、中層が極暗褐色シルト、下層がにぶい黄褐色シルトである。

遺物はサヌカイト剥片(S31)が出土したが、詳細な時期は不明である。

10-S-K 132(図176)

第10調査区の中央で検出した土坑である。主軸方位N-55°-W、検出面の標高は35.9mである。

平面形状は不整形で、長軸2.42m、短軸1.08m、深さ0.24mを検出した。断面形状は不整形である。埋土は2層に分層でき、上層が褐色粗砂混じり細砂、下層が暗褐色シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

10-S-K 208(図177)

第10調査区の南側で検出した土坑である。調査区外に広がるため全体の形状は不明である。主軸方位N-67.5°-E、検出面の標高は36.2mである。

平面形状は不整形で、長軸1.20m、短軸0.7m以上、深さ0.42mを測る。断面形状は椀状で、東側にテラスを有する。埋土は単層で、黒褐色粘土である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

10-S-K 311(図177)

第調査区の東側で検出した土坑である。主軸方位N-40.5°-E、検出面の標高は35.7mである。

平面形状は不整形で、長軸約2.10m、短軸約0.96m、深さ約0.1mを測る。断面形状は浅い皿状である。埋土は単層で、にぶい黄褐色シルト～粘土である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

10-S-K 312(図177)

第10調査区の南側で検出した土坑である。調査区外に広がるため、全体の形状は不明である。主軸方位N-83°-W、検出面の標高は35.8mである。

平面形状は不整形で、長軸3.7m以上、短軸1.4m以上、深さ約0.26mを測る。断面形状は逆台形で、段落ちを有する。埋土は3層に分層でき、暗褐色シルト～シルトと暗褐色シルト、3にぶい黄褐色シルト～粘土である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

11-S-K 6(図178)

第11調査区の西側で検出した土坑である。主軸方位N-85°-W、検出面の標高は36.1mである。

平面形状は不整形で、長軸約2.62m、短軸約0.86m、深さ約0.36mを測る。断面形状は椀状で、南側にテラスを有する。埋土は単層で、褐色シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

11-S-K 11(図178)

第11調査区の東側で検出した土坑である。主軸方位N-30°-W、検出した標高は36.25mである。

平面形状は卵形で、長軸約1.72m、短軸約1.06m、深さ約0.12mを測る。断面形状は浅い皿状である。埋土は単層で、黒褐色粘土である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

11-S-K 29(図178)

第11調査区の東側で検出した土坑である。主軸方位N-19°-W、検出面の標高は36.25mである。

平面形状は不整形で、長軸約1.40m、短軸約0.74m、深さ約0.12mを測る。断面形状は逆台形である。埋土は2層に分層でき、上層が暗褐色粘土、下層が暗褐色シルト～粘土である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

11-SK 30(図 178)

第 11 調査区の北側で検出した浅い土坑状の遺構である。調査区外に広がるため、全体の形状は不明である。検出面の標高は 36.2m である。

平面形状は不整形形で、長軸 2.3m 以上、短軸 1.0m 以上、深さ約 0.34m、断面形状は浅い皿状である。埋土は単層で、にぶい黄褐シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

11-SK 15(図 178)

第 11 調査区の東側で検出した土坑である。主軸方位 N-12°-W、検出面の標高は 36.3m である。

平面形状は不整形形で、長軸約 1.74m、短軸約

0.82m、深さ約 0.34m を測る。断面形状は逆台形である。埋土は単層で、褐粗砂混じりシルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

11-SK 31(図 178)

第 11 調査区の西側で検出した土坑である。調査区外に広がる。主軸方位 N-84.5°-W、検出した標高は 36.0m である。

平面形状は楕円形で、長軸約 1.90m、短軸 1.2m 以上、深さ約 0.90m を測る。断面形状は逆台形である。埋土は 8 層に分層できる。堆積状況から、風倒木痕と考えられる。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

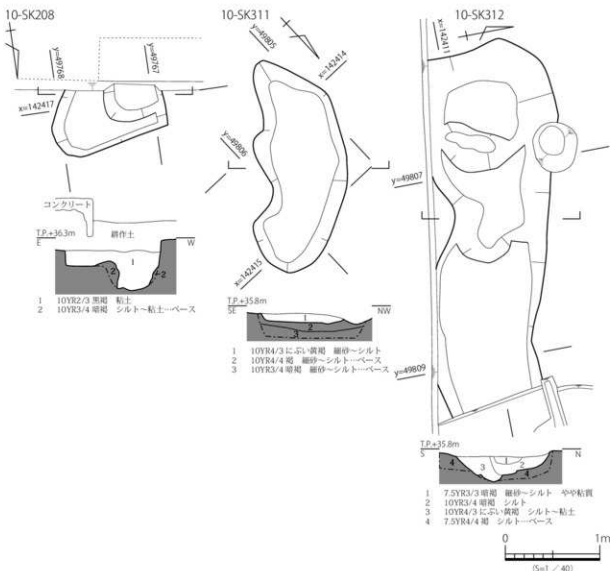


図 177 10-SK208・311・312 平・断面図

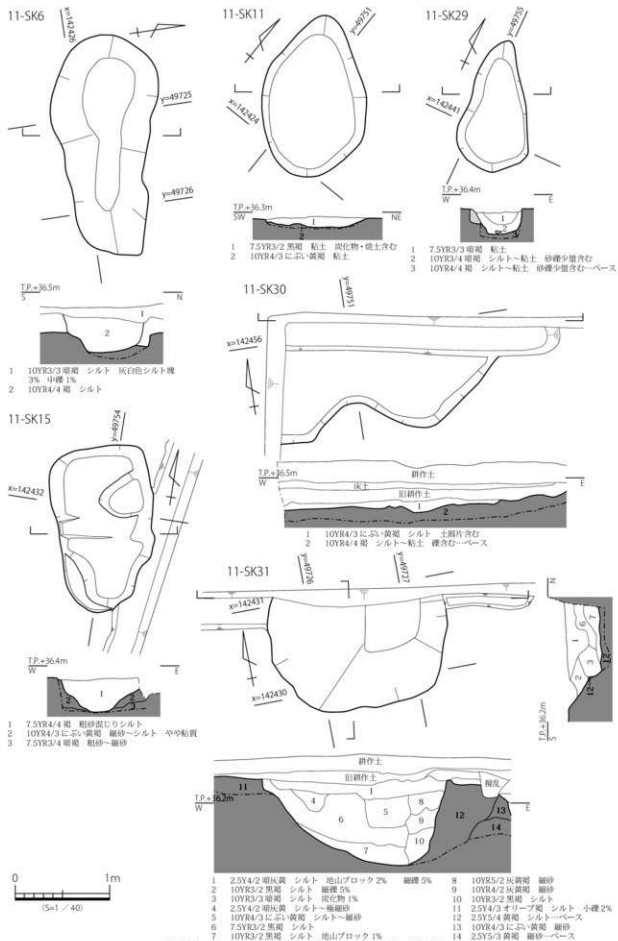


図 178 11-SK6・11・15・29・30・31 平・断面図

12-SK 8(図 179)

第 12 調査区の北側で検出した土坑である。主軸方位 N-81.5°-W、検出面の標高は 36.6m である。

平面形状は不整形で、長軸約 2.42m、短軸約 1.08m、深さ約 0.50m を測る。断面形状は逆台形である。埋土は 2 層に分層でき、上層が褐シルト、下層が暗褐シルト～粘土である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

12-SK 42(図 179)

第 12 調査区の南側で検出した土坑である。主軸方位 N-36.5°-W、検出した標高は 36.7m である。

平面形状は不整形で、長軸約 2.16m、短軸約 0.56m、深さ約 0.40m を測る。断面形状は椀状である。埋土は 6 層に分層でき、上層が暗褐シルト、下層が黒褐シルトと暗褐シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

12-SK 1(図 179)

第 12 調査区の北側で検出した土坑である。調査区外に広がるため、全体の形状は不明である。主軸方位 N-4°-E、検出した標高は 36.7m である。

平面形状は楕円形で、長軸約 0.66m、短軸 0.4m 以上、深さ約 0.10m を測る。断面形状は浅い皿状である。埋土は単層で、炭化物多量を含む灰黄褐粘土である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

12-SK 2(図 179)

第 12 調査区の北西側で検出した土坑である。調査区外に広がるため、全体の形状は不明である。主軸方位 N-62.5°-W、検出した標高は 36.7m である。

平面形状は方形で、長軸約 0.68m、短軸 0.5m 以上、深さ約 0.14m を測る。断面形状は不整形である。埋土は単層で、暗褐シルト～粘土である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

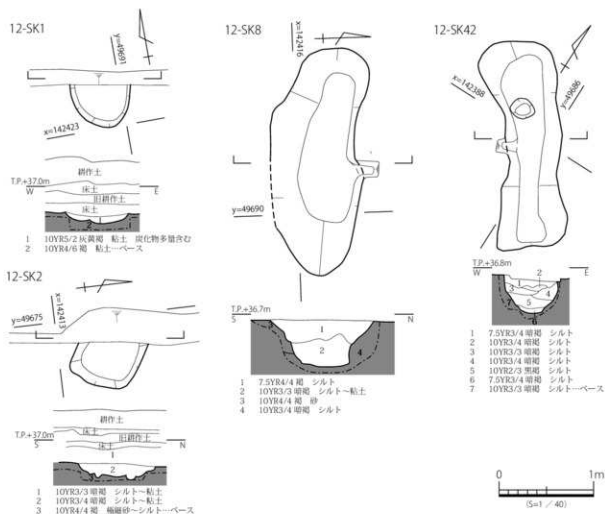


図 179 12-SK1・2・8・42 平・断面図

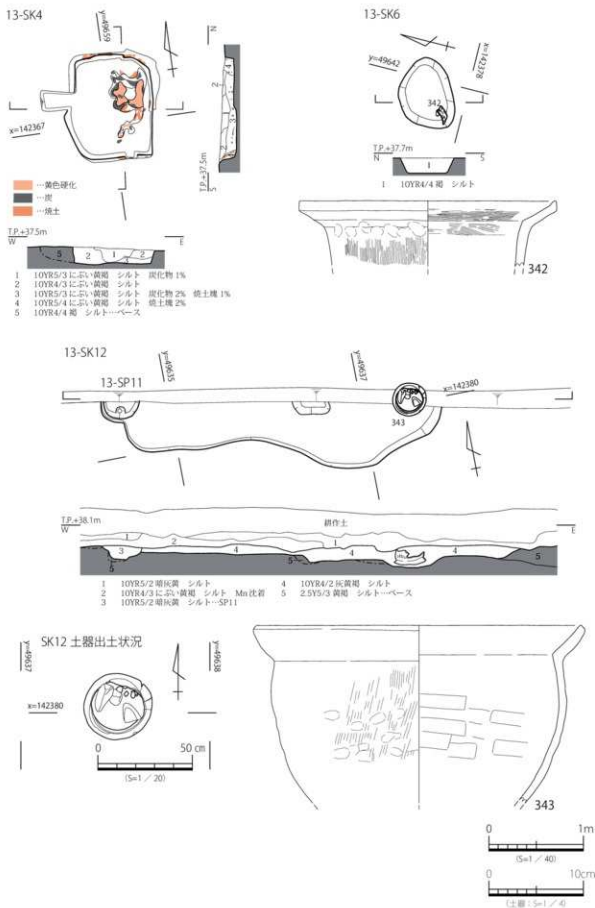


図 180 13-SK4・6・12 平・断面図及び出土遺物実測図

13-S K 4(図 180)

第 13 調査区の東側で検出した土坑である。主軸方位 N-8°-E、検出面の標高は 37.4m である。

平面形状は隅丸方形で、長軸約 1.2m、短軸約 1.0m、深さ約 0.18m を測る。断面形状は方形である。埋土はにぶい黄褐シルトで、底部と壁面内部に燃焼痕が確認できる。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

13-S K 6(図 180)

第 13 調査区の中央北側で検出した土坑である。主軸方位 N-60°-E、検出面の標高は 37.65m である。

平面形状は不整形で、長軸約 0.8m、短軸約 0.55m、深さ約 0.15m を測る。断面形状は逆台形である。埋土は単層で、褐シルトである。

遺物は土師質土器蓋(342)が出土した。出土遺物の年代から 8 世紀後半～9 世紀前半と想定できる。

13-S K 12(図 180)

第 13 調査区の北東側で検出した土坑である。13-S P 11 に切られる。調査区外へと広がるため、全体の形状は不明である。主軸方位 N-80°-W 検出した標高は 37.8m である。

平面形状は不整形で、長軸約 4.2m、短軸 0.7m

以上、深さ約 0.2m を測る。断面形状は不整形である。埋土は単層で、灰黄褐シルトである。

遺物は土師質土器蓋(343)が出土した。出土遺物の年代から、古代以降と想定しておく。

20-S K 7(図 181)

第 20 調査区の北東側で検出した土坑である。主軸方位 N-0°-W、検出面の標高は 36.85m である。

平面形状は不整形で、長軸約 0.8m、短軸約 0.7m、深さ約 0.2m を測る。断面形状は不整形である。埋土は単層で、暗褐シルト～粘土である。

遺物は弥生土器底部(344)が出土した。遺物は混入品と考えられるので、時期は不明である。

20-S K 10(図 181)

第 20 調査区の北東側で検出した土坑である。主軸方位 N-40°-W、検出面の標高は 36.8m である。

平面形状は不整形で、長軸約 0.9m、短軸約 0.75m、深さ約 0.18m を測る。断面形状は不整形である。埋土は単層で、にぶい黄褐シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

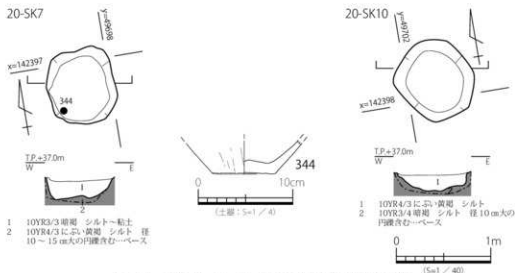


図 181 20-SK7・10 平・断面図及び出土遺物実測図

(6) SX

8-SX 58(図 182)

第8調査区北側で検出した性格不明遺構である。主軸方位 N-79°-W、検出面の標高は 36.3m 前後である。

長軸 4.2 m 以上、短軸約 1.06m、深さ約 0.12m を測る。断面形状は不整形である。

埋土は単層で、暗褐シルトである。

遺物は須恵器高杯片が出土したが、詳細な時期は不明である。

43-SX 1(図 182)

第43調査区の南側で検出した性格不明遺構である。主軸方位 N-20°-W、検出面の標高は 36.4m である。

長軸 3.6 m 以上、短軸約 0.65m、深さ約 0.10m で、断面形状は方形である。

埋土は単層で、にぶい黄褐細砂～シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

10-SX 217(図 183)

第10調査区の西側で検出した性格不明遺構である。10- 竪穴 201 に切られる。主軸方位 N-28°-W でやや湾曲する。検出面の標高は 36.2m である。長さ約 5.4 m を検出し、幅は約 1.50m、深さは約 0.2m を測る。断面形状は浅い皿状である。埋土は上層が褐粘質土、下層が褐粘土混じりシルトである。遺物が出土していないため、時期は不明である。

5-SX 55(図 184)

第5調査区の中央で検出した性格不明遺構である。主軸方位 N-3°-W、検出面の標高は 36.4 ～ 36.2m である。当初、竪穴建物の可能性が考えられたが、掘方と底部が不整形であることから、性格不明遺構とした。

平面形状は不整形で、長軸約 4.35m、短軸約

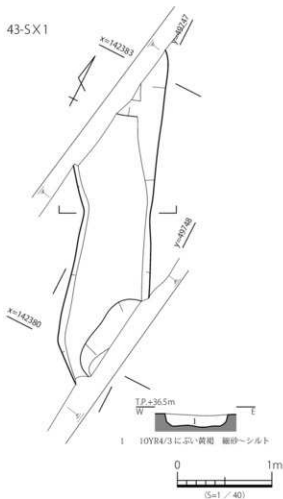
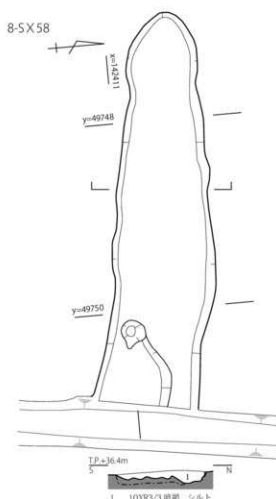


図 182 8-SX58、43-SX1 平・断面図

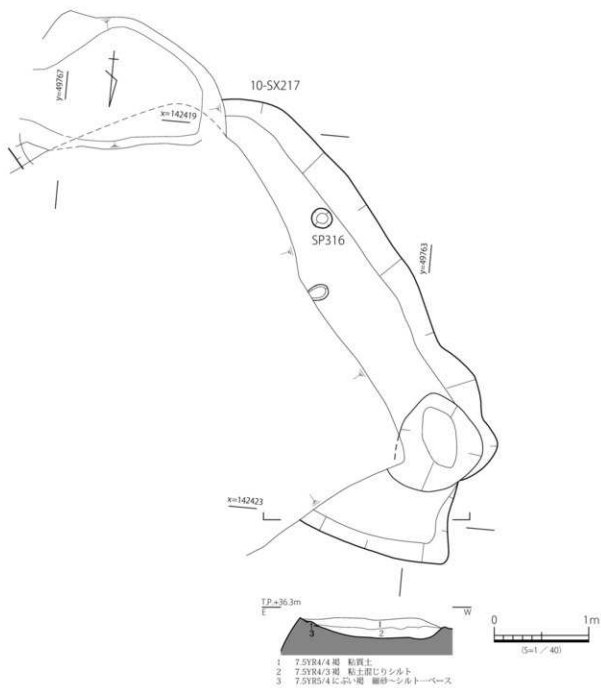


図 183 10-SX217 平・断面図

4.16m、深さ約0.29mを検出した。断面形状は不整形である。

埋土は3層に分層でき、上層が黒褐シルト、下層が暗灰黄細砂～シルトと黄灰細砂～シルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

9-S X 126(図 185)

第9調査区の西側で検出した性格不明遺構である。調査区外に広がるため、全体の形状は不明である。主軸方位N-1.5°-W、検出面の標高は36.9mである。

平面形状は不整形で、長軸約3.62m、短軸約1.0m以上、深さ約0.46mを測る。

断面形状は不整形で、埋土は上層が灰黄褐細砂～シルト、下層が暗褐粗砂混じりシルトである。

遺物は下層から須恵器壺(345)が出土した。出土遺物の年代から古墳時代後期初頭～中葉と判断できる。

11-S X 5(図 186)

第11調査区の中央で検出した性格不明遺構である。11-SD 4・SK 6・31に切られ、調査区外に広がる。主軸方位N-43°-E、検出面の標高は

5-SX55

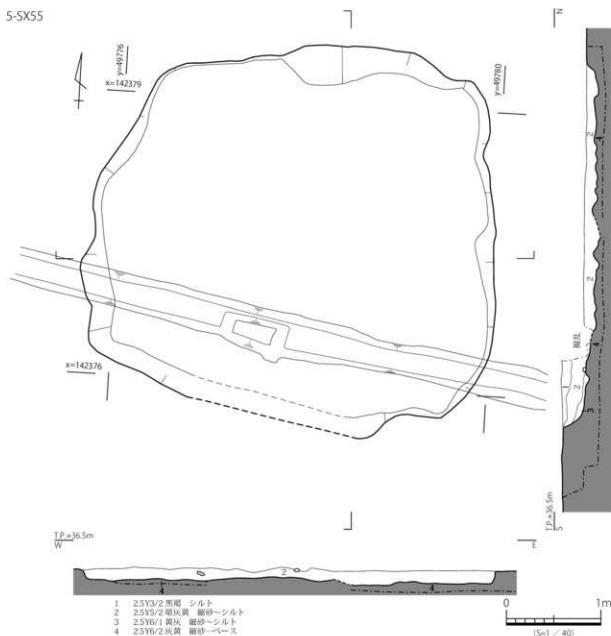


図 184 5-SX55 平・断面図

36.45mである。

平面形状は不整形で、長軸約 7.8m 以上、短軸約 5.2m 以上、深さ約 0.75m、を検出した。

断面形状は不整形である。埋土は 3 層に分層でき、上層が暗褐シルト、中層が地山ブロック土を含む暗褐シルト、下層が灰黄褐シルトである。

遺物は須恵器蓋 (346)・甕 (347)、土師器高杯 (348)、剥片 (S32) が出土した。図示した遺物の他に、須恵器破片・壺片が出土した。出土遺物の年代から MT 15 ~ T K 10 型式併行期と判断できる。

12 - S X 30 (図 187)

第 12 調査区の東側で検出した性格不明遺構である。主軸方位 N-8.5° -E、検出面の標高は 36.85m である。調査区外へと広がるため、全体の形状は不明である。

平面形状は不整形で、長軸約 9.98m、短軸約 2.7m 以上、深さ約 0.24m を測る。

断面形状は浅い皿状である。埋土は 3 層に分層でき、上層がにぶい黄橙シルト、中層が黄褐細砂、下層が暗褐極細砂である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

9-SX126

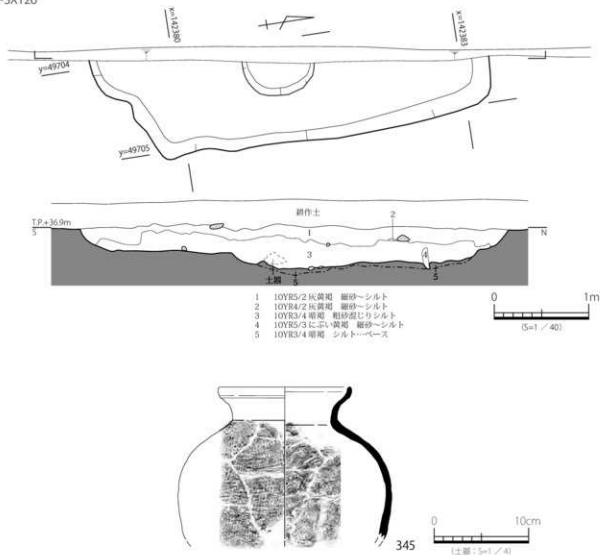


図 185 9-SX126 平・断面図及び出土遺物実測図

11-SX5

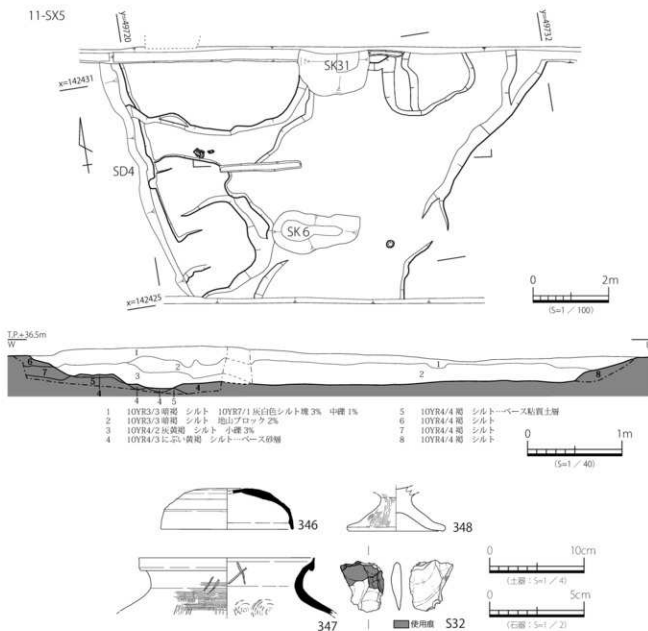


図 186 11-SX5 平・断面図及び出土遺物実測図

12-SX30

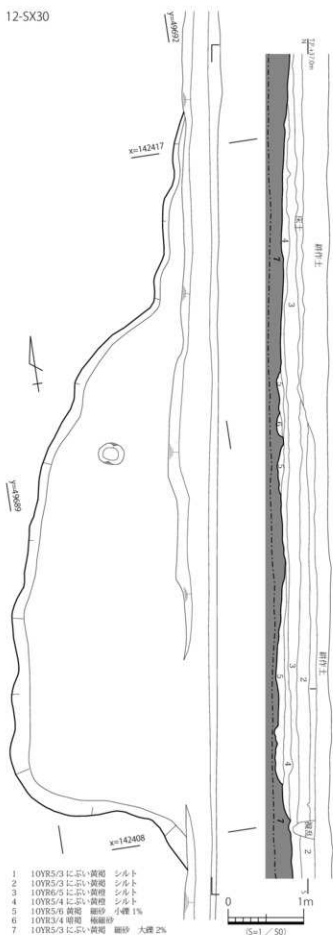


図 187 12-SX30 平・断面図

12-SX31(図188)

第12調査区の西側で検出した性格不明遺構である。調査区外に広がるため、全体の形状は不明である。主軸方位 N-59°-E、検出面の標高は 37.1m である。

平面形状は不整形形で、長軸約 2.4m 以上、短軸約 1.46m、深さ約 0.40m を測る。

断面形状は不整形である。土層は上層がにぶい黄褐シルトと暗褐シルト、褐シルト、下層が暗褐シルトである。

遺物は土師器羽釜 (349) が出土した。図示した遺物の他に、須恵器壺片が出土した。

出土遺物から古代以降と判断できる。

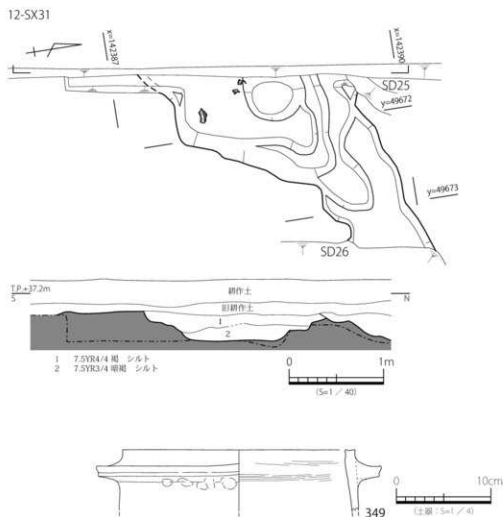


図188 12-SX31 平・断面図及び出土遺物実測図

(7) SP

3-S P 13(図 189)

第3調査区の南側で検出したビットである。検出面の標高は 36.4m である。

平面形状は楕円形で、長軸約 0.3m、短軸約 0.22m、深さ約 0.28m を測る。断面形状は逆台形である。

遺物は須恵器杯蓋 (350) が出土した。

5-S P 28(図 189)

第5調査区の中央で検出したビットである。検出面の標高は 36.15m である。

平面形状は隅丸方形で、長軸約 0.4m、短軸約 0.35m、深さ約 0.2m を測る。

断面形状は椀状である。土層は3層に分層でき、埋土は上層がにぶい黄褐細礫混じりシルト、中層が灰黄褐細礫混じりシルト、下層が地山ブロック土を含む灰黄褐細礫混じりシルトである。

遺物は土師器轆轤 (353) が出土した。

22-S P 8(図 189)

第22調査区の中央で検出したビットである。検出面の標高は 36.1m である。

平面形状は楕円形で、長軸約 0.95m、短軸約 0.65m、深さ約 0.3m を測る。

断面形状は椀状である。埋土は3層に分層でき、上層が黒褐粗砂混じり粘質土、中層が黒褐粗砂～シルト混じり粘質土、下層がにぶい黄褐極細砂～シルトである。

遺物は須恵器高杯 (352) が出土した。

9-S P 42(図 189)

第9調査区の中央で検出したビットである。検出面の標高は 36.5m である。

平面形状は円形で、長軸約 0.25m、短軸約 0.25m、深さ約 0.15m を測る。断面形状は逆台形である。

遺物は黒色土器碗 (358) が出土した。

10-S P 15(図 189)

第10調査区の中央で検出したビットである。検出面の標高は 36.1m である。

平面形状は楕円形で、長軸約 0.5m、短軸約 0.4m、深さ約 0.2m を測る。断面形状は逆台形である。

ある。

遺物は須恵器鉢 (355) が出土した。出土遺物から 12 世紀頃と判断できる。

10-S P 64(図 189)

第10調査区の中央北端で検出したビットである。検出面の標高は 36.05m である。

平面形状は隅丸方形で、長軸約 0.95m、短軸約 0.65m、深さ約 0.3m を測る。

断面形状は逆台形に段落ちを有する。埋土は単層で、黒褐シルト～粘土である。

遺物は土師器甕 (356) が出土した。

10-S P 144(図 189)

第10調査区の東端で検出したビットである。検出面の標高は 36.0m である。

平面形状は円形で、長軸約 0.3m、短軸約 0.3m、深さ約 0.15m を測る。

断面形状は逆台形である。埋土は単層で黒褐シルト～粘土である。

遺物は黒色土器A類片 (357) が出土した。

10-S P 204(図 189)

第10調査区の西南端で検出したビットである。検出面の標高は 36.3m である。調査区外に広がる。

平面形状は不整形で、長軸約 1.0m、短軸約 0.6m 以上、深さ約 0.2m を測る。

断面形状は逆台形にテラスを有する。埋土は単層で黒褐シルトである。

遺物は須恵器杯蓋 (351) が出土した。出土遺物からMT 85 型式併行期と判断できる。

11-S P 32(図 189)

第11調査区の南東端で検出したビットである。検出面の標高は 36.25m である。調査区外に広がるが、第44調査区では構造物による擾乱のため、検出面が第11調査区よりも下であったため、検出できなかった。

平面形状は円形を呈すると想定でき、長軸約 0.5m、短軸約 0.25m 以上、深さ約 0.2m を検出した。

断面形状は椀状である。埋土は単層で暗褐シルトである。

遺物は土師器甕 (354) が出土した。

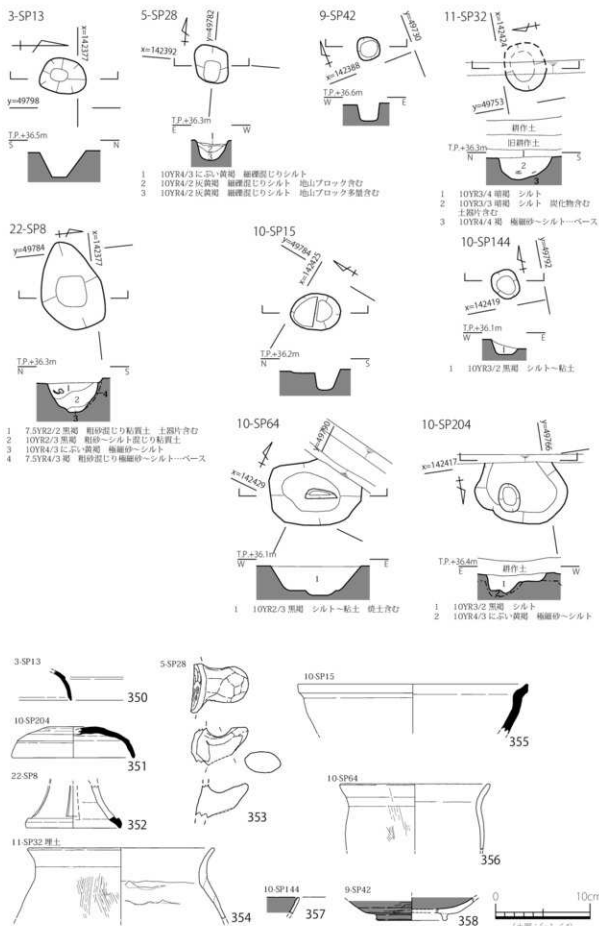


図 189 SP 平・断面図及び出土遺物実測図

2017 年 3 月 17 日 印刷

2017 年 3 月 30 日 発行

高松市埋蔵文化財調査報告第 177 集
新病院整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書

萩前・一本木遺跡 I

- 第 1 分冊 -

著作権所有 高松市番町一丁目 8 番 15 号

発行者 高松市教育委員会

印刷者 株式会社 美巧社